Yuzawa, Kōkichirō
Kaisetsu Nihon bumpō

湯澤幸吉郎著

解説 日本文法

東京
大岡山書店發行


LIBRARY
JUL 25 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

序　文

湯澤幸吉郎君は、曩に「室町時代の言語研究」と題する好著を發表せられた。これは橋本進吉教授の序文にある通り、國語史研究の上に、大なる光を投ずるものであつた。

日本語の歴史的討究は、純然たる學問として、最も意義あるものである。而してその發達變遷の跡を辿り、現代日本語の淵源する處を知るためにも、そして、過去の國民生活を明かにし、現代の敎育ある國民の常識を得るためにも、苟もゆるがせにすることの出來ないものである。

然るに、既往の諸研究は、主として中古以前に限られてゐた。從つて、中古語が時代と共に推移して、遂に現代の國語にまで發展した過程をたどる事は、殆んど出來ない狀態にあつた。殊に、室町時代の言語は、その研究の根本資料たるべき抄物を評價規定し、これを組織的に取捨して推論することの困難なるため、未だ曾て、その

成果の發表されたものはなかつた。中世と近代とを繫ぐ契機は、永く暗黑の中に殘されてあつた。

湯澤君は、異常の忍耐と努力とを以て、この種の資料の攻究に從事せられた。君は、東京高等師範學校卒業後、更に東京帝國大學國語學敎室に學ばれ、主として中古以後の語法研究に從事せられること十數年であつた。而して、その研鑽の一端を公にせられたものが、かの「室町時代の言語研究」である。實に、同書によつて、始めて同時代の語法研究の基礎が築かれ、その體系が樹てられたものといふべきである。その功績は永く學界に記憶せられるであらうと信ずる。

私も同書を逸速く熟讀することを得た一人である。私は君の研究態度の嚴正なる、而して日本語學の造詣の深きに、信頼し、且つ驚嘆したのであつた。更に、君と交誼を得るに至つて、君の好學にして篤實、淸廉にして恬淡なる風格に接し、愈々尊敬の念を禁じ得ないのであつた。或日、遂に私は、君に親しむの餘り、現代の日本文法に關しても、これを平易に、組織的に、且つ精密に解說して、私どもの蒙を啓いて呉れるやうにとお願ひしたのであつた。もし、さういふ書物を座右に備へ得れば、私どもはどんなに便利するであらうと思つたからである。併しそれは、學問のため

に時間を惜しまれてゐる君に對して、あまりに勝手な賴みであつたかも知れなかつた。然るに、君が、今回、私の慫慂を容れて、「解說日本文法」を草せられたことは、偏へに、君の他を益せんとする心に依るものである。ただ、私どもにとつては感謝この上もない。

求められて辭するを得ず、湯澤君に對して抱懷する所を披瀝し、以て序に代へた次第である。

昭和六年七月二十五日

横山重

緒言

一、本書は、編者の經驗に基き、主として、中等學校の教授上の參考書たらしめ、兼ねて、文檢受驗者の伴侶となり、また廣く、國文法の研究に志す者の爲に、手引になるやうにとの目的から、編纂したものである。

一、文法を說くに當つて、最も重視すべきは、その組織・體系である。然れども、本書は、右の如き目的から、現今教育界に於いて、最も廣く行はれてゐると認める組織によることとし、編者に於いて異る見解を有する事でも、必ずしも異を立てぬ。尤も、機會あるごとに、これ等の問題について、解說を試みることは怠らぬ。

一、本書では、個々の事實の解釋も、大抵一般に行はれる說に從つた。が、全く謬見であり、不合理であると信ずることは、これを訂した。たとへば、口語法で、「靜かに」「立派に」などを、形容動詞の連用形とし、助動詞「だ」「です」の連用形に、「で」を擬するの類である。

また、一般には行はれぬことながら、編者の考から、特に試みたものがある。たとへば、形式名詞を

說き、可能動詞を立て、及び、接續詞を職能の上から三種に分類したやうなのは、それである。

一、本書は、文語法と口語法とに就いて述べるが、兩者の一致するものは、その何れに就いて說くかを一々はことわらぬ。また、用言や助動詞などのやうに、著しい差異のあるものは、文語法を先とし、次に口語法に及ぶことにした。

一、口語法を說くに當つては、文語法との、連絡・關係を明かに示す事に、主眼點を置いた。隨つて、本書の口語法だけを切り離して見る時は、文語法の換骨奪胎たるに過ぎず、說明も不徹底に終つた個處が少くない、との批難が起るであらう。されど、同一組織の下に、同時に說かうとする以上、これは避け難い弱點であると思ふ。

一、「敬譲語の異常な發達は、國語の一特質として數ふべきものである」との考から、本書では、各品詞にわたつて、これに就いて述べた。

一、編者自身の力を以て解し得ざることは、これを先輩學者の著書に示教を仰ぎ、引例なども、他書に出てゐるのを利用したのが、少くない。これ等はその都度その旨を明かに示さうと欲したが、煩に堪へかねて、必ずしも一々はことわらぬ。また編者の拾收した引例でも、特に、その要を認めるもの丶外、その出所を記さぬことにした。

一、明治三十八年、文部省から發表された「文法上許容スベキ事項」は、文語法の變遷及び實際教育の

上から見て、頗る重大なものであると考へるので、第五篇に於いて、これに就いての私見を述べ、且各項を註することにした。

一、本書各項の用例は、成るべく豐富に擧げようと心がけた。その他、實際教授に、用言の活用の練習などに際して、或種の活用の語彙を得ようとしても、直ちに思ひ浮ばぬことあるに顧みて、附錄として、各種活用に屬する文語の主なる動詞・形容詞を擧げた。

一、實際の教授に當つて、如何なる精神を以て、如何なる點に主眼を置くべきかは、教授者の寸時も忘るべからざる要項である。依つて、本書は、中等學校の教授要目中、各科に關するものと、國語・漢文に關するものとを、卷尾に附載して、以て實際教授の便を圖ることにした。

一、近時、假名遣問題が漸く世上の注意を惹き、いはゆる發音的假名遣の實行運動が、日に活況を呈するに至つた。文部省また、近く新假名遣を、國定教科書に採用するやの說さへ言ひ傳へられる。假名遣を歷史的のものにするとしても、發音的のものにするとしても、文法そのものには變りはないが、併し、文法の說き方に影響すること、頗る大なるものがある。文部省の採用しようとする假名遣は、如何なるものか、今、直ちに知ることを得ないのであるが、恐らくは、先般、臨時國語調査會が改訂發表した「假名遣改定案」か、少くともそれに近いものであらうと推定される。依つて本書は、これを卷尾に附載することにした。

一、漢字の制限問題も、近時やうやく各方面に論議せられるやうになつたので、同時に改訂された同會の「常用漢字表」をも收めて、この方面の考察にも便宜を圖ることにした。

一、本書の刊行に當つて、序文を賜つた横山重君に感謝する。又、八木重良君の配慮を得た所が頗る多い。こゝに特に記して謝意を表する次第である。

昭和六年七月

湯澤幸吉郎

目次

第一篇　總説

第二篇　品詞各說

第一篇　總　說

第一章　國語と文法

〔一〕　言語と文字

われ〳〵の日常生活において、各自の思想感情を他に向つて發表するには、音聲によることが最も普通である。而して、或思想・感情を表す音聲は、社會的に一定してゐて、個人が自由に變更することが出來ない。かゝる音聲を廣く、言語（又はことば）といふ。言語を形に表して、見てわかる樣にしたものを、文字（又は字）といふ。

○音聲によりて感情を表すには、直接間接の二法がある。前者は「あゝ」「まあ」のやうな、いはゆる感動詞を用ひる方法である。後者は、或思想を發表し、それに寓して感情を表出する方法である。

○文字又は字は、しば〳〵音聲學上の音と混同される。古く和歌を三十一文字（モジ）といひ、俳句を十七字（ジ）詩と稱し、また「字餘り」「文字足らず」などいふ文字・字は、音節の意である。促音とは何ぞやの問に對して、假名の「つ」を示したといふ、噓のやうな事實もある。「文字は視覺に訴へるもの、音は聽覺に

訴へるもの。」――これが二者の區別される標準である。

○意味のある音聲であり、それを表す文字であつても、ある個人間にのみ通用するものは、こゝにいふ所の言語・文字ではない。世にいはゆる言語・文字とは、必ず一般的・普遍的性質を有しなければならないからである。

〔二〕　國語――文語と口語

世界には多くの種類の言語はあるが、ある國家が自國の通用言語と認めて居るものを、その國の國語と稱する。

わが國には、國初以來の國語があつて、幾多の變遷を經たが、今日われ〳〵が、實際の對話に用ひるものを、特に口語（又は話言葉）といふ。普通の講話・演說等に用ひるものは、これと多少相違する所はあるが、尙同じく口語といふ。

また我が國では、文字を以て思想を發表するに、大體二種ある。一は主として、平安朝時代の言語上の法則・習慣によるもので、それに用ひる言語を、特に文語といふ。他の一は、右の口語によるものである。

○我が國語といへば、縱には、國初以來われ等の祖先の語つた各時代の言語と、横には、現に各地に行はれてゐる方言とを併せ含むものであるが、今日端的に國語といへば、われ等が現に用ひて居て、國家の

認める所のものを指すのである。而して現在では、書き表す場合にも、いはゆる口語體の文が普通に用ひられる樣になつたので、口語・文語の區別は、「口で語る」「文字で書き表す」といふやうに、簡單に說明することが出來なくなつた。よつて本文の樣に說いて見たのである。

○講話・演說、又は文字で書き表す場合に用ひる口語は、思想の發表形式や、用語の上に於いて、對話に用ひるものと、趣を異にする點が少くない。よつて今後、必要ある場合には、これ等を一括して筆寫體又は講演體の口語と稱し、以て對話體の口語と區別する事にする。

〔三〕 文——題目と敍述

われ〳〵が言語を用ひて、或題目について、その動作・存在または狀態等を敍述する時は、その題目と敍述との兩部を合せた一かたまりを、文（又は文章）といふ。即ち文は、形の上では獨立したもので、それには必ず兩要素がなければならない。

一、太郎　泣く。

二、氷は　つめたい。

三、暗い夜は　大變さびしい。

四、あなたの手拭は　すつかり乾きました。

五、友より贈られし書は　此處にあり。

（―印は題目の部。＝印は敍述の部である。）

○文とは、言語を以て「まとまつた思想を表したものである」とか、「思想の最小單位を表出したものである」とか、いろ〳〵むづかしい解釋がある。が、さうすると、「まとまつた思想」とは何ぞや、「思想の最小單位」とは何か、などと更に問題が大きく廣くなる。勿論これ等は、根本的に考究せねばならぬ事ではあるが、こゝには先づ極めて常識的に、平易に、右の如く解して、文の概念を得るに滿足したいのである。

○題目と敍述との二部分を具有しても、それが更に他の大きな文の一部分になつて居る時は、それを文と呼ばない（後に言ふが、それ等は節と特稱する）。即ち文と言ふ以上は、必ず形の上で獨立したものでなければならない。また文の特別なものは、題目或は敍述の何れかを缺くことがあるが、こゝには一般定型的な文について考へれば、それで十分である。

〔四〕　單　語

文は、題目と、敍述との二部分から成るが、文によつては、その各部分が更に細かに分解されるものがある。今別の例に就いて見る。

櫻の花は　甚だ美しい。

題目の一部分の「櫻の」は、他の場合に、「櫻の木」「櫻の葉」とも用ひられるから、右の題目は、「櫻の」「花は」との二部分に分けて見られる。

更に「櫻の」について見ると、一方「櫻は」「櫻を」ともなり、他方、「梅の花」「私の弟」とも用ひられるから、「櫻」と「の」とに分けられる。けれども、「櫻」も、「の」も、それ以上分解することは出來ない。このやうに見て行くと、結局この文は、

櫻　の　花　は　甚だ　美しい

この六つの個體に細分される。その一つ〳〵を單語といふ。卽ち、單語とは、文を組み立てる單位となる言語をいふ。

○思想上で一と考へられるものが、必ずしも一單語で表し得ない。たとへば、「美しい花」も、「あなたの本」も、思想上では一であるが、二單語以上の連つたものである。

また、「靜か」「甘」だけでも、一定の意味を、思ひ浮ばせる力が無いでもないが、これ等は「靜かに」「甘し」などとなつて、始めて單語となるのである。換言すれば、「靜か」「甘」のまゝでは文の組成に關與するを得ず、文に用ひられる時は、通例「靜かに」「甘し」となつた上の事であるから、單語として認められるのは、「靜かに」「甘し」である。

○單語には、右に擧げた例文中の「櫻」「花」「甚だ」「美し」のやうに、ある概念を表すものと、「の」「は」等のいはゆる助詞や、「人に笑はれる」「風が吹いた」の「れる」「た」等の、いはゆる助動詞のやうに、それ自身に何等の概念を表さぬものとの二種ある。

○單語については、大體以上の通り言ひ得るが、一々の場合に當つては、一單語か否か、判じ兼ねるものが少くない。これは一は、我が國で文字に書き表す場合に、英・獨文などと異つて、單語と單語との切れ目を明かに示さぬ習慣になつて居る爲と思ふ。

○文の題目も敍述も、一單語である場合と、二單語以上から成る場合とあることは、第三項に擧げた例で判明する。

〔五〕　文法・語法

單語を組合せて文を作るには、一定の法則があつて、これに從はねば、互の思想を正確に授受することが出來ない。この法則を文法といふ。本書は、文語・口語の文法を述べるものである。

○文法と同意に語法といふ語を用ひる人がある。また口語に關する法則を語法、文語に關する法則を文法と、使ひわける人もある。文典は文法を說いた書である

第二章　品詞概說

〔六〕　品　詞

文法を研究し、これを說明するに當つては、便宜の爲に、單語をその形態・職能・意義の上から、幾つかの種類に分類し、その各々を品詞と稱する。本書では次の九品詞を立てる。

名詞　代名詞　動詞　形容詞　助動詞

副詞　接續詞　助詞　感動詞

○品詞の分類は、頗る重大であり、同時に困難な問題であつて、學界にもいろ〳〵異說がある。而して言語は、絕えず變化するものである上に、甲品詞と乙品詞との中間に位するやうなものもあつて、その所屬を決定し難い場合が少くない。殊に口語においてさうであるが、本書では文語を主にして說き、口語はそれと關連させて述べるつもりであるから、こゝには普通に行はれる分類に從ふ事にする。從つて口語だけを切り離して考察する場合とは、自然と違つた見方も生ずる譯である。

〔七〕　名詞・代名詞——體言

「豐臣秀吉」「東京市」「机」「風」「運動」のやうな、人・場所、その他一切の事物の名を表す語を名詞といふ。また「われ」「それ」「こゝ」「あちら」のやうに、人・事物・場所・方角等の名の代りに用ひて、それ等を指し示す語を代名詞といふ。

名詞・代名詞を合せて體言といふ。體言はその語形が變化することなく、文中に於いて占める資格の中、單獨でも題目となり得る（第三項第一例）事が、最も重要な點である。

〔八〕　動詞・形容詞——用言

「泣く」「乾く」「ある」のやうに、人や事物の、動作・存在等を表す語を動詞といふ。また「美し」「淋しい」「つめたい」のやうに、人や事物の、性質・有樣等を表す語を形容詞といふ。

動詞・形容詞を合せて用言といふ。用言が文中で占める資格の中、單獨でも敍述となり得る（第三項第二例）事が、最も重要な點である。

〔九〕　助動詞

「賞めらる」「參ります」の「らる」「ます」は、それぞれ動詞について、受身の意・丁寧の意を表して居る。此のやうに主として動詞について、敍述を助ける語を助動詞といふ。

〔一〇〕 活用・語幹・語尾

用言と助動詞とは、用ひ方によつて、その語の形が變る。今文語で各一例を示せば、次の通りである。

動詞	賞め	賞む	賞むる	賞むれ	賞めよ
形容詞	高く	高し	高き	高けれ	
助動詞	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

右の樣に形の變ることを活用といふ。

又、これ等が活用するに當つて、右の「賞(ホ)」「高(タカ)」「ら」のやうに、變化せぬ部分を語幹（或は語根）と云ひ、傍線で示したやうな變化する部分を語尾といふ。

○第九項の「賞めらる」「參ります」のやうに、用言に助動詞のついたものを、活用連語と稱することがある。

〔一一〕 副詞

「大變淋しい」「すつかり乾きました」などいふ時「大變」「すつかり」などは、その下にある形容詞の「淋しい」、活用連語の「乾きました」を修飾して居る。このやうに、用言または、活用連語を修飾する語を副詞といふ。

○「美しい花」「につこり笑ふ」「是非參りませう」

この「美しい」「につこり」「是非」などのやうに、他の語に副うて、一定の意義を加へ（嚴格に言へば、內容を增すと同時に、その語の表す範圍を狹めるのであるが）、又はその語の作用を助けることを修飾といふ。

○副詞には、用ひ方による語形の變化はない。

〔一二〕 接續詞

この本は面白い。併し文章はやさしくない。

博物學に精しく且つ繪畫をよくす。

次の土曜日または日曜日に出發せん。

この「併し」「且つ」「または」のやうに、前後の文または、語句をつなぐに用ひる語を接續詞といふ。

○接續詞には、用ひ方による語形の變化はない。

〔一三〕 助詞

此處に梅の花が咲いて居ます。

に於ける「に」「の」「が」「て」のやうに、他の單語の下にあつて、その語と他の語との關係を示し、又は或意味を添へるものを、助詞（テニヲハとも）といふ。

○助詞も助動詞も、その語自身に特定の意味を有することなく、他の語に添うて始めて或意味を表し、いろ〳〵の役目をするのである。

○助詞は多くは語形が短小で、用ひ方による語形の變化はないが、口語に於いては、發音上、上にある語に融合することが珍しくない。

〔一四〕 感動詞

あゝ、悲しいかな。　もし〳〵、一寸待つて下さい。　おう、さうでしたか。

この「あゝ」「もしもし」「おう」のやうに、感情を表したり、呼びかけ・應答等に用ひる語を感動詞といふ。

○感動詞には、用ひ方による語形の變形はない。

第二篇　品詞各說

第三章　名　詞

〔一五〕　固有名詞と普通名詞

人・場所、その他一切の事物の名を表す語を名詞といふ（第七項參照）。

名詞のうち、「源頼朝」「鎌倉」「萬葉集」等は、その人・その土地・その書に限つた名で、他に通用しない。このやうに一事物に限つた名を表すものを固有名詞といふ。また「犬」「庭」「草」などのやうに同類に共通する名を表すものを普通名詞といふ。

○國語において、名詞を固有・普通の二つに分類する文法上の必要は、毫もないのであるが、この別を知つて居ることは、實用の上から便利である爲に、通例敎へる事になつて居る。

〔一六〕　形式名詞と實質名詞

幼より書を讀むことを好む。

親しく聞き得たるところを述ぶ。

すまじきものは宮仕なり。

其の反對するはずなし。

心に思ふまゝを語れ。

この「こと」「ところ」「もの」「はず」「まゝ」は、それ自身で一定の事物の名を表すものでなく、必ず上に「書を讀む」「親しく聞き得たる」等の語を伴ふものであるが、その職能が一般の名詞と異らぬので、同じく名詞と見なす。

○右の「こと」「所」「もの」等は、必要ある場合には、特に形式名詞と呼び、これに對して、前項に擧げた名詞のやうに、一定の事物を表すものを實質名詞といふ。

○次の、「こと」「ところ」等は、實質名詞である。

ことをおろそかにせず　　ところは何處か

ものに不足せず　　弓の的

このやうに形式名詞は、實質名詞の用法の發展の結果として生じたものが多い。

○形式名詞は、口語には殊に多くて、一々擧げきれないが、尙數語揭げよう。

兄のはう（方）は大丈夫だが、弟の方が氣がかりだ（口語）

あづまのかた（方）へ行く（文語）　　子孫の爲を思ふ（口語）
若いうちが花だ（口語）　　そんなつもりはない（口語）
あの人の反對する譯がない（口語）　　知らざる由を答ふ（文語）
この前にやつた通りがよい（口語）

尚、助詞にもこの種のものはあるが、こゝには略する。

〔一七〕　名詞の複數

普通名詞には、その表す事物が、單數であるか、複數であるか、形の上に區別のないのが通例であるが、ある名詞は次の如き方法で、複數を表すことがある。

一、同じ名詞を重ねる。

人々（ひと〴〵）　　山々（やま〴〵）　　家々（いへ〴〵）　　隅々（すみ〴〵）

○これ等は、その事物一つ〳〵をいふ意にもなる。尚一つ〳〵を指す言ひ方には、「各」を漢語につけた、「各人」「各國」の如きものがある。

二、名詞の下に「たち」「がた」「ども」「ら」などをつける。

御家人たち（文語）　　親たち　　殿がた

華族がた（口語）　武士ども　女ども　侍女ら　生徒ら

○これ等は人に關する名詞に限るもので、文語では尙、「殿ばら」「奴ばら」の如きがあり、用ひ方によつては、いろ〳〵の意になる。

また文語では、「ども」を人以外につけて、「松の木どもあり」「山口の千峯、酒よきものども持て來て（土佐日記十二月二十八日）」などいふ。

漢語には、「諸」「衆」「數」などを冠して複數を表すものがある。

諸國　諸先生　衆口　衆說　數種

○以上の「人々」「各國」「親たち」等は、重ねたもの、及び頭尾についたものを合せて、それ〴〵一語と見るべきである。

〔一八〕數詞

名詞のうち、事物の數量を表し、順序を數へるに用ひる語を、特に數詞といふことがある。

（數量）ひとつ　ふたつ　三(サン)　四(シ)　いつ組　む月　七匹　八人　九尾　十枚

（順序）第一　（第）二番　三號　四つ目

○數を不定にいふには、「いくつ」「いくら」「いく日(ニチ)(カ)」「何(ナン)千」「何(ナン)枚」「いくつ目」「何(ナン)號」などと

いふ。

○大凡の數を表すには、「數枚」「十人餘（アマリ）（ヨ）」「一二年」「五六日」などいふ。

〔一九〕 敬讓語 ― 敬語・謙語・丁寧語

單語の中には、その語固有の意味の外に、敬讓の意を含むものと、含まぬものとある。前者を敬讓語といひ、後者を平常語といふ。

敬讓語は、大別すると、敬語・謙語・丁寧語の三種となる。

一、敬語　敬語は、他を尊敬する意を含むもの。從つて、話對手又は、第三者に關する事に限つて、これを用ひる。

○古事記・日本紀・萬葉集等には、自己に敬語を用ひた例が少くないが、これは、特例と見るべきである。後世の文學等にも、高貴の方の仰言を引用した中に、その形式が頗る多いが、これ等の大部分は作者自身が、そのかたに對して敬意を有する所から、故意に或は無意識的に、仰言を變へて描出したものと解すべきである。

二、謙語　謙語は、他に對して、へり下る意を含むもの。これは話手・話對手・第三者、いづれに關する事でも、そのものが他に對して下位に立つ場合、又は事實はどうであつても、立つとして考へる

場合に用ひる。

○尊敬といひ、謙譲といふも、要するに、同一の心理作用であつて、たゞその向ふ方向が、彼方であるか、此方であるかの、相違に過ぎない。故に、平安朝の文學などにも、たとへば、天皇の、親王又は内親王に對する御動作に、謙語を用ひて描出した例は少くない。これ等は、親王又は内親王を主にして考へた場合に現れるのである。たとへば、

女御子……母女御も御子三歳にて亡せ給ひしかば、帝我れ一所長きものに思ほし養ひ奉り給ひける（榮華、月宴）

の「奉る」も、後に説くやうに謙語であるが、こゝでは帝の、女御子に對する御動作につけて用ひたのである。

三、丁寧語　話對手を敬する意味にもなる場合が多いが、主として、話手が自己の品位を保つ爲に用ひるもの。隨つて、話手・話對手・第三者、いづれに關する事にも用ひる。

○丁寧語は、主として對話に現れるので、これを對話語と稱する人もある。又これと謙語とを合して一種と見る人もある。

〔二〇〕　文語の敬譲名詞

文語の敬護の名詞は、次の通りである。

一、敬語の名詞には、「龍顏」「行啓」「仰せ」「思召」等のやうに、本來敬意を含むものもあるが、名詞に敬意を添へるには、一般に次の如くする。

み心　　おほみ歌　　おん盃

ご（御）書　　ご立腹　　ぎよ（御）意

このやうに、名詞の上に、「み」「おほみ」「おん」「ご」「ぎよ」等を冠らせるものがある。

父ぎみ　　兄上　　齋藤殿

また、人に關するものは、右のやうに、名詞の下に、「きみ」「うへ」「どの」等をつける。

また、漢語では、次のやうに敬意を表す語を冠らせたものを用ひる。

尊父　　尊名　　令閨　　賢息　　賢弟　　貴國　　貴書　　芳恩　　芳情　　高見　　高名

玉稿　　玉詠

これ等の漢語は、敬語としては、對者に關する事物に限つて用ひるものである。

二、謙語の名詞には、本來の國語では、「腰をれ」（自分の詠歌）、「せがれ」（自分の子）などあるが、さう多くはない。普通は、謙遜する意を冠らせた、次のやうな漢語を用ひる。

愚父　　愚妻　　拙宅　　拙著　　舍兄　　舍弟　　弊國　　弊家　　寸志　　寸書　　微志

微意　鄙見　鄙懷　粗飯　粗茶　薄謝　薄膳

○以上の敬讓名詞には、口語でも用ひるものが入りまじつてゐる。

〔二二〕　口語の敬讓名詞

口語の敬讓語は、次の通りである。

一、敬語　本來のものの外、一般の名詞を敬語にするには、「お」「ご(御)」等を冠らせ、又人に關するものには、「さま」「さん」等を添へ、或は頭尾に、これ等を同時に添へる。

お顏　お宅　ご兩親　ご機嫌

神さま　松平さま　叔父さん　春吉さん　ご尊父さま　お子さん

○この「さま」と「さん」とを比較するに、前者は尊敬の意が强く、後者は、親愛の意を表すと言はれる。尙、男子の間には、「齋藤君」「春吉君」のやうに、「くん」が用ひられる。

○敬意を含む語を重ねる事が、主として婦人の間に行はれる。

おみ帶　おみ足　おみおつけ(味噌汁)

○數詞にも「お」を冠らせることがある。

お一つ　お十五　おいくつ　おいくたり

二、謙語　「家内」（自分の妻）「せがれ」などの外、一般に謙意を表すには、「お」「ご」を冠らせる。

お相手を致しませう。　お迎に參りました。

お返事を差上げましたか。　お禮も申上げませんで……。

ご案内を致しませう。　ご挨拶に上りました。

○右の「お」「ご」は、元來は、相手をされる人、迎へられる人を敬する意を表すものであるから、これ等のついた語を、關係敬語と言ふ人がある。正しくそれに違ひがないのである。けれども、「お相手」「お迎」等を抽出せずに、「お相手を致しませう」「お迎に參りました」等を一まとめにして、動作する者の側から考へると、謙意を表すものと見ることが出來ると思ふ（前項の注意參照）。よつてこゝでは、これ等を謙語として擧げた。かく見ることは、後の謙語の動詞・助動詞との連絡上、少くとも便利である。

三、丁寧語　「お」「ご」を冠らせる。

お膳　お箸　お茶碗　お菓子　お藥　お湯　お酒　お晝　おやすみ（休日）

おしまひ（終）　ご飯　ご酒　ご本　ご馳走

○これ等の丁寧語は、敬語と紛れ易いし、また、用ひ方によつて敬語にもなるが、自分方（ガタ）の「膳」なり

「飯」なりを、他人に向つて「お膳」「ご飯」といひ、又、對手が何等敬意を表すべき人でなく、極端にいふと、召使を叱る時でも、「お膳」「ご飯」といふ。これ等の點から、敬語または謙語と區別される。

○「お」「ご」をつける丁寧語は、對話體に多く現れ、殊に婦人語に著しい。中には「おなか（腹）」「おはち（飯櫃）」「おなら（屁）」「おつけ（味噌汁）」のやうに、「お」を切離しては用ひぬものさへある。

第四章　代名詞

〔一二〕　人代名詞と指示代名詞

人や事物・場所・方角の名の代りに用ひて、それ等を指し示す語を代名詞といふ（第七項參照）。そのうち、人に用ひるを人代名詞、事物・場所・方角に用ひるを、指示代名詞といふ。

〇代名詞は、名詞と一緒に體言と呼ばれるもので、諸種の點に於いて、共通な性質を持つて居る。その人なり、事物なりを、直接に指し示す點は、固有名詞に似て居る。併し、代名詞が、一般に名詞と區別される點は、名詞は、一定の事物に限つた名であるのに、代名詞は指し方によつて、その實質の變るところにある。

たとへば、「私」は、話手は誰でも、自己を指すに用ひられ、また、甲處・乙處と處を異にすると、同じ「此處」でも、その內容が違ふが、名詞の表す所は一定して居るから、「猫」を指して「犬」といふ譯には行かぬ。

○名の代りに用ひる語は、右に擧げたのに限る譯ではない。たとへば、時を表す「今」「昨日」「明日」「いつ」等も、名の代りに用ひる語と言ひ得るのである。だから現に時の代名詞を立てる學者もある。故に、普通の文典で代名詞といふのは、名の代りに用ひる或る特定のものだけを含むものと解すべきである。

〔一三〕　自稱・對稱・他稱

代名詞のうち、話手が自己を指すのに用ひるものを自稱又は第一人稱といひ、話對手を指すものを對稱又は第二人稱といひ、自稱・對稱以外のものを他稱又は第三人稱といふ。

他稱即ち或は第三人稱は、その指し方によつて、四種に分れる。卽ち、話手に近いものを近稱と云ひ、話對手に近いものを中稱と云ひ、話手にも、對手にも、近くないものを遠稱といひ、また疑問のもの、或は不明のものを指すを、特に不定稱といふ。

○右の如くであるから、指示代名詞は全部他稱に入るのである。換言すれば、他稱には、人・事物・場所方角を指すものがあるといふ事になる。

〔一四〕　文語・口語の人代名詞の表と、指示代名詞の表

代名詞は、文語と口語との間に、文法上の差はないが、用ひる單語に異同がある。その用ひ方は、待遇上の關係によつて頗る複雜であるが、次には大體を表示するに止める。

一、文語の人代名詞の表

自稱	對稱	他稱			
		近稱	中稱	遠稱	不定稱
わ	な	こ	そ	あ、か	た
われ	なれ	これ	それ	かれ	たれ
	汝			あれ	

○他稱中の、近稱・中稱・遠稱に用ひる語は、元來は指示代名詞である。

○一音の代名詞は、主として、「わが國」「たが袖」「孔子及びその高弟の言行」のやうに、助詞「が」「の」に連つて用ひられる。

○複數を表す場合には、「われ」「汝」「これ」「それ」「かれ」「あれ」等に、「ら」をつけるのが普通である。

二、口語の人代名詞の表（括弧で包んだのは、複數を表す時につける語）

	自稱	對稱	他稱 近稱	他稱 中稱	他稱 遠稱	他稱 不定稱
同輩又は同輩以上に	わたくし（ども、たち、ら）	あなた（がた）	このかた（がた）	そのかた（がた）	あのかた（がた）	どなた どのかた（がた）
同輩又は同輩以下に	わたし（ども、たち、ら）	おまへ（がた、たち、ら）	このひと（たち、ら）	そのひと（たち、ら）	あのひと（たち、ら）	どのひと（たち） だれ

○右の外、男子は「僕」（―等、―たち）を自稱に、「君」（―ら、―たち、―がた）を對稱に用ひる事が普通である。又、「わたくしども」「僕等」を單數に用ひる事がある。

○「あなた樣」「どなた樣」「このおかた」「どのおかた」などいへば、更に敬意を含む事になる。

○「陛下」「殿下」「閣下」等は、文語・口語共通に用ひる（對稱他稱とも）特別な人代名詞である。

三、文語の指示代名詞の表

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	こ、これ	そ、それ	あ、あれ か、かれ	いづれ なに
場所	こゝ	そこ	かしこ	いづこ いづく
方角	こち こなた	そち そなた	あち あなた かなた	いづち いづかた

○一音の代名詞は、「こは驚くべき事なり」「そを知らでは……」「何もかも」なども用ひるが、多くは、助詞「の」に連つて、「この本」「その國」「かの童」「あの若者」のやうに、下の語を強く指し示すだけの意に用ひる。

○事物不定稱の「いづれ」は一つを指し、「なに」は廣く指す。故に二以上のものから、一を選擇するには、「いづれ」を用ひる。

○話手・話對手に近くないものでも、何れか一方の知つて居る事だと、近稱又は中稱の代名詞で表し、雙方の知る事だと遠稱を用ひる。これは人・事物・場所の代名詞、及び「この」「その」「あの（かの）」に共通である。

某海岸に一奇石あり。これ（この石）は……。

君はアフリカの南端を通過せる由なるが、そこ（その邊）は……。

曾て君と伊香保に遊びしが、かしこは……。

四、口語の指示代名詞

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	これ	それ	あれ	どれ なに
場所	こゝ こゝら	そこ そこら	あすこ あすこら	どこ どこら
方角	こつち こちら	そつち そちら	あつち あちら	どつち どちら

○事物代名詞（不定稱を除く）は、人代名詞の他稱にもなり、末に「ら」をつけて、複數を示すに用ひることがある。
○事物不定の「どれ」は、文語の「いづれ」と用法が同じ。但し口語でも丁寧にいふ時は、「いづれ」を用ひる。
○場所の代名詞の「ら」のついたものは、廣く漠然と指すに用ひる。またその遠稱には、「あそこ」「あそこら」がある。
○方角の代名詞の「ら」のついたものは、少し丁寧にいふことになる。

〔二五〕　代名詞の轉用

代名詞は異る稱に、又は他種の代名詞に、轉用されることが多い。たとへば、自稱の「わ」「われ」を對稱に、場所の「そこ」、方角の「そち」「そなた」を對稱に、事物の「これ」、方角の「こち」を自稱に用ひることとあるが如くである。人代名詞として用ひる「これ」「それ」「あれ」等は、元來は事物を指すものなる事は、既に述べた通りである。
○口語で、二以上の事物から選擇するに、方角の代名詞を用ひて、「こつちがいゝか知ら」「そちらに致しませう」などいふ事は、普通である。

〔二六〕　反射指示

代名詞には、以上に述べた種類のものと異つて、人稱に拘らず、そのもの自身（人にも物にも）を指す語がある。その指し方を反射指示といふ。本來この作用を有するものは、「おのれ」である。

女はおのれを喜ぶ者の爲に顏つくりす（枕、三）

白き花ぞおのれ獨りゑみの眉開けたる（源、夕顏）

風をいたみ岩打つ波のおのれのみ碎けて物を思ふ頃かな（詞花、卷七）

○「おの」は、「おのれ」と、同じ性質の語であるが、これは常に助詞「が」に連つて、「自身の」の意に用ひられる。

橘は於能が枝々なれども、玉にぬく時同じをにぬく（天智紀）。

今までに忘れぬ人は世にもあらじ、おのがさまざま年の經ぬれば（勢語、八六段）。

今普通「各」で表す「おの〳〵」も、この「おの」を重ねて各自を意味するのである。

○自稱の代名詞「われ」を、「おのれ」と同意に用ひ、又「わ」に「が」をつけた「わが」を、「おのが」の意に用ひることあり、又、反對に、「おのれ」を、自稱・對稱に轉用することも珍しくない。

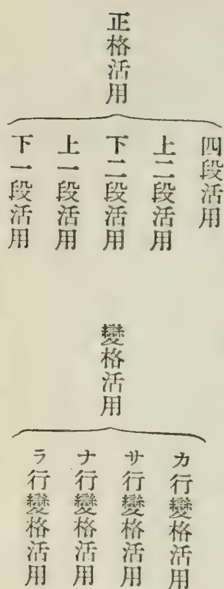
○今は名詞の「自己」「自身」「自分」を、「おのれ」と同樣に用ひる事が多い。

第五章　文語の動詞

第一節　文語動詞の活用の種類

〔一七〕　正格活用と變格活用

人や事物の動作・存在等を表す語を動詞といふ。動詞には活用がある（第八・第十項參照）。あらゆる動詞を、活用の狀態から分類すると、次の如く九種になる。その區別の標準は、活用する部分が五十音圖の同一の行に就いて見て、幾段（列）にわたるかといふ點にある。



〔二八〕　四段活用

今動詞「咲く」を取つて見ると、次の如く活用する。

咲か|　咲き|　咲く|　咲け|

即ち「咲」は動かないで、その下がか|・き|・く|・け|と變化する。すべて用言が活用するに當つて、「咲」のやうに變化せぬ部分を語幹（語根とも）といひ、か|・き|・く|・け|のやうに變化する部分を語尾といふ。次に右の語尾を五十音圖に當てゝ見ると、ア・イ・ウ・エの四つの段にわたるを知り得る。このやうな活用を四段活用といふ。

○四段活用の動詞は、カ・ガ・サ・タ・ハ・バ・マ・ラの各行に存する。よつて、その活用を示す時は、行名をも言ふのが例である。たとへば、右の「咲く」の活用を「カ行四段活用」といふ類である（以下各種活用もこれに準ずる）。又これを書き表す場合に、「カ、四」のやうにすることがある。

○四段活用に屬する動詞の數は、他のどの種類に屬するものよりも、遙に多い。そのうち普通に用ひるものは、卷末の附錄に「各種活用所屬の主な動詞・形容詞」として、他の用言と共に擧げた。

〔二九〕　上二段活用

「起く」といふ動詞の活用を考へると、次の通りである。

起き　起く　起くる　起くれ　起きよ

語尾は、き・くがもとで、それに、る・れ・よのついたものである。き・くは、五十音圖のイ・ウの二段であるから、右の如き活用を上二段活用といふ（段の上下は、五十音圖のウの段を標準にしていふ）。

○上二段活用の動詞は、カ・ガ・タ・ダ・ハ・バ・マ・ヤ・ラの各行に存する。これを書き表はすのに、「カ、上二」を以て、カ行上二段活用とする例にならふことがある。

〔三〇〕　下二段活用

「尋ぬ」といふ動詞の活用は、次の通りである。

尋ね　尋ぬ　尋ぬる　尋ぬれ　尋ねよ

即ち語尾は、ね・ぬがもとで、それに、る・れ・よのついたものである。而して、ね・ぬは、五十音圖のエ・ウの二段であるから、右の如き活用を下二段活用といふ。

○下二段活用の動詞は、五十音圖の各行と、ガ・ザ・ダ・バの各行とに存する。これを書き表はすのに、「ナ、下二」を以て、「ナ行下二段活用」とする例にならふことがある。

〔三一〕　上一段活用

「見る」といふ動詞のあらゆる形を考へるに、次の通りである。

み　　みる　　みれ　　みよ

即ち、み|だけがもとで、それにる|・れ|・よ|のついたものである。而してみ|は、五十音圖のイの段の音である。よつて、このやうな活用を上一段活用といふ。

○上一段活用の動詞は、カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの各行に存するが、所屬語が極めて少く、普通用ひるのは、次の諸語に過ぎない。

カ行　着る。　　ナ行　似る、煮る。

ハ行　干る。　　マ行　見る、試る、顧る、惟る、鑑る。

ヤ行　射る、鑄る。　　ワ行　居る、率る、用ゐる。

但し、「試る」「鑑る」等は「マ上二」にも用ひ、「用ゐる」は「ハ上二」にも用ひる。

○「ナ、上一」を以て、ナ行上一段活用を示す例にならふことがある。

○上一段活用には、「見る」のやうに、語幹・語尾の區別のつかぬものが多い。

〔三二〕　下一段活用

「蹴る」といふ動詞の活用は、次の通りである。

け　ける　けれ　けよ

即ちけだけがもとで、それに、る・れ・よのついたものである。而して、けは五十音圖のヱの段の音である。このやうな活用を下一段活用といふ。

○下一段活用の動詞は、カ行の右の「蹴る」だけである。但し「蹴る」は、現代文では、「蹴らず」「蹴りたり」のやうに、「ラ、四」的に用ひることもある。

〔三三〕　カ行變格活用

「來」といふ動詞の活用を考へると、次の通りである。

こ　き　く　くる　くれ　こよ

即ちカ行上二段活用に似て居るが、オ段のこのある所が違ひ、その他五種の正格活用の何れにも屬せぬ。よつて、この活用をカ行變格活用（略稱、カ變）といふ。

○カ變に屬する動詞は、右の「來」の一語である。

○カ變は、こ・き・くとなるから、これをカ行三段活用といふ人もある。

〔三四〕　サ行變格活用

「爲（ス）」といふ動詞の活用は、次の通りである。

せ　し　す　する　すれ　せよ

即ちサ行下二段活用に似て居るが、イ段のしのある點が異り、その他正格活用の何れにも屬せぬ。このやうな活用をサ行變格活用（略稱、サ變）といふ。

○サ變に屬する動詞は「爲（ス）」「おはす」の二語であるが、名詞や漢語を動詞にするには、これによる例である。この際これが、ザ行に變ることがある。

罪す　心す　與（クミ）す　欲（ホッ）す（「ほりす」の轉）
嘉（ヨミ）す　無（ナ）みす　重んず　甘んず
勉強す　製す　論ず　同ず

また「先んず」「暗んず」は、「先にす」「そらにす」の轉であるが、一語の動詞と見るべきである。
尙、「重んず」「甘んず」は、「重み」「甘み」の名詞に、すのついたものである。

○サ變はせ・し・すとなるから、これをサ行三段活用といふ人もある。

〔三五〕　ナ行變格活用

「死（シ）ぬ」といふ語の活用は、次の通りである。

死な　死に　死ぬ　死ぬる　死ぬれ　死ね

即ち語尾が、な・に・ぬ・ねとなる點は、四段活用に似て居るが、更に、ぬに、る・れのついたもののある點が違ふ。また、「死に」以下、「死ぬれ」までは、上二段活用に似て居るが、「死な」「死ね」のある點が違ふ。その他、今まで述べた何れの活用にも屬せぬ、このやうな活用をナ行變格活用（略稱、ナ變）といふ。

○ナ變に屬する動詞は、「死ぬ」「往ぬ」の二語である。

〔三六〕 ラ行變格活用

「有り」といふ動詞は、次の如く活用する。

あら　あり　ある　あれ

即ち語尾が、ら・り・る・れとなる點は、四段活用と同樣である。然るに今まで述べたあらゆる動詞は、言ひ切る場合には「讀む」「騷ぐ」「受く」「見る」「死ぬ」のやうに、末の音はウ段であるのに、これは「あり」とイ段の音で終る點が一般と異る。よつて、これを別に立てゝ、ラ行變格活用（略稱、ラ變）と稱する。

○ラに屬する動詞は「あり」「居り」「侍り」の三語である。

〇

以上九種の活用を通觀するに、そのもとになる型が二つある。一は、母音の變化によるもので、四段活用・ラ變がその代表である。一は、一定の根幹となるものがあつて、それに他の音（る・れ・よ）のつくもので、上下の一段活用が、その代表である。他の上下の二段活用・カ變・サ變・ナ變等は、この二型の混合して成つたものに外ならぬのである。

第二節　各活用形の用法（文語）

〔三七〕　未然形・連用形・終止形・連體形・已然形（イゼン）・命令形

今「死ぬ」の各活用の形の一用法を見ると、次の通りである、

一、	（死な）	願はくは花の下にて我死なむ	未然形
二、	（死に）	不幸にも一家死に絕えたり	連用形
三、	（死ぬ）	生れたるものは必ず死ぬ	終止形
四、	（死ぬる）	鳥の死ぬる時はその聲悲し	連體形

五、（死ぬれ）　　身は死ぬれども魂はこの土に留る　　　已然形

六、（死ね）　　　君のためには潔く死ね　　　　　　　命令形

右の六つの活用の形の中、第一の「死な」は、死ぬことの未ださうなつて居ない意を表すから、これを未然形といふ。

第二例の「死に」は、他の用言に連る形であるから、これを連用形といふ。

第三例の「死ぬ」は、言ひ切る所に用ひる形であるから、これを終止形といふ。

〇終止形は、その動詞の本體と見られる。隨つて、或動詞を擧げ示すには、その終止形を以てする例である。これは形容詞にも、助動詞にも共通である。

第四例の「死ぬる」は、體言に連る形であるから、これを連體形といふ。

第五例の「死ぬれ」は、死ぬことの已にさうなつた場合に用ひる形であるから、これを已然形といふ。

第六例の「死ね」は、命令に用ひる形であるから、これを命令形といふ。

〔三八〕　動詞の活用表

すべて動詞の活用の形を、前項の例にならつて排列したものを、活用表といふ。今、各種活用の動詞を一語づゝ擧げて示せば、別表の通りである。

種類	語例	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	振る	振(フ)	ら	り	る	る	れ	れ
上二	盡く	盡(ツ)	き	き	く	くる	くれ	きよ
下二	認む	認(ミト)	め	め	む	むる	むれ	めよ
上一	煮る	（煮）	に	に	にる	にる	にれ	によ
下一	蹴る	（蹴）	け	け	ける	ける	けれ	けよ
カ變	來(ク)	（來）	こ	き	く	くる	くれ	こよ
サ變	爲(ス)	（爲）	せ	し	す	する	すれ	せよ
ナ變	死ぬ	死(シ)	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ變	有り	有(ア)	ら	り	り	る	れ	れ

〇尙、各種活用の各行の一動詞を擧げた活用表は、卷末に附錄としてある。
〇表中、「未然」「連用」などあるは、「形」字を略したのである。以下の表もこれにならふ。
〇語幹の部に（　）印を附したのは、語幹と語尾との區別のつかぬものである。故に他の語では、たとへば、「振る」の未然形は、語幹の「ふ」と、相當欄の語尾「ら」とを合した「ふら」であるが、（　）印を附した動詞では、表に現れて居るものが、卽ち、その活用形である。たとへば、上一段の「にれ」は、そのまゝで「煮る」の已然形である。以下の表もこれにならふ。
〇右の表によつて見れば、各種活用には、活用形の同じものが少くない。卽ち四段では終止形と連體形、上下の二段では未然形と連用形、上下の一段では未然形と連用形、及び終止形と連體形、ラ變では連用形と終止形とが、それ〴〵同じである。而して、六活用形全部の異るものは、カ變・サ變・ナ變の三である。
それから、オの段の活用形を有するはカ變に限つてゐる。そして終止形がイの段の音で終るのは、ラ變だけである。

〔三九〕　各活用形の一用法は、第三十七項に述べたが、その他いろ〳〵の用ひ方がある。次にその主なものを擧げよう。

〔四〇〕　未然形の用法

一、助動詞「る」「らる」（可能・受身・敬譲）、「す」「さす」「しむ」（使役・敬譲）、「ず」「ざり」「じ」（打消）、「む」「まし」（推量）、「まほし」（希望）に連る。但し、サ變は「り」（時）にも連る。用例は各助動詞の部にゆづる。

二、助詞「ば」に連つて、事實の假定、及び未來の時を表す。例は助詞の部にゆづる。

〔四一〕　連用形の用法

一、他の用言に連る。

讀み果つ　起きあがる　瘦せ衰ふ　得がたし

落ちやすし　今は此の者愛しにくし、討てや（平家、九）

○動詞の中には、「咲きそむ」「書きさす」「參りかぬ」「しおほす」等の、「初む」「さす」「兼ぬ」「おほす」のやうに、他の動詞につくだけで、獨立に用ひられぬ特別なものがある。

二、助動詞「き」「けり」「たり」「ぬ」「つ」（時）、「けむ」（推量）、「たし」（希望）、「けり」（詠歎）に連る。

また、動詞から轉じた敬譲の助動詞「奉る」「致す」等に連るものがある。詳しくは、助動詞の部に

述べる事にする。

三、事柄を並列していふに用ひる。

家に在りて盆栽を樂しみ、書畫を玩ぶ。

兄は洋畫に志し、弟は彫刻家となる。

○右の如き用ひ方を、「文の中止に用ひた」ものといふ人もある。

四、名詞となる。

障子のやぶれ（破）　かち（勝）を爭ふ

たすけ（助）を乞ふ　おぼえ（覺）なし

○尙、「山ごもり」「あはせ藥」のやうに、他の語と一緒になつて、名詞となることが多いが、それ等は、語の構成の部にゆづる。

五、動詞と名詞との兩性質を表す。

A　「行く」「來る」「遣す」等の目的を示すもの。

人を呼びに行く　友を見まひに來る

城を攻めに遣す

B　下にサ變の動詞「す」があつて、全體として一動詞のやうになる。

未だ歸りはせじ　　はや散りやせん

寒さにはたへもすべけれど……

○即ち右の連用形は、上に對しては動詞のはたらきを表すが、同時に下に對しては、名詞的性質を有するものである。

六、副詞のやうに用ひる。

はじめこの地を占領するや……　　あまり悲しくて……

やすみ〳〵登山す　　重ね〴〵言ひおくる

〔四二〕　終止形の用法

一、事柄を言ひ切るに用ひる。用例は略す。

二、助動詞「べし」「べかり」(可能・推量等)、「まじ」(打消)、「らし」「らん」「めり」(推量)等に連る(但しラ變の動詞は例外)。

四、同語を重ねて、副詞のやうに用ひる。

泣く〳〵去る　　源平かはる〴〵天下を取る

かへす〴〵訓戒す　　這ふ〳〵逃げ歸る

〔四三〕　連體形の用法

一、體言に連る。

日の昇る時　　義に勇む彼

二、助動詞の「なり」（指定）、「如し」（比況）に連る。尚、ラ變の動詞は、「べし」「べかり」「らし」「らむ」「めり」「まじ」にも連る。例は略す。

三、動詞と名詞との兩性質を表す。

春の至るは嬉しけれども、老の來るは悲し。

白雲の飛ぶをしるべにして行く。

水の流るゝにまかせて下る。

○右のやうに用ひられた動詞を、特に準體言と呼ぶことがある。

〔四四〕　已然形の用法

一、助詞「ば」「ども」等に連つて、事實の既にさうなつて居ること、又は假定を表す。詳細は助詞の部にゆづる。

二、四段活用の動詞は、助動詞の「り」（時）につく。

○尙、已然形は、「こそ」と一緒になつて、特別な用法を有するが、助詞の部にゆづる。

〔四五〕　命令形の用法

一、對手に向つて、命令・願望する意を示す。例は略す。

二、自己の希望を表す。これは動作者に對しては、間接の關係になる。

あはれ此の夢のあへかし　　早く夜のあけよかしと願ふ

わが子は無事にあれと神に祈る

三、放任の意を表す。

梅花は落ちば落ちよ。　　天道はくみしもせよ與せずもあれ。

四、假設に用ひる。

何人にもせよ之を犯すを得ず。

戰場はいづこにてもあれ、情をいたましめざることなし。

〔四六〕　各活用形には、大體以上述べたやうな用ひ方があるから、ある動詞の六活用形を考へる時には、各形の主な用法の一二を知つて居れば、判明する譯である。

○試に、これを述べると、次の通りである。今「讀む」「受く」を例にとる。

一、打消の意の「ず」、又は推量の意の「ん」のつくのは未然形。——讀まず、受けず。

二、過去又は完了の意の「たり」のつくのは連用形。——讀みたり、受けたり。

○助詞の「て」、又は口語助動詞「ます」をつけて見るのもわかりいゝが、これ等の場合には、後にいふ音便（オンビン）に注意せねばならぬ。

三、文を言ひ切るに用ひるのは終止形。——地理書を讀む。賞を受く。

四、名詞「人」又は「時」のつくのは連體形。——讀む人、受くる時。

五、口語「けれども」の意の「ども」のつくのは已然形。——讀めども、受くれども。

○助詞「ば」は未然形にもつくから紛れ易い。

六、命令の意を表すのは命令形。——讀め、受けよ。

第三節　動詞の音便（文語）

〔四七〕　音便——イ音便・ウ音便・撥音便・促音便

ある音(オン)を他の音(オン)と一緒に發音する場合に、便宜上、本來の音を別の音に變へることがある。そのうち或種類のものを、特に音便(オンビン)といふ。

而して、動詞の四段活用と、ナ變・ラ變との連用形が、助詞「て」、時の助動詞「たり」に連る際に起る音便を、動詞の音便といふ。これには次の四種がある。

イ音便　ウ音便
撥音便　促音便

〔四八〕　イ音便

カ行・ガ行・サ行の四段活用の語尾、き・ぎ・しが、いに變るをイ音便といふ。而して、ぎが、いとなる時の、「て」「たり」は、「で」「だり」となる。

書きて（たり）………書いて（たり）
漕ぎて（たり）………漕いで（だり）
指して（たり）………指いて（たり）

○「吹いて」「脫いで」など書くべきいを、ゐ又は、ひと誤らぬやうに、注意すべきである。
○「し」が「い」になるものは、現代文ではあまり多く用ひない。

〔四九〕　ウ音便

ハ行四段活用の語尾ひが、うに變るを、ウ音便といふ。

言ひて（たり）………言うて（たり）

請ひて（たり）………請うて（たり）

○「問うて」「沿うて」など書くべきうを、ふと誤らぬやうに、注意すべきである。

○鎌倉以後のものに、「喜うで」「賴うだる方」のやうに、バ行・マ行にもウ音便が起り、今も地方に殘存するが、一般的なものと認められない。

〔五〇〕　撥音便

バ行・マ行の四段活用、及びナ變の語尾び・み・にが、んに變るを撥音便といふ。この場合の「て」「たり」は、「で」「だり」となる。

遊びて（たり）………遊んで（だり）

汲みて（たり）………汲んで（だり）

死にて（たり）………死んで（だり）

○右の如き場合に、んを、むと書き誤らぬやうに、注意すべきである。

○鎌倉以後のものには、「往んじ（いにし）嘉吉の戰」「去ん（さり）ぬる五月」「旣に誅せられ畢ん（をはり）ぬ」「足ん（たり）ぬべし」のやうに、ナ變が時の助動詞「し」（きの連體形）に連つた際や、ラ行四段活用が時の助動詞「ぬ」に連つた際に、撥音便が現れるが、一般的にはならなかつた。

〔五一〕　促音便

タ行・ハ行・ラ行の四段活用、及びラ變の連用形ち・ひ・りが略されて、その上の音が促音に變るを促音便といふ。

立ちて（たり）………たつて（たり）
逢ひて（たり）………あつて（たり）
振りて（たり）………ふつて（たり）
有りて（たり）………あつて（たり）

○ハ行四段活用には、ウ音便・促音便ともに存するが、語によつては、その一方しか現れぬものがある。たとへば、「請うて」「問うて」は普通であるが、「請つて」「問つて」は現れない。

○カ行四段の「行く」は、語幹いの時は、促音便になつて、「いつて」といふが（カ行四段で促音便を見るのは、この語に限る）、語幹ゆの時は、イ音便になつて、「ゆいて」といふ。

○ラ行四段の動詞が、「し」（時の助動詞）に連つた際にも促音便が起るが、一般的にはならなかつた。

李陵が胡に入つしに同じ。　落ちとどまつし時。

第四節　活用の識別と假名遣

〔五二〕　動詞の語尾の中には、その活用の種類は違ひながら、現在の發音では區別せぬもの、紛れ易いもの等があるから、活用を正確に會得せねば、隨つて假名遣の誤にも陷る。一語々々の動詞の活用を判斷するには、簡單には第四十六項に據れば宜しいが、こゝに全般的な注意を述べる。

〔五三〕　活用の種類を考へるに當つては、次の四項を、特に注意すべきである。

一、上下の二段活用とナ變との連體形・已然形、及びラ變の終止形は、現在の口語から誤り易いから、混同してはならぬ。

二、音便と本來の活用形とを混合せぬやうにせねばならぬ。

三、所屬語の少い左記のものは、暗記する要がある（第三十一項乃至第三十六項參照）。

上一　下一　カ變　サ變　ナ變　ラ變

四、或動詞をとつて、右の六種のいづれにも屬せぬものであつたら、四段か、上二段か、下二段であるはず故、それを識別するには、その動詞に打消の「ず」、又は推量の「ん」をつけて見て、次の如く判ずる。

待たず(ん)の如く、ア段の音につく時は、四段。

落ちず(ん)の如く、イ段の音につく時は、上二段。

負けず(ん)の如く、エ段の音につく時は、下二段。

〔五四〕　右の如くにして、四段・上二段・下二段のいづれかの活用である事が判つても、何行に屬するかゞ、判斷しにくいものがある。それには次の如く考へると宜しい(總じて動詞は、終止形以下につくことあるる・れ・よを取除いて考へれば、必ず五十音圖の同行に活用する事を忘れてはならぬ)。

一、「恥じず」「閉じん」のやうに、未然形の語尾の發音のじであるのは、全部ダ行上二段活用で、隨つて假名は「ぢ」が正しい。ザ行には上二段活用はない。(ジ・ヂの發音の區別ある地方では、この條不要)。

二、上二段活用のハ行とヤ行とは紛れ易いが、ヤ行のは次の三語だけである。

老ゆ　悔ゆ　報（酬）ゆ

三、下二段活用のザ行とダ行とも紛れ易いが、ザ行に屬するものは、「交（混）ず」の外現れない。

四、下二段活用のア行・ハ行・ヤ行・ワ行も紛れ易いが、その所屬語は次の通りである。

ア行　得。

ヤ行　癒ゆ　覺ゆ　消ゆ　聞ゆ　肥ゆ　越（超）ゆ　凍ゆ　冴ゆ　榮ゆ
聳ゆ　絕（斷）ゆ　生ゆ　冷ゆ　殖ゆ　吠ゆ　まみゆ　見ゆ　燃ゆ
萌ゆ　等

ワ行　植う　飢う　据う　等

右の何れでもないものは、大抵ハ行下二段活用であると判ずる。

五、四段活用で、「買ワず」「思ワん」の如く、未然形の語尾のワと發音されるものは、全部ハ行である。ワ行には四段活用がない。

〔五五〕　同じ漢字を以て表しても、用ひ方によつてその活用の異る事がある。次にその數例を擧げよう。

（落つ……タ、上二。
　落す……サ、四。

（冷ゆ……ヤ、下二。
　冷す……サ、四。

見る……マ、上一。　來……カ變。
見ゆ……ヤ、下二。　來る……ラ、四。
見す……サ、下二。　來す……サ、四。

特に「生」の字の如きは、次のやうに、いろ〳〵に用ひる。
はゆ（ヤ下二）。　はやす（サ四）。　おふ（ハ上二）。　うまる（ラ下二）。　せうず（サ變）。

故に、一々の場合に當つて、愼重に考察しなければならぬ。

〔五六〕　自動詞・他動詞

動詞を區別して、自動詞・他動詞と呼ぶことがある。

道行く人々は、蟻の如く集まる。
强き火も、時到つて消ゆ。

のやうに、目的の語を要求せぬ動詞を、自動詞といふ。これに對して、

蟻は夏日も營々として餌を集む。
人々協力して火を消す。

のやうに、その動作を直接に受ける目的の語（多くは「餌を」「火を」のやうにをがつく語）を要求する

動詞を他動詞といふ。

「集まる」と「集む」、「消ゆ」と「消す」とは、自動詞と他動詞とが、別活用になる例であるが、また左例の「吹く」「閉づ」のやうに、同活用の場合もあるから、その場合々々に當つては、その用法に注意して活用を判斷しなければならない。

風吹く（自）………太郎笛を吹く（他）〔共に、カ四〕

門戸閉づ（自）………太郎戸を閉づ（他）〔共に、ダ上二〕

第五節　敬讓動詞（文語）

〔五七〕　動詞にも敬讓語（第十九項參照）がある。

一、醍醐天皇、道眞に御衣をたまふ。

二、道眞、醍醐天皇より御衣をたまはる。

某國守より朝廷に土産をたてまつる。

三、こゝに珍しき事の候。

右例（一）の「たまふ」は、「與へる」に敬意を含む故、敬語である。例（二）の「たまはる」「たてまつる」は、「貰ふ」「與へる」に、へり下る意を含むから、謙語である。又例（三）の「候」は、「あり」の意で、話しぶりを丁寧にするに用ひてあるから、丁寧語である。このやうに敬讓動詞にも三種ある。

〔五八〕　敬讓動詞の主なものは、次の通りである。

一、敬　語

遊ばす（爲ル）　います・ます・おはします・まします（在ル・行ク・來ル）

おぼす・おぼしめす（思フ）　きこしめす（聞ク・飲食スル）

しろしめす（知ル）　たぶ・たまふ（與ヘル）

のたまふ（言フ）　召す（呼ブ・飲食スル・着ル・乘ル等）

以上は四段活用であるが、尚次のやうなものがある。

おはす（いますに同じ。サ變。サ四にも用ひる）　仰す（言ヒツケル、サ下二）

下さる（與ヘル、ラ下二）　なさる（爲ル、ラ下二）

渡らす（在リ・行ク・來ル。サ下二）

漢語には、「御覽ず」「行幸す」「出御す」（サ變）の類がある。

○右の中には、成立上二語の合成したもので、一語と見らるべきものがある。

○「渡らす」は、次のやうに現れることがある。

彼の尼は、若きより慈悲深き人にて御渡り候ふ（平治、下）

これより父大納言の御わたりあるなる有木の別所とかやへは、いかほどあるか（平家、二）

けれども、大抵の場合には、「渡らせ給ふ」「渡らせまします」のやうな形をとるから、便宜上「渡らす」までを一語と見た。

二、謙　語

致す（爲ル）　承る（聞ク・承諾スル）　候ふ（傍ニ侍スル）　奉る（與ヘル）

たまはる（貰フ）　仕る（爲ル）　申す（言フ）　參る（行ク・來ル）　拜む（見ル）

以上は四段活用であるが、尚次のやうな語がある。

聞ゆ（言フ、ヤ下二）　侍り（候ふニ同ジ、ラ變）　參らす（與ヘル、サ下二）

申上ぐ（言フ、ガ下二）

○漢語では、「參ず」「奉ず」「奏す」「拜す」「拜觀す」「拜聽す」「參拜す」「進上す」「進呈す」（共にサ變）等がある。

○「奉る」を「乘る」「着る」の意、「參る」を「飲食する」の意の敬語に用ひることがある。

御輿寄せて、疾く〳〵奉るべき由申けれども返答せず（長門本平家、一九）

御料は參りたるかといへば、夕べも今朝も……御箸をだに立てさせ給はずと申ければ……（同右）

三、丁寧語

謙語の「仕る」「致す」「承る」「申す」「參る」「候ふ」「侍り」及び漢語の「存ず」等を、丁寧語として用ひる。但し「候ふ」「侍り」は、「ある」の意となる。

鎌倉殿の御舍弟九郎大夫の判官殿…その御内に、伊勢の三郎義盛と申す者にて候ふが、軍合戰の料にて候はねば、物具をも仕り候はず…これまでまかり向つて候ふぞ。あけて入されせ給へ（平家、一一）

山門の大衆狼藉を致さば手向ひすべき所に…（同、一）

彼の幼き者一人助け置かれたりとも、いかばかりの事か侍らん、…聞くより痛はしく不憫に侍るぞとよ（平治、下）

丹波の少將を急ぎこれへたべ、存ずる旨あり（平家、二）

○「まかる」は、元來は、尊い所から退出する意で、「參る」の對になる謙語であるが、接頭語のやうに、他の動詞について、丁寧語を造るやうになる。例は右に出たが、尚一例を左に記す。

はや成經が身の上にまかり成つて候ひけるぞや（平家、二、成經の語）

〔五九〕　漢語や名詞を普通の動詞にするには、サ變にするを常とするに對して、これ等を敬讓の動詞にするには、次の方法による。

一、敬意を含む語に、「あり」「候ふ」「まします」等をつけて、敬語動詞をつくる。

主上斜ならず御感あつて…（平家、三）　郁芳門より入御あるべきにて…（同一）

法皇…錦帳近く御座あつて千手經をうち上げ〱遊ばされ（同三）

法皇…と御氣色ありければ、少將御前へ參られたり（同二）

本三位の中將重衡…御產平安、皇子御誕生候ふぞと高らかに申されたりければ（平家、三）

あの大納言失はれんことは、よく〱御思惟候ふべし（同二）

君の御出家候はゞ御内の上下みな惑ひ者となり候ひなむず（同二）

皇子御誕生ましまさば八幡平野大原野なんどへ行啓あるべきよし御立願あり（同三）

二、敬意を含む語に「なる」をつけて敬語動詞をつくる。

一院も急ぎ六波羅より還御なる（平家、一）

東の洞院を南へ、大炊の御門を西へ御出（ギョシュツ）なるに…（同）

左右なく内へ御幸なりぬ（保元、下）

ある時信西に向つて上皇仰せなりけるは…と仰せられければ（平治、上）

三、敬意を含む語に「なす」をつけて、謙語動詞をつくる。これは廣く適用されず、またその下には、仕向ける意の助動詞の添ふのが常である。

中の御門の御所へ還御なし奉る（平家、一）

大極殿…延久四年四月十五日に造り出されて…遷幸なし奉る（同）

四、「仕る」「申す」等をつけて、謙語動詞をつくる。

出家入道仕りいかならん片山里にもこもり（平家、二）

この山を社家より內裏へ奏聞申したりければ（同、一）

○尙、「たぶ」「奉る」等を、「て」を介して一般動詞につけて、その事を「して下さる」「してあげる」の意に用ひることがある。

せめては此の船に乘せて、九國の地まで著けてたべ（平家、三）

たゞ一所に如何にもなる樣に申してたばせ給ふべうもや候ふらん（同二）

法華問答講一定あるべくば、三年が命を延べてたてまつらむ（同一）

○「見せ申す」の「申す」の類は、助動詞として取り扱ふ。

第六章　口語の動詞

第一節　活用の種類と活用形の用法

〔六〇〕　文語口語の活用の異同

動詞の活用は、文語と口語との間に、それ〳〵異同がある。文語の活用は、前章に述べた通りであるが、口語の活用は、その種類から云へば、四段活用・上一段活用・下一段活用・カ行變格活用・サ行變格活用の五種に減じた。その關係を示せば、次の通りである。

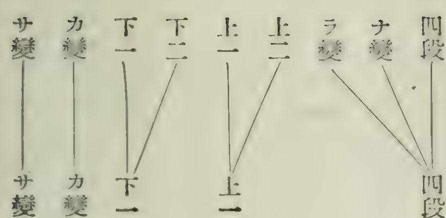
一、文語の四段活用は、口語でも四段活用である。
二、文語で上一段活用は、口語でも上一段活用である。
三、文語で下一段活用は、口語でも下一段活用である。
四、文語で上二段活用は、口語では上一段活用である。

五、文語で下二段活用は、口語では下一段活用である。

六、文語のナ變・ラ變は、口語では四段活用である。

七、文語のカ變・サ變は、口語でもカ變・サ變であるが、活用のしかたに差がある。

以上の關係及び、口語動詞の活用表を示せば、次の通りである。



口語活用名	例語	語幹	語尾 未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	裂く〔文語四段〕	裂	か	き	く	く	け	け
	死ぬ〔文語ナ變〕	死	な	に	ぬ	ぬ°	ね°	ね
	有る〔文語ラ變〕	有	ら	り	る°	る	れ	れ
上一段	似る〔文語上一〕	（似）	に	に	にる	にる	にる	によ、にろ°
	恥ぢる〔文語上二〕	恥	ぢ	ぢ	ぢ°る°	ぢ°る°	ぢ°れ°	ぢよ、ぢ°ろ°
下一段	蹴る〔文語下一〕	（蹴）	け	け	ける	ける	けれ	けよ、け°ろ°
	尋ねる〔文語下二〕	尋	ね	ね	ね°る°	ね°る°	ね°れ°	ねよ、ね°ろ°
カ變	來る〔文語カ變〕	（來）	こ	き	く°る°	くる	くれ	こ°い°
サ變	爲る〔文語サ變〕	（爲）	せ	し	す°る°	する	すれ	せよ、し°ろ°

○上一段・下一段・サ變の命令形に、末に「ろ」のある形が殖えたが、これは文語には全くない。但し下一段の「くれる」(呉で表される) の命令形は、對話體では「くれ」である。

○文語の已然形に相當する所を「假定」と變へたについては、第六三項に述べる。

○右の表でわかる通り、口語では、終止形と連體形とが、すべて同形である。これは次の形容詞にも、助動詞にも共通な現象である。

〔六一〕　口語と文語との活用の關係は、前項で述べた通りであるが、二三の注意すべきことがある。

一、「借る」「足る」「飽く」「染(沁)む」は、文語では四段活用であるが、口語では「借りる」「足りる」「飽きる」「しみる」のやうに、上一段活用に用ひる。但し口語でも、筆寫體では、文語のやうにも現れる。又「顫ふ」は、文語では四段活用であるが、口語では「ふるへる」と、下一段に活用させることがある。

二、文語ナ變の「往ぬ」や、ラ變の「侍り」等は、口語には普通用ひない。

三、下一段の「蹴る」は、口語でもラ行四段のやうに用ひることがある。

四、口語でも、漢語を動詞にするには、原則としてサ變によることになつて居るが、中には次の如く用ひるものがある。

例語	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令	活用の種類
煎じる	煎	じ	じ	じる	じる	じれ	じよ、じろ	上一段
譯す	譯	さ	し	す	す	せ	せ	四段

○通・應・高（カウ）・焙（ハウ）・封（フウ）・命・信・案・感・損・談などは、「煎じる」のやうに、上一段にも用ひる。
○議・解（カイ）・託・賀・謝・愛・祝・略・辭・害・廢・熟・復などは、「譯す」のやうに、四段にも用ひる。
○重んず・安んず・疎んず・先んず・暗（ソラ）んずなどは、漢語から來た動詞ではないが、これらも「煎じる」のやうに、上一段にも用ひる。

〔六二〕 可能動詞

貧乏で本も買へない。　　こんなに上手に書けますか。
この石が持てるものですか。　　もつと早く讀めればいゝが。

右の語は、單に「買ふ」「書く」「持つ」「讀む」等の意ではなくて、特に「買ひ得る」「書くことが出來る」等の意を表す。口語には、このやうに可能の意を表す動詞がある。これを「買ふ」「書く」などの

普通の意の動詞に對して、可能の動詞といふ。

普通動詞として四段活用に屬する口語動詞は、大方可能動詞になるが、文語のラ變から來た「ある」のやうに、例外となるものもある。また、解・譯・議・託等のやうに、動詞にする際に、四段活用にもなる漢語は、可能動詞となる。

可能動詞は、左表のやうに下一段活用であるが、命令形はない。

例語	語幹＼語尾	未然	連用	終止	連體	假定
書ける	書(カ)	け	け	ける	ける	けれ
死ねる	死(シ)	ね	ね	ねる	ねる	ねれ
解せる	解(カイ)	せ	せ	せる	せる	せれ

○可能動詞は、元來は、動詞に可能の助動詞がついて、一語となつたものである（第一一六項參照）が、簡單には、四段活用の假定形に、「る」「れ」の添つたのが、可能動詞であると考へれば宜しい。

〔六三〕　各活用形の用法は、大體文語のと同樣であるが、特に著しい點を擧げる。

一、文語では、未然形に助詞「ば」がついて、假定を表す（第四〇項を參照）ことになつて居るが、口語では、この言ひ方は廢れて、假定には別の表現法を用ひる。〇まれに、「死なば諸共」「毒を食はば皿まで」などともいふが、これ等は、特別の成句と見るべきものである。

二、連用形を、「兄は日本外史を讀み、姉は源氏物語を讀む」のやうに、事柄を並べいふに用ひる（第四一項の三參照）のは、口語にも行はれるが、それは主として筆寫體であつて、對話體では別の表現法を用ひる。

三、動詞と名詞との兩性質を表す連體形の下には、助詞「の」がつく。

正月の來るのはいゝが、年寄るのがいやだ。

飛行機の飛ぶのを見た。

子供の泣くのには閉口した。

四、假定形　文語の已然形に相當する活用形を假定形と記したが、これは次のやうに、「ば」がついて事柄を假定していふに用ひる場合が、最も多いからである（これを條件形といふ人もある）。

試驗が通ればそれを買つてやらう。

こんな事なら、うちに居ればよかつた。

普通の意の動詞に對して、可能の動詞といふ。

普通動詞として四段活用に屬する口語動詞は、大方可能動詞になるが、文語のラ變から來た「ある」のやうに、例外となるものもある。また、解・譯・議・託等のやうに、動詞にする際に、四段活用にもなる漢語は、可能動詞となる。

可能動詞は、左表のやうに下一段活用であるが、命令形はない。

例語	語幹	語尾　未然	連用	終止	連體	假定
書ける	書（カ）	け	け	ける	ける	けれ
死ねる	死（シ）	ね	ね	ねる	ねる	ねれ
解せる	解（カイ）（ゲ）	せ	せ	せる	せる	せれ

○可能動詞は、元來は、動詞に可能の助動詞がついて、一語となつたものである（第一一六項參照）が、簡單には、四段活用の假定形に、「る」「れ」の添つたのが、可能動詞であると考へれば宜しい。

〔六三〕　各活用形の用法は、大體文語のと同樣であるが、特に著しい點を擧げる。

一、文語では、未然形に助詞「ば」がついて、假定を表す（第四〇項を參照）ことになつて居るが、口語では、この言ひ方は廢れて、假定には別の表現法を用ひる。

〇まれに、「死なば諸共」「毒を食はば皿まで」などともいふが、これ等は、特別の成句と見るべきものである。

二、連用形を、「兄は日本外史を讀み、姉は源氏物語を讀む」のやうに、事柄を並べいふに用ひる（第四一項の三參照）のは、口語にも行はれるが、それは主として筆寫體であつて、對話體では別の表現法を用ひる。

三、動詞と名詞との兩性質を表す連體形の下には、助詞「の」がつく。

正月の來るのはいゝが、年寄るのがいやだ。

飛行機の飛ぶのを見た。

子供の泣くのには閉口した。

四、假定形　文語の已然形に相當する活用形を假定形と記したが、これは次のやうに、「ば」がついて事柄を假定していふに用ひる場合が、最も多いからである（これを條件形といふ人もある）。

試驗が通ればそれを買つてやらう。

こんな事なら、うちに居ればよかつた。

然らば、この形は、既定には絶對に用ひないかといふに、やはり次の樣に用ひることがある。

成程聞いて見ればもつともなことだ。

御話の通り、考へれば何でもない事でしたね。

讀めばこそわかつたのだ。

○この形は、また事柄を並べいふに用ひる。

昨日は、伯父も見えれば妹も來る、家の中が大變賑かでした。

佐藤は勉强もすればよく遊びもする。

○この形に、助詞「ど」「ども」をつける言ひ方は、口語には廢れた。

第二節　口語動詞の音便

〔六四〕　口語四段活用の動詞が、助詞「て」、助動詞「た」に連る際に、音便現象を起すことがある。そして同じく音便と言つても、文語では、音便であれ、本態であれ、何れかによらねばならぬといふ規定はないが、口語では、音便になるものは、その本の形によらないのが普通である。

〔六五〕　口語動詞の音便にも、文語と同じく四種ある。

一、イ音便　カ行・ガ行の「き」「ぎ」が、「い」となる。

書い（き）｛て／た｝　　漕い（ぎ）｛で／だ｝

○「た」は用ひ方によつて、「たら」とも、「たり」ともなるが、音便には變りがない。

○「て」が「で」となるものは、「た」も「だ」となる。

○「行く」も、カ行四段活用であるが、「て」「た」がつくと、「いつて」「いつた」となつて、一般の例とは異る。但し文語の「ゆいて」のやうな言方はしない。

○文語では、サ行四段にも、イ音便があつて、「指い（し）て」「放い（し）て」などいふことはあるが、口語では一般的のものと認められない。

○ラ行四段活用の「仰つしやる」「いらつしやる」「なさる」「下さる」等に、助動詞「ます」がつくと、「り」が「い」となつて、「仰つしやい（り）ます」「いらつしやい（り）ます」のやうになることがある。イ音便の一種である。但し、これ等は他と違つて、音便の「い」の方のみを用ひる事はなく、本形の「り」をも用ひるのである。「ござい（り）ます」も、この例になる。

二、ウ音便　ハ行四段の「ひ」が「う」となる。

舞う（ひ）｛て・た　　揃う（ひ）｛て・た

三、撥音便　ナ行・バ行・マ行の「に」「び」「み」が「ん」となる。

死ん（に）｛で・だ　　遊ん（び）｛で・だ

汲ん（み）｛で・だ

四、促音便　タ行・ハ行・ラ行の「ち」「ひ」「り」が略されて、その上の音が促音となる。

勝つ（かち）｛て・た　　買つ（かひ）｛て・た

賣つ（うり）｛て・た

○ハ行四段活用には、ウ音便・促音便の二があるが、東京では普通對話に促音便を用ひる。但し、「請つて」「問つた」などは言はず、他の「願つて」「尋ねた」などを用ひる。

第三節　口語敬讓動詞

〔六六〕　口語の敬讓動詞の主なものは、次の通りである。

一、敬語

あがる（食フ・飲ム）　遊ばす　いらつしやる（行ク・來ル・居ル）　おつしやる（言フ）

おぼしめす　下さる　なさる　めしあがる（食フ・飲ム）　召す

以上は總べて四段活用である。

○「いらつしやる」「おつしやる」「下さる」「なさる」（文語と活用の異る點に注意）の連用形が、助動詞「ます」に連る時は、語尾の「り」が「い」ともなることあるは、既に述べたが、これらが、「て」や「た」に連る場合に、促音便の起ることは、普通の動詞と異らぬ。またこれらの命令形は、「いらつしやい」「おつしやい」「下さい」「なさい」が普通である。

○「下さつた」「下さつて」を、「下すつた」「下すつて」ともいふが、これは標準的な言ひ方とは認められない。

二、謙語

あがる（訪ネル・行ク）　致す　いたゞく（貰フ）　うかがふ（聞ク・問フ・訪問スル）

承る　仕る　參る　申す

以上は四段活用で、尙次のやうなものがある。

上げる・差上げる（與ヘル、ガ下一）　申上げる（言フ、ガ下一）

漢語から來たのでは、「參上する」「拜見する」「拜借する」「頂戴する」などがある。

三、丁寧語

代表的なものには、「ございます」がある。これは元來は「御座ある」に「ます」のついたもので、敬語であつたが、何時の間にか丁寧語になつたものである。口語では「ござる」を單獨に用ひることはないから、「ございます」を一語と見なければならぬ。「ある」の意に用ひる。但し「ございます」ともいふ。

あなたは佐藤さんでござり（い）ますか。

いゝえ、私は佐藤ではござり（い）ません。

面白い御話がござり（い）ます。

活用は次の通りである。

未然	連用	終止	連體	假定
ございませ	ございまし	ございます	ございます	ございますれ

○「あります」も、「ございます」のやうに用ひるが、「…であります」は、對話體には言はない。もつとも、「…で（は、も）ありません」の打消の場合は別である。

○右の外「たべる」（飲ム・食フ、バ下一）「いたゞく」（同上、カ四）などがある。又謙語の「致す」「承る」「參る」「申す」等も轉用する。

〔六七〕　漢語や名詞を敬讓動詞にするには、次の方法によるのが普通である。

一、敬讓の意を含む語に、「遊ばす」「なさる」「下さる」及び「になる」（ラ四）をつけて、敬語をつくる。

ご辛抱あそばす　　ご運動なさる　　ご通知下さる　　お噂なさる　　ご覧になる

○まれには敬讓の意のない語につくことがある。

勉强なさる。　　心配なさる。

二、敬讓の意を含む語に「仕る」「致す」「申す」「申上げる」などをつけて、謙語をつくる。

お相伴仕る。　拜借致す。　ご案內申す。　お世話申上げる。　お供致す。

○まれには、敬讓の意のない語につく事がある。

注意致します。

○以上（一）（二）の例の下には、「ます」のつくことが多い。

三、謙語の名詞（第二十一項參照）を造り、それにサ變の語尾を持たせて、謙語動詞とする。この言ひ方は、最近廣く用ひられるやうになつて來た。

お通しする　お訪ねする　お答へする
お迎へする　お屆けする　お呼びする
お噂する　お供する　お對手する
ご招待する　ご報告する　ご案內する

○動詞に、「て」を介して、「下さる」をつけると、全體としてその動作を仕向ける意の敬語となる。

見て下さる。　伴れて行つて下さる。

また「頂く」をつけると、「して貰ふ」意の謙語、「上げる」をつけると、「してやる」意の謙語となる。

見て頂く　　　伴れて行つて頂く。
見て上げる　　伴れて行つて上げる。
因に、右の言ひ方と對になるものに、次のやうな例がある（括弧内に對になる語を示す）。
一、佐藤が僕に注意してくれる。（―下さる）
二、僕は佐藤に注意してもらふ。（―頂く）
三、僕は佐藤に注意してやる。（―上げる）
これ等は平常語と見るべきであらうが、總じてこれ等の言ひ方は、動作の關係者の爲になる意を含むのである（換言すれば、その動作は好意から出たことになる）。即ち、例一・二に現れた佐藤の注意は、「僕」に取つては感謝すべきことであり、例三の僕の注意は、「佐藤」に對する好意の發露である。かゝる意を含むから、これ等は平常語としても特別なもので、敬讓語との中間に位すると解するのが穩當なやうである。まして、「下さる」「頂く」「上げる」に至つては、敬讓の意が一層深くなるのである。但し「やる」は、尊大に高ぶつた心持を表すのに用ひることが、珍しくない。

第七章 形容詞

第一節 文語の形容詞

〔六八〕 形容詞の活用

事物の性質・有様などを表す語を形容詞といふ。形容詞にも活用がある（第八項、第十項參照）。その活用するに當つては、動詞と同じく、變化する部と、變化せぬ部とが出來る。これを、動詞にならつて、それ〴〵語幹・語尾と稱する。またその活用形の名稱も動詞に準ずる。

今「清し」「美し」の二つの形容詞をとつて、その活用のしかたを見ると、次の通りである。

未然形　水清くば掬びて飲まん。
　　　　花美しくば行きて眺めん。

連用形　水清く流る。

野邊の花も美しく見ゆ。

終止形　水淸し。　花美し。

連體形　淸き水を汲む。

美しき花を買ふ。

已然形　この水は淸けれども飲むを欲せず。

この花は美しけれども芳香なし。

〔六九〕　ク活用・シク活用

前項の例によれば、「淸し」の語幹は「きよ」で、語尾は次の如くなる。

く　く　し　き　けれ

このやうな活用をク活用といふ。

次に「美し」の語幹は「うつく」で、語尾は次の如くなる。

しく　しく　し　しき　しけれ

このやうな活用をシク活用といふ。

形容詞の活用には、この二種以外にはない。これを表示すれば、次の通りである。

第七章　形容詞

第一節　文語の形容詞

〔六八〕　形容詞の活用

事物の性質・有樣などを表す語を形容詞といふ。形容詞にも活用がある（第八項、第十項参照）。その活用するに當つては、動詞と同じく、變化する部と、變化せぬ部とが出來る。これを、動詞にならつて、それ〴〵語幹・語尾と稱する。またその活用形の名稱も動詞に準ずる。

今「淸し」「美し」の二つの形容詞をとつて、その活用のしかたを見ると、次の通りである。

未然形　水淸くば掬びて飮まん。
　　　　花美しくば行きて眺めん。
連用形　水淸く流る。

野邊の花も美しく見ゆ。

終止形　水淸し。　花美し。

連體形　淸き水を汲む。

美しき花を買ふ。

已然形　この水は淸けれども飮むを欲せず。

この花は美しけれども芳香なし。

〔六九〕　ク活用・シク活用

前項の例によれば、「淸し」の語幹は「きよ」で、語尾は次の如くなる。

く　く　し　き　けれ

このやうな活用をク活用といふ。

次に「美し」の語幹は「うつく」で、語尾は次の如くなる。

しく　しく　し　しき　しけれ

このやうな活用をシク活用といふ。

形容詞の活用には、この二種以外にはない。これを表示すれば、次の通りである。

	例語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	高し	高(タカ)	く	く	し	き	けれ
シク活用	悲し	悲(カナ)	しく	しく	し	しき	しけれ
	同じ	同(オナ)	じく	じく	じ	じさ	じけれ

○形容詞の活用には、命令形がない。

○シク活用の語幹・語尾を、右の表の如く見るのは、便宜上の事であつて、實は「悲し」「美し」「同じ」が語幹であつて、語尾は「く、く、○、き、けれ」である。卽ち終止形は、語幹のまゝを用ひるのである。これは後にいふ接尾語のつき方等によつて判る。

たとへば、接尾語さ・げがク活用の語幹について、「深さ」「寒げ」のやうになるが、同時にシク活用の語には、「嬉しさ」「樂しげ」などのやうについて、「うれさ」「たのげ」とはならぬのが、その一例である。

○古く、ク活用に「靜けし」「明けし」のやうに、語幹の末に「け」のある語が行はれたが、それ等には已然形はない。

○意味の上から見すれば、動詞は事物の動作を表し、形容詞はその屬性を表すといふ事になる。これを時の上から見れば、前者の表す所は一時的現象で、後者の表す所は、永續的な固定性である。けれども、その標準からは、辨すべからざるものがある。たとへば、「あり」が動詞で、「なし」が形容詞であるのが、その一である。これに類したものには、次の如きものがある。

老ゆ――わかし　　富む――貧し

その他、動詞にも永續的性質を表すものがあるから、動詞・形容詞の區別は、單に意義の上からのみ判別するを得ず、その活用をも考慮せねばならぬのである。

○

動詞・形容詞を一括したものを一品詞とすべく、これを二に分ける文法上の根據は頗る薄弱であつて、認める事が、出來ぬと說く學者もある。實際、文中における動詞・形容詞の主な職能には大差なく、ク活用・シク活用といふも、四段活用・上二段活用などいふのと對立する、一品詞中の活用の一種であると見れば見得るのである。

けれども、いはゆる形容詞と、動詞との諸活用形の間には、その用法にかなり大きい相違がある。そして、活用の有樣も、動詞では五十音圖の同一の行を出でないのに、形容詞ではカ行・サ行の二に跨る等の事がある。だからこれを區別するのは、取り扱ひ上、便宜が多いので、普通二種に分けるのである。

〔七〇〕　形容詞の活用形の用法

各活用形の主な用法を述べれば、次の通りである。

一、未然形

助詞「ば」に連つて、假定を表すに用ひる。例は助詞の部にゆづる。

二、連用形

A　他の用言に連る。

山高く聳ゆ。　　名殘惜しく思ふ。

詳しく知る。　　世を狹く見る。

○この用ひ方には二つある。第一、右の「高く」「詳しく」は、下なる用言「聳ゆ」「知る」を修飾するものであつて、第十一項に述べた副詞の作用をなすのである。この用法は、連用形には頗る多いので、これを副詞形と稱する人もある。

第二は、右の「惜しく」「狹く」のやうに、下なる用言を修飾せずに、上なる體言「名殘」「世」の性質を表す用ひ方である。即ち「名殘が惜しい」と思ひ、「世を狹い」と見るのである。

家を小さく造る。　　肉を柔かく煮る。　　竹を短く切る。

屋根を赤く葺く。　　石を細かく碎く。

近う（近き場所の意）を遠う申すは…。（平家、二）

等の形容詞は、皆、上に在る體言の屬性を說明するものである。けれども普通には、これ等を區別せずに、連用形が他の用言に連つたものと說明して居る。

尤も同じ文でも、その意味のとりやうによつて、右の何れとも解せらるゝ事がある。たとへば「この書は新しく見ゆ」も、今まで見えなかつた意ならば副詞的用法であるが、よごれずに買ひたてのやうな意ならば、書の屬性を表して居るものである。

B　事柄を並べいふに用ひる。

水清く、花美し。　　道悪しく、夜は暗し。

山の狹く險しき道をたどる。

C　名詞のやうに用ひる。

遠くを見渡す。　　多くの人々。　　早くより起き出づ。

夜遲くまで待つ。　　後少將はをさなくよりいみじう道心おはして（榮華、花山）。

三、終止形

言ひ切るに用ひる。

四、連體形

A　體言に連る。例は略す。

B　助動詞の「なり」(指定)、「如し」(比況)に連る。例は略す。

C　形容詞と名詞との兩性質を表す。

何時もなつかしきは故郷なり。　山の高きに驚く。　水の清きを賞す。

(右のやうに用ひられた形容詞を、特に準體言と呼ぶことがある。準體言は動詞にもある(第四三項第三條參照)が、用言に助動詞がついて連體形に終るものも準體言となる。

五、已然形

助詞「ば」「ども」に連り、また「こそ」と聯關的に用ひられる點は、動詞の場合と擇ぶ所がないから、例は略する。

〔七一〕形容詞の音便

形容詞にも音便があるが、ウ音便とイ音便との二種だけである。

一、ウ音便は、連用形の語尾「く」が「う」となるものである。

やさしう(く)見ゆ。　高う(く)昇る。

二、イ音便は、連體形の語尾「き」が「い」となるものである。

あゝ悲しい（き）かな。　よい（き）かな言や。

〔七二〕　形容詞の敬譲語

形容詞にも、まれに敬意を添へる爲に、「御」を冠らせることがある。

先帝の昔も御戀しう思し召されけむ…（平家、一）

太政の入道も…君をも御うしろめたきことに思ひ奉り（同三）

十三日に朝覲の行幸と聞えき。法皇も女院もかたがた御珍しく花やかに待申させ給ひけり（盛衰記、三）

平家の事様おん目ざましく思召され、院は御出家有りけれども（同右）

〔七三〕　形容動詞

形容詞の連用形、たとへば「高く。」「悲しく。」が、ラ變の動詞「あり。」に連る時は、「く」と「あ」とがつまつて「か」となり、「高かり」「悲しかり」のやうに變形することがある。

また狀態を表す副詞「靜かに。」「泰然と。」等が、「あり。」に連ると、その末の音「に」「と」が、「あ」と一緒になつて、「な」「た」とつまり、「靜かなり」「泰然たり」と變形することがある。

これ等は各一語と認め、形容動詞と名づけて、動詞の一種と見なす。その活用は「あり」と同様であるが現代文では通例用ひない活用形がある。

種類	原形	形容動詞	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
第一種	高くあり 悲しくあり	高かり 悲しかり	高か 悲しか	ら	り	（り）	（る）	れ）	れ
第二種	靜かにあり	靜かなり	靜かな	ら	り	り	る	れ	れ
第三種	泰然とあり	泰然たり	泰然た						

○語尾に（ ）印した活用形は、現代文で普通用ひぬものである。

第一種は、語幹の末に「か」のあるもの。これを「カリ」活用の形容動詞といふ人もある。

第二種は、語幹の末に「な」のあるもの。これを「ナリ」活用の形容動詞といふ人もある。

第三種は、語幹の末に「た」のあるもの。これを「タリ」活用の形容動詞といふ人もある。

第二節　口語の形容詞

〔七四〕文語の形容詞「高し」「新し」を取つて、口語の用ひ方を見ると、次の如くなる。

連用形　日が高く昇つた。　家が新しくなつた。

終止形　日はまだ高い。　この家は新しい。

連體形　日のまだ高い四時頃。　新しい家。

假定形　日がまだ高ければ、も少し休んで居たいが、お前出て見てくれ。

家が新しければ、買ひたいと思ふが、何うだらう。

例語	語幹＼語尾	連用	終止	連體	假定
高い	高(タカ)	く	い	い	けれ
新しい	新し(アタラ)	く	い	い	けれ

即ち、語尾は、兩語とも、「く」「い」「けれ」となつて、活用は一種となつた。

○特に區別する必要のある時は、「新しい」のやうに、語幹の末に「し」のあるのをシク活用、然らざるもの（「高い」の類）をク活用と呼ぶ。

○「よい」（善、好）は「いい」ともいふ。

〔七五〕　各活用形の用法について、特に注意すべき點を次に揭げる。

一、未然形は、まれに「やすくば買はう」など用ひられることはあるが、大體廢れたので、活用表から省いた。

二、連用形は、文語と同じく左例のやうに、事柄を並べ言ふに用ひることはあるが、それは筆寫體のみで、對話體では通例別の表現法を用ひる。

男も多く、女も少くなかつた。　厚く白い紙。

三、連用形が、動詞「ある」、及びそれに「ます」のついた、「あります」に連つて、たとへば、「白くある」「美しくあります」となつたものは、筆寫體には用ひるが、對話體には現れない。對話では「白いの（ん）です」「美しうございます」といふやうにいふ。

但し「白くはありません」「美しくもありません」といふやうな言ひ方は、對話にも用ひる。

四、形容詞を直接に打消すには、連用形に「ない」をつけて、「薄くない」「樂しくない」といふやう

にいふ。この「ない」は、打消の助動詞と紛れ易いが、形容詞の「ない」の用法の發展したものである。「讀み難し」「書き易し」の「難し」「易し」と同じ用法である。

○

元來、動詞の「あり」形容詞の「なし」は、有無・存否を表す語であるが、その用法が發展すると共に實質を失つて、「白くある」「薄くない」のやうに用ひれば、形容詞の敍述の作用を助けるだけの語になつてしまつたのである（「あり」は肯定の方面に、「なし」は否定の方面に）。

故に、若し「薄くない」の「ない」を助動詞と見れば、「讀み難し」「書き易し」「見にくい」「歩きよい」の如き形容詞を、全部助動詞と見ねばならぬ理である。そして「白くある」の「ある」をさへ、助動詞としなければならなくなるはずである。依つて本書では、助動詞說は採らない事にした。

尚、助動詞と形容詞との「ない」の區別は、大まかに言へば、意味は反對にはなるが、「ある」と置き換へられる「ない」は、形容詞であると解すれば宜しい。

たとへば、「行かない」の「ない」には、「ある」は置き換へられぬから、これは助動詞であるとするのである。そして「そんなに高くない」の「ない」は、「ある」と置き換へられるから、形容詞であると判ずるのである。

五、形容詞と名詞との兩性質を表す連體形の次には、「の」を置くのが普通である。

何時でも美しいのは花だ。　水のつめたいのに驚いた。　品のよいのを買つた。

六、文語の已然形に相當する活用形は、動詞の場合に述べた通り、多く假定に用ひるので、假定形（條件形とも）と呼ぶ。

直段がもつとやすければ買ひませう。

それで宜しければ持つて御出でなさい。

○これはまた事柄を並べいふに用ひる。

某は歷史にも精しければ、地理にもあかるい。

この形に、「ど」「ども」をつける言ひ方は廢れて、「けれども」といふ一助詞を生むに至つた。

〔七六〕　口語形容詞の音便

口語の形容詞にも、音便がある。

高う（く）見える。　新しう（く）なる。

即ち連用形の語尾「く」が「う」となるウ音便である。これは筆寫體に現れることがあり、口語でも地方によつては普通に用ひるが、東京では對話に用ひぬ。但し形容詞が「ございます」「存じます」に連る時には、必ずウ音便が起る。

高う（く）ございます。　珍しう（く）存じます。

○右のやうな場合でも、打消の意にいふ時は、左例のやうに原形でいふこともある。（助詞も・はが入つても同様である）。

高く（も）ございません。　珍しく（は）存じません。

○東京地方でも、「ございます」「存じます」に連る場合でなくても、「よう（原形よく）こそいらつしやいました」などは、普通に言ふ。

〔七七〕　形容動詞は、口語では次の通りである（第七十三項參照）。

一、第一種の形容動詞は、左例のやうに、未然形と、連用形と、命令形との外は、用ひない。

低からう。　嬉しからう。　（未然）

低かつた。　嬉しかつた。　（連用）

人惡しかれとは思はぬ。　よかれ・あしかれ、とにかく出來上つた。

晩かれ・早かれ、出席はするだらう。　（命令）

○命令形は特殊な語に限つて用ひられる。右以外の語では、殆ど見當らぬ。

二、第二種の形容動詞は、「穩かに」「綺麗に」のやうに、末に「に」のある副詞に、「ある」のつい

て約つたものであるが、口語では更に、「穩かで。」「綺麗で。」のやうに、末に「で」のあるものが、「ある」と一緒になつたものも新に出來て（これを口語形容動詞の第三種とす）、この兩種のものが互に相依り相助けて、一語のやうな觀を呈するのである。

原形	形容動詞	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體
穩か（綺麗）にある	穩か（綺麗）な	穩か（綺麗）	なら		（な）	な
穩か（綺麗）である	穩か（綺麗）だ	穩か（綺麗）	だら	だつ	だ	（だ）

この語については、誤解を抱く人が多いから、やゝ詳しく說明する。

A　「穩かな」と、「穩だ」とは、同一系統の活用形だと考へる人があるが、それは誤りである。なるほど、語幹は共通であるが、前者は「に」から、後者は「で」から出たもので、成立は全然別である。たゞこの兩活用は、各活用形の用法が局限されて、互に相補うて一語のやうに見えるが爲に、この誤解を招き易いのである。

B　連用形の語尾に「に」「で」を數へる學者がある。

人物が穩かに、おほやうだ。　見た目が綺麗で、値がやすい。

多分、右のやうな例を頭に浮べて言はれることだらうが、全くの誤解である。再び言ふまでもなく、「穩かな」「綺麗だ」は、「穩かに。」「綺麗で。」に、「ある」のついたものを一語と見て、その語尾を定めるのである。然るに、その「ある」を除いた副詞「穩かに」「綺麗で」を、その一活用形に數へるとは、形容動詞の成立を全然無視したものである。この論法で行つたら、「に・あり」「と・あり」から出來た、いはゆる助動詞「なり」「たり」の連用形も、それぞれ、「に」であり、「と」であると言はねばならぬ理である。

更に、他の例を擧げれば、助動詞「ざり」（ず・あり）、「べかり」（べく・あり）、「たかり」（たく・あり）等の連用形も、それ〴〵、「ず」「べく」「たく」であると言はねばならぬ。類例から推せば、このやうに明白な事であるけれども、右の如き誤解を抱く人が、意外に多いので、特に注意を要する。

C　「穩かなら」「綺麗なら」は、そのまゝで、或は助詞「ば」がついて假定を表す。未然形に「ば」がついて假定を表すのは、口語では、この外に助動詞「なら」（指定）、「たら」（時）があるのみで、珍しい異例である。

D　「穩かな」「綺麗な」は、連體形として用ひるのが普通である。地方によつては、終止にも用ひ

るが、一般から見れば、終止形としては廢れた。

E 「穩かだら」「綺麗だら」は、助動詞「う」に連つて推量を表すに用ひる。

F その連用形の語尾は、「だり」が原形であるが、「た」に連つて、「穩かだつた」「綺麗だつた」のやうな形でのみ現れる。

G 「穩かだ」「綺麗だ」は、「穩かだこと！」「綺麗だものですから……」などの用法から見れば、連體形もあるが、一般の體言に連ることはない。

○尙、假定の意に「海が穩かなれば舟で行かう」のやうにいふのは、方言的な言方で、標準とすべきでない。また、この形を「穩かなればこそ居られるのだ」のやうに、「ば・こそ」と一緒にして、旣定の意に用ひることはあるが、一般用言にならつて、表には省いた。

○第二種・第三種に屬する語を少し擧げて見よう。

穩かな	靜かな	明かな	柔かな	細かな	ふつゝかな
かなりな	大きな	小さな	盛な	をかしな	こんな
そんな	あんな	どんな	變な	妙な	急な
立派な	綺麗な	丈夫な	結構な	懇意な	

三、文語の形容動詞第三種の「確乎たり」「斷然たり」のやうな言方は、口語には廢れた。

〔七八〕　形容詞や形容動詞に、敬意を添へる爲に、「お」「ご」を冠らせることがある。

お早うございます。　お珍しい物を頂きまして…。

あの方(カタ)はお靜かなかたでございますね。　ご快活な御子さんですこと。

また、丁寧の意を表す爲に「お」をつけることがある。

お寒い日でございます。　お靜かないゝ御天氣ですこと。

第八章　文語の助動詞

第一節　助動詞の種類

〔七九〕　助動詞

助動詞は、主として動詞について敍述を助ける語であつて、一定の活用を有する（第九・第十項參照）。

助動詞は左例の如く、體言につくこともある。

正成は忠臣なり。　汝は汝たり、我は我たり。

助動詞はまた、左例の如く、助詞「の」「が」の下につくことがある。

歲月は流るゝが如し。　白くして雪の如し。

助動詞はまた、他の助動詞につくことがある。

行かしめらる。　打たれたるならん。

○右の「たり」は、體言以外にはつかぬ。

○右の「なり」「たり」「ごとし」も、普通は助動詞として取り扱つて居るが、山田博士の說かれるやうに、これ等は敍述の職能を有するが、實質を缺くか、實質の一定せぬもので、やはり用言の一種と見るべきものである。山田博士は、他に「あり」「す」とを合せて、形式用言と命名された。又、故三矢博士も、「ごとし」を形容詞として說かれた。これ等は須く聽從すべき卓說であるが、本書は姑く一般の所說による事にした。

〔八〇〕 助動詞の分類

助動詞は、その意義によつて分類すれば、次の十一種となる。

可能　受身　使役　打消　時　推量　指定　詠歎　希望　比況　敬讓

〔八一〕 可能の助動詞

可能の助動詞は、その動作をなし得る意を表すに用ひるものである。

　藁屋なりとも住めば住まる。

　如何なる困難にも堪へらる。

思ふ一念、岩をもとほすべし。

その精神は何人も企及すべから（べかりの未然形）ず。

○「べかり」は、「べく」と「あり」との合して成つた語である。

○可能の意を表すものでも、「行くを得たり」「讀み得」「行く能はず」「見ること能はず」など用ひる「得（ウ）」「能ふ」は動詞であり、「え行かず」「え讀むまじ」の「え」は副詞である。

○「勤めらる」、値段の「まけらる」の遷つた「勤まる」「まかる」は、一語として取扱ふべく、これ等は口語と認むべきである。

〔八二〕　受身の助動詞

受身の助動詞は、他のものゝ動作を受ける意を表すに用ひるものである。

敵に民家を燒かる。

兄より英語を教へらる。

○漢文直譯讀みの言ひ方で、「民家は敵の燒く所となる」のやうに、「…所となる」の形で受身の意を示すことがあるが、助動詞とは關係がない。

○國語では、「前に立たる」「子に泣かる」のやうに、いはゆる自動詞も受身に用ひられる點が、ヨーロ

ッパ諸國の國語と異る所だと言はれる。彼の地で受身になるのは、他動詞のみだといふ。

○概言すれば、國語で受身に言ふのは、その動作を受けるもの、又は話手の不本意なる意を表す場合が多い（右の「焼かる」「立たる」「泣かる」等で考へ得る）。然るに、近年ヨーロッパ語の影響で、必ずしも然らず、廣くいふやうになつて來た（右の「教へらる」の例で考へ得る）。

○「人知れずこそ思ひそめしか」「見にくき姿を人に見えじ」などの「知れ」「見え」は、「知られ」「見られ」の遷つて一語となつたものである。この類のものには尙「助かる」「授かる」があり、又「教はる」（これは口語と認むべきである）ともいふ。

〔八三〕　使役の助動詞

使役の助動詞は、他のものに一定の動作をさせる意を表すに用ひるのである。

弟に日本畫を習はす。

妹に電燈をつけさす。

部下をして敵將を捕へしむ。

○軍記物などに、普通ならば受身でいふべき所を、「家の子郎黨多く討たせ…」「馬の太腹射させたり」

など使役の形にいふのは、特別の用ひ方と見るべきである。

〔八四〕　打消の助動詞

打消の助動詞は、動作・存在を打消していふに用ひる語である。（打消を否定といふこともある）。

　呼べど答へず。

　誤を再びせざりき。

　よもまことにはあらじ。

　爭ふとも些の益もあるまじ。

○「ざり」は、「ず」と「あり」と合して成つた語である。

○「じ」「まじ」は、推量して打消す時に用ひる。

〔八五〕　時の助動詞

時の助動詞は、動作し存在する時を表すに用ひる語で、次の如く三種に分れる。

　その時、賊の姿は既に見えざりき。

　昔紀貫之といふ歌人ありけり。

右の「き」「けり」は、過去の意を表すから、これを過去の助動詞といふ。

○次のやうに、過去の事を用言のまゝで表すことがある。

三位の中將…世のならひまで思ひ殘す事なし。さるにつけても涙ばかりぞ盡きせざりける。

次の「む」「むず」は、動作が今より後に起ることを表すに用ひるので、これを未來の助動詞といふ。

彼は日ならず此の地を去らむとす。

この月の十五日には迎への人々參うで來むず。

○「む」「むず」は、發音に從つて「ん」「んず」とも書く。

○「むず」は「む」(助動詞)、「と」(助詞)、「す」(動詞)の合して一語となつたものである。

○次のやうに、動詞のまゝで未來のことをいふ事がある。

船の到着する頃まで此處に待たむ。

明日は出發する日なり。

次の「ぬ」「つ」「たり」「り」は、動作の完了した意に用ひるので、これを完了の助動詞といふ。

庭の梅花も咲きぬ。

見るべきものは見つ、今は歸らん。

月はまさに西山に隱れたり。

日は空高く昇れり。

〔八六〕　推量の助動詞

推量の助動詞は、動作・存在を推し量る意味にいふに用ひる語である。

友も小鳥を飼ふらし。
花もはや散るめり。
こは何事なるらむ。
彼の心はさもあらむ。
仙家より歸り出て七世の孫に逢ひたりけむも、かくやありけむとぞ覺えし。
今日君の畫がき給はん鶴の姿は、斯樣なるべし。
今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし、消えずはありとも花と見ましや。
父の素意を達したらんこそ孝子の則にてもあらむずれ（むずの已然形）。

○「べし」は、かく〳〵の筈だと、確かな意味で推量するに用ひる。
○「むず」は、「む」と略々同意に用ひるが、「む」よりも強い。これは發音に從つて、「んず」とも書く。尙、推量の助動詞については、後の第一〇五項に述べる。

〔八七〕　指定の助動詞

指定の助動詞は、それと指し定めて敍述をするに用ひる語である。

　人は萬物の靈長なり。

　當時彼は七歳の少年たりき。

右の二語は、共に體言につくが、「なり」は又用言や活用連語について、強く斷定するに用ひる。

　子を持ちて始めて親の恩は知るなり。

　櫻は散るが面白きなり。

　大勢は如何ともすべからざるなり。

○右の例のやうなのは、實は「なり」の上に體言の略されたものであるが、便宜上、用言につくと說くのである。

○指定助動詞の「なり」と混ぜられ易い「駿河なる富士」「前なる池」のやうな「なる」は、やはり「に」「あり」の約で、成立も同様であるが、これは存在の意を表す動詞として、指定の「なり」と區別されてゐる。但し普通には連體形以外は現れない。

○指定の「なり」を、「顏回なる者」のやうに、「といふ」と置き換へ得る所に用ひることがある。この用ひ方は、近世に入つてから、漢籍讀みに盛に採用され、今も尙用ひられる。言はゞ「なり」の用法の

侍從を差遣せしめ（しむの連用形）給ふ。

右の「る」「らる」「給ふ」「す」「さす」「しむ」等は、他を敬ふ意を表すから、敬語である。

○「給ふ」は、敬語の動詞から轉じたのである。

○「す」「さす」「しむ」は、他の敬意を表す語と共に用ひるのが普通である。

○敬語の動詞「ます」「おはします」「まします」等も、助動詞となつて、動詞の下につくことがある。

そこにおはするは、その折の女人（メヒト）にや見えますらむ。（大鏡）

此の度もまたかひなき命を助けさせおはしませ。

女院は…今年は二十九にぞならせましましける。（平家、灌頂）

○左例のやうに、敬意を含む語（名詞と見るべき語であるが、便宜上動詞の連用形として取扱ふ）につく「ある」「なる」も敬語の助動詞である。

法皇今朝の禪門の使に、はや御心得あつて…（平家、二）

主上斜ならず御歎あつて…（同三）

一院も内々仰なりけるは、「……」とは仰なりけれども（同一）

【九二】　謙語の助動詞

謙語の助動詞は次のやうである。

聖德の高きを仰ぎまつる。

聖壽の萬歲を祝し奉る。

幼主をたすけまゐらす。

いと懇にもてなし申す。

右の「まつる」「奉る」「まゐらす」「申す」は、元來は謙語の動詞であるが、本義を失ひ、他の動詞についてへり下る意を表して居る。即ち助動詞の謙語である。このやうに助動詞の謙語は、總べて動詞から轉じたもので、尚次のやうな語がある。

給ふ（ハ下二。敬語の給ふと異る）　いかでたづねんと思ひ給ふるを…。

聞ゆ（ヤ下二）　式部卿の宮…帝も后も放り難きものに思し聞えさせ給ふものから…。

〇右の「給ふ」「聞ゆ」に就いては、第一〇八項參照。

〔九三〕　丁寧の助動詞

丁寧語の助動詞は次の通りである。

いかでさる事を知りはべらん。

きたなき所の燒けはべりしかば…。
一の谷にて備中の守討たれ候ひぬ。維盛さへ斯樣になり候へば、いかにおの〳〵の便りなう思召され候はむずらむ（平家、十、維盛の語）。

右の「はべり」「候ふ」は、動詞としての本義を失つて、たゞ丁寧にいふ意を表すから、助動詞の丁寧語と見るべき語である。

第二節　文語助動詞の活用と連續法

〔九四〕　活用の種類から見た助動詞

前節で述べた助動詞を、その活用の種類から見れば、動詞型のものと、形容型のものと、特殊型のものとの、三種に分けられる。これを表示すれば、次の通りである。

〔九五〕　動詞型助動詞の活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令	活用の種類
可能受身敬讓	る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ	ラ下二
	らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ	同
使役	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	サ下二
敬讓	さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ	同
	しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	マ下二
完了	つ	て	て	つ	つる	つれ	（てよ）	タ下二
	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	（ね）	ナ變
	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	ラ變
	り	（ら）	（り）	り	る	（れ）	（れ）	同
過去	けり	（けら）		けり	ける	けれ		ラ變
指定	なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	同

打消	ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ	同
希望	たかり	たから	たかり	(たかり)	(たかる)	(たかれ)		同
可能	べかり	べから	べかり	(べかり)	(べかる)	(べかれ)		同
推量	めり むず		(めり)	めり むず	める むずる	めれ むずれ		ラ變的 サ變的

○表中、括弧で包んだのは、現代文に多く用ひぬ活用形である。以下の表も同様である。

○可能の「る」「らる」には命令形がない。

○敬譲の「す」「さす」「しむ」は、近古以降は、その終止形以下の活用形は、多く用ひない。

○指定の「たり」は、完了の「たり」と同様故、別に擧げない。

○詠歎の「けり」は過去の「けり」のやうであり、詠歎の「なり」は指定の「なり」のやうであるが、共に終止形以下の三形を有するのみである。表には特記しない。

○「べかり」を他の意に用ひる時も、活用には變りがない。

○指定の「なり」の連用形は、事柄を並べいふに用ひること少く、その場合には「にて」「にして」を用ひる。

正成は父にて（にして）正行は子なり。
父は陸軍大將にて（にして）子は海軍中佐なり。

〔九六〕形容型助動詞の活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	活用の種類
推量	べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	ク活用
打消	まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	シク活用
希望	たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	ク活用
	まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	シク活用
比況	ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき		ク活用的

○「べし」を他の意に用ひても、活用には變りがないから、一々は擧げぬ。

〔九七〕　特殊型助動詞の活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	備考
推量	む			む	む	め	無變形
	らむ			らむ	らむ	らめ	
	けむ			けむ	けむ	けめ	
	まし			まし	まし	ましか	
	らし			らし	（らし）	（らし）	
過去	き			き	し	しか	
打消	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
	じ			じ	じ	（じ）	無變形

○未來の「む」は、推量の「む」と同様故、別に出さぬ。

○推量の「らし」は、現代文では、

らしく（未然・連用）　らし（終止）　らしき（連體）

のやうに用ひるが、古くは表に示す通りである。

○尚、敬譲の助動詞に轉用される「給ふ」「奉る」「參らす」「候ふ」等は、動詞として用ひる場合と同じ活用であるから、こゝには特に擧指することを略す。

〔九八〕　各助動詞は、他の如何なる語につくかは、第一節の例でも略々理解されるが、次に一括して、これを示すことにする。

一、動詞の未然形につく助動詞。

る　らる　（可能・受身・敬譲）

す　さす　しむ　（使役・敬譲）

ず　ざり　じ　（打消）

む　まし　（推量）

まほし　（希望）

り（サ變に限る）　（完了）

○「る」「す」は、四段・ナ變・ラ變の未然形につき、「らる」「さす」は、その他の活用の未然形につく。

二、動詞の連用形につく助動詞。

き　　けり　　　　（過去）

たり　つ　ぬ　　　（完了）

けむ　　　　　　　（推量）

たし　たかり　　　（希望）

○「き」の終止形は、カ變にはつかず、サ變には、終止形のみがつく。また、その連體形と、已然形とは、カ變・サ變の未然形にもつく。次につくものだけを圖示する。

來(コ)	し
爲(セ)	しか
來(キ)	し　しか
爲(シ)	き

○完了の「ぬ」は、通例、ナ變の動詞にはつけて用ひない事になつて居るが、「山鳩三つ…食ひあひてぞ死ににける」（平家一）のやうな例は、珍しくない。

○詠歎の「けり」は時の「けり」と同じ。

三、動詞の終止形（ラ變を除く）につく助動詞。

べし　べかり　（可能・推量等）

まじ　（打消）

らし　らむ　めり　（推量）

○「まじ」は近古以後、四段・ナ變・ラ變以外には、「過ぎまじ」「受けまじ」「せまじ」のやうに、未然形にもついて現れるが、正規の用法と認められて居ない。

四、動詞の連體形につく助動詞。

なり　（指定）

ごとし　（比況）

べし・べかり・まじ・らし・らむ・めり（ラ變に限る）

○「なり」「ごとし」は、形容詞の連體形にもつく。

五、動詞の已然形（四段活用に限る）につく助動詞。

り　（完了）

六、體言につく助動詞。

なり　たり　（指定）

七、助詞「が」「の」につく助動詞。

ごとし　（比況）

○「ごとし」が體言につくには、必ず助詞「の」を介し、用言につくには、或は直接し、或は「が」を介する（第九十項參照）。

〔九九〕　或助動詞が他の助動詞につく場合の規定は、大體前項に準ずれば宜しい。

○たとへば、完了の「たり」は、動詞の連用形につくことから、動詞型助動詞の連用形「れ」「しめ」にもつき、指定の「なり」が、形容詞の連體形にもつくことから、形容詞型助動詞の連體形「べき」「まじき」「たき」にもつくと、推察し得るが如くである。

されど、助動詞相互の間には一定の習慣があつて、連續の際の順序の、動かすべからざるものがある。たとへば、「らし」「まし」「じ」などは、その下に他の助動詞の來るを許さず、また使役・時の兩助動詞、若しくは、受身・推量の兩種を同時に用ひるには、各々その順序に

せ（させ、しめ）たり　る（らる）らし

とすべきが如くである。中には、受身・使役の兩助動詞の如く、

受けさせ（使役）らる（受身）

打たれ（受身）さす（使役）

上下何れも成立するものもある（意味に相違はあるが）。

右の如くであつて、詳しくは、一語々々に就いて考へるより外はないが、次に一例として、大體を表す順序表を掲げよう。

活用形名	動詞	受身	使役	希望	過去
未然	打た	れ	させ	たから	
連用	打ち	れ	させ	たかり	
終止	打つ	る	さす	たかり	き
連體	打つ	るゝ	さする	たかる	し

（一）この表は、受身・使役・希望・過去の四助動詞を連續するには、その順序によりて「打た・れ・させ・

たかり・き（けり）」とすべく（表中の線は之を示す）、またその中の何れかを省く時も、その順序によつて、たとへば、

打た・れ・させ・き　（希望略）

打た・れ・たかり・き　（使役略）

打た・せ・たか・りき　（受身略）

打ち・たかり・き　（受身・使役略）

打た・れ・たかり（たし）　（使役・過去略）

のやうにすべきを示すものである。

但し、意味によつて、受身と使役との順序が反對になり、また上の語によつて、「る」が「らる」に、「さす」が「す」に變る。

そして、希望の助動詞が、最後に立つ時は、「たかり」を「たし」にするのが普通であり、また過去の「き」は「けり」でも同樣である。

次頁の表も同じ順序を示すものである。

○表の中の直線は、揭げた動詞・助動詞を全部連ねた「受け・させ・られ・ざり・ける・なら・む」の連續法を表したのである。

活用形名	動詞	使役	受身	打消	過去	指定	推量
未然	受け	させ	られ	ざら		なら	
連用	受け	させ	られ	ざり		なり	
終止	受く	さす	らる	ざり	けり	なり	む
連體	受くる	さする	らるゝ	ざる	ける	なる	む

第三節　助動詞の注意すべき用法

〔一〇〇〕　助動詞の用法は頗る微妙であつて、簡單には說き得ないが、これに注意せぬと文意を精確に取ることは出來ない。その互に連續したものは、個々の助動詞の意義をたどれば、全體としての複雜な意味も理解されるはずであるが、また特別な用法を有するに至るものもある。次に是等の主なものに就いて述べよう。

〔一〇一〕　る　らる

「る」「らる」は、可能の意を表すことは既に述べた（第八一項）。これが又、次のやうに、動作の自然に起る意に用ひられることがある。

　故郷のみ思はる。

　人の身の上さへ案ぜらる。

　鷄籠の山明けなむとすれども、家路は更に急がれず。

右の意に用ひられた「る」「らる」を、特に自發の助動詞といふことがある。

〔一〇二〕　べし　まじ　じ

「べし」の可能・推量の意、「まじ」の推量の打消に用ひることは、既に述べた。この二語は、尚次のやうに用ひる（「まじ」には常に打消の意が伴ふ）。

一、第一人稱の動作について、決意を表す。この場合「じ」は、「まじ」よりも更に強い意味に於て用ひられる。

　予は今後斷然禁酒すべし。

　予は再び酒杯を手にすまじ。

われ等は誤を重ねじと誓ひぬ。

二、事の適當・必要なる意を表す。

こは少年の讀むべき書なり。

こは少年の讀むまじき書なり。

三、事の當然なる意を表す。

國民として盡すべき道。

紳士としてあるまじき行爲。

四、義務を指定するにいふ。

親には至誠を以て事ふべし。

君父の事は忽にすまじきぞ。

○右のやうな例を、普通には命令、又は禁止を表すと說いてゐる。

○「べかり」も、可能・推量・適當・當然・義務の指定に用ひるが、反語にいふ「豈之を討つべけんや」のやうな「べけんや」は、「べからんや」の轉と言はれる。

〔一〇三〕 す　さす　しむ

使役の助動詞としての、右の三語の例は既に擧げたが、これは又、左例のやうに、許容・放任の意を表すに用ひる。

あわてて船に乘つて、內裏を燒かせぬる事こそ口惜しけれ（平家、一一）

敵に暇もあらせず攻め寄す。

賢王は民を飢ゑさせて自ら樂む事なし。

國政に失望する者を存在せしむるは、政治家の恥辱なり。

○第八三項に述べた軍記物の例なども、積極的に「討たせ」「射させ」たと解するよりも、許容・放任の意とすべきか。

「す」「さす」「しむ」は、敬語助動詞としても用ひることは、既述の通りであるから、それ等に「らる」のついた。

せらる　　させらる　　しめらる

には、それぞれ二種の用法が生ずる。

一、「せ」「させ」「しめ」が、共に使役の助動詞で、「らる」が受身の助動詞である場合。この時は被役（サセラレル意）を表す。

書を讀ませ（しめ）らる。

人を訪ねさせ（しめ）らる。

二、各助動詞とも敬語の助動詞である場合。この時は敬意が深くなる。是等に更に敬語助動詞「給ふ」、丁寧の助動詞「候ふ」を添へると、一層敬意が強くなる。

乘馬を好ませ（しめ）らる。

行幸せさせ（しめ）られ給ふ。

還幸せさせ（しめ）られ給ひ候ふ。

○尚、動詞に使役助動詞のついた「聞かせて」「讀ませて」などを、サ行四段の動詞に、「て」のついた「動かして」「驚かして」などと混じて、「聞かして」「讀まして」など誤ることがある。注意を要する。

〔一〇四〕　完了と過去との助動詞

同じ事件に對しても、その事を主にして見るか、時の上から見るかによつて、完了ともなり、過去ともなる筈だから、完了の助動詞といひ、過去の助動詞と言つても、如何なる場合にも、截然と區別し得るはずのものではないが、大體の用法から見て、（一）「たり」「り」と、（二）「つ」「ぬ」を完了助動詞とし、（三）「き」「けり」を過去の助動詞として、分類する。

一、たり　り

この二語は、ラ變動詞「あり」から出た語で、大體「て・あり」の意を失はずに用ひられる。

A　動作が過去から現在まで進行してゐる意を表す。

中天にさしかゝりたる（かゝれる）月。

賊の追討に向ひたる（向へる）將軍。

B　過去の動作の結果の、なほ存する意を表す。

昨日讀みたる（讀める）書。

花咲きたり（咲けり）。

山河に風のかけたるしがらみは…。

C　完了を表す。

類なき光に色も添ひなまし今宵の月を君と見たらば（完了の假定）

秋の夜の千夜を一夜になせりとも（同）言葉殘りて鳥や鳴きなむ（以上二例、三矢博士の文法から）。

D　「たり」は、動作の並列にも用ひる。これは完了の意のものゝ一用法であらう。

太りせめたる男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乘り煩ふ上、主の心にも似ず…（平治、中）

掃いたり、拭うたり、塵拾ひ艫舳に走り廻つて、手づから掃除し給ひけり（平家、一一）。

二、つ　ぬ

A　動作の完了の意を表す。

ほとゝぎす鳴きつる方を眺むれば…。

今度御邊をば一方の大將に賴むなり。この事しおふせつるものならば、國をも莊をも所望によるべし。

只今敵を滅してんず、怖ろし〳〵（平治、上）

夏の夜は未だ宵ながら明けぬるを雲の何處に月宿るらん。

猛き人もつひには亡びぬ。ひとへに風の前の塵に同じ。

火の中水の底へも入りなばやと思へども…。

B　決定的の意味に用ひる。口語で「キット……ショウ」といふ程の意。

この後も讒奏するものあれば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。

その賞に誇ることは、傍若無人とも申しつべし。

この海に馬にて渡しぬべき所やある。

またも慕ふ事あらば、心も動き候ひなむず。

C　動作を並べいふに用ひる。

敵の間かぬ先に寄せんとて、馳せつ、ひかへつ、驅けつ、歩ませつ…大阪越といふ山を夜もすがらこそ越えられけれ。

泣きぬ、笑ひぬぞし給ひける。

○

因に、故三矢博士は、「つ」「ぬ」の差を、左のやうに示された。

ツ　動作的故意的にして急（短、硬）。對話體の文に多し。

ヌ　狀態的自然的にして緩（長、軟）。敍述體の文に多し。

三、き　けり

き・けり共に、過去の意を表すに用ひるが、「けり」は動詞「あり」から出たと考へられる。從つてその用例を見ると、過去の完了・過去の繼續を表すものが多い。卽ち、その語氣は、「き」は前に述べた完了の「つ」に相當し、「けり」は「ぬ」と同じ趣がある。

有明のつれなく見えしわかれ。

君がため惜しからざりし命。

昔は物を思はざりけり。

もとは法師なりけりと覺えて、髮はそらざまに生え上り…。

　形見に一部の法華經をぞ留めける。

○「けり」は、詠歎の助動詞にも數へられるが、過去の「けり」と言はれるのでも、歌などでは、詠歎の意を含むものが多い。

尙、現代文に於ては、專門家の文は別として、普通には、時の助動詞として「たり」「り」「ぬ」「き」が多く、小學校用の國定敎科書でも、「つ」「けり」は、極めてまれにしか用ひないやうである。「り」も、現代文では、終止・連體形以外は、あまり用ひぬ事は、既に述べた。

四、完了と過去との助動詞の連語　「たり」「り」「つ」「ぬ」の各々は、過去の「き」「けり」に連つて、次の如くなる。

(a) たりき、たりけり。　(b) りき、りけり。

(c) てき、てけり。　(d) にき、にけり。

これ等は、過去に於ける動作の繼續・それ以前の動作の結果の存したこと、又は單に過去や完了を表す等、いろ〳〵に用ひられる。但し現代の達意文には、あまり用ひない。

〔一〇五〕　む(ん)　む(ん)ず

この二語は、未來・推量の意に用ひることは、既に述べた。これが第一人稱の動作につくと、その決意を表す。

度々の合戰にも御命には代り參らせむとこそ存じ候ひしか。

物の具をば參らせ候はん。

御有様を見屆け參らせてこそ、歸り上り候はんずれ（平治、中）。

まづ尾張の野間に行き、忠致に馬物の具請うて通らんずると宣へば…（平治、中）。

次にこれは、確定せずに漠然といふに用ひる。

思はむ子を法師になしたらむこそいとほしけれ。

寶の山に入りて手を空しうせむこと、怨の中の怨、愚かなるが中の口惜しき事にては候はずや。

我と思はむずる者共は、物の具して急ぎ參れ。

大衆の御咎めや候はんずらん。

また、適當・當然の意を表すに用ひる（「べし」と似てゐる）。　但しこれは上に「こそ」のある場合に限るやうである。

斯くいましたる事、あるまじき事なり。人してこそ言はせ給はめ、疾く歸られね（大鏡卷三）。

公家より…存の旨あらば幾度も奏聞にこそ及ばめと仰下されければ…（長門平家、一一）。

都にてこそ如何にもなり給はめ、又西國へ落ちさせ給ひたらば助かり給ふべきか（盛衰記三一）。

御自害候ふとも……東國の身方の憑みあるやうにこそ御計らひ候はんずれ（平治、中）

○「む」「むず」が、完了の助動詞について、次の如くなると、いろ〳〵の意になる。

たらむ（むず）　　てむ（むず）　　なむ（むず）

但し、「り」に「む」のついた「咲けらむ」のやうなのは、用例が多くない。これを「咲くらむ」と混じてはならぬ。

〔一〇六〕　推量の助動詞

「む」「むず」については、前項で述べたから、次に殘りの諸語について述べる。

一、らし　　「らし」は、或根據に立つて、推定する意にいふ場合が多い。

み吉野の山の白雪つもるらし、ふるさと寒くなりまさるなり。

これが助動詞「ける」「なる」につく時は、その「る」が多く略される。

春過ぎて夏來にけ（る）らし…。

世の中はかくのみな（る）らし。

後には「ならし」を、「なり」の意にさへ用ひるやうになつた。

二、めり　「めり」は、客觀的狀態を、さうだと判斷する意を表す。口語の「…ノ樣ニ見エル」「…ノ樣ニ思ハレル」といふに當る。現代文には廢れた。

この世の中に生れては、願はしかるべき事こそ多かるめれ。

立田川紅葉流れて亂るめり。

ラ變活用の語がこれに連ると、その語尾の「る」が「ん」となつて、次の如くなることがある。

あん（る）めり

多かん（る）めり

なん（る）めり

三、らむ　「らむ」は想像・推定に用ひる。

をめき叫ぶ聲は梵天まで聞え、堅牢地神も驚き給ふらむとぞ覺えける。

都に待つ人どもの心もとなう候ふらむ。

あな夥し、こは何事なるらむ。

京童の申さむこと、後日の難にや候はむずらむ。

これは又、事を漠然といふに用ひる。

親の科に當り給ふらむこそ淺ましけれ。

「責一人に」といふらむことにやと、あちきなし。

四、けむ　「けむ」は、過去のことを、確かでない意、漠然たる意にいふに用ひる。

これは…先世の芳緣も淺からずや思はれけむ。

人々の心の中、さこそは嬉しうも又あはれにもありけめ。

昔北里・息里が海巖山へ放たれたりけむ悲しみも、今こそ思ひ知られけれ。

五、まし　「まし」は次のやうに用ひる。

世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。

飛鳥川しがらみ渡し塞かませば、流るゝ水ものどけからまし。

右の「まし」は、假設が成立つた場合に生ずる事件を推量するに用ひる。

隔なう打向ひてもおはしたらば、さりとも命ばかりをば助け奉つてまし（キット助ケ奉ラウモノヲ）

見る人もなき山里の櫻花、外の散りなん後ぞ咲かまし。

右の「まし」は、話手の意思・希望を表す。又、左例のやうに、假設に用ひることがある。

この謀反遂げなましかば、御邊とてもおだしうてやはおはすべき。

「ましかば」の假定に對する後件の想像を、左例のやうに「まし」で表すことがある。

頼朝といふ人もなく泰時といふ者も無からましかば、この日本國の人民いかゞなりなまし。

〇尙、第二例の「飛鳥川…」の歌の假定に用ひてある「ませ」を、「まし」の未然形とする說がある。又、第一例の「世の中に…」の歌にある假定に用ひた「せ」を、過去の助動詞「き」の未然形に擬する人がある。

〔一〇七〕　ごとし

「ごとし」は、類似する事物を比較說明するに用ひることは、第九〇項で述べたが、これはまた、兩者の全く同一である意を表す。

　中宮御惱の御事、承り及ぶ如くんば、成親の卿が死靈など聞えて候。

　藝術の貴重なることは、旣に述べたるがごとし。

　事件は君の推測の如く發展せり。

これを推量の意にも用ひる。

　聞く所によれば、そは事實なるが如し。

　彼の洋行は、近日に迫りたるが如し。

尙又、例示に用ひることがある。

兄弟皆俊才にして、その長男の如きは、全世界の醫學界に重きをなすといふ。

出雲大社は、規模壯大、その本殿の如きは、高さ八十尺に及ぶ。

○「ごとし」の連用形を、副詞のやうに用ひる時には、古くは語尾「く」のつかぬことあり、後世でも韻文には、その形で用ひることがある。然るに又「く」に助詞「に」を添へ、更にそれから、ナリ活用の形容動詞のやうになつて、「ごとくなり」ともなる（「ごときなり」のやうに連體形に「なり」のつくことは、普通の形容詞と同じ）。

神のごと、きこえしかども…。

月のごと、日輪ほのかに浮ぶ。

衆人蟻のごどくに集まる。

鎧うたる兵…雲霞の如くに河原表まで充ち滿ちたり。

相共に賢愚なり、環の如くにして端なし（平家、二）

さしもさかしき東坂、平地を行くが如くなり。

唐僧なれば語を聞き知し召す人なし、只鳥の囀る如くなりしを…。

又「如き」の連體形の代りに、「如くの」を用ひることがある。

未だかくの如くの例を聞かず（平治、上）

　かくの如くの志、大慈大悲の御誓にて照し知し召すならば…（同、下）

〔一〇八〕　謙語助動詞の「給ふ」と「聞ゆ」

「給ふ」「聞ゆ」は、主として中古文に現れる語で、共に下二段に活用する。

「給ふ」は第一人稱の動作に限つてつき、下に丁寧語「はべり」の添ふことがある。「見る」「聞く」「思ふ」の外には、つかぬやうである。

　まこと空事見給へんとて、まうで來つるなり。

　主の娘ども多かりと聞き給へて…。

　さこそは返す〴〵も思ひ給へ候ひつれど…。

また二つの動詞の間に立つことがある。

　みづからはえなむ思ひ給へ立つまじき。

「聞ゆ」は「奉る」「まゐらす」と似て居るが、多くの例によると、第三人稱の、他の三人稱に對する動作にのみつけるやうである。

　疑なき儲の君と、世にもてかしづききこゆれど…。

　何人か迎へきこえん。

○

國語においては、敬讓語の發達が著しく、文中では西洋諸國語のやうに、一々主語・補語等を用ひることはなく、敬讓語の使ひわけによつて、これを知らしめるやうになつて居る所が少くない。

先づ、動詞だけに就いて見るに、たとへば、平重盛が中宮の御殿で蛇を捕へ、その處理の爲に人を呼んだ時の有様を、平家物語の作者は次のやうに記してある。

伊豆の守の仲綱、その時は未だ衛府の藏人にて候はれけるが、「仲綱」と名告りて參られたるに此の蛇をたぶ。賜はつて弓場殿を經て殿上の小庭に出でつゝ、御倉の小舍人を招いて、「これ賜はれ」といはれければ、大きに頭をふつて逃げ去りぬ。伊豆の守力及ばず、わが郎等の競を召して之をたぶ。たまはつて捨てゝけり（卷四、競が事）

即ち、重盛と仲綱、及び仲綱と、小舍人・競との關係が、「たぶ」「たまはる」の二語で表されてゐるから、一々「誰が誰に」とことわる必要がないのである。

次に、一活用連語の中に、複雜な待遇關係を示すことが珍しくない。二三例を擧げると、

法皇…少將もまた涙に咽びて申上げらるることもなし（平家、二）

右の「申上げ」は少將が法皇に言上するを表し、「らるゝ」は作者が少將に對する敬意を表す。

法皇を傾けまゐらせ給はむこと、天照大神正八幡宮の御慮にも背かせ給ひなむず（同、重盛が父

清盛にいふ語)

右の「まゐらせ」は、清盛の法皇に對する動作にへり下る意を添へたもので、「給は」は、下の「せ給ひ」と共に、重盛が清盛の動作を敬して言つたのである。また

之を小松の大臣の許へ遣されたりければ、父の禪門に見せ奉らる(平家、二)

だけの文句で、「奉ら」は、小松の大臣の、父に對する動作に、謙意を添へ、「る」は、作者がその動作を敬して言つたことがわかる。

又、次の文は、長崎入道圓喜が、足利高氏について、北條高時に語つた文句である。

何樣足利殿の御子息と御臺とをば、(高時ガ)鎌倉に留め申さ(高時ノ、足利ノ妻子ニ對スル動作ニ添フ)れ(長崎ガ高時ニ對スル敬意)て、一紙の起請文を書かせ奉ら(高時ガ足利ニ對スル動作ニ添フ)せらる(長崎ガ高時ニ對スル敬意)べしとこそ存候へ(長崎ノ動作)〔神田本太平記、九〕

〔一〇九〕 その他

以上主な助動詞について大體述べたが、次にその他のものを、一括して擧げよう。

一、詠歎の「けり」

これは過去の「けり」から來たもので、形の上から兩者を區別することは出來ず、たゞ前後の意味から判ずるより外はない。たとへば、

白雲のおりゐる山と見えつるは、降り積む雪の消えぬなりけり。

海は淺かりけり。佐々木討たすな。渡せ者ども。

あな夥し、火もあれほどまで多かりけりな。

子ならざらん者が、誰か只今わが身の上をさしおきて、是程までは喜ぶべき。誠の契は親子の中にぞありける。

これ等は共に詠歎の意を表して居る。口語には、詠歎の意を表す助動詞はないから、普通これ等は、「消エナイノダワイ」「多イワイ」「アルワイ」など譯される。

次に詠歎の「けり」が、完了の助動詞につくと、單に時を表すだけのものと紛れ易いが、

高砂の尾のへの櫻咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ。

八重むぐら茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は來にけり。

などは、完了に詠歎の意が添うて、「咲イタワイ」「來タワイ」など譯すべきである。

二、詠歎の「なり」

指定の「なり」の、連體形につくに對して、これは終止形につくのが、形の上の區別である。

梓の弓の許すなり。

秋風に初かりがねぞ聞ゆなる。

此の世を去らんとする時にこそ始めて過ぎぬる方の誤れる事は知らるなれ。

されど四段活用や上下の一段活用では、終止形と連體形とが同形であるから、形の上の區別は出來ず前後の關係で判ずるより外はない。

三、打消の「ず」

「ず」の已然形「ね」に、助詞「ば」のついたものが、後世ならば「ざるに」、口語「ナイノニ」といふ所に用ひられた例が、古く見える。しかもこれは、近古のものにも現れるから、特に注意すべきである。

その後西に向ひ、「……」と宣ひもはてねば六彌太うしろより薩摩の守の首を取る（平家、九）

官軍既に寄せ候と申しも果てねば、先陣既に馳せ來る（保元、中）

又古く、「ず」に「は」をつけて用ひたもののうち、

事繁き里に住まずは今朝鳴きし雁にたぐひて行かましものを（萬葉、八）

などは、「住まんよりは」の意である。但し、この「は」を、「ば」と訓む說もある。

次に連體形の「ぬ」は、韻文には「ない」となつて現れることがある。

誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに。

大淀の松はつらくもあらなくに…。

○因に、「ぬ」の「なく」となる類の語を延言といふ。延言は動詞・或種の助動詞に現れ、普通のものには、次の二種ある。

A　連體形の末の音の、子音と母音との間に、ak が入る。

曰ふ——曰はく　　思ふ——思はく

恐る——恐らく　　ける（助動詞）——けらく

「ぬ」の「なく」となるも、これである。

B　動詞の末の音の、子音と母音との間に、ah (f) が入る。

住む——住まふ　　呼ぶ——呼ばふ

語る——語らふ　　計る——計らふ

四、敬語の「ます」

これは、有ル・居ルの意の、敬語動詞を轉用したものであることは、既に述べた。これを口語で丁寧語に用ひる「ます」と混ぜぬやう注意せねばならね。口語のは、後に述べるやうに、何等敬意を表する必要のない場合にも用ひるが、これは話手の尊敬する者に關してのみ用ひるのである。從つて、自

己の動作に、これのつくことは絶えてない。

天皇…大和に入りまさむとせしに（正統記、神武天皇）

父の天皇かくれまして一年ありて（同、孝昭天皇）

尊は…徒より出でます（同、景行天皇）

五、ざるべからず

これは「ざり」「べかり」「ず」の連合したもので、一々の意をたどれば、疑點はないが、打消が二つあるので、結局「べかり」又は「べし」を強くいふ事になる。口語では「ナケレバナラナイ」「ネバナラヌ」に當る。

彼の如きは、眞の英雄といはざるべからず（言フノガ當然ダ）。

約束は嚴守せざるべからず（守ルノハ義務ダ）。

更に努力せざるべからず（努力スル必要ガ迫ッテキル）。

第九章　口語の助動詞

第一節　助動詞の種類と活用

〔一一〇〕　口語の助動詞は、文語よりやゝ種類が減じて、次の九種になつた。

可能　受身　使役　打消　時　推量　指定　希望　敬譲

〔一一一〕　各種の所属語を示せば、次の通りである（括弧内の語は、それに相當する文語である）。

一、可能の助動詞　れる（る）　られる（らる）

二、受身の助動詞　れる（る）　られる（らる）

三、使役の助動詞　せる（す）　させる（さす）

四、打消の助動詞　ぬ（ず）　ない　まい（まじ）

五、時の助動詞　た（たり）　う・よう（む）

○「た」は、他の語へのつゞき方によつて、「だ」ともなる。

六、推量の助動詞　う・よう（む）　らしい（らし）

七、指定の助動詞　な（なり）　だ　のだ

八、希望の助動詞　たい（たし）

九、敬譲の助動詞

敬語　れる（る）　られる（らる）

丁寧語　です　のです　ます

○動詞から轉來した語では、次の通り。

敬語　なさる　あそばす　くださる　になる

謙語　いたす　まうす　申上げる

〔一一二〕　口語助動詞の活用も、動詞型のもの、形容型のもの、特殊型のものと三分して見られる。そして文語で下二段活用のものは、口語では下一段活用となるやうに、大體動詞の活用に於て見るやうな關係に立つ。

〔一一三〕 動詞型助動詞の活用表（口語）

種類	語	未然	連用	終止	連体	假定	命令	活用の種類
可能受身敬譲	れる られる	れ られ	れ られ	れる られる	れる られる	れれ られれ	れよ、れろ られよ、られろ	下一段
使役	せる させる	せ させ	せ させ	せる させる	せる させる	せれ させれ	せよ、せろ させよ、させろ	下一段
時	た	たら	たり	た	た			ラ四的
指定	だ のだ な	だら のだら なら	だつ のだつ なり	だ のだ （な）	（だ） な			ラ四的
敬譲	です のです ます	でせ のでせ ませ	でし のでし まし	です のです ます	 ます	ますれ	ませ、まし	サ變的 同 同

○可能・敬讓の「れる」「られる」には命令形がない。

○文語の已然形に相當する活用形を假定形としたのは、動詞・形容詞の場合と同じ。この形が「……ばこそ」に連つて、既定の意を表すことも、同樣である。その用法では、時の「た」の已然形として、「たれ」、指定の「な」の「なれ」をも表すべきであるが、用言にならつて表には省いた。

○時の「た」の連用形として「て」を擧げ、指定の「だ」と、敬讓の「です」の連用形として、「で」を擧げる人があるが、それは誤である。これは「た」と「だ」とは、「てある」「である」の約つたのを一語と見て、その活用を考へるのである。然るに、更に分解して、元の「て」と「で」とを、その一活用形とするのは、他に緣付いて獨立の生計を營んで居る娘を、同居家族として數へると同樣であつて、贊成出來ない。

尙、この事は、第七十七項二のBに於いて、第二種・第三種活用の形容動詞について述べたことを參照すれば、明かである。

○指定の「のだ」と、敬讓の「のです」とは、「だ」「です」に、助詞「の」のついたのを、便宜上、一語と見たのである。

尙、この「の」は、つゞけ方によつて、しば〳〵「ん」となる。

○動詞から轉來した「なさる」「致す」等の敬讓助動詞は、動詞と同活用であるから、表には表さぬ。

〔一一四〕　形容詞型助動詞の活用表（口語）

種類	語	連用	終止	連體	假定	活用の種類
打消	ない	なく	ない	ない	なけれ	ク活用
推量	らしい	らしく	らしい	らしい		シク活用
希望	たい	たく	たい	たい	たけれ	ク活用

○未然形は、まれに「なくば」「たくば」など用ひるが、形容詞にならつて表には表さぬ。

〔一一五〕　特殊型助動詞の活用表（口語）

種類	語	連用	終止	連體	假定	備考
打消	ぬ〔ん〕 まい	ず	ぬ〔ん〕 まい	ぬ〔ん〕 まい	ね	無變形
時推量	う よう		う よう	（う） （よう）		同 同

○「ぬ」は「ん」とも發音するから、從つて「ん」とも書く。

第二節　口語助動詞の主な用法

〔一一六〕　可能の助動詞「れる」「られる」

一、「れる」は動詞四段活用の未然形に、「られる」は、その他の活用の未然形、及び使役助動詞の未然形につく。

書かれる　　起きられる

受けられる　　こ（來）られる

せ（爲）られる　　受けさせられる

二、「られる」は、サ變動詞には、その連用形にもついて、「しられる」ともなる。但し、通例は、「せられる」「しられる」の轉と考へられる所の「される」を用ひて、「辛抱される」「勉强される」のやうにいふ。尤も「達す」「察す」「命ず」「信ず」などは、サ變に活用させても用ひるが、「される」とはならない。

三、「れる」が、四段活用の動詞についた「讀まれる」「書かれる」等が、發音上の變化を起して、「讀める」「書ける」のやうになつたものは、各一語の動詞と見なして可能動詞と名づけることは、第六十二項で述べた。

〔一一七〕　受身の助動詞「れる」「られる」

「れる」「られる」の、他語へのつき方は、前項（一）（二）に述べた事が全部あてはまる。

〔一一八〕　使役の助動詞「せる」「させる」

一、「せる」は動詞四段活用の未然形に、「させる」は、上一段・下一段・カ變の未然形と、受身の助動詞「れる」「られる」の未然形と、サ變動詞の連用形とにつく。

書かせる	起きさせる
受けさせる	こ（來）させる
打たれさせる	叱られさせる
し（爲）させる	

二、サ變動詞につくのは、右のやうに「し・させる」であるが、これを「念入りにさせる」「勉強させ

る」のやうに、「させる」といふのが普通である。尤も、「罰す」「發す」「談ず」「封ず」などは、「させる」とはならない。文語のやうに「せ・させる」といふことは廢れた。

三、文語の「しむ」に相當する「しめる」（マ、下一）も、講演體には用ひるが、對話體には現れない。

〔一一九〕　打消の助動詞「ぬ」「ない」「まい」

一、「ぬ」「ない」は、動詞の未然形・助動詞「れる」「られる」「せる」「させる」の未然形につく。但しこれには例外がある。

A　サ變の動詞には、「ぬ」はその未然形に、「ない」はその連用形に限つてつく。

せぬ　、　しない

從つて「勉强せない」などは、標準的な言ひ方ではない。

B　「ぬ」も「ない」も、四段活用の「ある」にはつかぬ。飜譯文などに「あらぬ」など現れるのは普通な言方ではない。また「あらぬ噂」などは、特別な慣用句と見るべきである。

C　「ぬ」は右の外、敬讓助動詞「ます」の未然形について「ませぬ」となるが、「ない」はつかぬ。

二、「ない」に「ある」のついたものは、

行かなかつた　　見なかつたか

のやうな用ひ方の外、現れない。

○「足りなからう」のやうな言方も聞かぬではないが、普通ではない。かゝる場合には「足りないだらう」といふ。

○助動詞の「ない」と形容詞の「ない」との間に、紛れ易い用法がある（第七五項の（四）參照）。

三、「まい」は、四段活用にはその終止形に、上一段・下一段（助動詞れる・られる・せる・させるを含む）カ變には、その未然形に、サ變にはその連用形につく。

書くまい　み（見）まい　受けまい

こ（來）まい　し（爲）まい

右の外、敬譲の「になる」「ます」の終止形にもつく。

お出でになるまい　ありますまい

○「まい」の連體形は、稀に「行くまいものでもない」「あらう事か、あるまい事か」など用ひる。

〔一二〇〕　時の助動詞「た」「う」「よう」

一、「た」は動詞と動詞型助動詞（指定のなを除く）との連用形につく。その際に音便が起り、「だ」となることとあるは、第六章第二節に述べた。

二、「た」は活用形によつて意味が必ずしも同一でない。

昨日の會には齋藤が演說した、

此處は昨年大事のあつた場處だ。

右のやうに終止・連體形は、過去に用ひるが、又左例のやうに完了にも用ひる。

會はたつた今終つた。

咲いた櫻になぜ駒つなぐ。

未然形は、「行つたらう」のやうに、「う」に連つて過去の推量に用ひる外、左例のやうに假定に用ひる。

咲いたら(ば)見よう。

呼ばれたら(ば)行かう。

未然形を假定に用ひるのは、この外に形容動詞と「なら」があるだけで、口語としては珍しい。連用形は時の意を失つて、次のやうに、動作の並列に用ひる。

行つたり來たりした。

足を踏まれたり横に押されたり、ひどい目に逢つた。

○「た」の已然形としては「たれ」があるが、今までの例に從つて表には記さぬ。又「たれば」を「た

ら（ば）」の意に用ひるのは、標準的な言方でない。

三、「う」は四段活用の動詞と、ラ行四段的活用の助動詞との未然形に、「よう」はその他の活用の動詞と、下一段活用の助動詞との未然形につく。但し、サ變の動詞には、「よう」がその連用形について、「しよう」となる。

これ等の連體形は、まれに事柄を漠然といふ際に現れる。

そんなにならう道理がないではないか。

そんな事は出來ようはずがない。

○筆寫體では、「次に現れるだらう所の事件」など折々用ひられる。

〔一二二〕　推量の助動詞「う」「よう」「らしい」

一、「う」「よう」は、前項の（三）に述べたことが、そのまゝ當てはまる。

二、「らしい」は用言の終止形と、下一段活用の助動詞・形容詞型の助動詞・「ぬ」（打消）「た」・「ます」の終止形とにつく。

三、「らしい」と「ある」と合して一語となつたものは、次のやうにしか用ひない。

何かあるらしかつた。　居るらしかつた。

○「らしからう」も用ひさうであるが、通例「らしいだらう」といふ。

〔一二三〕　指定の助動詞「だ」「のだ」「な」

「だ」と「な」とは、互に用法上の缺を補つて、一語のやうに見えるので、しば／＼誤解される。その用ひ方は次のやうである。

一、未然形「だら」「なら」

これは君のペンだらう。

これが君のペンなら（ば）返しませう。

君も讀みたいなら（ば）讀んで見給へ。

卽ち「だら」は、「う」に連つて推量を表し、「なら」は、「ば」に連り、或は單獨で、假定を表す

この假定の用ひ方は、口語中の特例である。

二、連用形「だつ」「なり」

あれは僞物だつた。

居るなり歸るなり隨意にし給へ。

ペンなり鉛筆なり早く持つて御出でなさい。

即ち「だつ」は「た」に連つて過去を表すに用ひ、「なり」は事柄を並べいふに用ひる。

○「なら」を「なり」のやうに、事柄を並べいふに用ひることがある。

顔立ちなら姿なら、申分ない御孃さんだ。

されど標準的な言方とは認められない。

三、終止形「だ」「な」

これは地理書だ。　　あれの年は十二だ。

呼んだのは私だ。

右のやうに終止には「だ」を用ひるのが普通で、「な」は廢れた。又これを「ぢや」といふのは標準的な言方ではない。

四、連體形「だ」「な」

忠義な家來　　孝行な子

それから、「だ」も、次の如く連體形に用ひられるが、總べての體言に連るにあらず、極めて狹く局限されてゐる。

まあえらい人出だこと。　　好きな芝居だもの、行つて見たらいゝではないか。

五、「なればこそ……」のやうに「なれ」を已然に用ひる事はあるが、一般の例にならつて表に記さな

○「らしからう」も用ひさうであるが、通例「らしいだらう」といふ。

〔一二三〕　指定の助動詞「だ」「のだ」「な」

「だ」と「な」とは、互に用法上の缺を補つて、一語のやうに見えるので、しば〳〵誤解される。その用ひ方は次のやうである。

一、未然形「だら」「なら」

これは君のペンだらう。

これが君のペンなら（ば）返しませう。

君も讀みたいなら（ば）讀んで見給へ。

卽ち「だら」は、「う」に連つて推量を表し、「なら」は、「ば」に連り、或は單獨で、假定を表すこの假定の用ひ方は、口語中の特例である。

二、連用形「だつ」「なり」

あれは僞物だつた。

居るなり歸るなり隨意にし給へ。

ペンなり鉛筆なり早く持つて御出でなさい。

即ち「だつ」は「た」に連つて過去を表すに用ひ、「なり」は事柄を並べいふに用ひる。

〇「なら」を「なり」のやうに、事柄を並べいふに用ひることがある。

顏立ちなら姿なら、申分ない御孃さんだ。

されど標準的な言方とは認められない。

三、終止形「だ」「な」

これは地理書だ。　あれの年は十二だ。

呼んだのは私だ。

右のやうに終止には「だ」を用ひるのが普通で、「な」は廢れた。又これを「ぢや」といふのは標準的な言方ではない。

四、連體形「だ」「な」

忠義な家來　孝行な子

それから、「だ」も、次の如く連體形に用ひられるが、總べての體言に連るにあらず、極めて狹く局限されてゐる。

まあえらい人出だこと。　好きな芝居だもの、行つて見たらいゝではないか。

五、「なればこそ……」のやうに「なれ」を已然に用ひる事はあるが、一般の例にならつて表に記さな

い。又これを假定に用ひるのは、標準的な言方でない。

六、「だ」は體言につき、「な」は體言・用言の連體形・助動詞の連體形につく。但し「だ」の未然形に「う」がついて推量を表すものは、用言及び助動詞（まい・う・よう・らしいを除く）の連體形にもつく。

次に「のだ」は、用言及び助動詞（まい・う・ようを除く）の連體形につく。

寒いからふるへるのだらう。

品がいゝから直段も高いのだ。

それで滿足なのだ。

やつぱり遊びたいのだつた。

○右の「の」は、既述の通り「ん」と發音されることが多い。又、この「の」を、次の例（一）のやうに、下に體言を略したものや、例（二）のやうに、體言の代りをする「の」と混ぜぬやう、注意すべきである。

A　この鉛筆は、僕の（鉛筆）だ。

その帽子は、齋藤の（帽子）だらう。

B　この鉛筆は、弟にやつたのだ。

B　僕の帽子は、その古いのだ。

○「だ」「のだ」と同様に用ひられるものに、「である」「であります」「でございます」等、及び是等に「の」のついた語がある。

そのうち「である」「であります」及びそれに「の」のついたものは、對話體には用ひない。對話では「でございます」「のでございます」等、及び敬譲の部で述べる「です」「のです」を用ひる。

〔一二三〕　希望の助動詞「たい」

「たい」は動詞・下一段活用の助動詞の連用形につく。

「たい」の連用形「たく」が、動詞「ある」と合して一語となつたものは、次のやうに用ひる。

見たからう。　　勝たせたからう。

見たかつた。　　勝たせたかつた。

〔一二四〕　敬語助動詞「れる」「られる」「なさる」「になる」「あそばす」「くださる」

先生も水泳に行かれる。

六時には父も起きられる。

あの方もお歌ひなさるさうですね。

あなたもお出でになるでせう。

これをお讀み遊ばしては如何でございます。

暫くお待ち下さるやうに申しませう。

○「れる」「られる」の、他の語へのつき方は、可能の「れる」「られる」に同じ（第一一六項の一・二參照）。

○「なさる」「になる」「遊ばす」「下さる」は動詞・下一段活用の助動詞の連用形につき、その動詞には、「お」を冠らせるのが普通である。

○「なさる」「になる」「下さる」の連用形に、「て」「た」のつく時は、必ず促音便となる。また「ます」に連る時は、「なさり」「下さり」は、「なさいます」「下さいます」ともなる（第六四項參照）。

○「れる」「られる」の命令形は、今多く用ひない。「なさる」「下さる」は、「なさい」「下さい」となる。また、「お讀みなさい」の類は、「お」を略したり、「なさい」の一部分、或は、全部を略すことがある。

讀みなさい　　お讀みな　　お讀み

たゞ「讀みな」とさへいふことがあるが、敬意が殆んどなくなつてしまふ。

○右の外、學生などの云ふ言葉に、「讀み給へ」「見給へ」などのやうに、命令に「給へ」を用ひることがある。

〔一二五〕 謙語助動詞「いたす」「まうす」「申上げる」「つかまつる」

おわび致したいと存じます。

一言おことわり申して置きます。

これは後からお屆け申上げませう。

お受け仕りますまい。

○右の助動詞は、「お」を冠らせた動詞の連用形につき、下に「ます」の添ふことが多い。

○「致す」「仕る」の命令形は、今は多く用ひない。

○口語で、謙語助動詞のつく動詞には、右の諸例のやうに、大抵「お」を冠らせることになつて居る。文語でも、

九條の右丞相師輔公も慈慧僧正に御契り申させ給ひて…。

のやうに現れるが、併し、左例のやうに、「御」のつかない例が多い。

九條殿……惜み申さぬ人もなし（榮華、月宴）。
これは義經に天の與へ給ふ文や、鎌倉殿に見せ申さむ（平家、一一）

〔一二六〕　丁寧の助動詞「です」「のです」「ます」

これは土佐犬です。
花ももう散るでせう。
試驗がなか〳〵むづかしいのです。
誰にも賞められるのです。
私も參りますが、あなたはいらつしやいませんか。
あつ、蛇が居ます。

一、「です」「のです」は、指定の「だ」「のだ」に丁寧の意を含んだもので、他語へのつき方等は、「だ」「のだ」と同樣である（第一二二項參照）。

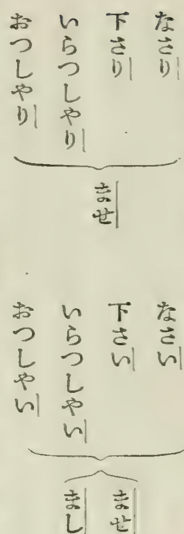
二、「ます」は、丁寧語として、最もよくその特色を發揮したもので、人稱の如何、話手の身分如何を問はず、對話には普通に用ひられる。たとへば、主人が召使を叱る時にさへ、これを用ひるのであつて、以て丁寧語は、話對手に敬意を表す爲のものと解するよりも、話手自身の品位を保つのが主たる

目的で用ひられるものと見るべきである。

三、「ます」の未然形には、「ませう」「ませぬ」とつゞくが、打消の「ない」はつかぬ。

四、「ます」の終止形・連體形を「まする」といへば、更に丁寧になる。

五、「ます」の命令形は「ませ」が本體であるが、敬語動詞「なさる」「下さる」「いらつしやる」「おつしやる」の連用形の語尾「り」が、「い」となる時は、「まし」ともなる。



○「ます」の命令形は、今は敬譲の意を含まぬ語にはつかぬ。

○

右の外、文語には詠歎の助動詞・比況の助動詞がある。前者に對しては、口語では助詞などを用ひてその意を表し、比況の「如し」に對しては、「樣だ」を用ひる。この「樣だ」を、口語の比況の助動詞として擧げる人もあるが、本書ではその說に從はぬ。

この「樣」は形式名詞で、上に、その實質を補充する語がついて現れるのが常であつて、それに助動詞

「なり」がついて、述語の地位に立つことは、文語にも珍しくない。すると、文語の比況助動詞にも、「樣なり」を數ふべき筈である。口語に限つたことではない。

一體「ごとし」や、指定の「なり」「たり」を助動詞にすることさへ、われ等は如何にやと思つて居る。若し「樣だ」を助動詞とするなら、他にも「某も來るさうだ」「何かありさうだ」「來る樣子だ」なども、助動詞と見るべきだとの主張も起る。よつて本書では文語の「ごとし」に相當する言ひ方に、「樣だ」があるといふに止め、「樣だ」を一語の助動詞とは見ない。

鬼のやうなるもの出で來て殺さんとしき（竹取物語）

廿日、昨日のやうなれば舟出さず（土佐日記、一月）

人皆えあらで笑ふやうなり（同、一月十八日）

にぎはゝしきやうなれどまくる心地す（同、三日）

第十章　副　　詞

〔一二七〕　副　詞

用言、または活用連語を修飾する語を副詞といふ。副詞には用ひ方による語形の變化はない（第一一項參照）。また副詞は、文語と口語との間に、用ひる單語に異同はあるが、文法上の差はない。

〔一二八〕　情態を表す副詞、程度を表す副詞

靜かに歩む。　　懇に教ふ。

につこと笑ふ。　　ばたりと倒れた。

粗末に取扱ふ。　　泰然と構へたり。

右の副詞（―印）は、動詞又は、それに助動詞のついたもの（、印）を修飾して居る。そして、これ等の副詞は、何れもその情態を表してゐる。

すこぶる多し。　やゝ高き山。

大層穩かだ。　もつと穩かな海。

右の副詞（―印）は、形容詞又は形容動詞（、印）に副つて、程度を示して居る。

いと安らかに見ゆ。　最も嚴格に取調ぶ。

やゝ急に流る。　よほどはつきり聞える。

右の＝印の副詞は、下に在る―印の副詞に副うて、その程度を表してゐる。即ち、程度を表す副詞は、他の副詞をも修飾する事がわかる。

〔一二九〕　副詞には、倚次のやうなものがある。

げに春はのどかなり。

さりとはつゆ知らず。

予は必ず行かん。

光陰はあたかも流水の如し。

その有樣はいかに華やかなりけん。

いかでさる事の候ふべき。

恐らく彼の言は僞なるべし。

彼たとひこの度の戰に敗るとも……。

即ち、これ等の副詞は、用言・活用連語、又はそれ等が體言や助詞と一緒になつてゐるもの（丶印）の敍述の態度（斷定的であるか推測的であるか等の）を助けて居る。故に、この種の副詞は、述語・述部を修飾するとも言ひ得る。前の情態・程度の副詞は、被修飾語の實質（意義）に關するものであるに對して、これを敍述の副詞と稱する（尙二四一項參照）。

○

敍述の副詞を、意義に關するものから、明かに區別して說かれたのは、予の知る限りに於いては、山田孝雄博士を以て最初とする。われ等は、これによつて、副詞の硏究に、一光明を與へられたものとして、喜ばざるを得ない。

從來は、この「敍述方法」（博士の用語）に關する副詞を說く者なく、たとへば、次の

誠にこの地は仙境なり。

豈これ男子の本懷ならずや。

多分某も贊成してくれませう。

よしんば人が誘つたにもせよ……。

等の場合に、「誠に」「豈」「多分」「よしんば」などは、下の全文を修飾するものとして說かれた。けれども、これ等も、敍述を助けるものとして、右の、印の敍述の語を修飾すると見る事の、至當なるを信ずるものである。

〔一三〇〕　副詞をその形の上から見ると、大體三種に分類される。

一、語末に「に」のあるもの。

靜かに　（明かに　確かに　愚かに　のどかに　おごそかに　ほのかに
かすかに　こまかに）

若やかに　（まめやかに　のびやかに　たをやかに　おだやかに　あざやかに
ほそやかに）

滑らかに　（柔らかに　つまびらかに　たひらかに）

たひらに　ひらに　新たに　斜に　おもむろに　けなげに　懇に　まれに

つとに　ゆるがせに　なほざりに　直ちに　かりそめに　まれに　さすがに

すなほに

自然に　激烈に　溫順に　明白に　雄大に　切に　優に　急に

以上は、大方、文語・口語共通のものであるが、この外、口語に多く用ひられるものには、次の如き類がある。

丈夫に　結構に　變に　妙に　こんなに　あんなに　どんなに　立派に

○右は總べて情態を表す副詞である。これには、左の語のやうに、「に」を略して用ひるものもある。

遙か（に）　忽ち（に）　すぐ（に）〔即刻〕

○語末に「に」のある情態の副詞は、ナリ活用の形容動詞となるはずであるが、中には、「直ちに」のやうに、例外となるものがある。

又、これ等は、口語では、語末が「で」となり（「靜かで」「斜で」の類）、從つて、「だら」「だつ」「だ」と活用する形容動詞（第七七項の第二條參照）を造るのであるが、やはり「夙に」「直ちに」のやうな例外がある。

二、語末に「と」のあるもの。

そよと吹く　きと睨む　ひらりと　から〱と　につこと　ほの〲と

倉卒と　悄然と　着々と　確乎と　躍如と　得々然と

○これ等も情態を表す副詞であつて、中に漢語から來たものは、タリ活用の形容動詞を造ることは、既に述べた。口語の對話體では、この漢語系統の副詞は、一般に廢れた。

三、その他の副詞。

程度の副詞　いさゝか　いと(ど)　いよ〱　少し　頗る　たゞ　甚だ　最も　やゝ

敍述の副詞　苟くも　必らず　恰も　いかゞ　いかで(か)　など(か)　たとひ　若し

○口語に多く用ひるものでは、尚次のやうなものがある。

程度の副詞　大層　大變　かなり　よほど　ごく(極)

敍述の副詞　是非(とも)　多分　つまり　結局　ちやうど

○以上大體を示したが、形と意義との分類は一致せぬ。從つて、末に「に」があつても、「誠に」「まさに」「あに(豈)」のやうな敍述副詞あり、「殊に」「大きに」のやうな程度を示すものあり、末に「と」があつても、口語の「もつと」「もちつと」のやうな程度を示すあり、「きつと」のやうな敍述に關するものもある。

また、「やがて」「しばし」「しばらく」のやうな情態副詞もある。

○副詞の分類は極めて困難であるが、程度の副詞は、他の副詞をも修飾する能力あるを標準とすれば宜しい。敍述の副詞は既述の通り、敍述が肯定・否定を斷言するものか、疑問・推測、又は假設を表す

ものか、その敍述の姿を規定するものであつて、一方から見れば、その判斷に對する、話手の主觀的態度を表すものと言ひ得る。たとへば、「豈」「たとひ」といへば、必ず「然らんや」「然りとも…」のやうに反語を呼び、假設の語を要求し、また「けだし」「須く」には、「然らん」「然るべし」のやうに、推量・當然の意の敍述が應ずる類である。

右二種以外の副詞は、本書では總べて情態副詞として、敢へて區別をつけないのである。

〇他の品詞に屬する語で、文中に於て副詞のやうに用ひられる語は、頗る多いが、それは第十六章に於て述べる。

〔一三一〕 副詞にも敬意を添へる爲に、「おん」「ご」を冠らせることがある。

天皇は伊勢に行幸しておんみづから神宮に平和の回復を告げ給へり。

殿下は御手づから記念の松を植ゑ給ふ。

若宮樣がたもおんすこやかに渡らせらる。

漢語に「ご」を冠らせたものは、しば〳〵現れる。

御活潑にあらせらる。　御賢明にまします。

御質素におはします。　御快活に談笑せらる。

口語では「お」「ご」を冠らせることが、文語よりも多い

お靜かに　　おついでに　　おかはいさうに

お立派に　　お綺麗に　　お樂(ラク)に

ごゆつくり　　ごもつとも

ご親切に　　ご愉快に　　ご壯健に

又、下に「さま」を添へて副詞に用ひることがある。

おあいにくさまでございます。

ご苦勞さまに、わざ〳〵御出で下さいました。

外に「お待遠さま」「ご退屈さま」「ご親切さま」などもある。又「お粗末さま」「お氣の毒さま」は謙語となる。

第十一章　接續詞

〔一三二〕　前後の文、または語句をつなぎ合せる爲に用ひる語を接續詞といふ（第一二項參照）。

接續詞は、その職能の上から見ると、三種に分類される。

英語並びに數學は、彼の最も得意とする學科なり。

叔父および長兄の家を訪ふ。

史書若しくは科學書を讀む。

夏は海岸に避暑し又は山地に旅行す。

彼は博識にしてしかも見識ある學者なり。

右の接續詞（｜印）は、文の題目内の語と語（第一例）、又は同一の題目についての敍述の部分内において、語と語（第二例以下）を接續して居る。これを第一種の接續詞と假稱する。

花咲き、かつ鳥鳴く。

士に爭友あれば、則ち身令名を離れず。

道は嶮しいが、しかし景色はなか〳〵いゝ。

工場の音もやかましいし、それに近所の子供等の騒ぐのもうるさい。

右の接續詞は、一の題目について敍述するものと、異る題目について敍述するものとを接續する。これを第二種の接續詞と假稱する。

やがて競爭は始れり。しかして我が選手は常に餘裕を示しながら優勝せり。

彼等は久しく努力せり。さればその成績には見るべきものありき。

この海は冬季風浪激し。故に一時船舶の通航を見ざるに至る。

彼も奮鬪せり。されど終に敗れたり。

某は數個國語に通ぜり。但しロシヤ語には精しからざるがごとし。

右の接續詞は、文の首にあつて、形の上に連絡のないその文と前文とを、意味の上で接續してゐる。これを第三種の接續詞と假稱する。

〇接續詞の右の分類は、私案によるものであるが、これは文章篇に入つてからの術語を用ひれば、簡單に說明される。即ち第一種は、同一成分內の語句を接續するもの。第二種は、節と節、節と文を接續するもの。第三種は、形の上に獨立する文と文とを接續するものである。この分類は獨立語の說明の便から

出たものである（第二〇九項参照）。

〔一三三〕　接續詞は、文語と口語との間に、用ひる單語に異同はあるが、文法上の差はない。

○接續詞を、その意義の上から、左の通り四種に分類する人がある。

一、並列・累加を表すもの

　及び　　かつ　　しかも　　しかして　　また　　並に　　尙

○口語では右の外、次のやうな語を多く用ひる。

　それに　　そして　　して　　それから

二、選擇を表すもの。

　若しくは　　又は　　將（ハタ）　　或は

○口語では、「それとも」をも用ひる。

三、順當な結果を示すもの。

　故に　　されば　　然らば　　隨つて　　因つて

○口語では次のやうな語を多く用ひる。括弧した部分を略してもいふ。

（それ）だから　　（それ）ですから　　（そこ・それ）で　　（それ）では

（さう）したら　（さう）すると

四、背反的な結果や制限の意を示すもの。

されど　然れども　然るに　但し　尤も

〇口語では次のやうな語を多く用ひる。括弧した部分を略してもいふ。

けれども　（さう）だけれども　（さう）ですけれども　（さう）だが

（さう）だのに　（それ）でも

〔一三四〕　國語には本來の接續詞なく、すべて他品詞からの轉來である。「ば」「とも」「ども」等は、接續の作用を有するが、これ等は助詞に編入される。

〇右のやうな事實から、國語文法で接續詞といふ一品詞を立てることは、大に考慮すべき問題である。而して普通接續詞として擧げる語でも、たとへば假りに示した前項の分類の第四の「されど」「然れども」「然るに」等を、各一語と見ることには異論があつて、これ等は「さり」「然り」といふ動詞の一用法を示すに過ぎず、一語として取扱ふべきものでないといふ人がある。これ等の點に就いて、深く論ずるは、本書の目的でないから避けるが、異論があるだけ、接續詞として擧げられる語は、人によつて必ずしも一致せぬ事は記憶し置かねばならぬ。

第十二章　助　詞

第一節　助詞の種類

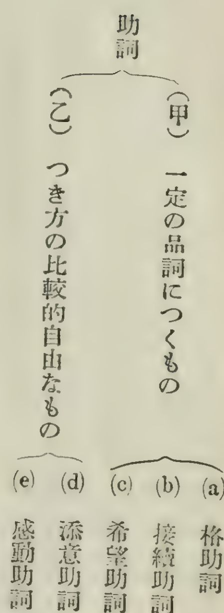
〔一三五〕　助詞は、他の語の下にあつて、その語と他の語との關係を示し、又は一定の意味を添へるものである（第一三項参照）。

助詞は、文語と口語との間に、用ひる語に異同あり、同じ語形のものでも、意義の異るものがある。

○例へば、目的を示す「を」は、文語・口語とも、共通に用ひるが、場處等を示す口語の「で」は、文語には用ひない。

文語禁止の「な…そ」は、口語に用ひぬ。又同じ「さへ」でも、文語と口語では、その意味が異る。

〔一三六〕　助詞を、他語へのつき方と、その職能及び意義の上から、次のやうに分けて見る。



〔一三七〕　格助詞は、主として體言につき、その體言が、他語に對して如何なる關係に立つかを示す助詞である。所屬語は次の通りである。尚、×印は、口語に限るか、主として口語に用ひられる語である。以下同様。

が　の　に　へ　と　より　から　を　にて
×しか　×ほか　×で

○格とは、體言・準體言が、文中に於て他語に對して占める關係（資格）をいふ。

〔一三八〕　接續助詞は、用言・助動詞につき、文と文、または語句と語句とを接續するに用ひる助詞である。所屬語は次の通りである。

ば　と　とも　ど　ども　も　に　を　が　て　で　ものを　ものの

ものから　ものゆゑに　からに　つつ　ながら

×ので　×し　×ても　×けれど（も）　×のに　×ところが　×ところで　×ことを

×て（で）は

〔一三九〕　希望助詞は、用言・助動詞につき、希望や禁止の意を表すに用ひる助詞である。所属語は次の通りである。

ばや　なむ　が　がな

な　な……そ

〔一四〇〕　添意助詞は、種々の語について、それ〴〵一定の意味を添へる助詞である。所属語は、次の通りである。

は　も　ぞ　なむ　こそ　や　か　やは　かは　だに　さへ　すら

まで　など　なんど　のみ　ばかり　やらん

×どころか　×でも　×だけ　×き（ぎ）り　×だけに　×やら

〔一四一〕　感動助詞は、感動の意を表す助詞で、所屬語の主なものは、次の通りである。

も　し　しも　よ　や　な　は　を　か　かな　かも　かし

×なあ　×わい　×ね　×ねえ

○

本書でいふ感動助詞を、いはゆる感動詞の中に包含せしめて、「あゝ」「あはれ」「あら」などと同一視する學者がある。それも一つの見方であるが、本書は採らない。それはこの二者の間に、大なる性質上の相違があるからである。

即ち「あゝ」「あはれ」等は、體言・用言などと同じく、それ自身で一定の意味を表す力を具有するに反して、「よ」「や」「な」等は、その能力なく、他語について始めて一定の意を表すもので、他の一般の助詞や助動詞と同樣である。

これを文中の位置から見ても、感動詞の、文の首にあるを常態とするに反して、感動助詞は、必ず他語の下にあり、從つて用言などに接續する場合の、特別な規定が生ずる。

次に文章論から見ると、感動詞は獨立語と見られるに反して、感動助詞は他の成分、たとへば述部・主部等に包含せられるのである。これ等の諸點から、この二者には類似する點があるにも拘らず、本書では別品詞と見る說を採る。

〔一四二〕　助詞は、用法による語形變化なく、その形は以上のやうに、多くは短小であるが、一文中にあつては微妙なはたらきを有するものゆゑ、次に一通りその意義・用法を説明することにした。但し便宜上、他種のものをも併せ説くこともある。

第二節　格助詞

〔一四三〕　が

これには次のやうな用ひ方がある。

一、用言の主體を表す語につく。

　わが立つる道。

　君が論ずる所。

　日の昇るが遲し。

　人を恨みざるがよきなり。

右の第一・第二例のやうに、述語が連體形になつて居る場合の主語（多くは代名詞）か、又は第三・

第四例のやうに、主部が用言・助動詞の連體形に終る時につくのが普通である。されど次のやうな例も珍しくない。

　つゞく者が無ければこそ兄弟二人は討たれたれとて…。

　信西が姿を變へてや逃ぐらん。

○以上の諸例の「が」の上にある體言・準體言の占めるやうな格を、主格といふ。

○口語では、主格を表す「が」の用法が頗る自由で、殆ど制限がない。

　花が咲いた。　　水がきれいだ。

　これがいゝ。　　君がさう言つたのか。

　私が居ない時。　　鼠が逃げて行つた穴。

但し、主語が用言又は助動詞の連體形で終るものには、「のが」のつくのが普通である。

　君の讀むのが遲過ぎる。

　さう考へるのがいけないのだ。

二、體言と體言との間にあつて、その關係を示す。即ち、上の體言が、下の體言の修飾語であることを表す。

　梅が香　　君が代　　爲義が首

わが國　　汝が弟　　たが袖

○右の例に於ける「が」の上の體言が占めるやうな格を、屬格といふ。

○「が」のこの用ひ方は、口語では廢れた。たゞ成句や、次のやうな用ひ方として、その面影を止めて居るに過ぎない。

今が今まで知らずに居た。

十錢がものはある。

○文語で、「が」の下の體言を略することがある。

此の歌、或人のいはく柿本人麻呂が（歌）なり。

三、口語では、「が」を希望・好惡・喜怒等の感情や、巧拙・能力の對象を表すに用ひることが普通である。

私は水が飲みたい。

この子は大變繪本が好きだ。

われ〳〵は、それが怖しいのです。

佐藤はテニスが上手だ。

あなたは、これが持ち上げられますか。

この場合、往々主語に「に（は）」のつくことがある。

この手紙があの人に書けるものですか。

私にはそれが出來ないのです。

そんなことが君に出來るものか。

○右諸例の「が」の上の體言が占めるやうな格を、目的格といふ。目的格の語につく普通の助詞には、尙「を」（第一四九項の一參照）がある。

○對象を示す語が、用言又は助動詞の連體形に終る時は、「のが」となる。

私は雪の降るのが嬉しい。

あの人は泳ぐのが上手だ。

私はさう言はれるのがつらい。

○右の「が」は、文語でも現れないことはない。

此子を見る度每に、其事が忘れ難く覺ゆるぞや（平家、一一）

御一家の公達の西海の波の上に漂はせ給ふ御事が心苦しく候うて…（同、一〇）

今さら子がかなしく、妻が戀しければとて、いかでか（アナタヲ）見捨て奉るべき（盛衰記、三一）

あれ體の不覺人あれば、なか〳〵軍がせられぬぞ（平治、中）

【一四四】の

これには次のやうな用ひ方がある。

一、主格に立つ語につく。

稲葉そよぎて秋風の吹く。

立寄り給ひて（尾花を）折り給ふに、この女の見ゆ。

入りにし人の音づれもせぬ。

來る人のなき。

右諸例では、用言が文を終止して居るが、連體形で結んだのは、感動的な意を含む。これ等の用法は口語には廢れたが、次のやうに、附屬節の中の主語につく「の」は、文語・口語共通に用ひられる。

讒侫の徒は、忠賢のおのれが上にあるを惡む。

諸大夫の大納言になることは、絶えて久しく候。

われ故母の苦しみを見給ふらんこそ悲しけれ。

弟の買つた本が、こゝにある。（口）

日の暮れるまで遊んだ。（ロ）

二、屬格を表す。

春の雪　庭の梅　かれの鉛筆

この「の」は、左例のやうに、尙いろ〱の語につく。

（副詞に）　たゞの人　暫しの間　若しの事

（副語の語幹に）　まれの細道　さやうの遊び者

（形容詞の語幹に）　あな面白の舞や　あゝ有難の御言

（助詞で終る句に）　昨日よりの雪　公園への道

社長より給仕までの一團　甲と乙との二人

（用言・助動詞の連體形に終る節に）　天に昇るの思　他人を侮辱するの言

成功の上ならでは歸鄕せざるの覺悟

右は何れも上にある語や、文句を體言のやうに見なすのである。尙この用法で重要なのは、左例のやうに、同じ事物に就いていふ語句の間にあつて、その連結をなすものである。

黑き馬の太く逞しき（馬）に乘り……。

長一丈ばかりなる蛇の周一尺ばかりなる（蛇）が橫たはれり。

紅き梅の香ことに高き（梅）を折りて……。

○後に來る體言（括弧で示した馬・蛇・梅の類）を「もの」とすることあり、或は全く略することもある。口語では普通「の」を用ひる。

繪本の面白いのを買つた。

柿の眞赤なのはきれいだ。

これ等は、西洋語で、關係代名詞を用ひて表す言ひ方と、頗るよく似て居る。

○「の」の下の體言を略することがある。

とかくいひて前の守も今の（守）も諸共におりて、今のあるじも前の（主）も手取りかはして……

（土佐日記十二月廿六日）

その帽子は君の（帽子）か。ハイ、これは私の（帽子）でございます。

三、感情・能力等の對象を示す。但し附屬句の中に限る（文語・口語ともにいふ）。

亡き父の戀しき時は……。

今更名殘の惜しきにとて……。

水の飲みたい時（口）　金の欲しい人（口）

蛇のこはい女（口）　菓子の好きな男（口）

漢文の讀めない子供（口）

○文語で「歴史の忽にすべからざるは…」「老人の重んずべきを教ふ」などといふ「の」は、「を」の意である。もと〳〵上にある體言が撥音で終つて居るのについた「を」（たとへば「老人を」「中心を」の類）が、「の」と發音されたに始まるらしい。

四、事柄を並べいふに用ひる。これは口語に限る（格を示すものでないが、序に擧げる）。

茶碗の皿のといろ〳〵買つた。

ペンだの鉛筆だの澤山持つて居る。

次のやうに、體言的に見られる用言にもつく。

行くの行かないのと騒いで居た。

大きいの小さいのとなか〳〵やかましい。

○口語の「の」には、用言又は助動詞の連體形について、それの屬する文句を體言化するものがある。

飛行機の飛ぶのは大變早い。

人の前で叱られるのがつらい。

見たいのをこらへて居る。

もつと長いのが欲しい。

一層のことずつとたかい（高價）のにしようか。

これ等の「の」は、前に擧げた「柹の眞赤なのは…」の｜印の「の」と共に、余は形式名詞（第一六項參照）と見るが、一般には格助詞の中に編入するやうである。然れども一定の格を表すものでないことは、右の諸例で判然する。

〔一四五〕　に

「に」には、いろ〳〵の用法があるが、次には特に注意すべきものだけに就いて述べる。

一、受身・使役に言はれる動作の主を示す。

犬に吠えらる。　弟に買はせたる書。

○「吠える」といふ動作の主は犬であり、「買ふ」ものは弟である。

二、動作の目的を示す。

年賀に行く。　見學に來る。

醫師を迎へに遣す。　教を請ひに參る。

○動詞の連用形についたものは、上を體言に準じたのである。

三、比較の標準を示す。この場合には、下に形容詞の來ることもある。

父に似る。　鳥に劣る。　甲は乙に等し。　收穫高は昨年に同じ。

四、斷定の對象を示す。

人は木石にあらず。　あれは何者に候ふぞ。

兄は軍人にして（してはありての意）弟は醫師なり。

建禮門院……天下の國母にましませば……。

五、事物を配合するに用ひる。

月にむら雲、花に風。

口語では、これが一轉して、事物を一々數へ擧げるに用ひる。

集つたのは、佐藤に齋藤に井上に佐々木に、その外かれこれ十人ばかりでした。

六、同じ動詞を重ねた中に入り、上の動詞を副詞のやうにして、意味を强く表すに用ひる。

揉みに揉んでぞ戰ひける。

親子は死力を盡して漕ぎに漕いだ。

七、敬意を以て主語を表すに用ひる。

皇后宮にはいと物心細く思されて（榮華、鳥邊野）

……とこそ彼の入道殿には仰せらるゝなれ（大鏡、卷三）

そこ（對稱代名詞）にも聞かせ給ひつらん、入道相國餘りに怖しき事をのみ申すと聞きしが……

（平家、六）

○この「に」は、口語でも高貴のかたに對して用ひる。

〔一四六〕　へ

「へ」は「に」と似た所があるが、「に」は動作の歸着點を示し、「へ」は動作の進行する方向、又は歸着する所を漠然と表すに用ひられる。

東の方へ行く。　四國へ遣す。

口語では、尙次のやうに用ひる。

一、場所を示す。

新聞は机の上へ載せて置いた。

ちよつと此處へ御出でなさい。

弟は學校か圖書館かへ行つたはずです。

○文語體でも、口語のやうな用ひ方の現れることがある。

二、動作の對手を表す。

あの本は弟へやつてしまつた。
私へも御手紙を下さいました。
あなたへはまだ申上げなかつたのでせうか。

〔一四七〕　と

「と」の用法を大別すると四になる。

一、指定の意を表す。

東京といふ處。　大臣となる。　年長者を座長とす。

○「と・いふ」を文語では「てふ」といふことあり、口語でもいろ〳〵にいふ。

○指定の「と」で、左例のやうな用ひ方のものは、上にある文を一の體言と見たのである。

失敗の源因はこの點にありと教ふ。
身にその覺えなしと僞る。
戰は頗る激しかりきといふ。
申込の期は既に過ぎたりと報じ來る。
心中に、時こそ來れと思ひて、勇み立つ。

早くその日の來れかしと祈る。

あつぱれ武士よと賞めぬ者こそなかりけれ。

かく言ふは何者ぞと問へば……。

右の「と」は、意義の上では一旦完結し、形の上では獨立したもの（即ち文）についたものである。隨つて「と」の受ける文が、平叙文で、上に係になる語（第廿五章參照）のない時は、「と」の上の用言・助動詞は、必ず終止形であるべきはずである（第一・二・三・四例參照）。

二、動作を共にする對手を示す。

友と語る。　某と約す。

反對者と論爭す。

支那市場に於てヨーロッパ產と競爭す。

三、比較の標準を表す。

これと異り。　實物は豫て聞きしものと同じからず。

汝の言は、昨日述べし所と等しからず。

四、同じ動詞を重ねた中に入り、上の動詞を副詞のやうにして、意味を强く表すに用ひる。

讀みと讀む書。

ありとある人。

生きとし生ける者。

五、事柄を並べいふに用ひる（これは格に關係のない用ひ方であるが、序にこゝに述べる）。

京都と奈良とに遊ぶ。

酒と煙草とを近づけず。

與ふると與へらるゝと、いづれか容易なる。

事の成ると成らざるとは、努力の如何にあり。

右の場合、用言の連體形についたのは、その上を體言のやうに取扱つたのである。また、この「と」は、原則としては、幾つでも並列される語の下毎に添へるのであるが、最後の「と」は略されることがある。但し、次のやうな場合は、意味が不明になるから、省かれない。

羽織と袷の裏地とを買ふ。

羽織と袷との裏地を買ふ。

〔一四八〕　より　から　×よりほか　×よりしか　×よりか　×しか　×ほか

「より」「から」には、次の用法がある。

一、動作の起點を示す。これは文語では「より」を用ひ、口語では「から」を用ひるのが普通である。

朗讀は君より始めよ。

風は正午頃より吹き出しぬ。

會長より賞品を授與せらる。

遠方の友達から手紙が來た（口）。

明日から勉强を始めよう（口）。

そんな事は誰から聞いたのか（口）。

文語でも古くは「から」を用ひた。

明日からは若菜摘まむ。

二、比較の標準を示す。これには文語・口語とも「より」を用ひる。

父母の恩は山より高し。

予は春よりも秋を好む。

一人見んよりは君と共に見ん。

五人よりは多からう（口）。

いつもよりよく出來た（口）。

品が惡くても無いよりましだ（口）。

この「より」は、「ほかに」「ほか」と一緒になり、下に打消の意の語が來て、それに限る意を示す。

神より外に知る者はなし。

泣くより外の事ぞなき。

紙は二枚よりほかない（口）。

にせ物とよりほか思はれない（口）。

○口語では右の「ほか」の代りに、「しか」「か」を用ひることがある。

此處よりしか居る處がない。

直段の高いのよりしか殘つて居ない。

たつた三つよりかない。

これだけよりか殘つてゐません。

此處には三人より居ない。

又この場合、たゞ「より」「しか」「ほか」だけを用ひることがある。

反對するよりしかたがあるまい。

萬年筆は一本しか持つて居ない。

三人分だけしか用意しなかつた。
やすいのしか殘つて居ない。
此處には雜誌ほかありません。
行つて話して見るほかしかたがない。
これは日本にほか出來ない品です。

〔一四九〕　を　をして

「を」には大體二用法あり、文語・口語、共通である。

一、動作の目的物を示す。

枝を折る。　花を見る。

行くを送り、來るを迎ふ。

使役にいふ時には、被役者を表すことがある。

使を急がす。　子を睡らす。

この場合に、文語では、「をして」といふことがある。

部下をして敵將を捕へしむ。

二、動作の行はれる場所を示す。

國を出づ。　　坂を下る。

山を登る。　　空を飛ぶ。

橋を渡る。　　門前を過ぐ。

〔一五〇〕　にて　で　して　とて

「にて」は「に」と「て」と合して一語と見られる助詞である。「で」は、「にて」から出たもので、口語に用ひられる。その用例は次の通りである。

一、指定の意を表す（斷定の對象を表すと言つてもいゝ）。

これは諸國修行の僧にて候。

新中納言知盛卿は、生田の森の大將軍にておはしけるが……。

それは私の鉛筆ではございません、佐藤さんのでございます（口）。

これは地理書である（ない）（口）。

○次の「にて」「で」も指定の意のものであるが、共に「であつて」の意味を表し、文語の「なり」、口語の「だ」を中止に用ひたかのやうに思はれる。それが爲に往々助動詞の一活用形（連用形）と誤

られる。

正成は忠臣にて、尊氏は逆賊なり。

これは國産品で、直段もやすい。

二、場所を表す。

兩軍大に關原にて戰ふ。

發明品を東京にて賣出す。

此處で待つて居ませう（口）。

圖書館で勉强した（口）。

三、手段材料等を表す。

萬年筆にて書く。

自動車にて鎌倉に遊ぶ。

ビールは大麥でつくる（口）。

繩でつないだ（口）。

四、原因・緣由を示す。

チブスにてたふる。

自らの實力のみにて成功せり。

それで大變迷惑した（口）。

親戚の事で忙しい（口）。

○口語では、この「で」に、用言を體言化する「の」（第一四四項、第四條の終參照）をつけて、一語のやうに用ひるが、これは接續助詞として別に述べる（第一五一項の三參照）。

○以上に述べた「に」「と」「へ」「より」「から」「で」等の上にある體言の占めるやうな格を、補格といふ。また、この補格には、前に述べた目的格をも含めていふことがある。

○

「して」は、動詞「す」の連用形と、助詞「て」と合して、一語のやうに見られるものである。

飯粒（イヒボ）して鯛釣る。

人して言はしむ。

義經をして義仲を討たしむ。

さびしき野原を一人して行く。

これ等のしては、「以て」「にて」などの意。

峯高くして谷深し。

巧にして速かなり。

愚昧にして遲鈍なり。

水洋々として波悠々たり。

行く川の流は絶えずして、而も元の水にあらず。

都にして遇ひける人。

などは、「ありて」の意である。

○これと關聯して注意すべきは、語末に「に」「と」のある副詞と、體言に助詞「に」「と」のついたものとの區別である。

明かにして疑ふべからず。

閑靜にして讀書に適す。

渺茫として際涯なし。

即ち、これ等に於いては、「明かに」「閑靜に」「渺茫と」が、一單語（副詞）で、それに「して」がついたのである。併しながら、

形は人にして心は鬼なり。

子として親を敬愛せざる者なし。

等に於ては、助詞「に」「と」に「して」がついたのである。

○「して」は、口語でも、次のやうに用ひるが、「高くして」「明かにして」「人にして」の類は、一般に廢れた。

　二人して運んだ。

　五月ばかりして直つた。

　それからしてこんな事になつた。

○

「とて」は、間に「思ひ」「言ひ」などを省いたものである。

　花見にとて出で立つ。

　敎を受けんとて師の門をたゝく。

　さらばとて出で立つ。

　また見んとて互に別る。

この「て」を略して、「と」とのみ言ふことがある。

　夏は暑しとなげき、冬は寒しとかこつ。

　今はこれまでなりと合掌稱念して、身を海中に投ず。

○口語でも、「とて」の用法は大體同樣であるが、又これを、文語「とも」「ども」の意に用ひることがある（下に「も」のつく場合もある）。

少しぐらゐつらいとてかまはない。

やすく買へばとて粗末にしてはいけない。

一日とてもうつかりはして居られない。

僕とても何ともしやうがない。

尚、前二例は、接續助詞と見られるが、便宜上一括して示す。

○

以上の外、文語だけに用ひるものに「つ」がある。兩體言の關係を示すもので、「梅が枝」「秋の月」の「が」「の」と同じやうに用ひられる。

天つ神　國つ社　外つ國　時つ風　先つ頃　夕つ方　末つ方

第三節　接續助詞

〔一五一〕　ば　と　ので　から　し　からに　や　か

「ば」には次のやうな用法がある。

一、用言又は助動詞の未然形について、事實でないこと、不明なことを假定するに用ひる。

　われ若し飛行家ならば、一氣に太平洋を飛ばんものを。

　價やすくば、買はん。

又これは、未來の或場合を豫想するに用ひる。

　夜明けば、直ちに出發せよ。

　三月に至らば、更に暖かならん。

「ば」が、形容詞・助動詞「ず」、及び形容詞型助動詞につく時は、發音の便宜から、左例のやうに間に「ん」の入ることがある。

　君の言にして正しくんば、誰か從はざるべき。

　汝速かに去らずんば、禍忽ち至らん。

　若し然るべくんば、我また何をか言はんや。

○文語の「ば」の右のやうな用ひ方に對して、口語では、「なら（ば）」「たら（ば）」「……と」及び假定形に「ば」のついたものを用ひる。

飛行家なら（ば）　飛行家だつたら（ば）　飛行家だと
やすいなら（ば）　やすかつたら（ば）
やすいと　　　　　やすければ
明けたら（ば）　　明けると
明ければ

この際、「飛行家なれば」「安いなれば」「安かつたれば」は用ひない。又「夜が明けたら」のやうに、事實の假定でなくて、單に未來の或場合を述べる（事實としては必然的に決定して居ること）には、「明けるなら（ば）」のやうな言方はしない。

尙、一例を言ふと、來客のあるに確定して居る場合に、家人に向つて「客が見えたら……」とは言ふが、「客が見えるなら……」とは言はない。

尙、對話體では、右に示した諸例の、括弧で印した「ば」は、略するのが常である。

二、用言又は助動詞の已然形について、一種の假定を表すが、條件の成否を念頭に置かず、直ちにその成立した場合に考を持つて行つて、一般的眞理を述べるに用ひる。

國に諫むる臣あれば、その國必ず安く、家に諫むる子あれば、その家必ず正し。
水はせかるれば、却つて激す。

何人も心美しければ、人に賞めらる。

これが特殊な事物に就いて言へば、その特性・習慣を表す。

繼信は……酒に醉ひぬれば、少し口荒なる者なり（平治、下）

この馬は、騎れば、直ちに疾驅す。

○口語では右のやうな場合に、假定形に助詞「ば」をつけ、或は終止形に「と」をつける。

吹けば。　吹くと。

醉へば。　醉ふと。

騎れば。　騎ると。

美しければ。　美しいと。

三、事實を述べる用言（助動詞）の已然形について、それの屬する文句が、下に述べる事件の理由・源因を表すに用ひられるもの。

今日は雨降れば、遠足を中止す。

この水は清ければ、むすびて飲まん。

友は勉强家なれば、必ず成功せん。

○右のやうな場合に、文語で「からに」を用ひることあり、口語では「ので」「から」などを用ひるの

が普通である。

浮きて行く紅葉の色の濃きからに川さへ深く見えわたるかな。

様をこそ替へ給はんからに心さへつれなくなり給ひける恨しさよ。

又これは、一般的な事實についていふことがある。

吹くからに野べの草木のしをるればうべ山風を嵐といふらん。

口語の例は次の通りである。

まだ早いので人が集りません。

人が穩かなのでみんなが善くいふ。

雨が降るのでやめにした。

水がきれいだから飲まう。

見たいから見るのだ。

口語では尙、假定（已然）形に「ばこそ」をつけて右のやうな意に用ひることとあるは、旣にしばしば述べた通りである。

辛抱すればこそ今日の樣になれたのだ。

やさしければこそ私にも出來たのです。

海が穩かなればこそ元氣で來られたのだ。

讀んだればこそわかつたやうな次第です。

四、事實を述べる用言・活用連語の已然形について、下にある事件の起つた場合、又は氣のついた場合を示す。

見渡せば、花も紅葉もなかりけり。

ふと目さめたれば、時計は十二時に報ぜり。

夜明くれば、すなはち出發す。

○口語では、この際次のやうにいふ。

見渡すと。　見渡したら（ば）。

目がさめると。　目がさめたら（ば）。

夜が明けると。　夜があけたら（ば）。

下に述べることが意外な事件である場合には、假定（已然）形に「ば」をつけたのも用ひる。

用が濟んだといふから歸つて來れば、又呼びに來た。

持つといふから持たせれば、直ぐ重いといひ出した。

○口語では、この形を事柄の並列にも用ひる。

雨も降れば、風も吹く。

品もよければ、價も高い。

行つても見たければ、大儀でもある。

叱られもすれば、賞められもした。

○口語では、右のやうな事柄の並列に「し」をも用ひる。

雨も降るし、風も吹く。

品もいゝし、價も高い。

右のやうに「し」は終止形につく。

○文語では尙、連體形に「や」「か」をつけて、その場合を表す言ひ方がある。

尊氏の再び上洛するや、義貞は之を途に迎へ撃たんと請ふ。

彼若し敗れんか、天下の形勢は豫測すべからざるに至らん。

右のやうに、これは既定にも未定にもいふ。

〔一五二〕　とも　と　も　でも　が

「とも」には二つの用法がある。

一、動詞の終止形・形容詞の連用形について（助動詞はこれに準ずる）事實を假定し、それに應ずる事件は、その拘束を受けない意を表す。

如何に勉むとも、成功すまじ。

讀み難くとも、中止するなかれ。

人に笑はるとも、われは忍ばん。

右のやうな場合に、古くは「と」、近世以後には連體形に「も」をつけていふことがある。

紛にかくと、筆も及ばじ。

人は見ると、われは見じ。

如何に勉むるも、成功すまじ。

讀み難くも、中止するなかれ。

○右のやうな場合に、口語では次のやうにいふ。

A　連用形に「ても」をつける。

どんなに勉強しても……。

讀みにくくても……。

人に笑はれても……。

B　動詞の終止形・形容詞の連用形に（助動詞はこれに準ずる）、「とも」をつける。

何處へ行くとも隨意だ。

待たれるとも待つ身になるな。

早くとも三時前には出來上るまい。

助動詞「う」「よう」「まい」にもつく。この時は「と」ともなる。

何うならうとも（と）かまはぬ。

寢ようとも（と）起きようとも（と）、心通りにして置く。

行かうとも（と）行くまいとも（と）、ほつて置く。

C　「う」「よう」「まい」等に「が」をつける。

誰が何と言はうが、氣にかけない。

勉强しようが、なまけようが、全く干渉しまい。

勉めようが、勉めまいが、頓着しない。

二、事實を讓歩的に認めて、それに拘束されない意味を表すに用ひる。用言へのつき方は前のと同じ、

兵衞の佐殿は、今こそ流人にておはすとも、末賴もしき人なり（平家、一二）

某は手腕家なりとも、この難事件の解決は容易ならざるべし。

競爭者は此の如く多くとも、某は必ず優勝すべし。

これ等は事實の假定を表すものではない。今、第一例に就いていへば、兵衛佐賴朝の流人たる事は、否定すべからざる事實である。然れども、後件にいふ「末賴もしき人なり」の方から見ると、その事實の拘束を受けて居ないから、兵衛佐は流人でない場合と同樣である。換言すれば、前件にいふ流人たる事實は、後件に對して、事實たる效力を有しないのである。すると、事實そのものが、假定の事實のやうに考へられる。この心理が反映して、「流人にておはすとも」と、假定の形にしたものと思ふ。この言方は、後件を特に強く重い意味に考へる時に現れる。平家物語卷十一に、二位の尼が、

われは女なりとも、敵の手にはかゝるまじ。

と言つて居られるのは、この用法を最もよく表して居ると思ふ。

〇口語の言ひ方は、前條と同樣である。

〔一五三〕　ど　ども　けれども　ても　も

「ど」「ども」には二つの用ひ方がある。

一、事實を述べる用言の已然形について、それに應ずる事件は、その拘束を受けない意を表す。

勉むれど（ども）成功せざりき。

讀み難けれど（ども）、中止せじ。

人に笑はるれど（ども）少しも關心せず。

○口語では、「ど」「ども」を用ひない。右のやうな場合には、助詞「けれど（も）」を終止形につけて表す。

勉强するけれど（も）　讀みにくいけれど（も）　笑はれるけれど（も）

又「ても」を用ひることがある。

あんなに賞められても嬉しくないのか。

そんなによく出來ても氣に入らないのか。

二、一般的な場合を假定して、普遍的な眞理を述べるに用ひる。後件が前件に拘束されないことは、前條と同樣である。

心こゝにあらざれば視れども見えず、聽けども聞えず。

才ある人は賤しけれどもやんごとなき人に交り、愚なる人は貴けれども賤の女にいやしまる。

日頃いかなる高名候へども最後に不覺しぬれば、長ききずにて候ふなり。（平家、九）

○口語では、この際通例「ても」を用ひる。

○文語體でも、近古以後では、「ども」を用ひる所に「も」を用ひることがある。

矢は當らざりしも痛手は負ひぬ。

〔一五四〕　が　に　を　ものを　ものゝ　ものから　ものゆゑに　のに×　ところが×　ところで×　ことを×

「が」「に」「を」は、事實を述べる用言・助動詞の連體形について、それの屬する文句と、下にある文句とを接續するに用ひるが、二つの場合がある。

一、前後の意味の背反するもの。

雪は降りしが、さまで寒からざりき。

しばしば忠告したりけるが、聽かざりき。

日暮れかゝるに、宿るべき家なし。

固く約束せるに、未だ來らず。

かくまでとは思はざりしを、さても降つたる雪かな。

○右のやうな場合に、口語では「が」「のに」「ところが」「ところで」「ことを」を用ひる。（尚、前項の「ど」「ども」とも關聯して考へるべきである）。

勉強はするが、さつぱり出來ない。

さう言はれるのは嬉しいが、今直ぐ應ずる譯には行かぬ。

人が笑つて居るのに、本人は平氣だ。
こんなに暑いのに、何とも思はないらしい。
行つて見たところが、誰も居なかつた。
わざ〳〵訪ねたところが、逢へなかつた。
今から心配したところで、しかたがない。
後からそんなことを言つたところで、間に合はない。
しようと思へば出來ることを、する氣がないから困る。

右の「のに」以下は、本書にいふ形式名詞に助詞のついたものであるが、便宜上それ等を各一の助詞と見て差支がなからうと思ふ。

〇背反の意で、成立の上でも右の諸語と同様なものに、尙「ものを」「ものゝ」「ものから」「ものゆゑに」がある。そのうち、「ものを」「ものゝ」は、口語にも用ひる。

都出でゝ君に逢はんと來しものを、來しかひもなく別れぬるかな。
なく聲も聞えぬものゝ悲しきは忍びに燃ゆる螢なりけり。
待つ人にあらぬものから初雁の今朝鳴く聲のめづらしきかな。
女房は、叶はざらんものゆゑに、猶も唯宰相の申されよかしとぞ歎かれける。

あんなにいやがつて居るものを、やめさせようともしない（口）。

早くしてしまへばいゝものを、遊んでばかり居る（口）。

引受けては見たものゝ、なか〳〵容易なことではない（口）。

○「ものを」は又、餘情を含めていふ感動助詞ともなる。

わが子の緣にむすぼほれざらんには、是程まで心を碎かじものを。

あつぱれ味方に鐵漿つけたる者はなきものを。

二、背反的意味を有せずに、前後を接續するに用ひるもの。

父は昨日出發せるが、既に目的地に達せしならん。

あれは手越の長者が娘…此二三年被召仕けるが、名をば千手前と申候。

あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。

村上彥四郎義光…急ぎけるに、芋瀨庄司はしなく道にて行きあひぬ。

中將…いと無興にておはしけるを、狩野介申けるは……。

○右のやうな場合に、口語では「が」「ところが」などいふ。尙これは「ば」（一五一項）とも關聯して見るべきである。

これは見事な花だが、何といふ花だらう。

私も見た事がありますが、なか〳〵面白い芝居です。
よく聞いて見たところが、隨分こみ入つた事件です。
やかましく催促したところが、案外早く出來ましたよ。

〇

以上に述べた「が」「に」「を」は、格助詞から出たものだと言はれるが、その何れと解すべきか紛れ易いものが少くない。

されど次のやうなのは、明かに格助詞と見るべきである。

薩摩守忠度は……「黑き馬の太うたくましき」に沃懸地の鞍置いて乘給へり（平家、五）

卽ち「　」で示したのは一體言と見なすべきもので（第一四四項第二條參照）、それについた「に」である。このやうな用ひ方は、頗る多い。

束帶正しき上﨟達數多おはして議定のやうなる事ありしに、「末座なる人の平家の方人すると覺しき」を其中より追立てらるゝが……（平家、五）

其後「座上に氣高げなる宿老のましましける」が、此日來平家の預りたる節刀をば……と仰せられければ、「其御傍に猶宿老のましましける」が、其後はわが孫にもたび候へと被仰（同）

右のやうな一體言と見なすべきものが、頗る長く現れることがある。

太政入道は……「先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて嚴島大明神より現に賜られたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりし」を脇挾み……（平家、二）

尚、これ等については、第二十三章に於いて、更に述べる。

〔一五五〕　て（で）　て（で）は

「て」は、完了の助動詞「つ」の連用形が、便宜上、助詞として取り扱はれるものであつて、用言・助動詞の連用形につき、その際「で」となることとあるは、既に音便の條で述べた通りである。

その用法を見ると、次の如く、甲・乙、二つに分れる。

（甲）用言の連用形を文の中止に用ひた形になるもの。

（乙）二動詞の間にあつて、これを一語のやうに結合させるもの。

そのうち（甲）は、更に、い・ろ・は・にの四種に分れる。

（い）事柄を並べいふ時に、その間に置く。

或人縣の四年五年（任期）果てて、例の事ども皆し終へて、解由などとりて、住む館より出でて舟に乘るべき處へわたる。

春過ぎて、夏來る。

友を訪うて、用件を濟す。

舊都は既に荒れて、新都は未だ成らず。

右の「て」は時間的に先後を示すが、次の諸例は、單なる並列である。

進むを知つて、退くを知らず。

日は短くて、夜は長し。

○右の用ひ方は、口語も同樣である。

(ろ)上の事柄が、下の事柄の源因となる意を示す。

山は崩れて谷を埋め、土裂けて水湧き上り、巖われて谷にまろび入る。

橋落ちて彼岸に渡るべからず。

北風烈しく吹きて寒氣甚し。

○この用ひ方は、口語でも變りがない。口語では、この「て」に「は」をつけたものを、その場合をいふに用ひる。

そんなに食べては身體に毒ですよ。

あまりむづかしくては讀めない。

そんなに騷いではいけません。

(は)上下の背反する意を表す。

　親に別れて悲しからざる人やある。

　事情を熟知して言はず。

　自ら計畫して、後にはその責任を逃んとす。

○右は口語でも普通であるが、この「て」に「も」のついたのが、「とも」「ども」の意の「ても」(一五二項)である。

(に)動詞と共に副詞的に用ひられる。

　急ぎて賊を追ふ。　極めて困難なり。　至りて嶮し。

○口語では、音便でいふのが普通である。

(乙)は、二動詞を合成させるつなぎになるもので、時の上から云へば、同時の事柄を續けいふ事になる。この用ひ方は、主として口語に行はれる。

　誰か立つてゐる様だ。

　子供等が騒いで來る。

　寒くなつて來た。

　使に持たせてよこした。

車に乘せられて行く。
見て下さる。
讀んであげる。

〔一五六〕　で

「で」は、助動詞の「ず」と、前項の「て」と合して、一語となつたもので、意味の上では、打消して、上下を接續するに用ひる。

嵐も吹かで秋も過ぎぬ。
もの言はでうち伏しぬ。

○口語では右の「で」を用ひず、次のやうにいふ。

何も知らないで…。　　何も知らずに…。
何も知らぬ（ん）で…。　　何も知らなくて…。

〔一五七〕　つつ　　ながら

「つつ」は、助動詞の「つ」を繰返した語であつて、用言・助動詞の連用形につき、動作を繰り返す意。

又は兩事を同時にするに用ひる。

　雨岸の風景を眺めつゝ進む。

　直衣の袖を絞りつゝ諫め申す。

　花を見つゝ時の至るを待つ。

〇口語では、講演體で、

　讀みつゝある。　　泣きつゝある。

など用ひ、又次のやうに、上下の背反する意のものは、對話體でも用ひる。

　何もかも知りつゝ知らん顏して居る。

　寒いといひつゝ薄着して居る。

〇

「ながら」は動詞・助動詞の連用形について、兩事を同時にする意に用ひる。

　書を讀みながら歩む。

　泣きながら語る。

又、次のやうに、上下背反する事をいふに用ひる。

　心に思ひながら口に出さず。

知りながら答へず。

〇「ながら」は、口語でも大體同樣に用ひるが、背反の意のものは、準體言にもつく。

店は小さいながら、なか〳〵繁昌する。

弟は何もわからないながら、皆と一緒に笑つて居る。

但しこの「ながら」は、如何なる用言にもつくと限らず、極めて局限されてゐる。

〇因に、「ながら」は又體言について、「そのまゝ」の意を表すに用ひることがある。添意助詞の部で說くべきであるが、便宜上こゝに附說する。

露ながら折りてかざさん菊の花。

梨を皮ながらたべた（口）。

兄弟は三人ながら秀才だ（口）。

これは又、體言・準體言について、「なれども」の意を表すことがある。

冬ながら空より花の散り來るは…。

子ながらも內には五戒を保つて…禮義を正しうし給ふ人なれば……。

女ながら男以上にはたらく（口）。

しらうとながら專門家の氣づかぬ事をいふ（口）。

第四節　希望助詞

〔一五八〕　ばや　なむ

「ばや」「なむ」は、動詞・動詞型助動詞の未然形について、希望の意を表す。

便あらば彼の島へも渡らばやと思ひ……。

いかにもして是を頼まばやと思ひ……。

ともに故郷に歸らなむ。

苔の衣をわれに貸さなむ。

小倉山峰のもみぢ葉心あらば今一たびのみゆき待たなむ。

「ばや」は率直に希望を表すこともあるが、多くの場合は、自己の心中に欲して、折もあらば實現したいと思ふことを述べるに用ひる。從つて、用例によつては、助動詞「む」を置き換へても、殆ど差のないやうなことがある。

人手にかゝらんよりは、自害せばやと思はれけるが……。

「ばや」が自己について述べるに對して、「なむ」は、他に對してあつらへ望む意を表す。これは又發音に從つて、「なん」とも書く。

○「ばや」「なむ」は、口語には用ひない。

〔一五九〕　が　がな

「が」「がな」は、強い意味の希望を表す助詞で、過去の助動詞「き」の連體形につく。

甲斐が嶺をさやにも見しが。

伊勢の海に遊ぶ海士ともなりにしが。

いかで此かぐや姫を得てしがな、見てしがなと音に聞きて愛で惑ふ。

右のやうに「し」の上に、完了助動詞「ぬ」「つ」の連用形もつく。而して、これ等は時の意を失つて、「しが」「にしが」「てしがな」が、一語のやうになつたのである。

次に「が」「がな」は、助詞「も」について、一語のやうになつて現れる。

老いず死なずの藥もが。

昔を今になすよしもがな。

これなくもがな。

○右の諸語は、口語には用ひない。但し「がな」に、次のやうに事を漠然といふに用ひるものがある。恐らく、右の「がな」の遷つたものであらうと思はれるが、これは口語にもまれに現れる。

誠には、各の心をがな引かんとてこそ申したれ（平家、七）

何がな取らせんと思へども……（宇治拾遺、九）

その事でがなあらう（口）。

芝居にがな行かう（口）。

〔一六〇〕 な　な…そ

「な」「な…そ」は、禁止の意を表す。

軒端の梅よ、春を忘るな。

見にくきふるまひして敵に笑はるな。

我に音な聞かせそ。

人にな語りそ。

右のやうに「な」は、動詞・動詞型助動詞の終止形につくが、ラ變の動詞には、「あるな」「をるな」のやうに、連體形につく。

「な…そ」の「そ」の上には、連用形の來るのが原則であるが、カ變・サ變の動詞は、左例のやうに、未然形である。

なこ（來）そ　　なせ（爲）そ

又この「な」は、連續する動詞の間に入ることがある。

紅葉を吹きな散らしそ山おろしの風

○口語では「な…そ」が廢れ、「な」が終止形につく。

讀むな　　起きるな　　捨てるな　　く（來）るな　　我慢するな

第五節　添意助詞

〔一六一〕　は

「は」は、他と區別して、その事物を取り立てゝいふに用ひる。

柳は綠にして花は紅なり。

嶺には松風の音淸し。

　彼を天才とは思はず。
　暫くは物もいはず。
　茶は好めども酒は近づけず。

助詞「を」の下にあるものは「ば」となる。

　茶をば好めども酒をば近づけず。

口語でも大體同様に用ひるが、次の「は」は、動詞・助動詞の連用形について、動作を勢強くいふに用ひたのである。

　風は吹きはしない。
　呼ばれはしたが、叱られはしない。
　讀みは讀んだが、よくわからなかつた。

〔一六二〕　も

「も」には次のやうな用ひ方がある。

一、同様の事物のうちの一を擧げていふ意を表す。
　われも行かん。

富士山にも登りたり。
古き版畫をも集む。

二、事物を並べいふに用ひる。
見渡せば花も紅葉もなかりけり。
小兒も行き、老人も行く。
嬉しくもなく、悲しくもなし。

○右の用ひ方は、口語でも大體同様である。

〔一六三〕　ぞ　なむ（ん）

「ぞ」「なむ」は、意味を强めていふに用ひる。
枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。
富士の高嶺を軒端にぞ見る。
いと恐しくぞ覺え侍りし。
貌よりは心なむまさりたりける。
生田の森となむ申す。

その初を思へば、かゝるべくなむあらぬ。△

「ぞ」「なむ」が文中にある時は、結びの用言・助動詞は、連體形で現れる。それは右の諸例の中、△印の語で明かである。その他の語も形の上には現れて居ないが、連體形である。（尙、これに就いては、第二十五章に詳說する）。

「ぞ」「なむ」の次に來る用言を略することがある。

常世は喜に滿ちて御前を退きけりとぞ（いふ）。

そはいと嬉しきことになむ（ある）。

「ぞ」は又用言・助動詞の連體形について、文の終にあることがある。この際體言についたものは、指定の助動詞「なる」のついたものと同樣である。

汝は何處に行かんとするぞ。

予は汝を見知れるぞ。

世の中ははかなきもの（ナル）ぞ。

此の陣の大將は誰人（ナル）ぞ。名のられ候へ。

○「ぞ」は、動詞と動詞との間に入ることがある。

忍び音に泣きぞあはれける。

遙の島へも移しぞ遣り參らせんずらん。

○「なむ」は、散文に多く用ひるが、現代文には廢れた。これを發音に從つて「なん」とも書く。

○口語では「なむ」を用ひない。「ぞ」も文中に現れるものは、

これぞといふ事件もなかつた。

何ぞ持つて參りませうか。

のやうに代名詞について、慣用的に用ひられるだけで、多くは次の例のやうに、文の終に來る。

僕も行くぞ。

そんな事をすると叱られるぞ。

道は隨分惡いぞ。

〔一六四〕　こそ

「こそ」は事物を取り立てゝ、意味を强めていふに用ひる。

人を恨みぬこそよき事には候へ。

彼こそ男の中の男なれ。

死なば一所にこそともかくもならめ。

「こそ」が文中にある時は、文の終の用言・助動詞は已然形で現れる（第二十五章參照）。

「こそ」の次に來る用言を略することがある。

いと悲しき事にこそ（あれ）。

「こそ」はまた次の例のやうに、それの屬する文句全體が、「……だけれども」の意で、下の文句にかゝることがある。

法勝寺とも執行とも知つたらばこそ返事はせめ、只頭をふりて知らぬといふ。

遲速もこそありけれ、皆往生の素懷を遂げけるとぞ聞えし。

〇口語にも「こそ」を用ひるが、文の結びには關係がない。

私こそ失禮致しました。

それでこそ男だ。

今度こそうまくやらう。

叱られこそしないが、ひどく小言を言はれた。

ようこそいらつしやいました。

〔一六五〕　や　か　やは　かは

「や」「か」には、大體三つの用ひ方がある。

一、問や疑を表す。

有りや、なしや。　　有りきや、なかりきや。

あるか、なきか。　　ありしか、なかりしか。

右のやうに、用言や助動詞を承ける時は、「や」は終止形、「か」は連體形につくのが原則であるが、現代文では、「や」を連體形につけても用ひる。

若し十二三の兒（チゴ）や通りつる。

何事をか仰せらるる。

右のやうに「や」「か」が文中にあつて、その文を用言・助動詞で結ぶには、連體形を用ひる規定である（第二十五章參照）。

誰にか問はん。

幾何なるか。

右のやうに、上に疑問の語のある時に、疑問の助詞を用ひようとすれば、「か」とするのが規定であるが、現代文では「や」をも用ひる。

二、反語に用ひる。

その時悔ゆともかひあらんや。

いづれの時にか忘るべき。

これには助詞「は」のつくことがある。

師高などは、ことの數にてやはあるべき。

徒らに歎かんやは。

折に觸れば何事かはあはれならざらん。

二度來べき春かは。

三、「や」は事物を並列していふに用ひる（文語・口語共通）。

若し東國に謫居せば、津輕や蝦夷の奥までも、遠路を凌ぎて駒に鞭をも打ちてまし。

今朝八幡へ參りつるも、判官や子どもの爲ぞかし。

あれやこれやで、大變忙しい（口）。

弟や妹をつれて、花見に出かけた（口）。

「か」も並列に用ひるが、「その中の何れかである」の意に言ふ。

この御年ぞかし、村上か朱雀院か生れおはしましたる御百日のもちひを……。

母か乳母か懐きて山林に逃げ隱れたらんはいかにせん……。

父か母かが参るはずです(口)。
あれかこれかと迷つて居ます(口)。
降るか降らないかは、まだわからない(口)。
今月の末か來月の初には出來上る豫定だ(口)。

〔一六六〕　だに　　すら　　さへ　　どころか

いろはだに知らず。
俗務多忙にして新聞を讀む暇だになし。
聖賢すら道を以てすれば欺くを得べし。
太平の世にすらかく淺ましき事あり。

右のやうに、「だに」「すら」は、一例を擧げて、他を類推させるに用ひる。「だに」は、最少限を表して、「最も程度の低いいろはさへも」のやうな意を表し。「すら」は、「聖賢でも、やつぱり……」と確かに認められる事に就いて述べて、他を類推させるに用ひる。併し、この二つは同意義に用ひることが少くない。たとへば、

糟糠にだに飽くこと能はず、まして美食をや。

己が國の事をだにえ知らぬ儒者の、いかで人の國の事をば知るべき。

等の「だに」は、「すら」と置き換へ得る類である。但し、「すら」は、確定した事に就いて述べる語であるから、次のやうな假定を表す文には用ひない。

實力だにあらば　　弓矢だに持たば

新聞だに讀み得ば

○「だに」に「も」をつけて「だにも」となつたものが、更に「だも」ともなる。

男はこれ侯にだも封ぜられず、女は妃たり（平家、六）。

「さへ」は、更に加はる意に用ひる。

雨烈しきに風さへ吹き出でぬ。

たゞ一人の兄にさへ逝かれたり。

傳來の家寶をさへ失ひたり。

○口語では「だに」を用ひない。「すら」も全く現れないではないが、多く用ひるのは、「さへ」であつて、次のやうな用法がある。

一、一事を擧げて他を類推させる（文語の「だに」「すら」に相當する）。體言につくものは「でさへ」ともいふ。

水さへ喉に通らなくなつた。

汽車に乗つてさへ酔ふ人だ。

局外者の私でさへ腹が立つ。

二、假定の文で、それと限つて、他を顧みぬ意を表すに用ひる（文語の「だに」に相當する）。

それさへ手に入れば大滿足です。

やらうとさへ思へば何時でもやれる。

佐藤さへ承知してくれゝば、ほかは何うでもいゝのだがな。

三、そひ加はる意を表す（文語の「さへ」と同様な用ひ方である）。

たつた一人の子にさへ別れた。

お前さへそんな事をいふのか。

買物に出るのさへおつくふになつた。

右の口語の「さへ」に「も」がついて、「さへも」と言つても意味に變りはない。

〇口語では、輕いものを擧げて、尙重いものゝあるを示すに、「どころか」を用ひることがある。

三日どころか、十日もかゝつた。

冷たいどころか、まるで氷のやうだ。

「どころ」に「の」がついて、下の體言を修飾する用ひ方もある。

行くどころの話でない。

〔一六七〕　まで

「まで」は、動作・事情の至り及ぶ點を示す。

あやしの法師ばらまで喜びあへり。

應募者は滿二十歳までのものに限る。

後の世まで名を殘す。

友を國境まで見送る。

昨夜おそくまで語り合ひたり。

淺ましきまで大人びさせ給ひて……。

「まで」は又「より」と共に用ひて、一體言の資格の句をつくる。

「一番地より十番地まで」は第一區なり。

「東京より大阪まで」の里程は幾何なるか。

「三月より五月まで」を春の季節とす。

○「まで」は從來格助詞に數へられたが、本書は山田博士の說に從つて、格助詞から除いた。一定の格を表さぬことは。右の諸例で明かである。

○口語の「まで」は大體文語のと同樣であるが、口語では尙、文語の「さへ」（添ひ加はる意） のやうにも用ひる。

骨までしやぶる。

子供にまで笑はれた。

英語はおろか、ホルトガル語まで出來る。

口語では又、動作・事物をそれと限る意に用ひることがある。

高ければ買はないまでのことだ。

いやと言ふなら、それまでだ。

〔一六八〕　など　　なんど　　でも

「など」は「なにと」から出たと言はれ、「なんど」ともなつて現れる。その種類のうちの事物を例示するに用ひる。

酒などを近づけず。

路傍の人などに聞きて……。

桃・櫻など一時に開く。

繪をかき書を讀みなどして日を過す。

右のやうに、その事物と限らずに表すから、明かに指さずに大概に言ふと解することも出來る。これは引用の際などに殊によくわかる。

「酒煙草は衞生上害あり」などいふ。

「わが事既に終れるか」など思ふ。

○「など」は口語でも普通に用ひる。そのうち、左例のやうに「といふ」、又はそれに似た意味の語のついたものは、特に、大概に指す意のものと解される。

學生などいふものは、そんな事はしないはずだ。

昔の道などいふものは、隨分狹かつたものだ。

何も知らないなど言つてすまして居る。

「などといふ」を「なんて」といふことがある。尙「など」は、

桃や櫻などが咲いて居る。

見たり聞いたりなどした。

のやうに、「や」「たり」と一緒に用ひることが多い。

）口語では、大概に指すのに「でも」を用ひることがある。

お茶でもあげませうか。

机の上にでも置いて下さい。

ペンででも書ける。

〔一六九〕　のみ　ばかり　×だけ　×き（ぎ）り　×く（ぐ）らゐ　×だけに

「のみ」「ばかり」は、それと限る意を表す。

彼のみはさまで喜ばず。

たゞ要綱を述べしのみなり。

姿ばかりは人なれど、心は禽獣に近し。

たゞ思ふばかりにて如何ともし難し。

「ばかり」は又、程度を表すに用ひることがある。

長一丈ばかり、周一尺ばかりの大蛇。

氣も狂はんばかり悲しみぬ。

「のみ」は口語には用ひず、「ばかり」の口語においての用ひ方は、文語のと同様である。

○口語では、それと限る意を示すのに、「だけ」「き（ぎ）り」を用ひることがある。

あの方だけが知つて居る。

あなたにだけお話致します。

殘つてゐるのはこれきりだ。

先月見たぎりで、あとは知らない。

○口語では又、程度を示すのに、「だけ」「く（ぐ）らゐ」を用ひることがある。

これだけあれば間に合ふだらう。

必要なだけ買ふ。

それがわかるくらゐなら、大丈夫だ。

局長にぐらゐなれるだらう。

私ぐらゐの年配だ。

右の「だけ」に「に」がつくと、身分や事情に相應する意を表す。

男の子だけになかなか活潑だ。

値が高いだけに品も上等だ。

書物を讀むだけに理窟がうまい。

〔一七〇〕　やらん　やら

「やらん」は「や（助詞）、あら（動詞）、む（助動詞）」の約されて一語と見なされる語で、用言の連體形・體言、及び助詞「と」「に」等につき、疑問又は不定の意を表す。

あれはいかなる御鳥居やらん。

内府は何とて是等を呼び取るやらん。

などや信頼をば申し助け給はぬやらん。

商人船やらん多く連り候。

爲朝とやらんは鳳輦に矢を放さんなど申しける奇怪の者なり。

召しに參ぜざらん者をば死罪に行はるべしとやらん承りて……。

右の「やらん」は「やらう」となり、更に現代口語では「やら」となつて、次のやうに用ひる。

一、不定の意を表す。

誰やらがさう言つた。

何人（ニン）やら私は存じません。

何處から來たのやら誰も知らない。

二、事物を並べいふに用ひる。

ペンやら鉛筆やら澤山持つて居る。

あれやらこれやらいろ〳〵ある。

歌ふやら踊るやら大さわぎだ。

足を蹈まれるやら押されるやら、ひどい目に遇つた。

悲しいやらくやしいやら、さん〴〵でした。

〔一七一〕 人によつて或は助詞とし、或は接尾語とし、或は副詞とする語がある。本書では姑く助詞として、こゝに併記する。

一、ごとに

一つ〳〵を指す意を表す。用言につくものは、「たびごとに」の意となる。

是を見る者ごとにあはれとは云はで……。

人ごとに一つの癖はあるものを……。

世は年ごとに變り行く。

月見るごとに亡き友を思ふ。

二、づつ

區切りを作る意に用ひる。

五人づつ一組となる。

三回づつにて交替す。

少しづつ與ふ。

三、がてら

動詞・助動詞の連用形について、兩事を兼ね行ふ意に用ひる。

涼みがてら物語る。

秋の野も見給ひがてら雲林院に詣で給へり。

○これは又、名詞につくことがある。

見ぬ人のかたみがてらは折らざりき身になずらへる花にしあらねば

四、がてに

事の成り難い意を表す。歌に多く用ひる。

集めしも今は昔の我が窓をなほ過ぎがてに飛ぶ螢かな。

わが宿に咲ける藤波立ちかへり過ぎがてにのみ人の見るらん。
俊蔭（人名）行きがてにして歸る。

五、まゝに　　まに〳〵

それに打任せて置く意に用ひる。助詞「の」「が」又は、用言の連體形につく。
昔のまゝに見る夢もがな。
聲のまにまに尋ね行く。
摘まん摘まじは君がまに〳〵。
徒然なるまゝに日ぐらし硯に向ひて……。
欲しきまに〳〵取る。

第六節　感動助詞

〔一七二〕　も　　し　　しも

「も」は感情を含めて、或は意味を強め、又は和らげていふに用ひる。

勅なればいともかしこし。

櫻花咲きにけらしも足引の山のかひより見ゆる白雲。

夜もふけぬ。

誰とも判明せず。

「し」は、文中にあつて、意味を强めるのに用ひる。これは又右の「も」と一緒に現れることが多い。

秋の夜の月の光し明ければ……。

花をし見れば物思もなし。

いつしか日も暮れぬ。

まつとし聞かば今歸り來ん。

之をしも忍ぶべくんば何をか忍ぶべからざらん。

今日しも都に着きたり。

その謂れなきにしもあらず。

必ずしも然らじ。

〇「も」は又次のやうに、兩動詞の間に在ることもある。

人の心のうつりもゆくか。　　求めも置かず。

聞きも敢へず聲々に悲しみ給ふ。

○口語では、「も」を用ひるが、「し」「しも」は、一般に廢れた。但し、「誰しも」「必ずしも」などは、一成語のやうになつて殘存する。

別に讀みたくもない。

このまゝにしても置けない。

書けといふなら書きもしようが、今すぐでは困る。

やすいもやすいが、品は上等でない。

飲みも飲んだ、一人で五合も飲んだ。

〔一七三〕　よ　や　とよ　を

「よ」「や」は、感動の意を表し、また呼びかけていふに用ひる。

かくても在られけるよ。

これを見よ有王よ、この子が文の書きやうのはかなさよ。

當家傾けんとする謀反の奴がなれる姿よ。

いと安らかなる御ふるまひなりや。

聲絶えず鳴けや鶯。

珍しや、いかに義經。

あなめでたの妓王御前の幸や。

あな面白や。

海は淺かりけるぞ、渡せや渡せ。

○「よ」は又、格助詞「と」と一緒になつて、一語のやうに用ひられる。

安元三年四月廿八日かとよ、風吹きて靜かならざりし夜……。

返すぐもめでたうこそ候へとよ。

いざとよ、さやうの人は三人これにありしが……。

尼が子に右馬の助家盛とて候ひしぞとよ。

○口語では、「よ」を、念を推して感歎の意を表すに用ひる。

雨が降つてゐるよ。

道がわるいんですよ。

それでは長すぎるんだよ。

「や」は念を推していふにも、呼びかけにも用ひる。

早く歸らうや。

花子や、ちよつといらつしやい。

○

「を」は、古い物に現れる感動詞である。

八重垣つくるその八重垣を。

香をだに匂へ人の知るべく。

特に、この「を」を擧げたのは、次のやうな例が、歌にしば〳〵現れるからである。

秋の田のかりほの庵の苫を粗み……。

風をいたみ岩打つ波のおれのみ……。

瀨を早み岩にせかるゝ瀧川の……。

これ等の「を」は、感歎の意の輕いものである。

因に、右の「苫を粗み」等は、古來「苫ガ粗イ爲ニ」「風ノ激シサニ」「瀨ガ早イノデ」のやうに解されこれ、「粗み」「いたみ」等は、形容詞の語幹に接尾語「み」のついたものと說かれてゐる。然るに、この「み」は、古い活用形の一語尾だと唱へる人もあるが、未だ一般から承認されない。

尙、右の用ひ方で、助詞「を」のない場合も珍しくない。

わが門の板井の清水里遠み人し汲まねばみくさ（水草）生ひにけり（古今、二〇）
わくる草葉の露しげみ、いとど御袖ぬれまさり……（平家、灌頂）

〔一七四〕　な　は　なあ　わい　ねえ　ね

「な」は感動の意に、言ひ据ゑる氣味のこもつた助詞である。又念を押していふにも用ひる。

花の色はうつりにけりな。
御命の今まで長らへておはしけるな。
いかに佐々木殿は、生食賜らせ給ひて上らせ給ふな。
（知章は）あの清宗と同年にて、今年は十六な。

「は」は感動の意を表すと共に、揭げ示すやうな心持を含む助詞である。

近き皇胤をたづねば、融等も侍るは。
あはや源氏の大勢のつゞいたるは。
佐々木にたばかられぬるは。

○口語では「な」「なあ」を念を推していふに用ひ、「は」（まれに「わい」）を感歎の意を表すに用ひる。

うまく書いたな。

隨分大きいな。
ほんたうに困つたものだなあ。
これでよからうなあ。
子供等がゐるは、ゐるは、二三十人も居る。
これはいかんわい。

「な」「なあ」と殆ど同樣に、「ね」「ねえ」をも多く用ひる。

うまく出來たね。
別に變つた事もありませんね。
また始めるのかねえ。

〔一七五〕　か　かな　かも

右は何れも感動の意を表す助詞で、用言につく時は、その連體形をうける。

昨日まで早苗取りしかいつの間に稻葉そよぎて秋風の吹く。
うつせみの世にも似たるか。
あゝ悲しきかな。

あつぱれ、けなげなる男の子かな。

三笠の山に出でし月かも。

大海の磯もとゞろに寄る浪のわれて砕けて裂けて散るかも。

「か」「かな」「かも」は、口語には用ひない。

〔一七六〕 かし

「かし」は、終止完結した形のものについて、念を推し力を添へるに用ひる。

さは思ひつかし。

さても君忘れけりかし。

言の葉にだにかけよかし君。

問へかしな尾花がもとの思草萎るゝ野べの露はいかにと。

しか覺ゆるぞかし。

いと淺ましき事ぞかし。

○口語には「かし」を用ひない。たゞ「さぞかし」「見てくれがし」「聞えよがしに高くいふ」のやうな慣用句の中に、或は「がし」となつて殘存するだけである。

〔一七七〕　え　さ　ぜ　て　とも

口語では尙、次のやうな感動詞を用ひる。

え　感歎の意を含んで、念をおす意に用ひる。

それは何だえ。

お前にも出來るかえ。

さ　輕く言ひはなす意にいふ。

これは僕の本さ。

また行つて見るさ。

それで大丈夫さ。

あの方も讀んだとさ。

それだからさ、私も言つて居るではないか。

ぜ　念をおしていふに用ひる。

早くしないと後れるぜ。

かなり冷いぜ。

あれはきつと來ないぜ。

て　輕く言ひ張る意にいふ。

旅行は春に限るて。

それが本當だらうて。

とも　問に對して、「勿論かく〳〵だ」と強く言ふに用ひる。

君も行くだらうね。行くとも。

これでいゝかえ。いゝとも。

一圓で買へるのか。買へるんですとも。

○

本書は、文語と口語とを關係させて說く方針で進んで來た。しかも常に、文語法を主にし、口語法を從にして、述べて來た。隨つて、これを切り離して、單獨に口語の側から見ると、組織の上からも、幾多不滿の點の生ずるのは、止むを得ない事である。

殊に、助動詞として說いたものゝ中には、むしろ助詞と見るべきものが、少からず混入してゐる。たとへば、指定の助動詞「な」の連用形「なり」とか、時の助動詞「た」の連用形「たり」などは、その原意を失つて、助詞化してゐる。これ等は、文語法を離れた口語法を說くに當つては、特に考慮すべき事である。

第十三章　感動詞

〔一七八〕　感動詞の用例

喜怒哀樂等の感情を表す語を感動詞といふ。感動詞には、用ひ方による語形の變化なく、常に文の首にあるのが一特色である。

ああ、悲しきかな。

あら、嬉しや。

あな、うらやまし。

あはれ、例の宰相が物に心得ぬよ。

あつはれ、けなげなる武夫よ。

あは、只今失はるゝか。

あはや、みかたの敗れんとするぞ。

さても、はかなの世の有様や。

左例のやうに、誘起・呼びかけ・應答に用ひる語も、感動詞として取扱ふ。

いざ、われ等も出で立たん。

いざや、矢一つまゐらせん。

いで、目に物見せん。

すは、伏兵のありけるぞ。

すはや、大將の御自害あるは。

やあ、それなるは誰人ぞ、名のれ。

やよ、待て、曲者。

なう、旅人、いづ方へ參らるゝぞ。

いかに、物申さん。

おう、さもあらん。

いな、ここあらず。

〔一七九〕 感動詞は、文語と口語とでは、用ひる單語に異同があるだけで、文法上の差はない。文語の

「ああ」「あ」「あら」「やあ」「おう」などは、口語でも用ひるが、その外、口語で最も普通に用ひるのは、次の通りである。

一、感情を表すもの。

お、痛い。　　おう、寒い。

おつと、あぶない／＼。

おや、これは變だ。

はあ、さうか。　　ははあ、わかつた。

はて、困つたものだ。

どうもはや、しやうがない。

まあ、どうしよう。

二、誘起に用ひるもの。

さあ、參りませう。

そら、火事だ。

それ、早く逃げろ。

三、呼びかけに用ひるもの。

おい、佐藤君。　　おうい、君。

もし、あなた。　　もしもし、ちよつと伺ひます。

四、應答に用ひるもの。

あ、さうですか。　　ああ、いゝとも。

ええ、承知致しました。

は、今參ります。　　はあ、さうですか。

はい、これで澤山です。

いえ、存じません。　　いゝえ、さうではありません。

いや、本當です。

第十四章　接辭・語幹を含む單語

〔一八〇〕　接辭―接頭語・接尾語、語幹

「心」「子」「春」「道」「夜」等は、文の構成に關與する資格のあるもので、これ等を單語と稱することは、既に第四項で述べた。然るに、その語頭、或は語末に、それ自身では獨立し得ぬもの――卽ち單語たる資格のないもの――がついて、意味の上で、又は語性の上で、趣の異る單語の生ずることがある。たとへば、次の如くである。

(1)　み心　　子ら　　春めく

(2)　近道　　日永　　おぼろ夜

(1)の「み」「ら」「めく」等は、他の單語に附屬してのみ現れるもので、(2)の「ちか」「なが」「おぼろ」等は、「く・し・き・けれ」又は「に」がつくと、形容詞又は、副詞となるべき語幹である。

今、普通の稱呼を用ひて、(1)の種類のうち、「み」のやうに語頭につくものを接頭語といひ、「ら」「め

く」のやうに語末につくものを接尾語といふ。而して、接頭語・接尾語を一括して、接辭と稱する。本章では、接辭・語幹を含む單語に就いて述べる。

〔一八一〕　接頭語の中には、「み心」「こ松」のやうに、或意味を添へるものあり、又「み岬」「さ渡る」「い坐す」のやうに、意味よりも、音調の上から添へられると解すべきものがある。尤も、起原に溯れば、總べて何等かの意を添へたと考へられる。

〔一八二〕　接尾語には、明かに、二種ある。一は「學生ら」「課長どの」のやうに、或意味を添へるだけで、語性には關係しないもの。他の一は、「春めく」「學者ぶる」のやうに、他の品詞に變へるものである。

〔一八三〕　接辭・語幹を含む名詞には、次のやうなものがある。

一、接頭語を有するもの。

はつ春　うひ孫　にひ參　み代　おほみ神　おん心　を川　こ山　ま晝

まん中　き薬　す顔　ひが目　くせ事　えせ法師　もろ刄　いく世　さ夜

み雪
お顔（ロ）　ご縁（ロ）

二、接尾語を有するもの。

我ら　家來ども　親たち　殿ばら　宮がた〔以上、複數を示す〕
中隊長どの　齋藤君　神さま（ロ）　鈴木さん（ロ）〔以上、敬讓の意を示す〕
大人げ　雪げ　怖ぢけ　話して　晴れさう（ロ）

三、形容詞・副詞の語幹を有するもの。

淺瀬　細道　近目　遠山　くら闇　强弓　弱腰　廣袖　輕石　こは飯
丈長　端近　夜寒　幅廣　先細　末太　鹽辛。
あだ名　おぼろ月　まれ人〔以上、名詞と語幹〕
古着　厚着　高飛　長生　早死　苦笑　遠廻
あだ臥　あだ寢〔以上、動詞の連用形と語幹〕

○こゝに收めた諸例を、普通には熟語とするが、本書の立て方は、それとは、少し違つて、分解すれば獨立せぬ分子を含む語を、一括して本章に收めた。熟語については、第十五章で述べる。

○尙、形容詞の兩語幹が合して、「遠淺」「高低(タカヒク)」といふやうな一名詞をつくることがある。

四、形容詞の語幹に接尾語のついたもの。

厚さ　強み　弱げ　寒け

〔一八四〕　接辭・語幹を含む動詞には、次のやうなものがある。

一、接頭語を有するもの。

さ迷ふ　け劣る　い行く　たばしる

○「うち開く」「取扱ふ」「さし控ふ」「相成る」等の—印のものも、動詞たる原意を失つて、接頭語化したものである。

二、名詞に、接尾語のついて成つたもの。

今めく（カ四）　時めかす（サ四）　大人（オトナ）ぶ（バ上二）　學者ぶる（バ四）

黄ばむ（マ四）　神さぶ（バ上二）　共なふ（伴、ハ四）　花やぐ（ガ四）

味はふ（ハ四）　年寄じみる（口語、マ上一）

尚、次の動詞の語尾は、普通接尾語とは説かぬやうであるが、成立の上から見れば、右の諸動詞と殆ど同様である。

跨ぐ　かたぐ（肩、擔）　くび（頸）る　はらむ　力（リキ）む

三、形容詞の語幹を含むもの。

近寄る　遠ざかる　廣過ぐ

四、形容詞の語幹、感動詞等に接尾語のついたもの。

面白がる　美しがる　あはれがる（ラ四）

口語では、「いやがる」「迷惑がる」「窮屈がる」等、多く用ひる。

〔一八五〕　接辭・語幹を含む形容詞には、次のやうなものがある。

一、接頭語を有するもの。

を暗し　こ高し　いく久し　いや高し　け近し　た易し　か弱し　いち早し

二、名詞に接尾語のついて成つたもの。

學者らし　議論がまし　今めかし　露けし

次の形容詞の語尾は、普通接尾語と言はぬが、成立の上から見れば、右の諸語と同様である。

大人し　まことし　しふね（執念）し

三、他の形容詞の語幹を戴くもの。

薄ぐらし　細長し　暑苦し

形容詞の語幹を重ねて、語幹とする形容詞がある。

長々し　重々し　輕々し　遠々し

右のやうに重ねられる元の形容詞は、ク活用であるが、新に出來たものはシク活用となる。

〔一八六〕　接辭・語幹を含む副詞には、次のやうなものがある。

一、他の單語に接尾語のついたもの。

花やかに　忍びやかに　存外げに　身づから　手づから

○右のうち、「花やか」「存外げ」だけで用ひず、「に」がついて副詞となる場合が多いから、「やかに」「げに」を各一の接尾語と見た。

これ等のうちには、左例のやうに、形容詞の語幹について、副詞をつくるものがある。

高やかに　高げに　清げに

二、形容詞の語幹を重ねたものに、「と」「に」のついたもの（或はこれを省いても用ひる）。

ひろ〴〵と　なが〳〵と　ちか〴〵に（と）

あら〳〵　うす〳〵　ゆる〳〵

第十五章　合成語

〔一八七〕　合成語—疊語・熟語

單語が二つ以上合して、文法上一單語として、取扱はれるものを作ることがある。これを合成語といふ。合成語には二種ある。一は、同じ單語を重ねたもので、これを疊語といひ、一は、異る單語を合成したもので、これを熟語といふ。

○本章では、單語たる形を有するもの同士が、互に合する場合に就いて述べる。尤もその際に、發音の上に、轉呼や、正濁の變化を來すものをも含むことにする。

〔一八八〕　疊語の主なものは、次の通りである。

一、名詞を重ねたもの。

人々　山々　家々　年々（トシ〴〵）　日々（ヒビ）　時々（トキ〴〵）　ところ〴〵

○數詞も重ねることがある。

　一つ〳〵　ひとり〳〵

二、代名詞を重ねたもの。

　我々　誰々　なに〳〵　それ〴〵　どれ〳〵（口）　どこ〴〵（口）

○右體言を重ねたものは、複數を表す場合・その各々を表す場合あり、又「日々」「時々」のやうに、副詞的に用ひられることあるものもある。

三、動詞を重ねたもの。

　（終止形を）　返す〴〵　言ふ〳〵　行く〳〵

　（連用形を）　泣き〳〵　かね〴〵　つぎ〳〵

○右は動作を繰返す意で、副詞的に用ひるのが普通である。中には「かね〴〵」のやうに、原義が殆ど失はれて、純然たる副詞（豫めの意）のやうに見なされるものもある。

四、副詞を重ねたもの。

　なほ〳〵　又々　いといと（約つて「いとど」ともなる）

○形容詞も「よし〳〵」のやうに重ねることはあるが、その副詞的用法のものも、「よく〳〵」「疾く〳〵」など現れる。

五、感動詞を重ねたもの。

あはれ〱　いざ〱　やあ〱

おや〱（口）　まあ〱（口）　はい〱（口）

○副詞・感動詞の疊語は、意味を強くする場合に現れる。

〔一八九〕　熟語の主なものは、次の通りである。

一、名詞をつくるもの。

（名詞と名詞）　硯箱（スヾリバコ）　春霞　道幅（ミチハバ）　山中（ヤマナカ）

（動詞と名詞）　賣物　たき火　貸家　釣床

（名詞と動詞）　紙入（イレ）　湯沸（ワカシ）　金持（カネモチ）　髮結

（動詞と動詞）　讀書（ヨミカキ）　請取（ウケトリ）　居食（ヰグヒ）　ゆきづまり

（名詞と形容詞）　袖無（ナシ）　裏無（草履の名）　仲好（ナカヨシ）

「からしな」（辛菜）、「すしや」（鮨屋）などは、名詞と名詞との合成したものと見なされる。

○「囚はれの身」「懲らしめ」のやうに、動詞に助動詞のついたものがある。また「蚊遣火」「人騒がせ」「負けじ魂」「したり顏」「わがもの顏」のやうに、三語以上合成したものもある。

○右は何れも純粹の國語について述べたのである。が、漢語から來たもの、或はその他の外國語から來たものに、國語がついて、「書棚」「鉛筆削(ケヅリ)」「ガラス窓」「タバコ入(イレ)」などともなる。それからこれ等同士が合成して、「ペン習字」「安全マッチ」などを造り、更に國語とも一緒になつて、「ゴム裏草履」「鐵筋コンクリート造り」などともなるのである。

○たまに副詞と名詞との合成した熟語名詞がある。

　たゞ人　たゞ事　また從兄弟(イトコ)　すゞろ言(ゴト)

また、副詞と動詞と合成したのもある。

　すゞろ歩(アリキ)　ちよつと見（口）

二、代名詞をつくるもの。

主に一音の代名詞を名詞に連ねる。

　わ殿　わ主　わ女　わ僧　わ御前　こ奴(ヤツ)　そやつ　あやつ

○「かやつ」は轉じて「きやつ」といふ。尚、口語では、「こやつ」「そやつ」等を、「こいつ」「そいつ」などのやうにいふ。

三、動詞をつくるもの。

（動詞と動詞）　かへりみる　おもん（ひ）みる　ひきゐる（率）　こひねがふ

落ちいる　落しいる

（名詞と動詞）　心ざす　こゝろみる　名のる　名づく　物語る

「罪す」「周旋す」「論ず」等のやうに、名詞や漢語に「す」のついたのも、こゝの例になる。尚、この類のものに、形容詞の語幹に接尾語「み」がついて名詞となつたものに、「す」のついた「よみす（嘉）」「なみす（無視）」のやうなものがある。そして、その「みす」が、「んず」と變形したのが、「重んず」「輕んず」「安んず」「難んず」「疎んず」「甘んず」等である。

○又「先にす」「そらにす」は、「さきんず」「そらんず」となつて、一單語として取り扱はれる。

○因に、「山高み」「瀬を早み」のやうに、形容詞の語幹について、副詞的なものにする「み」については、既に第一七三項に附說した。

三、形容詞をつくるもの。

（名詞と形容詞）　心よし（快）　名高し　物憂し　齒がゆし　後暗し　胸苦し

（動詞と形容詞）　有り難し　見ぐるし　見にくし　待ち遠し

五、副詞をつくるもの。

（名詞と助詞）　誠に　常に　幸に　よに　もとより　わざと（態）

（代名詞と助詞）　何ぞ　いづくに（ん）ぞ　何とて　何か（は）　なにとぞ（何卒）

（動詞と助詞）　極めて　至つて　すべて　敢へて　却つて　しきりに　みだりに
　　餘りに　恐らくは　願はくは　あまつさへ（あまりさへ）
（動詞と助動詞）　絶えず　成るべく
（副詞と助詞）　たゞに　さぞ

○「恐らく」「願はく」は、「恐る」「願ふ」を引き延べて言ふのだと說かれる。これを延音と稱することは、既に第一〇九項の三に附說した。

六、接續詞をつくるもの。

（副詞と副詞）　はたまた
（副詞と助詞）　又は　但し　しかも
（動詞と助詞）　並びに　されど　然れども　されば　然らば　いへども

〔一九〇〕　轉呼音・連濁音

單語が合成する際に、上にある語の末が、他の音に呼ばれることがある。これを轉呼音といふ。又、下にある語の頭音が濁音となることがある。これを連濁音といふ。

一、轉呼音の例

さか（け）や〔酒屋〕　たか（け）むら〔竹叢〕　かざ（ぜ）よけ〔風除〕
ふな（ね）うた〔船歌〕　かな（ね）もの〔金物〕　なは（へ）しろ〔苗代〕
あま（め）やどり〔雨宿〕　つま（め）さき〔爪先〕　むら（れ）やま〔群山〕
こわ（ゑ）いろ〔聲色〕

二、連濁音の例

物がたる　きぎ〔木々〕　見ぐるし　橋げた〔桁〕　春ごま〔駒〕
山ざくら〔櫻〕　人じち〔質〕　物ずき〔好〕　せぜ〔瀬々〕　花ぞの〔園〕
すけだち〔助太刀〕　鼻ぢ〔血〕　三日づき〔月〕　尼でら〔寺〕　としどし〔年々〕
硯ばこ〔箱〕　つけび〔放火〕　河ぶね〔舟〕　出べそ〔臍〕　背ぼね〔骨〕

○右のやうな現象は、前章に述べた、接頭語や形容詞の語幹のついた單語や、その語幹に現れることもある。例は既に出て居るが、尙、四五を擧げよう。

をがは〔川〕　たばしる〔迸〕　けぢかし〔近〕　薄ぎ〔着〕　遠ざかる〔離〕
薄ぐらし〔暗〕　先ぶと〔太〕　端ぢか〔近〕
かろがろし〔輕々〕　ひろびろと〔廣〕

三、轉呼音と連濁音と共に現れる例

さかだる（酒樽）　たかばうき（竹箒）　かざぐすり（風邪藥）
むなぐるし（胸苦）　かなぐつ（金靴）　ふなばし（舟橋）
あまごひ（雨乞）　つまづく（爪突）　こわづかひ（聲遣）

○

國語に於いては、動詞・形容詞が、他の語と合するには、通例、前者は連用形を以てし、後者は語幹を以てすると見るべきである。隨つて、「淺瀨」「端近」などは、成立上、「教へ子」「前掛」などと同一である。されど本書は、姑く形の上だけから見て、分解して得る各部が、他の場合に、何れも單語として用ひられるものである語を本章で說き、これに對して、そのまゝの形では、單語として用ひられぬ部分を含む語を、前章に一まとめにして述べた。尤も、本章でも、轉呼・連濁を生ずるものをも包含する故、分解した各部が、必ずしもそのまゝの形で、全部單語になるものとは限らぬ。隨つて分類としては、頗る不徹底なものになつたが、併し形の上で、理解し易からうと思つての試である。要は、第三篇を通じて、或品詞、たとへば名詞には、本來の單純なものゝ外、如何なる構造のものがあり、他の如何なる品詞がこれに轉成するかを概見しようとするにある。

第十六章　品詞の互用

〔一九一〕　品詞の互用

或單語は、用法によつて、他の品詞に轉じ、また、本來何れの品詞に屬すべきか不明なものが、甲品詞に編入されると同時に、乙品詞の單語の根幹となることがある。これ等を一括して、品詞の互用と稱する。

○本章で述べる所は、構造上から見て、他のものと複合せぬものに就いてである。從つて一品詞、たとへば名詞に就いて、本來の單純なものゝ外に、如何なるものがあるかを知るには、前章の終りに述べた通り、第三篇全部を通覽する必要がある。

〔一九二〕　他から名詞に轉成する主なものは、次の通りである。

一、動詞から。

（連用形から）　光　氷　霞　笑　帶

さかだる〔酒樽〕　たかばうき〔竹箒〕　かざぐすり〔風邪藥〕
むなぐるし〔胸苦〕　かなぐつ〔金靴〕　ふなばし〔舟橋〕
あまごひ〔雨乞〕　つまづく〔爪突〕　こわづかひ〔聲遣〕

○

國語に於いては、動詞・形容詞が、他の語と合するには、通例、前者は連用形を以てし、後者は語幹を以てすると見るべきである。隨つて、「淺瀨」「端近」などは、成立上、「敎へ子」「前掛」などと同一である。されど本書は、姑く形の上だけから見て、分解して得る各部が、他の場合に、何れも單語として用ひられるものである語を本章で說き、これに對して、そのまゝの形では、單語として用ひられぬ部分を含む語を、前章に一まとめにして述べた。尤も、本章でも、轉呼・連濁を生ずるものをも包含する故、分解した各部が、必ずしもそのまゝの形で、全部單語になるものとは限らぬ。隨つて分類としては、頗る不徹底なものになつたが、併し形の上で、理解し易からうと思つての試である。要は、第三篇を通じて、或品詞、たとへば名詞には、本來の單純なもの丶外、如何なる構造のものがあり、他の如何なる品詞がこれに轉成するかを概見しようとするにある。

第十六章　品詞の互用

〔一九一〕　品詞の互用

或單語は、用法によつて、他の品詞に轉じ、また、本來何れの品詞に屬すべきか不明なものが、甲品詞に編入されると同時に、乙品詞の單語の根幹となることがある。これ等を一括して、品詞の互用と稱する。

○本章で述べる所は、構造上から見て、他のものと複合せぬものに就いてである。從つて一品詞、たとへば名詞に就いて、本來の單純なもの丶外に、如何なるものがあるかを知るには、前章の終りに述べた通り、第三篇全部を通覽する必要がある。

〔一九二〕　他から名詞に轉成する主なものは、次の通りである。

一、動詞から。

（連用形から）　光　氷　霞　笑　帶

さかだる（酒樽）　たかばうき（竹箒）　かざぐすり（風邪藥）
むなぐるし（胸苦）　かなぐつ（金靴）　ふなばし（舟橋）
あまごひ（雨乞）　つまづく（爪突）　こわづかひ（聲遣）

○

國語に於いては、動詞・形容詞が、他の語と合するには、通例、前者は連用形を以てし、後者は語幹を以てすると見るべきである。隨つて、「淺瀨」「端近」などは、成立上、「敎へ子」「前掛」などと同一である。されど本書は、姑く形の上だけから見て、分解して得る各部が、他の場合に、何れも單語として用ひられるものである語を本章で說き、これに對して、そのまゝの形では、單語として用ひられぬ部分を含む語を、前章に一まとめにして述べた。尤も、本章でも、轉呼・連濁を生ずるものをも包含する故、分解した各部が、必ずしもそのまゝの形で、全部單語になるものとは限らぬ。隨つて分類としては、頗る不徹底なものになつたが、併し形の上で、理解し易からうと思つての試である。要は、第三篇を通じて、或品詞、たとへば名詞には、本來の單純なものゝ外、如何なる構造のものがあり、他の如何なる品詞がこれに轉成するかを概見しようとするにある。

第十六章　品詞の互用

〔一九一〕　品詞の互用

或單語は、用法によつて、他の品詞に轉じ、また、本來何れの品詞に屬すべきか不明なものが、甲品詞に編入されると同時に、乙品詞の單語の根幹となることがある。これ等を一括して、品詞の互用と稱する。

○本章で述べる所は、構造上から見て、他のものと複合せぬものに就いてである。從つて一品詞、たとへば名詞に就いて、本來の單純なもの丶外に、如何なるものがあるかを知るには、前章の終りに述べた通り、第三篇全部を通覽する必要がある。

〔一九二〕　他から名詞に轉成する主なものは、次の通りである。

一、動詞から。

（連用形から）　光　氷　霞　笑　帶

（終止形から）　すまふ（相撲）　かげろふ（陽炎）　向ふの山

○「すまふ」「向ふ」は、「すまひ」「むかひ」の音便で、「すまう」「むかう」が正しいといふ說がある。

○「歌」「宿」などは、名詞として用ひると同時に、動詞の語幹としても用ひる。「歌ふ」「宿る」がもとだらうと思はれるが、明かでない。

二、形容詞から。

（連用形から）　遠くを見る。　近くに住む。　幼くより…。　わかくより…。

（終止形から）　からし（辛）　すし（鮨）　おもし（重鎭）　あかし（燈）

○「幼く」「わかく」が音便となつて、「をさなう」「わかう」ともなつて現れる。

○「靑」「白」「赤」「黑」等は、名詞として用ひると同時に、形容詞の語幹としても用ひる。「靑し」「白し」等がもとだらうと思はれるが、明かでない。

○尙「あはれ」は、本來感動詞であるが、名詞にも用ひる。

〔一九三〕　他から代名詞に轉成するもの。

主として名詞から來るが、甚だ多い。

君　僕　わらは　拙者　殿　殿下　閣下　足下

〔一九四〕　他から用言に轉成するもの

動詞に轉來するものには、名詞や漢語を一活用形に見立てた、次のやうなものがある。

ひじる（聖）　れうる（料理）　さいしく（彩色）　さうぞく（裝束）

かぶく（歌舞伎）

この種のもので、形容詞になるものは思ひ當らぬ。

○一方で形容詞として用ひながら、同時に動詞の語幹となるものがある。

悲しむ　樂しむ　苦しむ

○一方で動詞の一活用形となると同時に、形容詞の語幹となるものがある。

騷がし　勇まし　狂はし

○形容詞「甚し」「早し」の語幹は、副詞として用ひられるが、何れが本來のものか、不明である。

〔一九五〕　他から助動詞に轉成するもの

これは總べて動詞から來る。

給ふ　遊ばす　まします　おはします　奉る　まつる　まゐらす　申す

致す　侍り　候ふ

〔一九六〕　他から副詞に轉成するもの

一、名詞から。

つゆ　ゆめ

右は副詞になると、意味の上に變化を來すが、「今」「昔」「今日」「きのふ」「こぞ」などは、同じ質質を以て副詞のやうに用ひられる。

○漢語の「一切」「大概」「平素」「日常」などは、語性が明確ならず、國語に取入れても、名詞にも副詞にも用ひる。

二、動詞から。

たとへ　はじめ　あまり　いそぎ

これ等は名詞にもなる。また「たとひ」の副詞も、「たとふ」といふ四段活用の動詞があつて、それから來たものだらうといふ。

三、形容詞から。

形容詞の連用形を副詞のやうに用ひることは、甚だ多い。

長く　　よく　　久しく　　狂はしく

〔一九七〕　他から接續詞に轉成するもの

「また」「はた」「なほ」「もつとも」のやうに、副詞から來たものゝ外には、左例のやうに名詞から來るものが多い。

殿上までも切り上らむずる者の面魂にてある間、別のことなしとぞ答へられける。

小兵といふ條、十二束三ぶせ、弓は强し……。

先方に照會致候ところ、目下品切の由に候。

〔一九八〕　他から感動詞に轉成するもの

南無三（寶）、しなしたり。

いかに、與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。

さて、何うしよう（口）。

どうも、はや、困つたものだ（口）。

あれ、蛇がゐる。

これ（こら）、何をして居るか。

それ（そら）、そこにありますよ。

どれ（どりや）、出かけようか。

右の｜印の語は、感動詞と見なすべきものである。

〇

尚、普通に助詞として取り扱ふ「て」は、助動詞から來たものであるが、「さへ」は「添へ」から出たものであらうと言ふ。口語の助詞には、この類のものが少くない。

第四篇　文　章　論

第十七章　文の成分　その一

主語・述語・補語

〔一九九〕　文―題目・敍述

既に第三項に述べたことによつて、次の番號をつけた單語の各集團は、文（文章）であり、―印は題目、‖印は敍述の部分であることは明かである。

一、雨　降る。

二、風　吹かん。

三、北風は　寒い（口）。

四、これは　大きいね（口）。

五、時計が　とまつたか（口）。

右諸例のやうに、文の題目が、體言（例一・二）か、體言に助詞のついたもの（例三・四・五）である時は、これを主語といふ。

また、敍述の部分が、用言（例一・三）か、活用連語（例二。尙第十項參照）か、それ等に助詞のついたもの（例四・五）である時は、これを述語といふ。

主語と述語とだけで成る文は、文の最も簡單なものである。

〔一〇〇〕　補　語

前項の文は、主語と述語とだけで成るものであるが、文によつては、敍述の部分に、述語以外のものの加はることがある。

今、前項の（四）（五）の例に就いて見るに、「これ」を他と比較していふ時には、次の如く云ふ。

これは　どれよりも大きいね。

又「時計」が前にも「とまつた」ことがある意味で問ふには、次のやうに云ふ。

時計が　また　とまつたか。

今この「どれよりも」と「また」とを比べて見るに、下に來る述語に關係をもつ點に於ては、共通であるが、その關係の疎密の差は姑く措いて論ぜず、形の上から見ると、二つの相違がある。

第一の相違は、成立の上にある。「どれより」(もの有無は、この際重きをなさぬ故、略していふ)は、體言に格助詞のついたものであるが、「また」は本來の副詞である。第二の相違は、「どれより」の方には、「さつき見た」「今までの」などのやうな形容詞的修飾語(第十八章參照)を冠し得るが、「また」にはそれが出來ない。

この點から區別して、「どれより」のやうに、體言に格助詞がついて、述語に係るものを補語と稱する。

尙補語の例を擧げると、次の通りである。

大慾は無慾に似たり。
猫は鼠を捕ふ。
大軍河を渡る。
友は井上と改姓せり。
光陰は矢の如し。
禍は口から出る(口)。
弟は何處へ行つたらう(口)。
妹は田舍で育つた(口)。

また、左例のやうに、體言に指定の助動詞「なり」「たり」(口語では「だ」「な」「です」)のついた

右諸例のやうに、文の題目が、體言（例一・二）か、體言に助詞のついたもの（例三・四・五）である時は、これを主語といふ。

また、敍述の部分が、用言（例一・三）か、活用連語（例二。尚第十項參照）か、それ等に助詞のついたもの（例四・五）である時は、これを述語といふ。

主語と述語とだけで成る文は、文の最も簡單なものである。

〔二〇〇〕　補語

前項の文は、主語と述語とだけで成るものであるが、文によつては、敍述の部分に、述語以外のものの加はることがある。

今、前項の（四）（五）の例に就いて見るに、「これ」を他と比較していふ時には、次の如く云ふ。

これは｜どれよりも大きいね。

又「時計」が前にも「とまつた」ことがある意味で問ふには、次のやうに云ふ。

時計が｜また　とまつたか。

今この「どれよりも」と「また」とを比べて見るに、下に來る述語に關係をもつ點に於ては、共通であるが、その關係の疎密の差は姑く措いて論ぜず、形の上から見ると、二つの相違がある。

第一の相違は、成立の上にある。「どれより」（もの有無は、この際重きをなさぬ故、略していふ）は、體言に格助詞のついたものであるが、「また」は本來の副詞である。第二の相違は、「どれより」の方には、「さつき見た」「今までの」などのやうな形容詞的修飾語（第十八章參照）を冠し得るが、「また」にはそれが出來ない。

この點から區別して、「どれより」のやうに、體言に格助詞がついて、述語に係るものを補語と稱する。

尙補語の例を擧げると、次の通りである。

大慾は無慾に似たり。
猫は鼠を捕ふ。
大軍河を渡る。
友は井上と改姓せり。
光陰は矢の如し。
禍は口から出る（口）。
弟は何處へ行つたらう（口）。
妹は田舍で育つた（口）。

また、左例のやうに、體言に指定の助動詞「なり」「たり」（口語では「だ」「な」「です」）のついた

ものは、合して述語と見るが、分解して考へる必要のある時は、その體言は補語とする。

正成は忠臣なり。

某は陸軍中將たり。

正行も忠臣だ（です）（口）。

僕が軍人なら……（口）。

○後に說くやうに、補語・述語に、修飾語のつく時には、前者には形容詞的修飾語、後者には副詞的修飾語のつくのが、常例である。然るに、右の述語には、次のやうに、形容詞的修飾語の冠せられることがある。

日本一の忠臣なり　　立派な軍人なら……。

されど、この「日本一の」「立派な」は、述語そのものでなく、その一部「忠臣」「軍人」についたものである。從つて、この際には、「忠臣」と「なり」、「軍人」と「なら」とを、分解して考へる必要があるのである。かゝる際の「忠臣」「軍人」は補語である。

右のやうに「なり」「たり」（口語「だ」「な」「です」）の補語には、助詞はつかない。他の補語でも、格助詞以外の補語のつくことあり、或は全く助詞のつかぬことがある。

今日わりご（を）持たせて來たる人……この人歌（を）よまんと思ふ心ありて（土佐日記）

講師、物・酒など（を）おこせたり（同右）

○助詞「ぞ」「か」「よ」が補語について、間に「なる」があると同様に用ひられることがある。

やれ、おのれは義平が首打つ程の者（なる）か、晴れの所作（なる）ぞ。能く斬れ。

此の手の大將は誰人（なる）ぞ、名のれ、聞かん。

われこそそれ（なる）よ。

○以上、補語を便宜上、述語の關係に於てのみ述べたが、補語は元來、用言・活用連語が、述語たる場合に限るものでないことは、次の諸例で明かである（○印は用言・活用連語）。

無慾に似たる大慾。

井上と改姓したる友。

矢の如き光陰。

田舎で育つた妹。

忠臣なる正成。

陸軍中將たる某。

○補語鑑別の標準

從來、補語と、後に述べる副詞的修飾語とを、區別するには、その標準を思想上の、完・不完に求める

のが、普通である。卽ち、補語は、「用言の意義の不完全なのを補充する語であつて、これなくば、完全な思想を表し得ないもの」であり、副詞的修飾語は、「用言の意義を精密にするだけのもので、思想の、完・不完には關與せぬもの」であると説かれた。

この區別は一見明かなやうであるが、實は頗る困難の作ふ問題である。現に多くの文法書は、右の如く說いて居ながら、具體的に示してある補語なり修飾語なりを見ると、必ずしも一致しないのである。それは「完全な思想」に對する見解が、人によつて區々だからである。個々の場合は、こゝに論ずるを避けるが、その最も著しい例は、左記のやうな、時・場處を表す體言に格助詞のついたものである。

僕はいつも五時に起きる。

弟は庭で遊んで居る。

疾く此處を去れ。

右に對して、多くの人は西洋文典風に、副詞的修飾語たるを說くが、山田博士は、日本文法論に於て、詳細にその性質を論じ、これ等を補語と見るべきだと示されたのである。

右に對して、本書では、わいだめなく、形の上から、前述のやうに見ようとするのである。これは、予の創見ではないが、予がこの方法に據つた主た理由は、次の通りである。

思想あつての言語であり、言語あつての文法であるから、文法を論ずるに當つて、思想を無視すること

の出來ぬのは、言ふまでもない。併し、文法上で或事實に就いて分類を行ふならば、その分けられた各々には、文法上の特別な規定が伴はなければならぬ。若しそれがなければ、單に思想上の問題であつて文法學の範圍には入らぬものと思ふ。この見地から予は、國語に於て、名詞を有形名詞・無形名詞に分類したり、動詞を自動詞・他動詞に分けたりすることの、無意味なるを信ずるものである。然るに今、前に擧げた例の「五時に」「庭で」「此處を」の類を、何人にも異論のない他の補語、たとへば、

落花は雪に似たり。

これは庭である。

此處を何處だと思ふ。

等の「雪に」「庭で」「此處を」に比べて見ると、その成立が、體言に格助詞のついたものである點で一致し、又これ等を意義の上で制限しようとすれば、齊しく形容詞的修飾語を要求する點で一致するのである。これ本書で、今後とも恐らく、永久に異論の絶えまいと思はれる純思想方面からの分類に據らないで、形式主義の便利なるに從ふ所以である。

然らば、この主義で總べてが解決されるかと云へば、遺憾ながら、やはり矛盾が生ずる。たとへば、

絃歌の聲常に絶えず。

彼は幸に成功せり。

事實は誠に明白なり。

彼は素より學に忠實なる者なり。

の類である。これ等は名詞たる「常」「幸」等に助詞のついて成つた點に於て、右の「五時に」「雪に」等と一致するが、形容詞的修飾語を要求し得ない點が異るのである。

然らば、これ等を何れに見るかといふに、予はその成立の方面を捨てゝ補語とせず、副詞的修飾語（第十八章參照）として取扱はうとするものである。結局予の案は、「形容詞的修飾語を要求し得るものは補語である」となる。

とにかく、右のやうに形式に偏する時は、自然の結果として、意義上の輕重が閑却されるやうになることは、否定すべからざる事實であつて、これは頗る大きい弱點である。よつて、第二十二章に「各成分の性質」を檢討して、形式上から整理したものを、更に、實質の上から顧る事にした次第である。

〇

書によつては、動作の目的を示す語、たとへば、

警官は賊を捕へたり。

弟に國文法を敎ふ。

の「賊を」「國文法を」の類を、客語と稱して、或は補語と對立せしめ、或は補語の一部として特立せ

しめるが、本書では、いはゆる客語を補語の一部分と見なすから、特に必要ある場合の外、客語を補語と區別しない。

〔二〇一〕　文によつては、二個以上の補語の存在することがある。

予は　彼を　天才と　見る。

校長は　卒業者に　證書を　授與せり。

私は　お母さんから　お菓子を　頂きました（口）。

僕も　來年から　スキーを　始めよう（口）。

弟は　畫用紙に　ペンで　漫畫を　かいた（口）。

弟は　庭で　友達と　獨樂を　廻して居ます（口）。

父は　飛行機で　立川から　大阪に　參りました（口）。

そも　頼朝に　尼を　慈悲者とは　誰れが知らせける（平治、下）

〇使役の助動詞の用ひられて居る場合に、その被役者を示す補語は、文語も口語も、「を」で表すのが普通であり、文語では、それに「して」をつけることも珍しくない。

子を眠らす（せる）。

使を走らす（せる）。

子をして泣かしむ。

このやうな場合に、「に」を用ひることがある（特に口語に於てさうである）。

人にも働かせれば自分も働く。

事務員にわざ〳〵來させながら何も言ひつけない。

年寄にも子供にも感心させる話。

右の「に」「を」を比較して見ると、「に」には、その動作に出るやうに仕向けるやうな、間接的な意を含み、言はゞ被役者の人格を認めて居る趣が現れるに對して、「を」は高壓的で、直接的で、被役者を完全に支配して居るやうな趣がある。古來「に」と「を」と交錯して、たとへば今日普通に「に」といふ所を、

聖旨をそむきて。　權門勢家をへつらふ。

など言ひ、又、

學問に好いて。　學問を好いて。

と雙方の形の現れるのも、この心理の相違だらうと思ふ。

さて元に還つて、使役の助動詞のついた動詞が、「を」の補語を要求するものである時は、被役者は、

「に」で表される。これは文語・口語共通である。

弟に　犬を　追はしむ。

妹に　電話を　取次がせる（口）。

即ち、同じく補語ではあるが、區別していふと、「弟に」「妹に」は、「追はしむ」「取次がせる」の活用連語に對するもので、「犬を」「電話を」は、動詞「追は」「取次が」に對するものである（文語では、右のやうな場合にも、被役者を表すにをしてを用ひることあるは、前と同樣である）。

次に動詞が、「に」「を」の兩補語を、要求するものである時の被役者は、文語では、「をして」を以て表す。

予は弟をして　妹に　繪本を　與へしむ。

賴朝、義經をして　義仲を　宇治に　攻めしむ。

口語では「をして」を用ひぬから、かゝる場合には、別の言ひ方をして、たとへば「弟に言ひつけて」「義經を遣つて」などいふ。つまりは「して」を元の意味に還元して言ふと見られる。

〔二〇二〕　主語・補語となるものは、既に述べた通り、體言及びそれに助詞のついたものであるが、尚その外に準體言（第四三項の三、及び第七〇項四のCを參照）に助詞がついて、これになることがある。

言はぬは言ふにまさる。

言ふは易く、行ふは難し。

過ぎたるは及ばざるがごとし。

稼ぐに貧乏追ひつかず。

予はわづらはしきを好まず。

よきを採り、あしきを捨つ。

第十八章　文の成分　その二

修　飾　語

〔二〇三〕　修飾語―形容詞的修飾語・副詞的修飾語

文には、前章で述べた主語・述語・補語以外のものゝ存在することがある。

一、激しき雨　降る。

二、友は　政界の有力者となれり。

三、幼兒は　すや〱と眠る。

四、お花は　道具を粗末に取扱はない子だ。

右の中、例（一）の「激しき」は、主語たる體言「雨」に係り、例（二）の「政界の」は、補語たる體言「有力者」に係つて居る。また、例（三）の「すや〱と」は、述語たる用言「眠る」にかゝり、例（四）

の「粗末に」は、活用連語「取扱はない」に係つて居る。

而して、これ等は何れも、それの係つて居る語を修飾（第一一項參照）して居る。よつて、これ等を一括して修飾語と名づけ、修飾される語を被修飾語と稱する。

修飾語のうち、右に擧げた例（一）（二）のやうに、體言を修飾するものを、形容詞的修飾語（略稱、形修語）といふ。

又、右に擧げた例（三）（四）のやうに、用言又は、活用連語を修飾するものを、副詞的修飾語（略稱、副修語）といふ。

〔二〇四〕　形容詞的修飾語は、大方次のやうな形で現れる。

一、體言に、助詞「の」「が」がつく。

學校の門　　七つの寶　　孔子及びその門人　　汝の言　　かしこの櫻

こなたの山　　何の意味もなし

松が枝　　二三十人が力　　わが國　　汝が髻　　たが宿　　重盛が子ども

特に「の」には、以上の他に、次のやうな場合もある。

（A）副詞について、形修語を造る場合。

若しの事　僅かの差　むねとの者

（B）下に用言を豫想する助詞について、形修語を造る場合。

京よりの便　あづまへの旅　これまでの努力　「よし」との返事

友達からの手紙（口）　東京での出來事（口）　八島へおし渡らむとての夜半（平家、九）

（C）形容詞の語幹について、形修語を造る場合。

有難の仰言　面白の舞　はかなの人の命　あぢきなの世　あやしの事

うらめしの振舞

（D）副詞の語幹について、形修語を造る場合。

まれの細道　なほざりのすさび　わくらはの妹背の習　さやうの遊び者

かやうの雲上の交り

（E）準體言について、形修語を造る場合。

回復するの望　花を見るの記

○一音の代名詞に「の」のついた「この」「その」「かの」「あの」等は、被修飾語を强く指示するに用ひる場合の多いことは、既に述べた。殊に、口語に於ては、「正成を崇拜して、その遺跡をたづねた」のやうに用ひる「そ」が、代名詞の性質を有する（正成の代りに用ひたのである）だけで、一音

では代名詞として用ひられることはない。

すると、「わが」「この」「あの」「どの」を各一語と見ねばならぬ事になるが、然らば、これ等は何品詞に收容すべきか。現在普通に行はれて居る文法書には、これを受け容れる品詞は立てゝない。中には、形容詞に入れるもの、代名詞と見るもの等もあるが、或一點が似て居るからといふなら、これ等を動詞に編入しても宜しいはずである。

次に、ク活用形容詞の語幹および、副詞の語幹は、單語と見ることは出來ない（ク活用の語幹でも、白・黑等は一方で名詞となるから別。又、遙かに、にこりとなどは、に・とがなくても現實に副詞として用ひるから、遙か、にこりはそれだけで立派な單語である）。

すると、前に擧げた「有難の」「まれの」等をまとめて各一單語と見ねばならず、從つて、口語の「わが」「どの」などに就いて言つた事が、そつくりこれ等に當てはまる。

右の如くであつて、現在普通に行はれる文法組織の上では、これは止むを得ない事であるから、予自身としては、右に述べた「の」の上にあるものは、便宜上、總べて體言と見なして取り扱ふことにして居る。

尚、これに就いては、昭和六年一月の『國語と國文學』誌上で「等閑に附された一品詞」と題して卑見を稍々詳しく述べてあるから、參考されたい。

二、連體形の用言・連體形で終る活用連語、及び末にそれ等のある語の一團。

泣く子に蜂。　出る杭は打たれる。　遠い親類より近い他人。

蒔かぬ種子は生えぬ。　死にし子、顔よかりき。

りこうな子より馬鹿な子がかはいゝ。　蓼食ふ虫もすき〴〵。

嘘から出たまこと。

〔二〇五〕　副詞的修飾語となるものは、本來の副詞・轉來の副詞・及び接續助詞「ば」「とも」「ど」「ども」「を」「に」「が」（これ等に相當する口語の助詞を含めていふ）等のついた一團の語である。

○接續助詞がついて副修語となるものは、第二一章に述べる（第二一六項の三參照）。

〔二〇六〕　修飾語には、更に他の修飾語のつくことがある。

（甲）　形修語についた例。

いと激しき雨降る。

大層立派な羽織が出來た（ロ）。

最も明白なる事實。

これよりももつと面白い話（口）。

（乙）副修語についた例。

頗る嚴格に教育す。

大層穏かに言ひ聞かせた（口）。

やゝ詳かに報告す。

かなり贅澤に暮して居る（口）。

右の諸例でわかる通り、第二次的修飾語は、總べて程度を表す副詞である。

〇右の諸例と紛れ易いものがある。たとへば、

友は我が政界の有力者となれり。

從弟からの手紙の內容を申しませう（口）。

の旁線を施した部分の解釋である。これは次の（甲）の如く解すべきものである。

（甲）我が政界の有力者。　從弟からの手紙の內容

（乙）我が政界の有力者。　從弟からの手紙の內容

即ち「我が」「從弟からの」は、「政界」「手紙」に係るものたることは、「政界が」「政界を」「手紙が」「手紙を」となつても、依然としてつくことでわかる。すると、右の文に於ても、「我が」「從

弟からの」は、下が「政界の」「徒弟からの」と、形容詞的修飾語になつて居る爲についたのでないと斷ぜられるのである。

〔二〇七〕　主語・述語・補語、及び修飾語は、文の構成に關與するものである。よつてこれ等を、文の成分といふ。

また、前三者の各々に修飾語のついたものを、それぞれ主部・述部・補部といふ。時には、述部と補部とを合せたものを、述部と稱することがある。

第十九章 獨立語

〔二〇八〕 文によつては、第十七・十八章に擧げた、主部・述部・補部の、何れにも屬せぬ語の存することがある。これを獨立語といふ。

〔二〇九〕 獨立語となる主なものは、次の通りである。

一、第二種・第三種の接續詞（第一三二項參照）

花咲き、かつ鳥鳴く。

雨は降るし、それに風までが強くなつて來た（口）。

彼は必勝を期したり。されど脆くも敗れたり。

私もあの人の行くのをとめた。けれども何うしても聞き入れなかつた（口）。

○獨立語は、主部・述部・補部以外に立つものを意味するから、次の例のやうに、それ等の何れかに含

まれるもの（即ち本書でいふ第一種接續詞）は、獨立語とは見ない。

我が國の醫學及び軍事は（主部）、最も進步せり。

人を遣して、醫學並に軍事を（補語）、研究せしめたり。

われ等は、大に飮みかつ食ひたり（述語）。

〇

右の第一種の接續詞をも、獨立語と見る學者があるが、それでは「獨立」の意如何を知るに苦しむ。これ等をしも獨立語と稱すべくんば、次の諸例の—印の助詞も、すべて獨立語と言はねばならぬ理である。然るに、助詞は成分の中に含めて、接續詞は一樣に獨立語とするのは、合理的な取扱ひではない。よつて、本書では、接續詞を用法の上から、他の成分の中に包含されるものと、獨立語になるものとに分類したのである。

佐藤と井上が缺席した（ロ）。

佐藤や井上を呼んで來よう（ロ）。

あれは佐藤か井上だ（ロ）

二、感動詞。

あゝ、わが友は逝けるか。

あはれ、夢かや現か、佛御前と見奉るは。

おや、誰か倒れて居る（口）。

おい、其處のけ（口）。

はい、畏りました（口）。

三、呼掛の體言。

少納言よ、香爐峰の雪はいかならむ。

佐藤君、あそこに行つて見ませうよ（口）。

君、ちよつとナイフを貸してくれ給へ（口）。

○これは、感動詞と一緒に現れることがある。

いかに、佐々木殿、高名せんとて不覺し給ふな。

もし〳〵、車屋さん、こちらですよ（口）。

○この體言が、修飾語を有することがある。

滿堂の諸君、私はこれから……（口）。

軒端の梅よ、春を忘るな。

のである。

〔二一〇〕　獨立語の普通なのは、前項に述べた通りであるが、尙、次のやうな語も獨立語と見るべきものである。

大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す。

右の文に於て、主部は「萬世一系の天皇」である。述語は「統治す」である。「之を」は補語である。殘りの「大日本帝國は」は、特に注意を惹く爲に、文の初に提出され、意味の上からは、重大なものであるが、文の構成の上から言へば、下にこれを代表する「之を」がある爲に、成分外に立つものである。かういふ場合、この「大日本帝國は」の種類をも獨立語といふ。

〇前の例に於いて、若し「之を」を略して、

大日本帝國は、萬世一系の天皇統治す。

とすれば、「大日本帝國は」は、單に補語を文首に提出したに止つて、文の構成に關與するもの故、これを獨立語とは見ない。

次に、右の種類の獨立語の例を、やゝ多く擧げて見よう。

遠く異朝を問らへば、秦の趙高・漢の王莽・梁の周伊・唐の祿山、是等は皆舊主先皇の政事にも不從……滅びし者共也（平家、一）

又次の女君、これも内侍のかみにて……同じ年（寬仁二年）の十月十六日に后にゐさせ給ふ（大

鏡、七）

道長大臣の御太郎、たゞ今の關白左大臣頼通のおとゞ、これにおはします（同）

女房の有様ども、かの初雪の物語の女御殿に參り込みし人々よりも、是れはめでたし（榮華、輝く藤壺）

毎度大敵を攻めなびけしこと、是全く武略の勝れたるにはあらず（神田本太平記、一六）

天下の人に指をさゝれん事、何の顔あつてかこれを御聞き忍び候べき（同、十）

松島・嚴島・天橋立、これを日本三景といふ。

彼陣と千種殿の陣と、其間わづかに五十餘町が程なれば……（神田本、八）

拷問のこと、暫く其沙汰をさしおくべし（同二）

今日わりご持たせて來たる人、その名などぞや今思ひ出でむ（土佐、正月七日）

大納言……二聲三聲ぞをめかれける。その體、冥途にて娑婆世界の罪人を……阿房羅刹が呵責すらんもこれには過じとぞ見えし（平家、二）

右のやうに、提出した獨立語は、必ず代名詞によつて下に代表されるが、又左例のやうに、副詞の「かく」が現れることもある。

數千人の兵同時に猛火の中へ落ち重つて……燒死にけり。その有様、偏に八大地獄の罪人の……

猛火鐵湯に身をこがすらん苦みもかくやと思ひ知られたり（神田本、七）

また、提出した獨立語に、特に注意させる爲に、助詞「は」をつけることがある。

又次の女君は、それも内侍のかみ……東宮の女御にて侍はせ給ふ（大鏡、七）

此所を支へ申さで通し參らせん事は、其罪科のがれ難く存候ほどに（神田本、一七）

馬上、上が上に落重つて死にける有樣は、傳へ聞く治承の古、平家十萬餘騎の兵、木曾が夜討に驅立てられ、くりからが谷に埋みけんも、是には過ぎじと覺えたり（同）

かの筑紫には、赤もがさかしこにもいみじければ、帥殿急ぎ立たせ給へども……（榮華、浦々別）

子ならざらん者は、誰かたゞ今わが身の上をさしおきて是程までは悅ぶべき（平家、一二）

第二十章　成分の位置

〔二一一〕　成分の常位

文の成分には排列上自ら一定の順序がある。既に擧げた諸例によつて察知せられるが、次に二例を示す。

（一）

主	副修語	補部	補部	述語
私は	嘗て	近所の子等に	美しい繪本を	やつた。
		形修　補語	形修　補語	

（二）

主部	副修語	補部	補部	述語
その子等は	いそ〳〵と	それを	めい〳〵の家に	持歸つた。
形修　主語			形修　補語	

これによつて次の通り言ひ得る。

一、主語は文のはじめにある。

二、述語は文の終にある。

三、補語は、主語と述語との間にある。

四、形容詞的修飾語は、被修飾語の直上にある。
五、副詞的修飾語は、主語の次にある。
六、獨立語は、多く文の上にある（第十九章參照）。

右は文の成分の常位である。

〔二一二〕　成分の倒置

文は、文意を強めたり、語調を整へたりする爲に、前項で述べた順序によらぬことがある。これを成分の倒置といふ。

一、思ひきや（述語）、此處に君を見んとは（補部）。
二、船には（補）、船長と老砲手とのみ（主語）、殘り居たり（述語）。
三、何事を（補）、いかなる者が（主）、書きつけたるやらん（述）。
四、電燈は（補）、誰が（主）、發明しただらうか（述）。
五、よき日は（主）、明けぬ（述）、さわやかに（副修）。
六、大層（副修）、天氣が（主）、穩かになつた（述）。
七、續け（述）、者ども（獨立）。

八、慈悲に富める主人も（主）、逝きぬ（述）、あゝ（獨立）。

○助詞「を」のつく補語を、文の始めに置く時には、「を」を略して、一見主語のやうに見えることがある（例四參照）。たとへば、

ビールは大麥で造る。

は「人が（主）、ビールをば（補）、大麥で（補）、造る（述）」である。また、

あれに見え候ふは粟津の松原と申し候（平家、九）

も、「見え候ふをば（補）、世人が（主）、粟津の松原と（補）、申す（述）」である。（「見えるのは粟津の松原だ」といふ文と同じ意にもいふが、こゝでは成立を述べるのである）。古く、人名や地名は、世人がさう稱する趣にいふ。

こゝに鳥羽禪定法皇と申し奉るは、天照太神四十六世の御末……（保元、上）

濱の宮と申し奉る王子の御前より……（平家、十）

第二十一章　句と節

〔二一三〕　句――連語

「私の末の弟」「につこり笑つた」のやうに、二單語以上が集合して、一の意義を表すものを句といふ。

○句は、語と語との關係が、修飾・被修飾の關係に立つものであつて、文の主體・敍述の關係に立つものとは異る。この句を連語と稱する人もある。

〔二一四〕　句には次のやうな種類がある。

一、體言句。

全體として體言的性質のもの。

激しき雨　降る。

友は政界の有力者となれり。

右のやうに、これは文の主部・補部となる。

二、形容詞句。

全體として體言を修飾するもの。

いと激しき雨。　いと激しく降る雨。

日の丸。　日の丸の旗。

右のやうに、これは形容詞的修飾語となるもので、被修飾語と合して見れば體言句となる。

三、副詞句。

全體として用言・活用連語を修飾するもの。

風やゝ激しく吹く。

風はよほど穩かになつた。

右のやうに、これは副詞的修飾語となるもので、被修飾語と合して見れば、次の述語句になる。

○形容詞句・副詞句は、成分の上から言へば、修飾語の一種である。

四、述語句。

全體として述語となるものである。

風激しく吹く。

弟は大層静かに勉強した。

○次のやうに、用言と用言、用言と助動詞の合したものは、特に活用連語と稱する事は、既に述べた。活用連語は、述語となると同時に、準體言となつて、體言句と同じく用ひられ、その末が連體形となつて形容詞句ともなり、又末が連用形となつて副詞句ともなる。

一生は過ぎ易し。（述語）

櫻はもう散るだらう。（同右）

愼しまざるべからざるは人の言なり。（準體言、主語）

彼は常に樂觀的なるべきを說く。（同、補語）

彼は往々言ふまじき言を吐き、すべからざるふるまひをなす。（形容詞句）

さる事は、あるべくも思はれず。（副詞句）

〔二一五〕　節―從屬節と對立節

「千鳥　鳴く」「日が　暮れる」は、共に主語・述語を具へた獨立の文である。併し、次の、

予は千鳥鳴く海岸を愛す。

弟等は日が暮れるまで遊んだ。

に於いては、大きな文の一部分である。このやうに主語・述語を具へたものが、他の大きな文の一部分になつてゐる時は、これを節といふ。

節は大別すると、從屬節と對立節との二種に分れる。

〔二二六〕　從屬節は、文の一成分となつてゐる節である。これは更に四種に分れる。

一、體言節。

體言的性質の節で、文の主語・補語となる。

色の白きは七難かくす。

予は時のうつるを知らざりき。

花の散るは蝶の舞ふに似たり。

敵のま近く押寄せ來れるを見て、將卒は一氣に之を擊破せんとせり。

右のやうに、體言節は、用言又は、助動詞の連體形に終る。口語では、この際「の」を用ひて、「白いのは」…、「うつるの」を…、「舞ふの」に…のやうにいふ。

二、形容詞節。

體言の修飾語となる節である。

水の流るゝ音は、玉をころがすが如し。

孔子は正義の念強き人なりき。

弟のつれて來た子供は、佐藤の二男だ（ロ）。

記事の面白い雜誌がないか（ロ）。

右のやうに、形容詞節は、用言・助動詞の連體形に終り、被修飾語と合して見れば、主部・補部となる。

○形容詞節は、成分の上から言へば、修飾語の一種である。

三、副詞節。

用言・活用連語を修飾するもの。

彼は語氣あらく詰問せり。

杉の若木が勢よく立ち並んでゐる（ロ）。

右のやうに、文の一成分（用言・活用連語から成るもの）に係る副詞節は、用言の連用形に終るを常とするが、次の例のやうに、下の全文に係る副詞節は、接續助詞に終る。

風吹けば、波立つ。

時は到れども、人は集らず。

日暮れかゝるに、宿るべき家なし。

夜の更くるにつれて、燈火は次第に暗くなりぬ。

君が勉強するなら（ば）、僕は歸らう（口）。

客が見えたら（ば）、直ぐ知らせてくれ（口）。

私が家を出ると、雨が降り出した（口）。

雨が降つたので、花の色がさめた（口）。

この本は面白くないが、私は終まで讀んだ（口）。

私がとめたのに、あれは出て行つてしまつた（口）。

○副詞節は、成分の上から見れば、修飾語の一種である。

○接續助詞に終る節であつても、副詞節でないものがある（第二一七項參照）。

四、述語節。

文の述部となる節をいふ。

東京は面積大なり。

象は鼻長し。

日本人は毛髪黒し。

右の例に於いて、「大なり」「長し」「黑し」の直接の主語は、「面積」「鼻」「毛髮」である。「東京は」「象は」「日本人は」は、「面積大なり」「鼻長し」「毛髮黑し」の主語である。よつて、「面積大なり」「鼻長し」「毛髮黑し」を述語節といふ。

述語節に對する主語、即ち、「東京は」「象は」「日本人は」を、總主語又は文主といふ。總主語には、助詞「は」がつき、述語節は、形容詞か・形容動詞か、他に比較する意のある動詞である（後の例參照）。

○述語節は、「面積大なる東京」「鼻長き象」のやうに用ひれば、形容詞節になる。

○

總主、述語節については、學界でも異論が多く、未だ一定の學說がない。本書では姑く、多くの教科書の所說に從つて、これを述べたが、その範圍も各書まちまちである。たとへば、

東京は　人口多し。

瀨戶內海は　波穩かなり。

の「東京には」「瀨戶內海にては」と解されるものまで、總主と說く人がある。甚だしきは、「春は花咲き、秋は葉落つ」の「春」「秋」までも總主とした書を見たことがある。本書では姑く、總主・述語節を說くが、「には」「にては」と解せられるものは、補語を提示したものと見て、總主とはし

ない。從つて、さういふ文の述語節のやうに見えるものは、普通の主語と述語とに分けて見るべきだとの見解を取る。具體的に例示すれば、次の通りである。

京都（に）は〔補語〕、舊蹟〔主語〕、多し〔述語〕。

山中（にて）は〔補〕、水〔主〕、淸し〔述〕。

夏（に）は〔補〕、溫度が〔主〕、高い〔述〕。

尚、總主、述語節の例を二三加へ置く。

鼠は　性敏捷なり。

この香水は　匂が外のと違ふ（ロ）。

某は　度量大ならず。

燕は　飛翔力强し。

某は　顏が大きい（ロ）。

○

節を「文の獨立せざるもの」とする人もあるが、本書では、「主語・述語を具へたものが、他の大きな文の一部分となつてゐる時は、之を節といふ」と定めた。從つて、

私の買つた本は此處にあります。

の傍線を施した部分は、獨立を失つて居る點は何人にも異論はないが、他の說からいふと、節ではあり得ないはずである。何となれば、「買つた」に對して、「買はれたもの」を示されば、纏まつた思想を表さぬ。從つて、文でないと說くからである。即ち、この說からは、「私の買つた」は、節なるか否かは全然問題にならぬのである。けれども、本書からいへば、主語「私の」、述語「買つた」があるから、立派な節である。

〔二一七〕　對立節—獨立節

對立節は、互に同等の地位を保つて對立する節である。よつて之を獨立節ともいふ。

一、臣は君を以て心とし、君は臣を以て體とす。
二、日月は一物の爲にその明を暗うせず、明王は一人の爲にその法を枉げず。
三、風ます〱つのりて、雨またいよ〱はげし。
四、山高く、水清し。
五、夏は暑いし、冬は寒い（ロ）。
六、直段も安くて、品も惡くない（ロ）。
七、風も吹けば、雨も降る（ロ）。

右のやうに、上節の末は、用言の連用形、助詞「て」の場合が最も多く、口語、特に對話體では、助詞「し」（例五）、「ば」（例七）の場合が最も普通である。

○口語對話體では、上句の末の連用形なのは、殆ど用ひない。

○形容動詞（ナリ活用・タリ活用）の連用形を中止に用ひる所は、普通次のやうにする。

助詞「して」「て」を副詞につける。

月明かにして（て）星稀なり。

論旨整然として態度また堂々たり。

副詞のまゝで置く。

月明かに星稀なり。

性質が穏かで、しかも見識が高い（口）。

○カリ活用の形容動詞を中止に用ひる所は、形容詞の連用形がその代用をする。

「して」は又、形容詞の連用形にもつく。

夜風凉しくして月清し。

指定の助動詞「なり」（口語「だ」）を中止に用ひる所には、助詞「にして」「にて」、「で」（口語）を用ひることが普通である。

正成は忠臣にして（にて）尊氏は逆賊なり。

兄は政治家で、弟は文學者だ（口）。

この場合、助詞を略することがある。

人は人（にして）、我は我なり。

君は君（で）、僕は僕だ。

第二十二章　各成分の性質と省略

〔二一八〕　主語・述語の省略

およそ文たる以上は、理論上、主語と述語とは、必ず存在すべきはずであるが、實際の場合には、誤解を生ずる憂のない限り。省略されることが多い。特に命令禁止を表す文の、主語の略されることは、珍らしくない。

一、主語を省略する場合。

（人々）人を對手にせず、天を對手にせよ。

（人々）品物に手を觸るべからず。

（君は）東國へ行き給ふと（我は）聞きしに、（君の）今また此處に來られしは何故ぞ。

（時は）もう五時だ（ロ）。

二、述語を省略する場合。

必要は發明の母（なり）。

三人寄れば文珠の智慧（出づ）。

先生が何うしてこちらへ（お見えになつたでせう）（口）、

僕はこれから出かけるつもりですが、君はどう（しますか）（口）。

お早う（ございます）（口）。

○次のやうに、補語につく助詞と述語とを略すことがある。

長男を義家（といひ）、三男を義光といふ。

兄は東京（に住み）、弟は大阪に住んで居る（口）。

○述語の一部が省略されることがある。

お前も一緒にお出で（なさい）〔お出でな（さい）〕

〔二一九〕 一般の立て方では、補語は、用言だけでは意義が不十分な爲に、その補充として要求されるものであつて、これなくば纏まつた思想を表し得ざるものである。從つて、補語を用ひた文から、これを取り去れば、文としての資格を失ふものであると說かれる。本書では、形式主義によつたので（第二〇〇項參照）、多少趣を異にするが、何れの主義によつても、補語の省略は認めざるを得ない。

一、次のやうな場合である。

　飛行機は次第に上方に昇りたり。

　エレベーターで下におりた（口）。

右の文中の「上方に」「下に」は、これを取除いても、思想上、何等の缺陥を生ぜぬから、略されることが多い。何となれば、「昇る」「おりる」には、本來「上方に」「下に」の意を含むからである。左に擧げる動詞も同様のものである。

　上にあがる（浮ぶ）。　下にくだる（沈む）。

　上流にさかのぼる。　上から落ちる。

　下から飛びあがる。　後をかへりみる。

　前に進む。　後方に退く。

但し、これ等の「上に」「下に」等は、一般的な意味でなく、上下の或特定の點を指す場合には、濫りに取り去ることが出來ない。殊に、次の例のやうに、具體的に、形の上に表された場合は、言ふまでもない。

　富士山に登る。　社會の下層に沈む。

二、同じ用言でも、用ひ方によつては、或は補語を要求し、或は補語を要求しない。

たとへば、單に今日の温度をいふには、次の如く云へば十分である。

今日は寒し。　今日は寒からず。

けれども、これを他と比較する場合には、次のやうに補語を必要とする。

今日は昨日より寒し（寒からず）。

三、その時の事情によつて、誤解の生ずる憂のない場合には、省略されることが多い。

與一目をふさいで、「南無八幡大菩薩……願はくは（われに）あの扇の眞中射させてたばせ給へ……今一度（われを）本國へ歸さむと思召さば、（われに）この矢はづさせ給ふな」と心の中に祈念して……與一鏑を取つて（弓に）つがひ、（弓を）よつぴいてひやうと放つ（平家、一一）

確かに敵が（此處に）來たはずだ。おい娘、お前は（それを）知つて居るだらう（口）。

〔二三〇〕　形容詞的修飾語にもいろ〳〵ある。

一、補充的形修語。

二兎を追ふものは一兎をも獲ず。

抑南都を燒き給ひし事は、太政入道殿の仰にて候ひしか（長門本平家、一七）

將來諸君の研究に待つ所が非常に多い（口）。

その山を見るに更に登るべきやうなし（竹取）。

京中の勢は先づ貝六條河原に馳集りてあきれたる體にて控へたり（神田本太平記、八）

山徒皆かちなりける上重き鎧に肩をおされて……（同）

主上……やがて還幸なるべき由を御出されけり（同、二七）

病の未だ見えぬさきに豫て療治を加ふる（同、一九）

畫師は鶴の臥したるさまを描けり。

御館を出で給ひし日より此處かしこに追ひ來る（土佐日記）

翁心地あしく苦しき時もこの子を見れば苦しきこともやみぬ（竹取）

右の諸例の修飾語（—印）は、これを取り去ると思想上に缺陷を來すことは、假りに、第一例と、最後の例とは、次の如くなつて、意味をなさなくなるのでも知られる。

ものは一兎をも獲ず。

翁、時もこの子を見れば、こともやみぬ。

即ち、これ等の修飾語は、前項で述べた、補語の大部分と性質を同じうするもので、必然的に要求されるものである。この種の形修語を補充的なものと稱する。

○右諸例の被修飾語は、大方は形式名詞（第一六項參照）と見るべきものである。

二、制限的修飾語。

「花」「鳥」は一般的な名であるが、「梅の花」「美しい鳥」といへば、特殊な、花・鳥である。このやうな形修語を制限的なものと稱する。これを取り除くと、全然意味をなさぬか、事實を誤り傳へる文となるものがある。

わが軍は、敵の軍を擊破せり。
このペンは、予のペンにあらず。
現代にはえらい政治家が居ない（ロ）。
東京市内には草葺の家は殆どない（ロ）。
幼年時代の乃木將軍は虚弱であつた（ロ）。

一般的な事物を特殊化する、形容詞的修飾語の重大なものなることは、右諸例の通りであるが、これが又、しば〳〵省略されるのである。たとへば、「花」と言へば、「櫻の花」を意味するが如きは、普遍的なものであるが、各地方・各社會にこの種のものが頗る多い。

（私の）父は、（私の）弟をつれて散歩に出かけました。
（あなたの）御兩親に何卒宜しく（御傳言を願ひます）。

などのやうな言ひ方も普通である。

石童丸も之を見て、（その）元結ぎはより（おのれの）髪を切る（平家、十）

木曾殿、（その）内兜を射させ、痛手なれば（その）兜の眞甲を（乘りたる）馬の頭におしあてゝうつぶし給ふ所を……すでに（木曾殿の）御首をば賜りけり。やがて（木曾殿の）首をば（おのが）太刀の先に貫き、高くさしあげ大音聲をあげて……と名のりければ（平家、九）

○右のやうに一般事物を表す名詞を、そのまゝの形で特殊な事物に用ひるのは、國語には非常に多い。

三、說明的修飾語。

被修飾語の一般の通性を述べるだけで、他と區別する意のない形修語がある。

これはまだ搗いてない玄米だ。

船の出入する港。　水に圍まれた島。

いやしき賤の女。　天地人の三才。

卽ち、「玄米」とは、精げない米の名であるから、「まだ搗いてない」は、玄米の說明であつて、玄米の中の特殊なものを、意味する爲に用ひたのではない。この種の形修語を說明的なものと稱する。併し、形の上には現れて居ないが、たとへば、「船の出入する港」に於いて、若し普通の港よりも船の頻繁に出入する意味に用ひたら、それは制限的形修語になる。

說明的形修語は、固有名詞や代名詞につくこともある。

東海の島に據つた日本。　中京と稱せらるゝ名古屋市。　大槻博士の言海。

一生を武人で終始した乃木將軍。

中年以後社會事業に身をさゝげた彼。

說明的形修語の有無の、文の成立に關係せぬことは、その性質上明かなことである。

〔二二一〕　形容詞的修飾語の、文の成分としての地位（價値）は、前項に述べた通りであるが、更に形修語が、連體形の用言・活用連語で終る場合に、それ等と、被修飾語たる體言との間に成立つ關係を見る必要がある。たとへば、

堅き氷。　鳴く虫。　詳かなる說明。

淸かりし心。　洋行せられたる某。

等の用言・活用連語は、被修飾語の屬性或は動作を表して、その關係は直接的のものであるが、

ひなの住居を思ひやりて心苦しく思ひつる涙は更に數ならず（神田本太平記、卷二）

に於いては、「涙が」思つたのでもなければ、「涙を」「涙に」「涙と」、乃至「涙から」思つたのでもなく、その關係は間接的である。

よつて予は、これ等の關係を大きく二つに分けて、（一）被修飾語と用言とが密接不離のもの、（二）そ

れが直接ならぬものとにする。

次の例は、大體神田本太平記によつて、表記法を、普通のに改めたものである。

一、關係の緊密なもの。

これは大體、被修飾語が、用言に對して或格に立つやうに、言ひ替へ得るものである（―印を附したものは被修飾語）。

白く淸げなるはだへ（肌ガ白ク淸ゲデアル）。
久米河の合戰に組んで討たれし敵（敵ガ……討タレタ）。
たけ廿丈ばかりなる大蛇（大蛇ノ長ガ廿丈バカリデアル）。
つば元の血になりたる大太刀（大太刀ノツバ元ガ血ニナツタ）。
山伏の祕して汲む水（水ヲ山伏ガ汲ム）。
切岸の上に橫たへ置きたる大木（大木ヲ橫タヘ置イタ）。
罪なき人民（人民ニ罪ガナイ）。
色紙押散したる障子（障子ニ色紙ヲ押散シタ）。
尊氏がこもつて候東寺（東寺ニコモツタ）。

異る格に立つ體言を要求する所の用言が、二つ以上現れることがある。

うてども、行かぬ痟牛（牛ヲ人ガ打ツ、牛ガ行カヌ）。

春宮は「連枝の御兄弟に、將軍の宮とて、直義朝臣の先年鎌倉へ下し進らせられたりし先帝の第七の宮」と一つ御所に……（宮ガ御兄弟デアラセラレル。宮ヲ世人ガ將軍ノ宮ト申上ゲタ。宮ヲ直義ガ鎌倉ニ下シ參ラセタ）。

其比菊亭殿に、「御妻とて、みめ形わりなく、品いやししからで、なまめいたる女房」ありけり（女房ヲ御妻ト云ッタ。女房ガ美シカッタ。女房ガ上品デアッタ。女房ガナマメイテ居タ）。

二、關係の密接ならぬもの。

これは用言と被修飾語との間に直接の關係はないが、修飾語全部が、被修飾語の實質補充の役目をするものである。從つて、形式名詞の被修飾語となることは勿論で、實質名詞でも、特殊な內容を要求する際に現れる。

「見る人これを羨まずといふ」事なし。

「兵糧運送の路絕えて千早の寄手以ての外氣を失へる」由聞えければ……。

是「もとより願ふ」所の成就也。

「俄に六波羅の北方をあけて仙院皇居となす」體、只騷しかりし有樣也。

「人して斯くと云ふべき」便もなければ。

「御勢のつかぬ」前に山門を攻めよ。

「一の太刀に胸を透されてあつと云ける」聲に番衆共驚き。

此比「南の風に雲消えて河水岸にあまる」時なれば。

「まだしのゝめの明果てざらん」比柚山の城……。

右のやうに、被修飾語が下の語に對して、ガ格、ノ格、ニ格等に立つことあるは、（一）の場合も同樣である。尙、これ等のことは、口語でも同樣であるから、特記しない。

〔一二二〕　副詞的修飾語

副詞的修飾語は、一般に、用言の意義を精密にする爲に用ひるもので、思想の完・不完に關係せぬものだと說かれてゐる。然れども、それは過言であつて、これを除去すると纒つた思想を表さぬものあり、殊に本書のやうに形式主義によるものは、仔細に考究せねばならぬ。

一、左例のやうな修飾語は、これを取除くと、事實に反する意となる。

風も激しくは吹かざりき（穩かに吹いたのである）。

お花は物をぞんさいに取扱はない女中だ（丁寧に取扱ふのである）。

〇右のやうに、用言に打消の意のついたものは、その副詞の關する限りに於いての否定であるのに、こ

れを取去ると、全部の否定になる爲に、事實との相違を來すのである。

○右の「激しく」「ぞんざいに」は、動詞の「吹く」「取扱ふ」だけに係り、從つて意味からいふと、次のやうに、副詞と動詞との連合した全體を否定したものである。

激しく吹かざりき。

ぞんざいに取扱はない。

○然るに、國語には、これと形式が同じで、兩意に解せられるものがある。たとへば、左例のやうなものである。

A　確かに知らじ（確カニ知ツテ居ルコトハアルマイ。不正確ニ知ツテ居ルダラウ）。

B　確かに知らじ（知ラナイコトガ確カダトイフ確信ヲ表ス）。

Aの場合は、助詞「は」をつけて、「確かには知らじ」などいへば、區別はつくが、次に擧げる「甲のやうに」（本書では補語になるが）の如きは、如何ともせん術がない。

お前も甲のやうに勉强しないと落第するぞ。

卽ち、この文では、甲は勉强家であるか、怠惰者であるか、明かでない。從つて、「甲のやうに」の係る所が、「勉强し」か、「勉强しない」か、甲を知る者にして始めて理解されることである。

○又、左例のやうに、疑問文に用ひた副修語は、これを除去すると、文の意が一變する。

君は國家の前途をいかに見るか。
お前はどう御返事申上げたのか。
太郎等はなぜあの花を折つただらう（か）。

卽ち、第一例で言へば、見方に就いての問が、見るか否かの動作についての問に變るのである。これ等は、單に用言の意味を、精密にするに過ぎないものとは言ひ得ない。

二、國語の副詞、及び普通に副詞と說かれる形容詞の連用形には、體言の屬性を表すものがある。たとへば、

將軍は意氣揚々と凱旋せり。
鶯も聲さやかに鳴き初めぬ。
登山隊も元氣よく出發しました。

のやうに、それぞ〳〵主語を持つ例では、「揚々たる意氣にて」「さやかなる聲もて」「よい元氣で」の意なることが明かである。從つて、これ等の「揚々と」「さやかに」「よく」を取り去つて、「意氣」「聲」「元氣」だけを取殘すことの不可能なことは、言ふまでもない。

尙、右の文に、「意氣」「聲」などの主語は略しても、大方同じ意味に解されるが、「元氣よく」の「元氣」を略すると、「よく」の意は、頗る不安定なものとなる。

○次に本書の副修語の中には、副詞・形容詞の連用形から成つて居るが、用言の意義を補充する役目をなすと見るべきものがある。たとへば、

氣分がさわやかになつた。

やすい品物を高くいふ。

即ち、「さわやかに」「高く」は、「なつた」「いふ」の狀態・程度を示すでもなければ、又その敍述を助けるものでもなく、その意義の缺陷を補ふものであつて、「さわやかな氣分と」「高い品物と」といふと同樣、普通の文法書でいふ補語である。

このやうな用ひ方の副修語は、全く取除くを得ないものである。よしそれを除去して、何等かの意に解せられても、もとの主眼とした點は失はれてしまふ。

次に尙數例を擧げよう。口語の例に限つたが、文語とて同樣である。

御機嫌うるはしう（麗しい御機嫌と）拜しました。

御めでたう（めでたいと）存じます。

帽子を大きく（大きい帽子に）造る。

あの男を怖しく（怖しい男と）感じた。

風俗がよく（よい風俗に）改まつた。

電燈の色が青く（青い色に）變つたね。
人柄が穩かに（穩かな人柄と）見える。
お琴を大變結構に（結構な演奏と）拜聽致しました。
私も今度の會はいやに（いやな會と）思つた。

○右のやうな用ひ方は、副修語それ自體の性質から來るものでないことは、次の用例を參照すれば、容易に理解される。

（この石を初は堅く（堅い石と）思つて居た。
（油斷が出來ないと堅く思つた（思ふ度合をいふ）。
（あの男（を）は最初から怪しく（怪しい男と）見て居た。
（物を言ふ時に怪しくふるへた（ふるへ方が普通でない）。
（態度が實に立派に（立派な態度と）見えた。
（本人の前で立派にことわつた（ことわる樣子が立派であつた）。

○文によつては、その何れに解すべきか、判明し難いものがある。たとへば、

今朝の地震（を）は強く感じた。

の如きは、「強い地震と感じた」とすべきやうであるが、また「感じ方が強かつた」とも取られるの

である。

○同じ語でも、意味によつて、その係る所の異るものがある。たとへば、

さほどでもない人を大變よくいふ。

絲を長く切りそろへる。

等の「よく」「長く」は「よい人と」「長い絲きれに」であるが、

あの人は此處にはよく來る。

絲を切り揃へるのに長くかゝる。

等の「よく」は「度々」、「長く」は「長時間」の意となつて、下なる用言を修飾するが如くである。

三、副詞には、敍述の作用がない。形容詞もまた、敍述語としては、動詞に比して遙に不完全である。その缺を補ふ爲に、動詞「ある」、助動詞「のです」などと一緒に用ひるのである。その中、形の上に變化を來したものは、合して一語と見、形容動詞と命名して取扱ふから、こゝには問題にはならぬが、各別の形を以て現れるものは、一考する必要がある。たとへば、口語の、

こゝは靜かではありません。

それは確かでございますか。

隨分お早いんですね。

あなたは何時もお若くいらつしやる。

そんなに怖しくもありません。

右の副修語（―印）は、普通下にある用言を修飾すると說くが、實は前に言つた通り、これ等の「靜かで」「お若く」等が主なるものであつて、下にある用言は、その作用を助ける補助語たるに過ぎないのである。言はゞこの關係は。動詞と助動詞との間に於けるものと同樣である。故に、普通の說き方は、本末・輕重を顚倒したものである。

以上のやうに、仔細に考へれば、副修語にもいろ〳〵あるが、今は姑く一括して、たゞその性質が、必ずしも同一でないことを明かにして置くに止める。

第二十三章　特殊な形をなす成分

〔二三三〕　形容詞的修飾語は、被修飾語たる體言の上にあることは、既に述べたが、一被修飾語に對して、二つ以上の形修語のつく時も、原則としてはこれに從ふ。然れども、文意を明かならしめる爲、又は修辭上の關係から、これ以外の形を採ることがある。その種類は次の通りである。

〔二三四〕　第一の形は、左例のやうに同一の被修飾語（主格又は補格に立つ。以下一々ことわらぬ）を二度出し、前後を屬格を示す助詞「の」で接續するもの。

「其次にまします上臈の頼朝一期の後は我に給て孫にて候者にたぶべきよし仰られつる上臈」こそ（以上、主部）藤原氏の先祖春日大明神にてましませ（長門本平家、九）

法印は（主語）、「うるはしき人の心正直に事あやまつまじき人」にて（以上、補部）おはしければ（同、七）

右の例に於いて、「　」で圍んだ語は、全部で一體言の資格を有するものである。また、その第二の體言が、第一の體言を代表する「もの」で現れることがある。

「歌道の方にもやさし男の子の山王にかうべを傾け參らせたる者」の固めたる門（長門本二）

「見なれたりし人の問くる者」なし（同、一八）

「片田舍の侍共のこはらかにて入道殿の仰より外は又恐しき事なしと思ふ者共」難波妹尾を始として……（平家、一）

又、初の體言には、修飾語のつかぬことがある。

「人の讒言しつる者」のあるにこそ（長門本、二）

〔一二五〕　第二の形は、下の體言を全然略すものである。たとへば、

するといふ馬の一日に千里を飛ぶ馬（もの）に乘つて、

といふべきを、次の如くいふ類である。

「するといふ馬の一日に千里を飛ぶ」に乘つて……（平家、十）

しかも、この形は、實際の文においては、寧ろ普通に現れる。

次にこの例を擧げよう。

一、主格に立つ例。

助詞が、添意助詞も・は等のつくことあり、又は助詞のつかぬことがある。

「世繼が隣に侍る者のそのきはに過ひて見奉りける」が語り侍りしなり（大鏡、七）

「大の男の太りせめたる」が怒りに怒りて……（平治、上）

「若君姫君のさうにましますす」も、「女房どものの前に並居たる」も、是を聞て……（長門本、一四）

「餘黨の僅に有りつる」は、志度の浦にて皆被討ぬ（平家、一一）

御さきに「有識僧綱どものやむごとなき」さぶらふ（大鏡、七）

「ある人の子の童なる」密にいふ……（土佐、正月七日）

二、屬格に立つ例。

助詞ががつく。

つひに尼になりて、「姉のさき立ちて尼になりける」が許へゆく（勢語、一五段）

「白布の袋の持ならしたる」が中に物を入（長門本、十）

三、ニの格に立つ例。

「鹿毛なる馬のはやりきつたる」に鏡鞍置かせて……（平治、上）

「親にもあらぬ池の禪尼の情を懸け給ふ」にも別れ奉れば（同、下）
「小家のありける」に舁き入れ進らせて（保元、中）
「武士のあらけなき」に捕はれて（平家、灌頂）

四、ヲの格に立つ例。

「乳母の使ひける從者の下屋に曹司してありける」をぞ呼び使ひける（宇津保、俊蔭）
この殿、「制を破りたる御裝束のことの外にめでたき」をして内に參り給ひて（大鏡、二）
「賓頭盧の前なる鉢のひた黑に煤づきたる」を取りて錦の袋に入れて……（竹取）
「讃岐の院の仁和寺の寛遍法務が坊に渡らせ給ひし」を守護し奉りて（平治、上）
「三年竹の節近なる」を少し押し磨いて（保元、中）

〔一三六〕　第三の形は、下の體言を略することは、前項の例と同樣であるが、その他屬格の「の」をも略すものである。次に「の」の位置に（　）印をして示す。

主格に立つもの。

「武藏國の住人別府小太郎忠澄（　）生年十八になりける」が進み出でゝ申しけるは（盛衰記、三六）

「郎等等（　）少々ありし」も皆留められて……（平治、下）

「肥前の掾橘の良利（　）殿上にさぶらひける」入道して……（大鏡、巻一）

ニ格に立つもの。

「今様の葵八花形の鏡（　）蒔繪螺鈿に入れたる」に向ひたる心地し（大鏡、一）

「高季といふ者の造りたる一宇の堂（　）松山といふ所にある」にぞ入れ進らせ（保元、下）

舍人成澤…「出雲の前司光保（　）五十餘騎にて信西が行くへを尋ね來たる」に木幡山にて行き逢ふ（平治、上）

ヲ格に立つもの。

「鎌倉の惡源太（　）近江の國石山寺の邊に忍び居給ひける」を、難波の三郎經房が郎等生け捕り奉りて（平治、下）

「かち立ちの兵（　）八十餘人有りける」を招寄せて（保元、中）

其時「義仲（　）二歳なりし」を母泣く〳〵抱て信濃へ越え（平家、六）

〔二二七〕　第四の形は、第一の體言に、助詞「は」「が」等がついて、それに主語たる感を強く與へるものである。この感を與へるのは、前項に擧げた第三の形も同様であるが、こゝに述べるものは、特に著

しい。たとへば、次の

「義綱は出家仕りし」を搦め進じ候ひき（保元、上）

に於いて、結局「出家仕りし義綱」を搦めた事になるが、屬格の助詞を用ひて、「義綱の出家仕りしを……」といふと稍異り、義綱が「出家シタ」といふ敍述に强い力がこもつて居て、强ひて分解すれば、「義綱ガ出家シタ」「ソノ義綱ヲ搦メ進ジタ」となる。何れにしても、文の上から見ると、「義綱は出家仕りし」は、一體言の資格を持ち、こゝでは「搦め進じ候ひき」の補語となるのである。尙、この種の例を、次に擧げよう。

「春宮大夫宗能卿は鳥羽殿に候はれける」を召されければ（保元、上）

「權右中辨貞憲は髻切り法師になりて傍に忍びたりける」を、宗の判官信澄尋ね出して……（平治、上）

「播磨の中將成憲は大宰の大貳淸盛の婿なれば、若しや命助かるとて、六波羅へ落ちられたりける」を、宣旨とて內裏よりしきなみに召されければ……（同、上）

「武藏相摸のはやり男の者共が、まつしぐらに打つて懸る」を、爲朝暫し支へて防ぎけるが……（保元、中）

「熊野の別當湛增が田邊に在りける」に使を立て給へば（平治、上）

「はるかに傳へ聞く人も涙を流さぬ」はなかりけり（長門本平家、一一）

尙、次の例の＝印の「が」なども、主格につく「が」とし、その上の文句を一體言と見られないことはないやうであるが、併し、今日の言語意識は、これを許さぬのである。これ等は、各々共通の主語に對する二つの述部をつなぎ合せる接續助詞と解すべきである。

御妹の上西門院も一つ御所に渡らせ給ひけるが同じ御車にぞ奉りける（平治、上）

夏附旦といふ番の醫者が侍醫といふつかさにて折節御前に候けるがとり敢へず藥の袋を玉體近く投たりけり（長門本、九）

即ち、右二例の文の主語は、「御妹の上西門院も」「夏附旦といふ番の醫者が」であつて、各二種の述部を有する單文と見るが至當である。

〔二二八〕　以上四種の形式を簡單に示せば、次の通りになる。第一の體言を甲字、その下の敍述を……で示す。甲には形修語のつく時も、つかぬ時もある。

第一形

甲　の……甲　　若き人の　美しき人

甲　の……もの　　若き吏の　才能ある者

第二形

甲　の……　老いたる吏の　正しき

第三形

甲　……　別府小太郎　生年十八になりけるが進み出で……

第四形

甲　は（が、も）……　宮崎太郎は　落ちたりけるを……

○甲の直下にある「の」が、「兄の太郎」「乳母の女房」の類の、屬格の「の」であることとは、第一形に於ては明かであるが、第二形では、これが主格の「の」たりやの感を與へる。されど既に擧げた、

白布の袋の持ちならしたるが中に……

鉢のひた黒に煤つぎたるを取りて……

の例などによつて、やはり屬格の「の」たることが知られる。たゞ併し、たとへば、

行路にかはづの跳り出で來るを下馬して拜す（平治、下）

に於ける用言「跳り出で來る」が、甲なる「かはづ」を主語とした、普通の述語のやうに思はれる用例が、最も多いので、「の」を主語についたものと思ふに至つたのである。即ち、現代一般の言語意識を以てすれば、右の文は、「行路に蛙が跳り出た」「その蛙を下馬して拜した」となるのである。而して

第三・第四形は、その意識が形の上に現れたものである(中には第二二六節に引いた、大鏡の例のやうに、甲が主語以外の場合もあるが)。

とにかく、この四形と、第二二一項で述べた形式とは、西洋諸國語で關係代名詞を以てする表現法に相當するもので、尚、研究する價値あるものと思ふ。

○口語では、第二の體言の代りに「の」を用ひる。

大きな柿の熟したのを貰つた。

文字のこまかいのは讀みにくい。

賊が逃げるのを追つて行く。

使が迎に來るのに逢つた。

鴨が飛び上るのを射つた。

第二十四章　文の種類

〔一二九〕　文は構造上から見れば、單文・複文・重文の三種に分けられる。

〔一三〇〕　單文とは、節を含まぬ文をいふ。

大地はめぐる。

瓶中の花ははや散り初めたり。

西の空がほんのりあかるい（ロ）。

○「主語と述語との關係が、たゞ一度成立する文を單文といふ」と說いても、同樣である。

○主語・補語が、二以上の事物を表す語から成ることがある。

友と予とは櫻を愛す。

予は櫻と梅とを愛す。

友と予とは野球と水泳とを好む。

右の諸例は、主語・補語を、別々に言つても成立するものである。第一例でいへば、「友は櫻を愛す」「予は櫻を愛す」であり、第二例では、「予は櫻を愛す」「予は梅を愛す」である。然るに、これ等と形は似て居ながら、性質の異るものがある。

太郎と次郎とは兄弟なり。

松島と嚴島と天橋立とを日本三景といふ。

これ等は別々には成立しない。單獨な太郎、若しくは次郎に、兄弟關係の生ずるはずなく、三景といふ以上、三者が必ず揃はねばならず、松島は三景の一たるに過ぎない（嚴島・天橋立も同様）からである。從つて、別々に成立する意の「も」は、この場合に用ひられない。

次に、これ等の語を並べるのに、大體左のやうな形式を用ひる。

（一）その語をたゞ並べるもの。

親　叔父　兄弟を始皇帝に滅されて（平家、五）

（二）助詞「と」を用ひる。

親と叔父と兄弟とを始皇帝に滅され……。

（三）助詞「も」を用ひる。

親（を）も叔父（を）も兄弟（を）も始皇帝に滅され……。

（四）接續詞を用ひる。

親・叔父及び兄弟を……。

親並に叔父　兄弟を……。

（五）助詞・接續詞を交へ用ひる。

親と叔父及び兄弟（と）を……。

親並に叔父と兄弟とを……。

（六）助詞「や」を用ひることがある。これは主として口語に現れる。

親　叔父や兄弟を……。

親や叔父　兄弟を……。

次に、敍述の部が二つ以上に分けられるものでも、共通の主語に關するものであれば、單文である（勿論節を含まぬもの）。

唐の太宗文皇帝は（主語）、鬚を燒きて功臣に賜ひ、血を含み瘡を吮ひて戰士を撫で給ふ。

信賴卿は（主語）、伏見源中納言師仲卿を相語らうて、彼の在所に籠り居て、馬に乘り馳せ引き、偏に武藝をぞ稽古せられける。

馬は（主語）、はやりきつたる逸物なれば、つと出でん、つと出でんとしけり。

信頼も（主語）、鼻血押し拭ひ、とかくして馬にかき乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に合ふべしとも見えざりけり。

正家は（主語）、重盛に組まんとしけるが、主を擊たせては叶はじと思ひければ、進藤左衞門に落重つて首を搔く。

この服地は（主語）、輸入品にまさるとも、劣らぬ優秀品です（口）。

〔二三一〕　複文は從屬節を含む文をいふ。

飲料水の少きは、トラック島の一缺點なり。

降る雪は、蝶の舞ふに似たり。

裁判所は、犯罪の疑のある者を十分に取調べる（口）。

室内の器具は、秩序正しく並びたり、

僕は、誰が來ても、此の門を開かない（口）。

某は、度量が狹い（口）。

君憂ふれば、臣樂ます。

萬民塗炭に苦しめども、爲政者は之を顧みず。
敵十萬騎ありとも、我は之を蹴散さん。
日が昇つたのに、弟はまだ寢て居る（ロ）。
家泰が候はざらん所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。

○右の諸例の示す通り、複文では、主語・述語の關係が、必ず二回以上成立し、しかも、對立節を含まぬものである。

○複文中の節の形は、第二百十六項に述べた。

〔二三二〕　重文は對立節から成る文をいふ。

目は物を見、耳は聲を聞き、鼻は香をかぐ。
松青く、砂白し。
言ふは易くして、行ふは難し。
柳は綠に、花は紅なり。
音吐朗々として、論旨整然たり。
右に見ゆるは三浦半島にて、左方は房總半島なり。

先に行くのは佐藤で、次が井上だ（ロ）。

弟はまだ歸らないし、妹まで遊びに行つてしまつた（ロ）。

人奢つて朝威を蔑如し、民猛くして野心を挾む。

○右の諸例の示す通り、重文では、主語・述語の關係が、必ず二回以上成立し、しかも、各節が對立節である。

○上の對立節の形に就いては、第二一七項參照。

〔二三三〕　複文・重文が混合して、更に複雜な形をなすことが多い。試に二三の例を擧げよう。

複文を含む重文。

君、上に愁ふれば、（從屬節）臣、下に勞し、（對立節）臣、内に樂まされば、（從屬節）帝、外に悅ばず。（對立節）

籠鳥の雲を戀ふる思、（從屬節）遙に千里の南海に浮び、（對立節）歸雁友を失ふ心、（從屬節）定めて九重の中途に通ぜんか。（獨立節）

重文を含む複文。

月影の小波に碎け、漁火の波間に出沒する（形容詞節）夜景も、またよろし。

越鳥南枝に巣をかけ（體言節）、胡馬北風に嘶ふも、生土（ウブスナ）を思ふ故ぞかし。

〔二三四〕　次に、文を意義の上から見て、普通次の四種に分ける。

一、平敍文。

斷定（肯定・否定）や、推量の意を表す文。

マッチは今より約百年前に發用せられたるものなり。

梅花は未だ開かず。

櫻もそろ〳〵咲くだらう（口）。

○右のやうに、平敍文は用言・助動詞の終止形で終るのが本體であるが、次の章で說く如く、文語法では、文中に、「ぞ」「なん」「こそ」のある時は、他の活用形で終る。

○またこの文は、助詞「ぞ」で終ることがある。

われは汝の主なるぞ。

二、疑問文。

疑問を表す文、及び反語の文をいふ。

月や出でたる。

誰かある。

これは何人の書きたるものなるか。

汝は之を明言せるにあらずや。

汝何者（なる）ぞ。

〇右のやうに、この文は用言・助動詞の連體形、助詞「か」「や」「ぞ」で終るのが普通である。

三、命令文。

特定の者に對する命令・願求・勸誘・禁止等を表す文をいふ。

諂ふ者をば敵と思へ。

申請くる所詮は、たゞ重盛が頸を召され候へ。

急ぎいづかたへも忍ばせ給へ。

人に示さんが爲に善をなすなかれ。

今日の事を明日に延すな。

いたくな歎き給ひそ。

ものども、（われに）續け。

○右のやうに、この文は用言・助動詞の命令形、助詞「な」「な…そ」で終るのが普通であり、文の主語の現れぬ場合が多い。また、次の例のやうな、義務を提示する意のものをも、通例命令文といふ。

明日は午前九時に校庭に集合すべし。

この土手に登るべからず。

四、感歎文。　感動の意を表す文をいふ。

あな、嬉しき今日の船出や。

あら、恥しのおのが心や。

あつぱれ、武夫よ。

あゝ、悲しき君かな。

頼み難きは人の心なりけり。

○右のやうに、この文には、感動詞・感動助詞・詠歎の助動詞等が、一又は二語あるのが常である。またこれには、主語・述語の具備せぬものが多い。

〔一三五〕　意義上から見た文は、右の四種になるが、實際には是等が互に入り交つて、複雑な文を構成するものである。

第二十五章　係結

〔二三六〕　係結の法則

平敍文は、用言・助動詞の終止形で終るのが常態である（第二三四項參照）が、それ等の、用言・助動詞の上に、或種の助詞があると、その他の活用形で結ぶことになつて居る。これを係結の法則といふ。

〔二三七〕　平敍文の中に、助詞「ぞ」「なむ」があると、その結びは連體形となる。これは詠歎の助動詞に終る感歎文にも適用される。

櫻は殘りなく散るぞめでたき。
月は海の中よりぞ出で來る。
絲なる一つ草とぞ春は見し。秋はいろ〳〵の花にぞありける。
山ほとゝぎす今ぞ鳴くなる。

昨日なむ都に參うで來つる。

心ある者は恥ぢずになむ來ける。

また、助詞「こそ」があると、その結びは已然形となる。

この亂れに公卿の命をおとすこそ淺ましけれ。

二位殿は……心憂くこそ覺ゆれとぞ宣ひける。

便宜候はゞ當家の浮沈をも試むべしとこそ存じ候へ。

人こそ見えね、秋は來にけり。

煙たなびく苫屋こそ我が懷しき住家なれ。

〔一三八〕　疑問文において、助詞「や」「か」が文中にある時は、終の用言・助動詞は連體形となる。

夜や暗き、路や惑へる、郭公わが宿をしも過ぎがてに鳴く。

秋の別れは惜しくやはあらぬ。

誰にか託すべき。

幾年か經し。

○助詞「や」「か」がなくても、上に「いかが」「いかに」「いかで」のやうな語があつて、疑問・反語

を表す時は、連體形で結ぶのが、通則である。

いかが取計らふべきと問ふ。

いかがは口惜しからぬ。

さていかにすべきと案じわづらひ……。

いかでしか仰せらるるとあやしくて……。

〔一三九〕 以上述べたやうな關係に立つ「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」等、及び疑問の語を係といふ。これに對して、連體形で結ぶものを「ぞ・なむ・や・かの結び」と云ひ、已然形で結ぶものを「こその結び」といふ。

上に係になる語があつても、用言・助動詞が、下の語につづくか、又は敍述部が體言と助詞とのみの場合には、右のやうな結びとはならぬ。これを轉結といふ。

うき世には長らへじとぞ思へども……。

古は車もたげよ、火かゝげよとこそいひしを……。

あれこそ、浦へ出づる道よと云ひ……。

信頼は……義朝こそ保元の亂以後、平家に覺え劣りて安からず存ずる者と思はれ、近づきて…。

又結びの用言の略せられることがある。

戰士は只死を致さんことをのみ思へりけりとなん（云傳ふる）。

いかさま事の出で來べきにこそ（あれ）とて……。

○係結の法則は、口語には廢れた。

第二十六章　呼應

〔二四〇〕　呼應

文中では、上にある語に對して、下にそれに適當した語を用ひ、上下相應じてその考を明かにする法がある。これを呼應といふ。前章の係結も一種の呼應である。

呼應を廣義に解すれば、いろ〳〵あるが、次にその主な二種について述べる。

〔二四一〕　敍述の副詞と敍述との呼應

敍述の性質によつて、一定の副詞が用ひられるのをいふ（第一二九項參照）。

次に、その主なものを擧げる。

斷定

汝の言は、誠に尤もなり。

げに人の一念は恐しきものなり。
勿論人は互に相依り相扶くべきものなり。
弓箭執る身は、もつともかくこそあるべけれ。

否定

つゆ知らざりき。
毫も取るに足らず。
えも言はず悲し。
思ひ殘すこと更になし。
悲しくてつや〳〵物も覺えず。
ゆめ〳〵人に語るべからず（禁止）。
決して忘れ給ふな（同右）。

決意

予も必ず出席すべし。
今夜の中に是非（きつと）讀んでしまはう（ロ）。

當然

男兒須らく大膽なるべし。

汝はよろしく殘りて再擧を圖るべし。

比況

恰も符節を合せたるが如し。

降る雪は、蝶の舞ふにさも似たり。

この靴は私のとちやうど同じだ。

疑問・反語（係結に關係あるものは略す）。

君はいかがおぼさるるぞ。

いかにこれを見給ふか。

何ぞ徒に安逸を貪らんや。

いづくんぞ之を捨つべけんや。

われあに辯を好まんや。

況や人に於てをや。

推測

請ふともよも許さじ。

定めて彼等も同意すべし。
事實は或は然らん。
恐らく事實は然らじ。
その說蓋し眞に近からん。
多分さうなつてゐるでせう。

假設

たとひ怨を懷くとも何事かあるべき。
若し天氣よくば、明日は散步せん。
よしんばこちらに手落があつたにもせよ、そんなに大げさに言ふ程の事ではない（口）。

〔二四二〕　待遇の呼應

尊敬の意を表す場合には、尊敬される人に關する事物、及びそれの動作を、敬意を含む語を以て述べ、へり下る意を表す場合には、またこれに準ずる。

このおとど（藤原道長）は、法興院おとどの御五郎、御母は……。この道長の大臣は今の入道殿下これにおはします。……この殿宰相になり給はで、直ちに權中納言にならせ給ふ、御年廿三。

その年上東門院生れさせ給ふ。正暦三年四月廿七日に從二位し給ふ。御年廿七。宇治殿生れ給へる年なり（敬語。大鏡卷七）。

乳母（藤原成經の乳母）に六條といふ女房あり、「御乳に參り始め候ひて、君を乳の中より抱き上げ參らせて……君の大人しう成らせ給ふ事をのみ嬉しく思ひ奉り、あからさまとは思へども、既に二十一年。片時も離れ參らせず。院内へ參ら（成經の參る謙語）せ給て、遲う出させ給ふだにも無覺束思ひ參らせ、既に如何なる御目にか遭はせ給はんずらん」とて泣く（—印敬語、‖印謙語。平家、卷二）

（秦野次郎が源爲義の北の方に向つて）「判官殿（爲義）は北叡山にて御出家候ひて、十七日の曉頭殿（義朝）の御許へ渡らせ給ひ候ひしを、（義朝が）穩し置き進らせて、（朝廷に）さまざまに申させ給ひ候ひしかども、天氣終に許させ給はで、昨日の曉（爲義を）七條朱雀にて失ひ進らせ候ひぬ。五人の御曹子たちをも、昨日の暮程に北山舟岡と申す處にて、皆斬り奉り候ひぬ。六條殿に渡らせ給ひつる四人の君だちをも、舟岡山にて只今失ひ申し候。これは乙若御前の最期の御形見を（あなたに）進らせられ候」（保元、下。○印は丁寧語。秦野から見れば、こゝに現れる人物は、總べて敬意を表すべき主家の人々である。しかも、其の間に謙語を用ふべき關係の生ずること、及び同じ「申す」でも、用ひ方によつて、謙語とも丁寧語ともなる點に注意すべき

である)。

私も當年は飛鳥山へでも參りまして、是非お花見を致したいと存じますが、何分小人數で留守居が居りませんものですから、何う致しましたら宜しうございますか、實は困つて居る所でございます(○印丁寧語。口語)

第五篇　結論

附　文法許容案

一

以上の各篇に於いて、文語・口語に存する主な事項は、一通り述べた。飜つて考へるに、現在の敎育上に於いては、文語法を主として、口語法は附錄的に說くのを一般の習はしとしてゐる。稀に、先づ口語を說いて、次に文語に及ぼすものもあるが、その所說は、依然として、文語法の換骨奪胎たるに過ぎない。隨つて、これを切り離して見ると、頗る妥當を缺く說明法が行はれて居る。

この事に就いては、既に本書の中にも、これに觸れたが、更に繰り返すと、たとへば、口語の「わが」「あの」等を分解して、「わ」「あ」等を代名詞とするものがある。けれども、文語に於いてこそ、これ等は獨立する一語であるが、口語では、單語として存在しないのである。單語でないものが、品詞の何れかに屬するはずがない。況や「どの」などは、分解のしやうがないのである。

そこで、これ等の「わが」「あの」「どの」等を各一語と見るものもある（それはわれ等も賛成する所である）が、併し、今日普通の文法書には、これ等を收容する品詞が立てゝないのである。又、口語の、「こんな」「そんな」「どんな」等も、同性質の語である。これを「これなる」「それなる」「どれなる」から來たものとして、「これ」「それ」「どれ」の代名詞と、助動詞「なる」とに分解して、說く人もあ

る。されど、若しこの方法を以てするならば、口語法を說くに當つても、一々まづその變遷を尋ねて、その原始的な形に於いてせねばならぬことになる。併し、これは歷史的文典の任務であつて、特殊なものである。普通の文法書では、現在ありのまゝの形に於いて、說くを主とすべきであつて、一々語源を討究して、原の形に戾さねばならぬ理はない。

これ等の點だけでも、口語法を說くに、文語法の組織そのまゝを踏襲することの、不穩當な點が了解されると思ふ。近時この事が漸く聲高く叫ばれ、既に文語法を離れた、口語法の出版されるやうになつたのは、喜悅に堪へない次第である。

二

次に、文語法について一言すれば、明治三十八年、文部省は「文法上許容すべき事項」十六項を發表した。一體、言語は時代と共に變遷するものであるといふ事に對しては、何人にも異論のないはずであるから、この事實を認める以上、「許案すべき事項」などの生れよう譯はないが、併し我が國で、文字を以て思想を發表するに當つては、假名遣は大體標準を奈良朝時代に置き、語法は所謂文語體では、平安朝時代に置く習はしである。

一體、社會萬般の事は、各時代それ〴〵特殊なものを生むから、思想發表の上でも、必ずしも異る時代

のものを墨守する必要はないはずである。假りに、政治・教育の上で、今日奈良朝や平安朝の型通りに行はうとしたら、恐らく狂人扱を受けるだらうと思ふが、不思議にも文字で思想を發表するには、右のやうな事になつて居る。

但し、發音法や言語の內容の變遷だけは認められて、必ずしも昔通りの發音や意味でなくても、宜しいとなつて居る。これだけが認められて居るのも、又不思議の一つである。それで、文法の上では、平安朝式に遂ふものは、誤謬又は破格として排斥されてゐたが、その中で、後世普通に用ひられるやうになつたもの十六項を擇び出して、教育の上などで、必ずしも排斥するに及ばないとしたのが、この「許容すべき事項」であると解する。

この十六項の中には、學者によつて、許容云々など問題にすべきでなく、始から正しいのであると說かれるものもあるが、今はそれに觸れず、次にその本文を示し、必要ありと思はれるものには註を施すことにした。本文の次に註として出したのは、予の加へたものである。

尙、本書では、近古以後の言語現象をも考慮に入れて、「む（ん）ず」を助動詞の部に舉げ、「やらん」を助詞の部に掲げ、また助詞「とも」に、事實を讓步的に認める用法をも說いた。その他機會ある每に、後世の語法にも觸れたが、近古以後のもの、たとへば軍記物などには、言語の變遷を無視する一派の文法學者に、破格として排斥せられる言方の少からざるは、豫め熟知せねばならぬ。

文法上許容すべき事項

明治三十八年十二月二日文部省告示第百五十八號

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ。

註　「居リ」はラ變、「死ヌ」はナ變の動詞である。「恨ム」は「心見ル」から出たといふ說はあるが、普通には、マ行上二段活用として用ひられる。これ等の三語を、四段活用に用ひて宜しいと言ふのである。口語では、三語とも、四段が普通である。

二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

註　シク活用の形容詞の終止形は、シが一つついて居るのであるが、二つついたのをも認めるといふのである。但し、本文の「習慣アルモノハ…」とは、如何なる意味か、多分本文に擧げてある「惡シシ」「勇マシシ」のやうに、前に用例のあるものといふ事であらう。すると、あらゆるシク活用

の終止形に適用し得ない。一々古典に當らねばならぬといふことになる。これは、一般の人には事實上不可能であるから、廣く解釋して、一般に適用し得るものとして差支なからうと思ふ。後の條項にも、これと同じ趣のものはあるが、同様である。

さて、「…シシ」の例は、故三矢博士の示された所によると、基俊集に「やさしし」、永長二年東塔東谷歌合に「夜風烈しし」とあるといふ。手近なものでは、源平盛衰記・平家物語等にも、この種の用例が散見し、降つて室町時代のものや、徳川時代のものに現れる。

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止形ニ用キルモ妨ナシ。

例　火災ハ二時間ノ長キニ亘リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

註　本文で明かであるが、シを終止形に用ひるのは、文語體の飜譯文には、殊に多く見られた。

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。

註　コトナリは「殊(コト)にあり」の一語になつた、ナリ活用の形容動詞である。この種の語は、助動詞の「り」、助詞の「て」、助動詞の「たり」に連らぬことは、「靜かなり」「柔かなり」「あらたな

り」等で試れば、直ちに判明する。然るに、コトナリは、ラ行四段の動詞「乗る」「くだる」「織る」などと同様になつたので、本文にあるやうに用ひられるのである。

五、「丶丶セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　手習サス。　周旋サス。　賣買サス。

六、「丶丶セラル」トイフベキ場合ニ「丶丶サル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　罪サル。　評サル。　解釋サル。

註　右の二條を一括して述べる。サ變動詞に助動詞「さす」「らる」のつく時は、その未然形を承けて、「手習せさす」「罪せらる」のやうになるべきであるが、「手習さす」「罪さる」と言つて宜しいといふのである。但し、これは「せ」が略されたのだとの說と、「せさ」が「さ」と約つたとの說と二つある。

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ。

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其地ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

註　「得」はア行下二段活用で、その未然形は「え」であるから、これに使役の助動詞「しむ」がつくと、「えしむ」となるはずである。然るに、これを「えせしむ」と「せ」を加へて言ふ者が多いから、それを許容するといふのである。

これと似たのに「見シム」を「見セシム」と誤りいふ者が多いが、それは許容されてゐない。「見シム」は「見させる」(見ることをさせる) 意であり、「見セシム」は「見せさせる」(見せることをさせる) 意で、別だからである。

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ、「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ、「暮セシ時」「過セシカバ」ナドスルモ妨ナシ。

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

註　過去の助動詞「き」が、動詞につくには、その連用形を承けるから、佐行四段動詞には「申シキ」「申シシ時」「申シシカドモ…」のやうになるが、通例「申セシ時」「申セシカドモ…」のやうにいふ。それを許容したのである。これはサ變動詞につく時の「勉強セシ時」「勉強セシカドモ」

に紛れたのであらう（第九八項の二參照）。

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例　花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會の議決ニ依ルノ限リニアラズ。

註　連體形が直ちに體言に連るのは普通であるが、右に擧げられたやうな「の」を加へる言ひ方も、普通に用ひられる。それを許容したのである。但し、右の例の「ノ」の上は、各成分が全部は現れて居ないが、體言節であつて、それに「ノ」がついて形修語となるのである。

この言方は、本居翁が、古事記の訓讀にも採用されて、「大山守の命は……其の弟皇子を殺さむの情有りて（應神天皇の條）」など見えるが、平安朝のものにも散見する。

思し煩ふ事ありけるは、この君に（娘を）たてまつらむの御心なりけり（源氏、桐壺）

好き〳〵しき心のすさびにて、人の有樣を數多見合せむの好みならねど（同、帚木）

さて、條文には、明かにことわつてないが、許容されるのは、右のやうな體言節に「ノ」のつく場合だけと考へるべきであらう。さうでないと、

花を見るの老人。　昨日降りたるの雨。

父に叱らるゝの子。　敵を撃退せるの我が軍。

のやうな言ひ方や、極端な例では、「吹くの風」「鳴くの鳥」「鳴かぬの螢」なども、許容することになるからである。

一〇、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞の連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例　有ルヤ。　面白キヤ。

父ニ似タルヤ、母ニ似タルヤ。

註　本書第一六五項參照。

一一、てにをはノ「トモ」ノ動詞・使役ノ助動詞、及受身ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　數百年ヲ經ルトモ。　如何ニ批評セラルルトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

註　トモは動詞、助動詞「る」「らる」「す」「さす」には、その終止形につく（本書第一五二項參

に紛れたのであらう（第九八項の二參照）。

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例　花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會の議決ニ依ルノ限リニアラズ。

註　連體形が直ちに體言に連るのは普通であるが、右に擧げられたやうな「の」を加へる言ひ方も、普通に用ひられる。それを許容したのである。但し、右の例の「ノ」の上は、各成分が全部は現れて居ないが、體言節であつて、それに「ノ」がついて形修語となるのである。

この言方は、本居翁が、古事記の訓讀にも採用されて、「大山守の命は……其の弟皇子（オトミコ）を殺さむの情（ココロ）有りて（應神天皇の條）」など見えるが、平安朝のものにも散見する。

思し煩ふ事ありけるは、この君に（娘を）たてまつらむの御心なりけり（源氏、桐壺）

好き〴〵しき心のすさびにて、人の有樣を數多見合せむの好みならねど（同、帚木）

さて、條文には、明かにことわつてないが、許容されるのは、右のやうな體言節に「ノ」のつく場合だけと考へるべきであらう。さうでないと、

花を見るの老人。　昨日降りたるの雨。

父に叱らるゝの子。　敵を撃退せるの我が軍。

のやうな言ひ方や、極端な例では、「吹くの風」「鳴くの鳥」「鳴かぬの螢」なども、許容することになるからである。

一〇、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞の連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例　有ルヤ。　面白キヤ。

父ニ似タルヤ、母ニ似タルヤ。

註　本書第一六五項參照。

一一、てにをはノ「トモ」ノ動詞・使役ノ助動詞、及受身ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　數百年ヲ經ルトモ。　如何ニ批評セラルルトモ。

强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

註　トモは動詞、助動詞「る」「らる」「す」「さす」には、その終止形につく（本書第一五二項參

照)。然るに、これを「經トモ」「セラルトモ」「シムトモ」としないで、舉げられた例のやうに言ふやうになつたので、これを許容するといふのである。

一二、てにをはノ「ト」ノ動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ従フモ妨ナシ。

例　月出ヅルト見エテ。　嘲弄セラルルト思ヒテ。
終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。
萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

註　本條の條文は、言葉が足りないので、誤解を懐く者が多いやうに見受ける。即ち、助詞の「ト」でも、並列に用ひるものは、

月ノ出ヅルト日ノ沒スルトハ、殆ド同時ナリキ。
嘲弄セラルルト賞讃セラルルトハ、予ノ關心スル所ニアラズ。

の如く、連體形の下にあることは普通であつて、破格でも、誤謬でもない。「ト」の上に體言の略されたものだからである。今、本條に示された例を見ると、指定の意味に用ひる、補格の「ト」である。しかも、示された第二・第三例は、略された成分があつて、形式上完備せぬが、これ等の、

「ト」は文を受けて居るのである。換言すれば、「ト」の受けて居るものは、一體言と同資格のものであつて。意味の上でも、形の上でも、獨立したものであるべきはずである（本書第一四七項の一參照）。故に示された例などでは、

月出ヅト見エテ。　萬人皆其德ヲ稱ヘケリトゾ。

のやうにするのが正しく、若し「出ヅルト…」「稱ヘケルトゾ」のやうにするなら、その上に「ぞ・なん・や・か」の係がなければならぬはずである。然るに、通例、その係がなくても、連體形にするので、それを許容したのである、

一三、語句ヲ列擧スル場合に用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザル時ニ限リ、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例　月ト花。　宗教ト道德ノ關係。　京都ト神戸ト長崎へ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

註　本書第一四七項の五に說いた。

一四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例　誰ニヤ問ハン。　幾何ナルヤ。
　如何ナル故ニヤ。　如何ニスベキヤ。

註　上に疑の語のある時に、下に疑問の助詞を用ひようとすれば、「誰ニカ問ハン」「幾何ナルカ」「如何ナル故ニカ」「如何ニスベキカ」のやうに、カとするのが古い習慣であるが、その際、ヤを用ひても差支がないといふのである（本書第一六五項の一參照）。

一五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ、「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ。

例　何等ノ事由アルモ（アリトモ）議場ニ入ルコトヲ許サズ。
　期限ハ今日ニ迫リタルモ（タレドモ）準備ハ未ダ成ラズ。
　經過ハ頗ル良好ナリシモ（シカドモ）昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。
　請願書ハ會議ニ付スルモ（ストモ・スレドモ）之ヲ朗讀セズ。
　給金ハ低キモ（クトモ・ケレドモ）應募者ハ多カルベシ。

註　右のモは本書でも、第一五二項の一と、第一五三項の二の末に於いて觸れたが、モの上に過去や

完了の助動詞のあるものは、ドモの意たるに相違なく、それがないと誤解を生じ易い。但し、「誤解ヲ生ズベキ例」として擧げられた第一例は、予の考では「付スルモ」とあつても、「付スル豫定デアル。ケレドモ…」の意以外に解し得まいと思ふが、何うであらう。假りに、これを「付ストモ」としても、この場合は「付スルカ否カ不明ダガ、付スルト假定スル」意にはならず、本書第一五二項の（二）の意味となり、やはり「付スルニ定マッテ居ル」黠は、「付スレドモ」と同様だと思ふ。若し假定であつたら、後件文は「朗讀セザルベシ」などあるべく、事柄によつて假定に對して後件を斷定することは珍しくないが、この場合は不穩當のやうに思ふ。

一六、「トイフ」トイフノ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　イハユル哺乳獸ナルモノ。
　　顔回ナルモノアリ。

註　本書第八七項參照。

附録　各種活用所屬の主なる動詞・形容詞（文語）

一、四段活用の動詞

カ行

飽く
開（明）く
欺く
歩く
發く
生く
抱く

戴（頂）く
嘶く
浮く
動く
嘯く
點頭く
呻吟く
置く
驚く
趣（赴）く

掻く
書く
輝く
傾く
乾く
聞く
軋く
築く
燿く
碎く
眩く
咲く
裂く
囁く
私語く

敷く
退く
好く
透く
塞く
背く
焚く
敲（叩）く
附（着）く
突く
續く
躓く
貫く
呟く
解く

囁く
泣（鳴）く
歎く
靡く
拔く
叩頭（ヌカヅ）く
退（ノ）く
除く
覗（ノゾ）く
吐く
掃く
省く
彈く
引く
蹲踞（ヒザマヅ）く

犇く
響く
開く
閃く
吹く
拭く
蒔く
捲く
招く
磨く
導く
向く
燒く
行く
沸（ワ）く

戰慄（ワナヽ）く

ガ行

仰ぐ
喘ぐ
急ぐ
薄らぐ
泳ぐ
嗅ぐ
炊ぐ
漕ぐ
騷ぐ
爽やぐ
凌ぐ

殺（ソ）ぐ
注ぐ
戰（ソヨ）ぐ
平ぐ
繼ぐ
繫ぐ
研（ト）ぐ
嫁ぐ
脫ぐ
剝ぐ
拉（ヒシ）ぐ
塞ぐ
防ぐ
貢ぐ
柔ぐ

動搖(ユラ)ぐ

サ行

明かす
餘す
現す
活かす
致す
出す
坐(イマ)す
動かす
移す
俯(ウツブ)す
促す

潤す
押す
懸す
起す
落す
威(オド)す
驚かす
劫(オビヤカ)す
思(オボ)す
思召す
及ぼす
下(オロ)(卸)す
御座(オハシマ)す
貸す
隱す

挿頭(カザ)す
交はす
返す
通はす
枯らす
乾かす
聞召す
萌す
下(クダ)す
崩す
暮す
消す
穢す
越す
焦す

志す
覆(コボ)す
懲す
殺す
挿す
探(サグ)す
諭す
醒す
晒す
示す
記す
知ろす
賺(スカ)す
過(スゴ)す
澄ます

濟ます
喫す
糺す
倒す
試す
漂はす
散らす
遣す
盡す
費す
潰(ツブ)す
照す
鎖す
誑かす
通(トホ)す

燈す
爲(ナ)(成)す
靡かす
流す
直す
惱ます
鳴らす
均(ナラ)す
馴らす
逃がす
匂はす
濡す
根ざす
殘す
延ばす

果(ハタ)す
外す
囃す
晴らす
放す
浸(ヒタ)す
響かす
臥す
古(フル)す
降らす
干(ホ)す
綻ばす
施す
亡ぼす
增す

申す
紛らす
紛らかす
紛らはす
御座(マシマ)す
廻す
惑はす
迷はす
亂す
召す
廻(メグ)らす
戻す
漏らす
饗(モテナ)す
催す

窶（ヤツ）す
宿す
許す
涌かす
渡す

タ行

過つ
打つ
穿つ
勝つ
壞（コボ）つ
育つ
立つ

斷つ
保つ
放つ
獨言（ヒトリゴ）つ
隔つ
待つ
滿つ
持つ
分つ

ハ行

商なふ
論（アゲツラ）ふ
冷笑（アザワラ）ふ

扱ふ
應接（アシラ）ふ
洗ふ
爭ふ
言ふ
憩ふ
誘ふ
厭ふ
祝ふ
窺ふ
失ふ
歌ふ
疑ふ
占ふ
移ろふ

奪ふ
潤ふ
諾（ウベナ）ふ
敬ふ
負ふ
追ふ
行ふ
襲ふ
言信（オトナ）ふ
覆ふ
思ふ
補ふ
飼ふ
買ふ
拘泥（カヽヅラ）ふ

圍ふ
語らふ
叶ふ
通ふ
競ふ
嫌ふ
食ふ
喰ふ
狂ふ
乞（請）ふ
逆ふ
誘ふ（サソ）
彷徨ふ（サマヨ）
侍ふ（サムラ）
慕ふ

從ふ
修理ふ（シツラ）
吸ふ
救ふ
住まふ
添ふ
害ふ（ソコナ）
揃ふ
給ふ
違ふ（タ（チ）ガ）
使ふ
償ふ
繕ふ
集ふ（ツド）
衒ふ

問ふ
整ふ
訪ふ（トブラ）
伴なふ
習ふ
賑ふ
擔ふ
匂ふ
縫ふ
願ふ
勞ふ（ネギラ）
狙ふ（ネラ）
拭ふ
宣ふ（ノタマ）
呪ふ（ノロ）

這ふ
計らふ
拂ふ
拾ふ
振ふ
諂ふ
舞ふ
紛ふ（マガ）
賄ふ
禁厭ふ（マジナ）
交らふ
惑ふ
纏ふ
賂ふ
迷ふ

向ふ
貫ふ
養ふ
休らふ
雇ふ
結(ユ)ふ
醉(ヨ)ふ
粧ふ
呼ばふ
煩ふ
笑ふ
醉(エ)ふ

バ行

遊ぶ
憐ぶ
浮ぶ
帶ぶ
及ぶ
叫ぶ
忍ぶ
飛ぶ
並ぶ
運ぶ
學ぶ
轉(マロ)ぶ
結ぶ
咽ぶ
弛ぶ
呼ぶ
喜ぶ

マ行

編む
赤む
憐む
怪しむ
危む
歩む
赤らむ
青む
忌む
勇む
痛む
愛(イツク)しむ
挑む
營む
産む
績(ウ)む
埋む
疎む
羨む
嚙む
屈む
圍む
霞む
悲しむ
刻む

組む　汲む　含む(クヽ)　悔む　苦しむ　黒む　窪む　込む　沈む　萎む　白む　清む　済む　荒む(スサ)　進む

涼む　染む(ソ)　妬む(ソネ)　工む(タク)　嗜む　疊む　頼む　楽しむ　撓む　佇む(タヽズ)　縮む　積む　摘む　攫む(ツカ)　慎む

蓄む　富む　慰む　泥む(ナヅ)　悩む　憎む　睨む　盗む　妬む(ネタ)　飲む　望む　養育む(ハグク)　挾む　励む　僻む(ヒガ)

潜む　退縮む(ヒル)　踏む　揉む　病む　止む　休む　歪む(ユガ)　緩む　讀む　淀む　拜む　惜む

ラ行

上(アガ)る
漁(アサ)る
嘲る
當る
暖まる
集る
侮る
焚(アブ)る
餘る
肖(アヤ)かる
改まる
誤る

入る
煎る
怒る
憤る
至る
勞(イタハ)る
僞る
祈る
彩る
賣る
蹲る
織る
贈る
送る
奥まる

起る
熾(オコ)る
奢(驕)る
懼る
怠る
劣る
諂(オモネ)る
借る
刈る
懸かる
屈まる
限る
被る
翔る
陰る

飾る
畏る
重なる
語る
固まる
代る
歸(返)る
薫る
切る
來(キタ)る
繰(ク)る
絎(クヽ)る
滑(クジ)る
腐る
下(クダ)る

覆る
配る
加はる
曇る
削る
凝る
樵(コ)る
擧(コソ)る
斷(コトワ)る
凍る
籠る
去る
溯る
下(サガ)る
探る

定まる
授かる
悟る
囀る
知る
叱る
茂る
滴る
縛る
絞る
滲る
摺る
擇(スグ)る
啜(スヽ)る
辷る

坐(スワ)る
剃る
反(ソ)る
譏(ソシ)る
染まる
足る
垂る
手繰る
助かる
祟(タヽ)る
辿る
便る
溜る
散る
契る

作（造）る
約まる
募る
詰る
積る
連なる
照る
取る
滯る
留る
隣る
通る
鳴る
成る
名告(ノ)る

なぶる　直る　訛る　握る　濁る　鈍る　塗る　煉る　舐(ネブ)る　眠る　乘る　殘る　罵る　登る　張る

計る　始る　走る　蔓(ハビコ)る　憚る　光る　浸る　拈(ヒネ)る　弘まる　降(フ)る　振る　耽る　塞がる　掘る　誇る

迸る　居る　罷る　雜(マジ)(混)る　交(マジハ)る　守る　參る　亂る　實のる　食る　漏る　盛る　守(モ)る　戻る　遣(ヤ)る

休まる　宿る　破る　搖(ユス)る　讓る　寄る　弱る　破(ワ)る　分かる　渡る　蟠る　折る　終る　踊る

二、上二段活用の動詞

カ行

生（イ）く
起く
盡く
避く

ザ行

過ぐ

タ行

落つ
朽つ

ダ行

怖づ
閉づ
捻づ
恥づ
攀づ

ハ行

生（オ）ふ
戀ふ
強（シ）ふ
用ふ

バ行

荒ぶ
帯ぶ
大人（オトナ）ぶ
媚ぶ
忍ぶ
煤ぶ
延ぶ
綻ぶ
亡ぶ
侘ぶ

マ行

恨む
試む

ヤ行

老ゆ

悔ゆ

報ゆ

ラ行

下る[オ]

懲る[コ]

三、下二段活用の動詞

ア行

得(ウ)
心得(ウ)

カ行

明(ア)く
預く

生(イ)く
受く
浮く
懸く
碎く
避(サ)く
投く
退(シリゾ)く
背く
闌(タ)く

助く
手向く
附(着)く
續く
僻く
號(ナ)く
拔く
退(ノ)く
開く
更(フ)く
解(ホド)く
負く
設く
向く
剝(ム)く

燒く
避(ヨ)く
分く

ガ行

擧(揚)ぐ
揭ぐ
捧ぐ
妨ぐ
平ぐ
告ぐ
遂ぐ
投ぐ
逃ぐ

剝ぐ　提ぐ　廣ぐ　曲ぐ　和ぐ

サ行

淺す　合す　失す　仰す　載す　馳す　伏す

任す　參らす　咽す　瘦す　寄す

ザ行

交（混）ず

タ行

當つ　充つ　周章つ

企つ　捨つ　育つ　立（建）つ　隔つ

ダ行

出づ　撫づ　秀づ　詣づ

ナ行

寝ぬ　兼ぬ　重ぬ　尋ぬ　束ぬ　連ぬ　佩ぬ　委ぬ

ハ行

與ふ　誂ふ　訴ふ　押ふ

衰ふ
換ふ
數ふ
協(カナ)ふ
構ふ
考ふ
加ふ
拵ふ
答ふ
支ふ
從ふ
添ふ
揃ふ
堪ふ
遣ふ

貯ふ
湛(タタ)ふ
稱(タタ)ふ
携ふ
譬ふ
仕ふ
傳ふ
集(ツド)ふ
調(トトノ)ふ
唱ふ
捕ふ
存生(ナガラ)ふ
擬ふ
準ふ
控ふ

歴(フ)（經）
交(マジラ)ふ
迎ふ
辨ふ
終ふ

バ行

燃(タ)ぶ
比ぶ
調(シラ)ぶ
總(ス)ぶ
食(タ)ぶ
給(タ)ぶ
並ぶ

延ぶ
綏ぶ

マ行

崇む
啖む
改む
諫む
戒む
浮(ウカ)む
掠(カス)む
固む
縛(カラ)む
極む

清む
苦しむ
籠（コ）む
醒む
定む
占む
閉（シ）む
認む
鎮む
沈む
進（薦）む
責（攻）む
染む
初（ソ）む
溜（タ）む

撓（タ）む
責（タシナ）む
弛む
撓（タワ）む
鏤む
勤む
留（ト）む
咎む
止（トド）む
背む
慰む
宥（ナダ）む
惱む
始む
僻む

潛む
弘む
深む
譽む
求む
止（ヤ）む
休む
歪（ユガ）む
治（納）む

ヤ行

癒（イ）ゆ
おびゆ
覺ゆ

消ゆ
聞ゆ
越（超）ゆ
肥ゆ
榮ゆ
聳ゆ
絕ゆ
生（ハ）ゆ
冷ゆ
殖ゆ
吠ゆ
見（マミ）ゆ
見（ミ）ゆ
燃ゆ
萌（モ）ゆ

ラ行

荒る
呆る
溢る
現る
入（容）る
生る
埋る
埋る
後る
恐（怖）る
音信る
溺る

枯る
隠る
切る
暮る
呉る
腐る
崩る
穢る
焦る
零る
知る
時雨る
勝る
廢る
垂る

爛る
戯る
倒る
疲る
潰る
馴る
流る
濡る
遁る
晴る
腫る
離る
觸る
脹る
堀る

紛る
亂る
結ぼる
漏る
破る
別る
忘る
折る

ワ行

飢う
植う
据う

四、上一段活用の動詞

カ行
着る

ナ行
似る
煑る

ハ行
干る

マ行
見る
惟（オモンミ）る
顧る
鑑る
試る

ヤ行
射る
鑄る

ワ行
居（キ）る
率（キ）る
率（ヒキ）ゐる
用ゐる

五、下一段活用の動詞

カ行

蹴る

六、變格活用の動詞

ラ變

有(在)り
居り
侍り

カ變

來(ク)

サ變

爲(ス)
坐(オハ)す
右の外
罪す
重んず
先んず
廢す
論ず
運動す等

ナ變

死ぬ
往(イ)ぬ

七、ク活用の形容詞

赤し
明(アカ)し
明らけし
淺し
咬し
熱(著)し
厚し
淡し
甘し
危し

暴(アラ)し
青し
潔し
著し
幼(イトケナ)し
薄し
旨(ウマ)し
疎し
煩(ウルサ)し
遲し

多し
重し
堅し
難し
忝し
痒し
辛(カラ)し
輕し
穢(キタナ)し
清し
臭し
暗し
黑し
濃し
快し

寒し
寒けし
利(サト)し
繁し
靜けし
澁し
執念し
白し
酸し
少し
狹し
高し
猛し
平けし
尊(貴)し

近し　拙し　強し　冷(ツメタ)し　露けし　疾し　遠し　無し　長し　直し　苦(ニガ)し　妬(ネタ)し　眠たし　長閑けし　早し
遙けし　低し　廣し　深し　古し　圓し　短し　愛(メデタ)し　目出度し　安（易）し　安らけし　豐(ユタ)けし　緩し　弱し　善（好）し
若(ワカ)し　惡(ワロ)し　幼(ヲサナ)し

八、シク活用の形容詞

悪し
新し
怪し
荒々し
勇し
忙し
不審(イブカ)し
忌々し
未だし
賤(卑)し

美し
疎々し
恨めし
麗はし
嬉し
憂(ウレ)はし
怖ろし
大人(オトナ)し
夥し
重々し

香し
悲し
輕(カロ)々し
委(クハ)し
悔(クヤ)し
苦(クル)し
險し
事々し
寂し
騒がし
親し
涼し
忙(セハ)し
逞し
正(タダ)し

樂し
乏し
長々し
苦(ニガ)々し
顯はし
烈(激)し
恥かし
甚だし
久し
等し
相應(フサハ)し
欲(ホ)し
紛らはし
正(マサ)し
貧し

眭し 空し 珍し 女々し 疚し 優し ゆかし 宜し 煩はし 佗し 可笑(ヲカ)し をこがまし 惜し 男々し

附錄　中等學校教授要目

師範學校教授要目

文部省訓令第七號（昭和六年三月十一日官報）

大正十四年文部省訓令第七號師範學校教授要目左ノ通改正ス地方長官ハ各學校長ヲシテ本改正要目ニ準據シ地方ノ情況ニ適切ナル教授細目ヲ定メシメ以テ各學科目教授ノ內容ヲ充實シ克ク師範教育ノ本旨ヲ貫徹セシメンコトヲ期セラルベシ

昭和六年三月十一日

本要目實施上ノ注意

一、各學科目ヲ教授スルニハ其ノ固有ノ目的ヲ達スルコトニ力ムルト共ニ互ニ聯絡補益シテ統一ヲ保タンコトヲ要ス

二、本要目ニ掲ゲタル事項及順序ハ斟酌ヲ加フルモ妨ナシ

三、教授用具ハ教授上差支ナキ限リ成ルベク日用品ヲ利用シ又ハ教員若クハ生徒ノ製作ニ係ルモノヲ以テ之ニ充テンコトニ力ムベシ又諸學科目ニ通ズル用具ハ成ルベク之ヲ兼用スベシ

四、教授ノ際小學校ニ於ケル教授ノ顧慮シ生徒ヲシテ常ニ之ニ留意セシムルヤウ便宜指導スベシ特ニ本科第二部ニ在リテハ小學校ニ於ケル教材ノ研究ニ重ヲ置キ且既修知識ノ整理補充ヲナサンコトニ力ムベシ

國語漢文

國語講讀ハ讀方及解釋、話方・暗誦・書取ヲ課シ其ノ材料ハ總テ文章ノ模範タリ而シテ國體ノ精華、民俗ノ美風、賢哲ノ言行等ヲ敍シ以テ健全ナル思想、醇美ナル國民性ヲ涵養スルニ足ルモノ、欽仰スベキ教育者學者等ノ傳記ニシテ修養ニ資スベキモノ、文藝ノ趣味ニ富ミテ心情ヲ高雅ナラシムルモノ、日常ノ生活ニ裨益アリ常識ヲ養成スルニ足ルモノ等タルベシ但シ女生徒ノ爲ニハ特ニ女子ニ必要ナル諸婦德ノ涵養ニ適切ナル材料ヲ加フベシ

漢文講讀ハ讀方及解釋、暗誦・書取、簡單ナル復文ヲ課シ其ノ材料ハ略國語講讀ノ場合ニ準ズ而シテ邦人ノ著作ニ係ルモノヲ主トシ更ニ德敎ニ關係深キ漢籍中ヨリ之ヲ選ブベシ

作文ハ平明達意ニシテ實際ニ適スル文ヲ作ラシメ且生徒ノ作品ニ就キ添削批評ヲ爲スベシ尙特ニ作文ノ時間ヲ設ケザル學年ニ在リテモ國語漢文ノ講讀ノ時間內ニ於テ成ルベク多ク之ヲ課スベシ

文法ハ國文法ノ大要ヲ授ケテ國語ノ特色ヲ理會セシムベシ尙特ニ文法ノ時間ヲ設ケザル學年ニ在リテモ常ニ講讀・作文等ニ附帶シ實例ニ就テ之ヲ敎ヘ正確ナル語法ニ練熟セシムベシ

文學史ハ國文學ノ史的發展ヲ略述シ國民性ノ由來スル所ヲ知ラシムベシ

習字ハ楷書・行書・草書及假名ヲ課シ間架結構ノ大要ヲ知ラシメ且實用ニ適切ナラシメンコトヲ期スベシ尙特ニ習字ノ時間ヲ設ケザル學年ニ在リテモ作文・書取其ノ他ノ場合ニ於テ常ニ正確ナル書方ニ注意セシムベシ

本科第一部

第一學年　每週六時

國語講讀　每週二時

漢文講讀　每週二時
文法　每週一時
習字　每週一時
作文
隔週一時必ズ國語・漢文講讀ノ時間ニ於テ之ヲ課スベシ

第二學年　每週六時

國語講讀　每週二時
漢文講語　每週二時
文法　每週一時
習字　每週一時
作文
前學年ニ準ズ

第三學年　每週五時

國語講讀　每週二時
漢文講讀　每週二時
習字　每週一時

第四學年　每週四時

國語講讀　第一學期及第二學期每週二時
漢文講讀　每週一時
文學史　每週一時
小學校ニ於ケル國語教授法及教材ノ研究
第三學期每週二時
增課教材　每週二時乃至四時
國語講讀
漢文講讀
習字

第五學年　每週四時

國語講讀　每週二時

漢文講讀　每週一時

文學史　每週一時

增課教材　每週二時乃至四時

國語講讀

漢文講讀

文法

小學校ニ於ケル國語教材ノ研究

本科第二部

第一學年　男　每週二時
女　每週三時

國語講讀　漢文講讀

作文

習字

小學校ニ於ケル國語教授法及教材ノ研究

增課教材　每週二時乃至四時

國語講讀

漢文講讀

習字

第二學年　男 每週二時
　　　　　女 每週三時

國語講讀　漢文講讀

文學史

增課教材　每週二時乃至四時

國語講讀

漢文講讀

文法

小學校ニ於ケル國語教材ノ研究

專攻科　每週三時

國語講讀　每週二時

漢文講讀　每週一時

作文・文法及習字ハ、便宜之ヲ課スベシ

增課教材

國語・漢文若クハ習字ノ一又ハ二以上ヲ選修セシム

注意

一、國語漢文ノ教授ハ常ニ生徒ノ思想感情ヲ啓發陶冶シ之ニ由リテ高尚ナル人格ヲ成シ特ニ愛國的精神ヲ養ハンコトヲ期スベシ

二、國語漢文ノ教授ニ際シテハ發音ヲ明確ニシ句讀ヲ正シクシ假名遣、漢字ノ字畫・用法ニ留意シ語句文章ヲ理會シテ全文ノ意義ヲ領得セシメ文章ノ妙味ヲ翫賞批判セシムヘシ

又漢文教授ニ際シテハ國語ノ法則ニ準據シ且漢文ト國文トノ異同ヲ辨ジ漢文ノ特徵ヲ會得セシムベシ尙低學年ニ於テハ辭書ノ用法ヲ授ケ其ノ使用ニ馴レシムベシ

三、國語漢文各分科ノ教授ハ互ニ聯絡補益センコトニ力ムベシ

四、文法ノ教授ニ於テハ國語ノ特色ヲ理會セシムルト共ニ國語愛護ノ精神ヲ養ハンコトニ留意スベシ特ニ時間ヲ設ケザル學年ニアリテモ常ニ講讀・作文等ニ附帶シ實例ニ就テ之ヲ教ヘ正確ナル語法ニ練熟セシムベシ尙增課教材中ニ成ルベク文法ノ時間ヲ設ケテ之ヲ課スベシ

五、習字ニ在リテハ黑板上ノ練習ヲモ適宜之ヲ爲サシムベク又硬筆習字ヲ加フルモ妨ナシ尙本科ノ高學年及專攻科ニ於テ習字ヲ課スル際適宜書法及書ノ鑑賞ニ就テ指導スベシ

中學校教授要目

文部省訓令第五號（昭和六年二月七日官報）

明治四十四年文部省訓令第十五號中學校教授要目左ノ通改正ス地方長官ハ各學校長ヲシテ本改正要目ニ準據シ地方ノ情況ニ適切ナル教授細目ヲ定メシメ以テ各學科目教授ノ内容ヲ充實シ克ク中學校教育ノ本旨ヲ貫徹セシメンコトヲ期セラルベシ

昭和六年二月七日

本要目實施上ノ注意

一、各學科目ヲ教授スルニハ其ノ固有ノ目的ヲ達スルコトニ力ムルト共ニ互ニ聯絡補益シテ統一ヲ保タンコトヲ要ス

二、本要目ニ揭ゲタル事項及順序ハ斟酌ヲ加フルモ妨ナシ

三、教授用具ハ教授上差支ナキ限リ成ルベク日用品ヲ利用シ又ハ教員自ラ製作シテ之ニ充テンコトニ力ムベシ又諸學科目ニ通ズル用具ハ成ルベク之ヲ兼用スベシ

國語漢文

國語漢文ハ國語講讀・漢文講讀・作文・文法及習字ヲ課スルモノトス

國語講讀ハ讀方及解釋、話方・暗誦・書取ヲ課シ其ノ材料ハ總テ文章ノ模範タリ而シテ國體ノ精華、民俗ノ美風、賢哲ノ言行等ヲ敍シ以テ健全ナル思想、醇美ナル國民性ヲ涵養スルニ足ルモノ、文藝ノ趣味ニ富ミテ心情ヲ高雅ナラシムルモノ、日常ノ生活ニ裨益アリ常識ヲ養成スルニ足ルモノ等タルベシ

漢文講讀ハ讀方及解釋、暗誦ヲ課シ其ノ材料ハ國語講讀ノ場合ニ準ズ而シテ邦人ノ著作ニ係ルモノヲ主トシ更ニ德教ニ關係深キ漢籍中ヨリ之ヲ選ブベシ

作文ハ平明達意ニシテ實際ニ適スル文ヲ作ラシメ且生徒ノ作品ニ就キ添削批評ヲナスベシ尙特ニ作文ノ時

間ヲ設ケザル學年ニ在リテモ少クトモ隔週一回國語漢文ノ講讀ノ時間內ニ於テ之ヲ課スベシ
文法ハ國文法ノ大要ヲ授ケテ國語ノ特色ヲ理解セシムベシ尙特ニ文法ノ時間ヲ設ケザル學年ニ在リテモ常ニ講讀・作文等ニ附帶シテ實例ニ就テ之ヲ敎ヘ正確ナル語法ニ練熟セシムベシ
習字ハ楷書・行書及假名ヲ課シ間架結構ノ大要ヲ知ラシメ且實用ニ適切ナラシメンコトヲ期スベシ尙特ニ習字ノ時間ヲ設ケザル學年ニ在リテモ作文・書取其ノ他ノ場合ニ於テ常ニ正確ナル書方ニ注意セシムベシ

第一學年　每週七時

國語講讀　每週四時
漢文ノ入門ニ資スベキ材料ヲ加ヘ漢文學習ノ基礎ヲ併セ養ハシムベシ
作文　每週一時
文法　每週一時
品詞ノ大要ヲ授ケ口語・文語ノ異同ヲ知ラシメ用言ノ活用ニ練熟セシムベシ
習字　每週一時

第二學年　每週六時

國語講讀　每週三時
漢文講讀　每週二時
作文　隔週一時
習字　隔週一時

第三學年　每週六時

國語講讀　每週三時
漢文講讀　每週三時

第三學年（第一種及第二種ノ兩課程ニ分チタル場合）

基本教材　每週四時
國語講讀　每週二時
漢文講讀　每週二時
增課教材　每週一時乃至三時
國語講讀

近世近古ニ於ケル名著ノ抄本類ヲ課スベシ

漢文講讀

主トシテ邦人ノ手ニナレル名著ノ抄本類ヲ課スベシ

習字

第四學年

基本教材　每週四時

國語講讀　每週二時

漢文講讀　每週二時

增課教材　每週一時乃至三時

國語講讀

前學年ノ材料ニ準ジ更ニ中古上古ニ於ケル文章ヲ選ビ授クベシ

漢文講讀

前學年ノ材料ニ準ジ更ニ德教ニ關係深キ漢籍ノ抄本類ヲ授クベシ

文法

既習ノ全事項ヲ組織的ニ整理シ文ノ構成ニ對スル一般ノ知識ヲ授クベシ

習字

第五學年

基本教材　每週四時

國語講讀　每週二時

漢文講讀　每週二時

增課教材　每週一時乃至三時

國語講讀

前學年ニ準ジ尚國文學ノ史的發展ヲ略述シ國民性ノ由來スル所ヲ知ラシムベシ

漢文講讀

前學年ニ準ズ

文法

習字

注意

一、國語漢文ノ教授ニ際シテハ常ニ生徒ノ思想感情ヲ啓發陶冶シ之ニ由リテ高尙ナル人格ヲ成シ特ニ愛國的精神ヲ養ハンコトヲ要スベシ

二、國語漢文各分科ノ教授ハ互ニ聯絡補益センコトニ力ムベシ

三、增課教材ノ要目ハ適宜取捨シテ之ヲ課スベシ

四、文法ノ教授ニ於テハ國語ノ特色ヲ理解セシムルト共ニ國語愛護ノ精神ヲ養ハンコトニ留意スベシ
尙第四學年又ハ第五學年ノ增課教材中ニ成ルベク文法ノ時間ヲ設ケテ之ヲ課スベシ

附言

高等女學校教授要目は、明治四十四年七月に制定されたもので、文部省では近々これを改訂されるやに言ひ傳へられ、その發表を見るのも、遠くはあるまいと思ふ。よつてこゝには、現行の要目を載せることを差控へることにする。

附錄　假名遣改定案

文部省　臨時國語調査會

現今、わが國に行われている國語、および、字音の假名遣は、これを學ぶのに、一方ならぬ苦心を要し、しかも、あやまりなく、つかいこなすことが、なかなか困難である。わが國民は、すでに、漢字に苦しんでいるのに、そのうえ、むずかしい、假名遣とゆう、重荷を負うている。本會が、さきに、常用漢字を公にし、さらにまた、假名遣の整理をはかつて、この改定案を發表するのは、文字の使用を容易にして、國民教育の發達と、國家文運の進展を、促そうとするためである。

凡例

一、本案ハ、大體、東京語ノ發音ニヨリ、ナオ地方ニオケルモノヲモ考慮シテ整理シタノデアル。

二、本案ハ、主トシテ、現代文(口語・文語トモ)ニ、適用スル。

三、固有名詞、オヨビ、ソノ他、特殊ナ事情ノアルモノハ、シバラク、從前ノ通トスル。タダシ、ナルベク、本案ノ假名遣ニヨル。

四、外國語ノ表記ハ、別ニ定メル。

國語假名遣改定案

國語の表記に關する通則

第一條　國語の拗音を書くには、ゃ・ゅ・ょ を、右側下に、細書する。
　たゞし、特別の場合にかぎり、細書せずとも、差支ない。

第二條　國語の、促音を書くには、っ を、右側下に、細書する。
　たゞし、特別の場合にかぎり、細書せずとも、差支ない。

第三條　國語の、ア°列長音は、ア°列の假名に、ぁ を、つけて書く。

第四條　國語の、イ°列長音は、イ°列の假名に、ぃ を、つけて書く。

第五條　國語の、ウ°列長音は、ウ°列の假名に、ぅ を、つけて書く。

第六條　國語の、エ°列長音は、エ°列の假名に、ぃ を、つけて書く。

第七條　國語の、オ°列長音は、オ°列の假名に、ぅ を、つけて書く。

第八條　國語の、ア°列拗音の長音は、ア°列拗音の假名に、ぁ を、つけて書く。

第九條　國語の、ウ列拗音の長音は、ウ列拗音の假名に、う を、つけて書く。

第十條　國語の、オ列拗音の長音は、オ列拗音の假名に、う を、つけて書く。

注意一　外國語の、拗音・促音の書き方には、通則第一條・第二條を適用する。

注意二　外國語の長音は、通則第三條以下の場合の、「あ」「い」「う」のかわりに、「ー」をつけて書く。

國語假名遣改定案

第一。ゐ・ゑ・を は、い・え・お に、改める。たゞし、助詞の を を除く。

例

一、ゐ を、い に、改めるもの。

いど（井戸）　いのしゝ（猪）　くわい（慈姑）

まいる（参る）　いる（居る）

二、ゑ を、え に、改めるもの。

こえ（聲）　つえ（杖）　すえ（末）

うえる（植ゑる）　すえる（据ゑる）

たゞし、酔ふ（ゑふ）は、よう に、改める。

三、を を、お に、改める。

おけ（桶）　おか（岡）　うお（魚）

おどる（踊る）　おしえる（教へる）

しおれる（萎れる）　おかしい（をかしい）

おしい（惜しい）　あおい（青い）

第二。ぢ・づ は、じ・ず に、改める。

例

一、ぢ を、じ に、改めるもの。

くじら（鯨）　ふじ（藤）　わらじ（草鞋）

ねじる（捻ぢる）　はじる（恥ぢる）　よじる（攀ぢる）

二、づ を、ず に、改めるもの。

うずら（鶉）　うず（渦）　みず（水）
ゆずる（讓る）　うずめる（埋める）　さずける（授ける）
めずらしい（珍らしい）　はずかしい（恥かしい）
しずかに（靜かに）　まず（先）

たゞし

(1) 二語の連合によつて生じた「ぢ」「づ」は、もとのまゝ。

例

はなぢ（鼻血）　もらいぢち（もらひ乳）
ひぢりめん（緋縮緬）　ちかぢか（近々）
たづな（手綱）　みかづき（三日月）
まなづる（眞鶴）　ぬまづ（沼津）

(2) 同音の連呼によつて生じた「ぢ」「づ」は、もとのまゝ。

例

ちぢみ（縮）　ちぢむ（縮む）
ちぢに（千々に）

つづみ（鼓）　　つづら（葛籠）
つづく（續）

第三。わ に發音される は は、わ に、改める。たゞし、助詞の は を除く。

例　かわら（瓦）　　かわ（河）　　にわ（庭）
あらわす（著す）　　まわる（廻る）　　こわれる（毀れる）
あらわぬ（洗はぬ）　　きらわぬ（嫌はぬ）　　さそわぬ（誘はぬ）
かわいらしい（かはいらしい）　　くわしい（委しい）
けわしい（險しい）
にわかに（俄かに）　　すなわち（則）

第四。い に發音される ひ は、い に、改める。

例　うぐいす（鶯）　　たい（鯛）　　はい（灰）
ついやす（費す）　　たいらげる（平げる）
ならいます（習ひます）

わらいます（笑ひます）

まいます（舞ひます）

ちいさい（小さい）　こいしい（戀しい）

ついに（遂に）

第五。お　に發音される　ふ　は、お　に、改める。

例

あおい（葵）

あおる（煽る）　あおぐ（仰ぐ）　たおす（倒す）

第六。う　に發音される　ふ　は、う　に、改める。

例

あらう（洗ふ）　まう（舞ふ）　やとう（傭ふ）

あやうい（危い）

第七。え　に發音される　へ　は、え　に、改める。たゞし、助詞の　へ　を除く。

例

かえる（蛙）　いえ（家）　まえ（前）

かえる（歸る）　さえずる（囀る）

さそえ（誘へ）　ひろえ（拾へ）

さえ（助詞、さへ）

第八。おに發音されるほは、おに、改める。

例　いきおい（勢）　かお（顔）　しお（鹽）

なおす（直す）　におう（匂ふ）

なお（猶）

第九。ウ列長音に發音されるくふ・すふ・ぬふ・ぶふ・ゆふ・るふの類の、ふは、うに、改める。

例　くう（食ふ）　すう（吸ふ）　ぬう（縫ふ）

おぶう（負ふ）　ゆう（結ふ）　くるう（狂ふ）　ゆうだち（夕立）

たゞし、ユの長音に發音されるいふ（言）は、ゆうに、改める。

第十。オ列長音に發音されるおふ・そふ・のふ・もふ・よふ・ろふの類の、ふは、うに、改める。

例

うけおう（請負ふ）　あらそう（爭ふ）
きのう（昨日）　おもう（思ふ）
まよう（迷ふ）　ふくろう（梟）

第十一。　オの長音に發音される　はう、オ列長音に發音される　わう・あふ・おほ　は、おう　に、改める。

例

一、はう　を、おう　に、改めるもの。
あおう（逢はう）　かおう（買はう）　まおう（舞はう）
こおう（強う）　しおう（吝う）

二、わう　を、おう　に、改めるもの。
よおう（弱う）

三、あふ　を、おう　に、改めるもの。
おうぎ（扇）　おうち（楝）

四、おほ　を、おう　に、改めるもの。
おうかみ（狼）　おうやけ（公）

しおうせる（爲遂せる）

おうい（多い）　おうきい（大きい）

第十二。オ列長音に發音される　かう・こふ　は、こう　に、がう　は、ごう　に、改める。

例

一、かう　を、こう　に、改めるもの。

こうがい（笄）　こうじ（麹）　こうべ（神戸）

さこう（咲かう）　きこう（聞かう）

こうばしい（かうばしい）

あこう（赤う）　ちこう（近う）　こう（斯う）

二、こほ　を、こう　に、改めるもの。

こうり（氷）　こうろぎ（蟋蟀）　とどこうる（滯る）

三、がう　を、ごう　に、改めるもの。

いそごう（急がう）　なごう（長う）

第十三。オ列長音に發音される　さう　は、そう　に、改める。

例

はなそう（話さう）　かえそう（返さう）　ちらそう（散らさう）
あそう（淺う）　くそう（臭う）
そう（然）

第十四。オ列長音に發音される　たう・とほ・とを　は、とう　に、改める。

例

一、たう　を、とう　に、改めるもの。
とうげ（峠）　たとうがみ（疊紙）
うとう（打たう）　かとう（勝たう）　たとう（立たう）
いとう（痛う）　かとう（堅う）　つめとう（冷たう）

二、とほ　を、とう　に、改めるもの。
とうる（通る）
とうい（遠い）。

三、とを　を、とう　に、改めるもの。
とう（十）

第十五。オ列長音に發音される　なう　は、のう　に、改める。

例

しのう（死なう）

あぶのう（あぶなう）

第十六。オ列長音に發音される　はう・はふ・ほほ　は、ほう　に、ばう　は、ぼう　に、ぱう　は、ぽう　に、改める。

例

一、はう　を、ほう　に、改めるもの。

ほうき（箒）

ほうむる（葬る）

二、はふ　を、ほう　に、改めるもの。

ほうる（投る）

三、ほほ　を、ほう　に、改めるもの。

ほうずき（酸漿）　ほう（頰）　ほうのき（朴木）

四、ばう　を、ぼう　に、改めるもの。

あそぼう（遊ばう）　とぼう（飛ばう）　はこぼう（運ばう）

五、ぱう を、ぽう に、改めるもの。

すつぽう（すつぱう、酸）

第十七。オ列長音に發音される まう・まふ は、もう に、改める。

例

一、まう を、もう に、改めるもの。

もうける（儲ける）　もうす（申す）

あゆもう（歩まう）　やすもう（休まう）　たのもう（頼まう）

あもう（甘う）　せもう（狹まう）

二、まふ を、もう に、改めるもの。

すもう（角力）

第十八。オ列長音に發音される やう・よほ は、よう に、改める。

例

一、やう を、よう に、改めるもの。

ようか（八日）

はよう（早う）

ようやく（漸く）

二、よほ を、よう に、改めるもの。

もようす（催す）

第十九。 ォ列長音に發音される らう は、ろう に、改める。

例 いのろう（祈らう） かえろう（歸らう） とうろう（通らう）

くろう（暗う） かろう（辛う） あろう（粗う）

第二十。 ウ列拗音の長音に發音される きう は、きゆう に、改める。

例 おうきゆう（大きう）

第二十一。 ウ列拗音の長音に發音される しう は、しゆう に、改める

例 しゆうと（舅） しゆうとめ（姑）

あたらしゆう（新しう） かなしゆう（悲しう）

すゞしゆう（涼しう）

第二十二。　オ列拗音の長音に發音される　けふ　は、きよう　に、改める。

例　きよう（今日（ケフ））

第二十三。　オ列拗音の長音に發音される　せう　は、しよう　に、改める。

例　まいりましよう（参りませう）　そうでしよう（さうでせう）

新舊假名遣對照表

注意　固有名詞、およびその他、用例の稀なものは、改定案から除いた。しかし、それらは、すべて本表によつて、類推することができる。

一

舊假名遣	發音	新假名遣
は	わ	わ
ひ・ゐ	い	い
ふ	う	う
へ・ゑ	え	え
ほ・ふ・を	お	お
ぢ	じ	じ
づ	ず	ず

二

舊假名遣	發音	新假名遣
いひ	いい	いい
しひ	しい	しい
じひ・ぢい	じい	じい
ちひ	ちい	ちい
にひ	にい	にい
ひひ	ひい	ひい

三

くふ	くう	くう
すふ	すう	すう
ぬふ	ぬう	ぬう
ぶふ	ぶう	ぶう
ゆふ	ゆう	ゆう
るふ	るう	るう

四

舊假名遣	發音	新假名遣
あう　あふ　おふ わう はう　はふ	おう	おう
かう　かふ　こほ	こう	こう
がう	ごう	ごう
さう	そう	そう
たう　とほ　とを	とう	とう
なう	のう	のう
はう　はふ　ほほ	ほう	ほう
ばう	ぼう	ぼう
ぱう	ぽう	ぽう
まう　まふ	もう	もう
やう　よほ　ゑふ	よう	よう
らう　ろふ	ろう	ろう

五

舊假名遣	發音	新假名遣
いう　いふ	ゆう	ゆう
きう	きゅう	きゅう
しう	しゅう	しゅう
じう　ぢう	じゅう	じゅう
ちう	ちゅう	ちゅう
にう	にゅう	にゅう
ひう	ひゅう	ひゅう
びう	びゅう	びゅう
ぴう	ぴゅう	ぴゅう
みう	みゅう	みゅう
りう　りふ	りゅう	りゅう

六

舊假名遣	發音	新假名遣
けう　けふ	きょう	きょう
げう	ぎょう	ぎょう
せう	しょう	しょう
ぜう　でう	じょう	じょう
てう	ちょう	ちょう
ねう	にょう	にょう
へう	ひょう	ひょう
べう	びょう	びょう
ぺう	ぴょう	ぴょう
めう	みょう	みょう
れう	りょう	りょう

字音假名遣改定案

字音の表記に關する通則

第一條　字音の、拗音を書くには、ゃ・ゅ・ょを、右側下に、細書する。

たゞし、特別の場合にかぎり、細書せずとも、差支ない。

第二條　字音の、促音を書くには、つを、右側下に、細書する。

たゞし、特別の場合にかぎり、細書せずとも、差支ない。

第三條　字音の、ウ列長音は、ウ列の假名に、うを、つけて書く。

第四條　字音の、オ列長音は、オ列の假名に、うを、つけて書く。

第五條　字音の、ウ列拗音の長音は、ウ列拗音の假名に、うを、つけて書く。

第六條　字音の、オ列拗音の長音は、オ列拗音の假名に、うを、つけて書く。

第七條　左の如き語は、發音のまゝに書く。

銀杏（ギンナン）　　天皇（テンノウ）　　三位（サンミ）

法被（ハッピ）　十方（ジッポウ）　一邊（イッペン）
七寶（シッポウ）　北方（ホッポウ）　六本（ロッポン）
學校（ガッコウ）　脚氣（カッケ）　甲冑（カッチュウ）
法度（ハット）　雜貨（ザッカ）　立派（リッパ）

字音假名遣改定案

第一。ゐ・ゑ・を は、い・え・お に、改める。

例

一、ゐ を、い に、改めるもの

胃（ヰ）　威（ヰ）　位（ヰ）　遺（ヰ）　委（ヰ）　尉（ヰ）
域（ヰキ）　員（ヰン）　院（ヰン）　韻（ヰン）
水（スヰ）　炊（スヰ）　衰（スヰ）　推（スヰ）　對（ツヰ）　遺（ユヰ）　類（ルヰ）

二、ゑ を、え に、改めるもの

會《エ》(ヱ)　惠《エ》(ヱ)　囘《エ》(ヱ)　衞《エ》(ヱ)

越《エツ》(ヱツ)　猿《エン》(ヱン)　園《エン》(ヱン)　圓《エン》(ヱン)　苑《エン》(ヱン)　援《エン》(ヱン)　寃《エン》(ヱン)

三、を を、お に、改めるもの

汚《オ》(ヲ)　惡《オ》(ヲ)　鳴《オ》(ヲ)

翁《オウ》(ヲウ)

屋《オク》(ヲク)　溫《オン》(ヲン)　穩《オン》(ヲン)　園《オン》(ヲン)　遠《オン》(ヲン)　怨《オン》(ヲン)

第二。くわ・ぐわ は、か・が に、改める。

例

一、くわ を、か に、改めるもの

化《カ》(クワ)　貨《カ》(クワ)　果《カ》(クワ)　菓《カ》(クウ)　過《カ》(クワ)　科《カ》(クワ)

火《カ》(クワ)　課《カ》(クワ)

會《カイ》(クワイ)　悔《カイ》(クワイ)　壞《カイ》(クワイ)　囘《カイ》(クワイ)　怪《カイ》(クワイ)　快《カイ》(クワイ)

獲《カク》(クワク)　擴《カク》(クワク)

活《カツ》(クワツ)　猾《カツ》(クワツ)　歡《カン》(クワン)　官《カン》(クワン)　還《カン》(クワン)　貫《カン》(クワン)

二、ぐわ を、が に、改めるもの

臥(グワ)　瓦(グワ)

外(グワイ)　月(グワツ)　元(グワン)　丸(グワン)　願(グワン)

第三。ぢ・づ は、じ・ず に、改める。

例

一、ぢ を、じ に、改めるもの

持(ヂ)　痔(ヂ)

軸(ヂク)　舳(ヂク)　陣(ヂン)

女(ヂヨ)　除(ヂヨ)　重(ヂユウ)　住(ヂユウ)　頭(ヂユウ)

二、づ を、ず に、改めるもの

豆(ヅ)　頭(ヅ)　途(ヅ)　圖(ヅ)

たゞし

(1) 連聲によつて濁る「智」「茶」「中」「通」等は、もとのまゝ。

例

さるぢえ(猿智慧)　わるぢえ(惡智慧)

はぢやや（葉茶屋）　ちやのみぢやわん（茶飲茶碗）

れんぢゆう（連中）　くにぢゆう（國中）

ゆうづう（融通）　じんづうりき（神通力）

(2) 呉音によつて濁る「地」「治」は、もとのまゝ。

例

ぢぬし（地主）　きぬぢ（絹地）

ぢろう（治郎）　せいぢ（政治）

第四。わ に發音される は は、わ に、改める。

例

琵琶の琶（ハ）　枇杷の杷（ハ）

第五。ユの長音に發音される いう・いふ は、ゆう に、改める。

例

一、いう を、ゆう に、改めるもの

尤（イウ）　又（イウ）　友（イウ）　幽（イウ）　郵（イウ）　誘（イウ）　由（イウ）

有（イウ）　遊（イウ）　悠（イウ）　憂（イウ）　猶（イウ）

二、いふ を、ゆう に、改めるもの

　邑《ユウ》(イフ)　揖《ユウ》(イフ)

第六。オ列長音に發音される　あう・わう・あふ・おふ　は、おう　に、改める。

例

一、あう　を、おう　に、改めるもの

　鶯《オウ》(アウ)　櫻《オウ》(アウ)　鸚《オウ》(アウ)　央《オウ》(アウ)　奥《オウ》(アウ)

二、わう　を、おう　に、改めるもの

　往《オウ》(ワウ)　王《オウ》(ワウ)　旺《オウ》(ワウ)　皇《オウ》(ワウ)　凰《オウ》(ワウ)　黄《オウ》(ワウ)　横《オウ》(ワウ)

三、あふ　を、おう　に、改めるもの

　凹《オウ》(アフ)　押《オウ》(アフ)　鴨《オウ》(アフ)

四、おふ　を、おう　に、改めるもの

　凹《オウ》(オフ)

第七。オ列長音に發音される　かう・くわう・かふ・こふ　は、こう　に、がう・ぐわう・がふ・ごふ　は、ごう　に、改める。

例

一、かう を、こう に、改めるもの

好（カウ） 考（カウ） 向（カウ） 肴（カウ） 香（カウ） 講（カウ） 高（カウ）
慷（カウ） 航（カウ） 幸（カウ） 效（カウ） 江（カウ） 降（カウ） 校（カウ）
行（カウ）

二、くわう を、こう に、改めるもの

宏（クワウ） 紘（クワウ） 光（クワウ） 廣（クワウ） 黄（クワウ） 皇（クワウ）
惶（クワウ） 荒（クワウ）

三、かふ を、こう に、改めるもの

甲（カフ） 岬（カフ） 閤（カフ）

四、こふ を、こう に、改めるもの

劫（コフ）

五、がう を、ごう に、改めるもの

號（ガウ） 鄕（ガウ） 强（ガウ） 豪（ガウ） 傲（ガウ）

六、ぐわう を、ごう に、改めるもの

轟（グワウ）

七、がふ　を、ごう　に、改めるもの

合(ガフ)

八、ごふ　を、ごう　に、改めるもの

劫(ゴフ)　業(ゴフ)

第八。オ列長音に發音される　さう・さふ　は、そう　に、ざう・ざふ　は、ぞう　に、改める。

例

一、さう　を、そう　に、改めるもの

掃(サウ)　双(サウ)　爪(サウ)　早(サウ)　相(サウ)　倉(サウ)　曹(サウ)

壯(サウ)　操(サウ)　騷(サウ)　爭(サウ)　桑(サウ)　喪(サウ)　葬(サウ)

二、さふ　を、そう　に、改めるもの

挿(サフ)

三、ざう　を、ぞう　に、改めるもの

造(ザウ)　藏(ザウ)　象(ザウ)　像(ザウ)

四、ざふ　を、ぞう　に、改めるもの

雜(ザフ)

第九。オ列長音に發音される たう・たふ は、とう に、だう・だふ は、どう に、改める。

例

一、たう を、とう に、改めるもの

刀(タウ) 島(タウ) 討(タウ) 盜(タウ) 打(タウ) 橙(タウ) 糖(タウ)

當(タウ) 湯(タウ) 桃(タウ) 陶(タウ) 稻(タウ) 禱(タウ) 悼(タウ)

二、たふ を、とう に、改めるもの

答(タフ) 塔(タフ) 踏(タフ) 納(タフ)

三、だう を、どう に、改めるもの

道(ダウ) 堂(ダウ) 棠(ダウ) 萄(ダウ)

四、だふ を、どう に、改めるもの

納(ダフ)

第十。オ列長音に發音される なう・なふ は、のう に、改める。

例

一、なう を、のう に、改めるもの

腦(ナウ) 惱(ナウ) 囊(ナウ)

二、なふ を、のう に、改めるもの

納(ナフ)

第十一。オ列長音に發音される はう・はふ・ほふ は、ほう に、ばう・ばふ・ぼふ は、ぼう に改める。

例

一、はう を、ほう に、改めるもの

報(ハウ)　邦(ハウ)　宝(ハウ)　方(ハウ)　包(ハウ)　保(ハウ)　褒(ハウ)

たゞし、蘇枋の枋は、發音に從い、はう を、おう に、改める。

二、はふ 又は、ほふ を、ほう に、改めるもの

法(ハフ・ホフ)

三、ばう を、ぼう に、改めるもの

暴(バウ)　冒(バウ)　坊(バウ)　房(バウ)　亡(バウ)　望(バウ)　膨(バウ)

四、ばふ 又は、ぼふ を、ぼう に、改めるもの

乏(バフ・ボフ)

第十二。オ列長音に發音される まう は、もう に、改める。

例

毛(マウ)　孟(マウ)　亡(マウ)　妄(マウ)　盲(マウ)　望(マウ)　網(マウ)

第十三。オ列長音に發音される　やう・えう・えふ　は、よう　に、改める。

例

一、やう　を、よう　に、改めるもの

羊(ヤウ)　洋(ヤウ)　樣(ヤウ)　陽(ヤウ)　楊(ヤウ)

二、えう　を、よう　に、改めるもの

要(エウ)　曜(エウ)　遙(エウ)　謠(エウ)　夭(エウ)　幼(エウ)　杳(エウ)

三、えふ　を、よう　に、改めるもの

葉(エフ)

第十四。オ列長音に發音される　らう・らふ　は、ろう　に、改める。

例

一、らう　を、ろう　に、改めるもの

老(ラウ)　勞(ラウ)　郎(ラウ)　廊(ラウ)

二、らふ　を、ろう　に、改めるもの

臈《ロウ》（ラフ）　臘《ロウ》（ラフ）　蠟《ロウ》（ラフ）

第十五。　ウ列拗音の長音に發音される　きう・きふ　は、きゆう　に、ぎう　は、ぎゆう　に、改める。

例

一、きう　を、きゆう　に、改めるもの

休《キユウ》（キウ）　丘《キユウ》（キウ）　厩《キユウ》（キウ）　臼《キユウ》（キウ）　糾《キユウ》（キウ）　久《キユウ》（キウ）　柩《キユウ》（キウ）

仇《キユウ》（キウ）　求《キユウ》（キウ）　朽《キユウ》（キウ）

二、きふ　を、きゆう　に、改めるもの

急《キユウ》（キフ）　及《キユウ》（キフ）　吸《キユウ》（キフ）　級《キユウ》（キフ）　泣《キユウ》（キフ）　給《キユウ》（キフ）

三、ぎう　を、ぎゆう　に、改めるもの

牛《ギユウ》（ギウ）

第十六。　ウ列拗音の長音に發音される　しう・しふ　は、しゆう　に、じう・じふ　は、じゆう　に、改める。

例

一、しう　を、しゆう　に、改めるもの

修《シユウ》（シウ）　舟《シユウ》（シウ）　囚《シユウ》（シウ）　秀《シユウ》（シウ）　就《シユウ》（シウ）　收《シユウ》（シウ）　臭《シユウ》（シウ）

秋《シユウ》（シウ）　州《シユウ》（シウ）　酋《シユウ》（シウ）　袖《シユウ》（シウ）　聚《シユウ》（シウ）　周《シユウ》（シウ）

二、しふ　を、しゆう　に、改めるもの

拾《シユウ》（シフ）　執《シユウ》（シフ）　集《シユウ》（シフ）　襲《シユウ》（シフ）　澁《シユウ》（シフ）　習《シユウ》（シフ）　輯《シユウ》（シフ）

三、じう　を、じゆう　に、改めるもの

柔《ジユウ》（ジウ）　獸《ジユウ》（ジウ）

四、じふ　を、じゆう　に、改めるもの

十《ジユウ》（ジフ）　什《ジユウ》（ジフ）　汁《ジユウ》（ジフ）　拾《ジユウ》（ジフ）

第十七。ウ列拗音の長音に發音される　ちう　は、ちゆう　に、改める。

例

晝《チユウ》（チウ）　丑《チユウ》（チウ）　宙《チユウ》（チウ）　抽《チユウ》（チウ）　冑《チユウ》（チウ）　肘《チユウ》（チウ）　鑄《チユウ》（チウ）

第十八。ウ列拗音の長音に發音される　にう・にふ　は、にゆう　に、改める。

例

一、にう　を、にゆう　に、改めるもの

柔《ニユウ》（ニウ）

二、にふ　を、にゆう　に、改めるもの

入（ニフ）

第十九。ウ列拗音の長音に發音される　びう　は、びゆう　に、改める。

例

謬（ビウ）

第二十。ウ列拗音の長音に發音される　りう・りふ　は、りゆう　に、改める。

例

一、りう　を、りゆう　に、改めるもの

留（リウ）　柳（リウ）　流（リウ）

二、りふ　を、りゆう　に、改めるもの

立（リフ）　粒（リフ）　笠（リフ）

第二十一。オ列拗音の長音に發音される　きやう・けう・けふ　は、きよう　に、ぎやう・げう・げふ　は、ぎよう　に、改める。

例

一、きやう　を、きよう　に、改めるもの

杏（キヤウ）　驚（キヤウ）　狂（キヤウ）　兄（キヤウ）　競（キヤウ）　鏡（キヤウ）

強（キヤウ）　京（キヤウ）　經（キヤウ）　鄕（キヤウ）　饗（キヤウ）

二、けう　を、きよう　に、改めるもの

校（ケウ）　敎（ケウ）　喬（ケウ）　橋（ケウ）

三、けふ　を、きよう　に、改めるもの

脅（ケフ）　協（ケフ）　夾（ケフ）　俠（ケフ）

四、ぎやう　を、ぎよう　に、改めるもの

仰（ギヤウ）　行（ギヤウ）　形（ギヤウ）　刑（ギヤウ）

五、げう　を、ぎよう　に、改めるもの

堯（ゲウ）　曉（ゲウ）

六、げふ　を、ぎよう　に、改めるもの

業（ゲフ）

第二十二。　オ列拗音の長音に發音される　しやう・せう・せふ　は、しよう　に、じやう・ぢやう・ぜう・でう・でふ　は、じよう　に、改める。

例

一、しやう　を、しよう　に、改めるもの

相(シヤウ)　正(シヤウ)　商(シヤウ)　詳(シヤウ)　傷(シヤウ)　省(シヤウ)
生(シヤウ)　唱(シヤウ)　將(シヤウ)　尙(シヤウ)　聖(シヤウ)　性(シヤウ)
章(シヤウ)　掌(シヤウ)

二、せう　を、しよう　に、改めるもの

笑(セウ)　俏(セウ)　招(セウ)　燒(セウ)　消(セウ)　詔(セウ)　小(セウ)
礁(セウ)　照(セウ)　少(セウ)

三、せふ　を、しよう　に、改めるもの

妾(セフ)　捷(セフ)　涉(セフ)

四、じやう　を、じよう　に、改めるもの

上(ジヤウ)　情(ジヤウ)　淨(ジヤウ)　狀(ジヤウ)　讓(ジヤウ)　成(ジヤウ)
城(ジヤウ)　常(ジヤウ)

五、ぢやう　を、じよう　に、改めるもの

場(ヂヤウ)　娘(ヂヤウ)　釀(ヂヤウ)　丈(ヂヤウ)　杖(ヂヤウ)　定(ヂヤウ)
錠(ヂヤウ)

六、ぜう　を、じよう　に、改めるもの

擾《ジョウ》（ゼウ）　饒《ジョウ》（ゼウ）

七、でう　を、じよう　に、改めるもの

條《ジョウ》（デウ）　嫋《ジョウ》（デウ）

八、でふ　を、じよう　に、改めるもの

帖《ジョウ》（デフ）　疊《ジョウ》（デフ）

第二十三。　オ列拗音の長音に發音される　ちやう・てう・てふ　は、ちよう　に、改める。

例

一、ちやう　を、ちよう　に、改めるもの

停《チョウ》（チヤウ）　提《チョウ》（チヤウ）　丁《チョウ》（チヤウ）　町《チョウ》（チヤウ）　挺《チョウ》（チヤウ）　長《チョウ》（チヤウ）

腸《チョウ》（チヤウ）　聽《チョウ》（チヤウ）

二、てう　を、ちよう　に、改めるもの

弔《チョウ》（テウ）　鳥《チョウ》（テウ）　朝《チョウ》（テウ）　兆《チョウ》（テウ）　超《チョウ》（テウ）　調《チョウ》（テウ）　彫《チョウ》（テウ）

三、てふ　を、ちよう　に、改めるもの

帖《チョウ》（テフ）　蝶《チョウ》（テフ）　牒《チョウ》（テフ）

第二十四。　オ列拗音の長音に發音される　ねう　は、によう　に、改める。

例

尿(ネウ)　饒(ネウ)　遶(ネウ)　鐃(ネウ)

第二十五。　オ列拗音の長音に發音される　ひやう・へう　は、ひよう　に、びやう・べう　は、びよう　に、改める。

例

一、ひやう　を、ひよう　に、改めるもの

兵(ヒヤウ)　平(ヒヤウ)　評(ヒヤウ)

二、へう　を、ひよう　に、改めるもの

雹(ヘウ)　表(ヘウ)　俵(ヘウ)　票(ヘウ)　豹(ヘウ)

三、びやう　を、びよう　に、改めるもの

屛(ビヤウ)　病(ビヤウ)　鋲(ビヤウ)

四、べう　を、びよう　に、改めるもの

苗(ベウ)　描(ベウ)　猫(ベウ)　眇(ベウ)　廟(ベウ)

第二十六。　オ列拗音の長音に發音される　みやう・めう　は、みよう　に、改める。

例

一、みやう　を、みよう　に、改めるもの
明(ミョウ)（ミヤウ）　命(ミョウ)（ミヤウ）　冥(ミョウ)（ミヤウ）　名(ミョウ)（ミヤウ）　茗(ミョウ)（ミヤウ）

二、めう　を、みよう　に、改めるもの
妙(ミョウ)（メウ）　苗(ミョウ)（メウ）　猫(ミョウ)（メウ）

第二十七。　オ°列拗音の長音に發音される　りやう・れう・れふ　は、りよう　に、改める。

例

一、りやう　を、りよう　に、改めるもの
良(リョウ)（リヤウ）　兩(リョウ)（リヤウ）　亮(リョウ)（リヤウ）　令(リョウ)（リヤウ）　領(リョウ)（リヤウ）　凉(リョウ)（リヤウ）
諒(リョウ)（リヤウ）　量(リョウ)（リヤウ）　梁(リョウ)（リヤウ）

二、れう　を、りよう　に、改めるもの
聊(リョウ)（レウ）　料(リョウ)（レウ）　了(リョウ)（レウ）　僚(リョウ)（レウ）　寮(リョウ)（レウ）　寥(リョウ)（レウ）

三、れふ　を、りよう　に、改めるもの
獵(リョウ)（レフ）　鬣(リョウ)（レフ）

新舊假名遣對照表

一

舊假名遣	發音	新假名遣
ゐ	い	い
ゑ	え	え
を	お	お
くわ	か	か
ぐわ	が	が
ぢ	じ	じ
づ	ず	ず
は	わ	わ

二

舊假名遣	發音	新假名遣
いう　いふ	ゆう	ゆう

三

舊假名遣	發音	新假名遣
あう　あふ　おふ		
はう	おう	おう
わう		
かう　くわう　かふ　こふ	こう	こう
がう　ぐわう　がふ　ごふ	ごう	ごう
さう　さふ	そう	そう
ざう　ざふ	ぞう	ぞう
たう　たふ	とう	とう
だう　だふ	どう	どう
なう　なふ	のう	のう
はう　はふ　ほふ	ほう	ほう
ばう　ばふ　ぼふ	ぼう	ぼう
まう	もう	もう
やう　えう	よう	よう
らう　らふ	ろう	ろう

四

舊假名遣	發音	新假名遣
きう　きふ	きゆう	きゆう
ぎう	ぎゆう	ぎゆう
しう　しふ	しゆう	しゆう
じう　じふ ぢゆう	じゆう	じゆう
ちう	ちゆう	ちゆう
にう　にふ	にゆう	にゆう
びう	びゆう	びゆう
りう　りふ	りゆう	りゆう

五

舊假名遣	發音	新假名遣
きやう　けう　けふ	きよう	きよう
ぎやう　げう　げふ	ぎよう	ぎよう
しやう　せう　せふ	しよう	しよう
じやう　ぜう ぢやう　でう　でふ	じよう	じよう
ちやう　てう　てふ	ちよう	ちよう
ねう	によう	によう
ひやう　へう	ひよう	ひよう
びやう　べう	びよう	びよう
みやう　めう	みよう	みよう
りやう　れう　れふ	りよう	りよう

註

右の「假名遣改定案」は、舊案に除外例を設けて、昭和六年五月八日に發表したものである。除外例は、國語假名遣改定案第二、及び字音假名遣改定案第三に書き加へた「たゞし書き」である。この修正について、同會幹事は、次の如く說明された。

假名遣改定案は、大正十三年十二月に發表して、世の批判を求めたのであります。その結果、ある字音、たとへば、「智」「茶」「中」「通」等の如き、單獨では淸音に言ひあらはされるのに、「猿智慧」「葉茶屋」「連中」「融通」の樣に、熟語を構成すると、連聲によつて、濁音になります。又、「地」「治」は、漢音では淸音、吳音では濁音であります。此の如く、淸音の時は「チ」「ツ」で、濁音になると「ジ」「ズ」と書きあらはす樣では、連想上、面白くないといふ意見が大分あります。

國語においても、同樣な場合がありまして、「鶴」が「眞」と結びついてマナズル、「綱」が「手」

と結びついてタズナとなり、「血」が「鼻」と結びついてハナジ、「近」が「手」と結びついてテジカとなるのがをかしい。又、同音同語の連呼される場合、たとへば、「續」がツズク、「鼓」がツズミ、「縮」がチジム、「千々」がチジとなり、「散り〳〵」がチリジリ、「月々」がツキズキとなつては、氣持がわるいといふ反對も相當にあります。

もちろん、感情問題ではありますけれども、この點を特に考慮致しまして、今回、これらの語は、しばらく、從前の通りに書きあらはすといふことにしておきます。原案における除外例は、たゞ、助詞「を」「は」「へ」の三つだけでありましたが、修正案では、以上に述べた特殊の場合に限りジヂズヅの用法を除外することゝなりました。

附錄　常用漢字表

文部省　臨時國語調査會

凡　例

一、本表ニナイ漢字ハ假名デ書ク。

二、固有名詞ニハ本表ニナイ文字ヲ用イテモ差支ナイ。
タダシ外國(支那ヲ除ク)ノ人名地名ハ假名書トスルコト。

三、代名詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞、オヨビ助詞ハ、ナルベク假名デ書ク。

四、外來語ハ假名デ書ク。

一 丨 丶 丿 乙 亅 二 亠 人

一丁七丈三上下不世丙並
中
丸主
久之乏乗
乙九乞也乳乱(亂)
了事
二互五井
亡交亦京亭
人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴
伺似位低住佐何余佛作伸使来(來)例侍供佳依侮侯
侵便係促俊俗保俠信修俳俵俸併(倂)倉個倍倒候借
倫倶仮(假)偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像

	僚偽(僞)偕價儀億儉償優
儿	元兄充兆兇先光兌克免児(兒)
入	入內全両(兩)
八	八公六共兵具典其兼
冂	冊再
冫	冬冷凉准凌凍
几	凡
凵	凶出
刀	刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺刻(刻)則削前
	剛副割創剰(剩)劇劍剤(劑)
力	力功加劣助努劾勅勇勉動勘務勝労(勞)募勢勤勳励
	(勵)勧(勸)

部首	漢字
勹	包
匕	化北
匚	區
十	十千升午半卑卒卓協南博
卜	占
卩	印危却卵卷卽
厂	厄厘厚原厥
厶	去参(參)
又	及友反叔取受
口	口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告周味呼命和咽哀品咸員哲唐唱商問啓唯善喉喜喪單喫嗣嘉器噴嚴嘱(囑)

部首	
口	囚四回因困固国(國)囲(圍)園円(圓)図(圖)團
土	土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪 報場塔塗塵境墓塀(塀)增墨墮壁壇壓壞壤
士	士壯壱(壹)寿(壽)
夂	夏
夕	夕外多夜夢
大	大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奨奮
女	女奴好如妃妊妙妨妥妹妻姉始姑姓委姦姪姬姻姿 威娘娯娠婚婦娼婿媒嫁嫡嫌嬢
子	子字存孝季孤孫学(學)
宀	冗(宂)宅守安完宏宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄 密富寒察寝実(實)審写(寫)寛宝(寶)

部首	漢字
寸	寸寺封射將專尉尊尋對導
小	小少尙
尢	就
尸	尺尼尾尿局居屆屈屋展屛履属(屬)
山	山岡岩岳岸峠峯島峽崇崎崩
巛	川州巡巢
工	工左巧巨差
己	己
巾	市布帆希帝帥師席帳帯(帶)常帽幅幕幣
干	干平年幸幹
幺	幻幼幾
广	床序底店府度座庫庭庶康廉廊廃(廢)廣廳(廳)

廴	延廷建廻
廾	弄弊
弋	式
弓	弓弔引弟弱張強彈
彡	形彩彫彰影
彳	役彼往征待律後徐径(徑)徒(徒)得従(從)御復微徵德徹
心	心必忌忍志忘忙忠快念怒思怠急性怨怪怯恐恥恨
	恩恭息悔悟患悖悲悼情惑惜惠悪惟惰悩(惱)想愁愉
	意愚愛感慈態慕惨(慘)慢慣慨慮慰慶慾憂憤憐憚憲
	憶憾憤懇應懲懷懸恋(戀)
戈	成我戒戰戯(戲)戴
戸	戸戻房所扇

日	无	方	斤	斗	文	攴	支			手
日旦旨早旬旭昇昌明易昔星春昨是映昭時晩晝普	既	方施旅旋族旗	斤斥斬斯新断(斷)	斗料斜	文	收改攻放政故叙(敍)教敏救敗敢散敬敵敷数(數)整	支	(擇)擊操担(擔)拠(據)擬擴摂(攝)	扣(控)推接提揚換握揭揮援描插損搖搜摘携摩撫択	手才打扱扶批承技抑投抗折抱抵押抽拂拍拒拓拔 拘拙招披拜括拳拾持指振捕捧捨掃授掌排掛採探

	景晴晶智暇暖暗暑暮暴暦曇曜
曰	曲更書曹曾替最會
月	月有朋服朕朗望朝期
木	木未末本札朱机朽杉材村束柿杯東松板枕林枚果
	枝枯架柄某染柔查柩柱柳栗校株根格栽桃案桐桑
	梅条(條)梨械棄棋棒棟森棺植楠業極栄(榮)構概楽(樂)
	楼(樓)標樞模様(樣)樹橋機横檄檢櫻欄権(權)
欠	次欲款欺歌歎歐歓(歡)
止	止正此步武歳歴帰(歸)
歹	死殊殉殖残(殘)
殳	段殺殿毀
毋	母每毒

比	毛	氏	气	水	火
比	毛	氏民	気(氣)	水氷永汁求汗汚江池決汽沈没沖沙汰河沸油治沼 沿況泉泊法波泣泥注泰泳洋洗津洪活派流浦浪浮 浴海浸消渉液淑涙淡淨淫深混清浅(淺)添減渡温測 港渇湖湧湯渕(淵)源準溢溶溺滅滋滑滞(滯)滴満(滿)漁 漂漆漏演漠漢漫漸潔潜(潛)潮沢(澤)激濁濃湿(濕)済(濟) 濱滝(瀧)湾(灣)	火灰災炊炎炭烈無然煉煮煙照煩熟熱燃燈焼営(營) 爆炉(爐)

部首	漢字
爪	爪爭為(爲)爵
父	父
爻	爾
片	片版牌
牙	牙
牛	牛牧物牲特犠(犧)
犬	犬犯狀狂狩狹猛猫猶獄独(獨)獲猟(獵)獸献(獻)
玄	玄率
玉	玉王玩珍珠班現球理琴環璽
瓦	瓦瓶(甁)
甘	甘甚
生	生產甥

用	用
田	田由甲申男町界畏畑畜畝略番画(畫)異畄(留)當畳(疊)
疋	疋疎疑
疒	疫疲疾病症痘痛痢療癖
癶	登発(發)
白	白百的皆皇
皮	皮
皿	皿盆益盛盗盟尽(盡)監盤
目	目盲直相省眉看眞眠眼着睡督
矢	矢知短
石	石砂砲破研(硏)硬硯碁砕碑確磁磨礎
示	示社祈祕祖祝神票祭禁禍福禦礼(禮)

禾	秀私秋科秒租秩移税程稚種称(稱)稲稿穀積穂穏
穴	穴究空突窃窒窓(窗)窮
立	立章童端競
竹	竹竿笑笛符第筆等筋筒答策算管箱節範築篤簡簿 籍
米	米粉粒粘粗粋精糖糞
糸	系紀約紅紋納純紙級紛素紡索紫累細紳紹紺終組 結絶絡給統糸(絲)絹経(經)緑維綱網綴綻綿緊緒線締 縁編緩緯練縛縣縫縮縦(縱)総(總)績繁織繕繪繭繰継 (繼)続(續)
缶	欠(缺)
网	罪置署罰罵罷羅

羊	羊美羣義
羽	羽翁翌習翼
老	老考者
而	耐
耒	耕
耳	耳聖聞聯声(聲)職聴(聽)
聿	粛(肅)肇
肉	肉肖肝股肥肩育肺胃背胎胞胴胸能脈脊脅脚脱腐
	腕脳(腦)腰腸腹膚膜膝胆(膽)臆膺臓
臣	臣臥臨
自	自臭
至	至致台(臺)

臼	與興挙(擧)旧(舊)
舌	舌舎
舛	舞
舟	舟航般舵舶船艦
艮	良
色	色
艸	芝花芽芳苑苗若苦英茂茶草荒荷莊菊菌菓菜華万(萬)落葉著葬蒙蒸蓄蔓薄藏藝藤薬(藥)
虍	虎虐処(處)虚(虛)号(號)
虫	蚊蛇蛙蜂蜜融虫(蟲)蚕(蠶)蛮(蠻)
血	血衆
行	行術街衝衡衛

衣	衣表衰袋袖被裁裂裏裕補装裸製複褒襲
襾	西要覆
見	見規視親覚(覺)覧観(觀)
角	角鮮(解)触(觸)
言	言訂計討訓託記訟訪設許訴診詐詔評詞詠試詩詰話詳誇諮誌認誓誕誘語誠誤説課調談請論諭諸諾謀謁講謝謡謹謬証(證)識譜警訳(譯)議護誉(譽)読(讀)変(變)譲
谷	谷
豆	豆豊(豐)
豕	豚象豪豫
貝	貝貞負財貧貨販貫責貯貳貴買貸費貿賀賃賄資賊

	賓賜賞賢賣賎(賤)賦質頼購贈賛(贊)
赤	赤
走	赱(走)赴起超越趣
足	足距跡路踊躍
身	身
車	車軌軍軒軟軸較載軽(輕)輩輪輸輯輿轉
辛	辛弁(辨辯)辞(辭)
辰	辱農
辵	込迎近返迫迭述迷追退送逃逆透逐途通速造連週
	進逸遂遇遊運過道達違遙逓(遞)遠遣適遭遅(遲)遷選
	遺遵避還辺(邊)
邑	邦邪邸郊郎郡部郵都郷

酉	酌配酒酢酬酷酸酔醜医(醫)
采	釈(釋)
里	里重野量
金	金釜針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼録銭(錢)錯鍋鎖
	鎮鏡鋳(鑄)鐘鉄(鐵)鑑鑛
長	長
門	門閉開閑間閣閲関(關)
阜	防附降限陛院陣除陪陳陰陵陶陥陸陽隆隊階隔隙
	際障隣随(隨)険隠
隹	隻雀雄雅集雇雌双(雙)雑離難
雨	雨雪雲零雷電需震霜霧露霊(靈)
青	青静

非	非
面	面
革	革靴
音	音響
頁	頂項順頓預頑領頭頻題額顔願顛類顧顕(顯)
風	風
飛	飛飜
食	食飢飲飯飾養餓余(餘)餐餅(餠)館(舘)
首	首
香	香
馬	馬馳駁駄駐騎騰騒驅驗驚駅(驛)
骨	骨髄(髓)体(體)

部首	漢字
高	高
髟	髪
門	闘(鬭)
鬼	鬼 魂 魔
魚	魚 鮮 鯉 鯛
鳥	鳥 鳩 鳴 鶴 鶏
鹵	塩(鹽)
鹿	鹿(鹿)麗(麗)
麥	麦(麥)
麻	麻
黃	黄
黑	黒 黙 点(點)党(黨)

鼓	鼻	齊	齒	龍	龜
鼓	鼻	斉(齊)	歯(齒)齢(齡)	竜(龍)	亀(龜)

『注意』本表ニオイテハ(　)印ヲ附シタ原字ヲ捨テ、コレニ對スル簡易字体ヲ一般ニ採用スル積デアル。

註

右の「常用漢字表」は、舊表に改訂を加へて、昭和六年五月八日に、發表したものである。この修正に關して、同會幹事は、次の如く說明された。

常用漢字表は、大正十二年五月に發表されたものでありますが、東京・大阪の各新聞社が聯合して新聞紙上に、漢字の制限を實現せんことを約し、共同宣言を發表して、同年九月一日よりこれを實施すべく準備して居りましたところ、不幸にして、九月一日の關東大震災のため、一時中止の止むなきに至りました。その後、各新聞社は、それぞれ復興の緒に就くに及び、更に漢字制限の實行に着手致しました。又、雜誌等においても、漸次これを實行する傾向を生じましたが、實際これを使用して見ますと、幾分修正すべきものあることを感得したのであります。卽ち、實際あまり使用しないものが、若干存在すると同時に、是非、新に加へたいものも、多少あることを認めたのであります。

つぎに、臨時國語調査會においても、漢字制限の實行を圓滑ならしめる爲に、漢語の整理を行ふの必要を認めまして、先年來、その調査を進めて居りましたが、「披露」や「諮問」の如く、實際ひろく用ゐられて居る語で、これを言ひかへるべき善い語のないものは、「ひ露」「し問」と書くことも面白くありませんから、「披」「諮」を新に差し加へました。

常用漢字の發表以來、社會が一般に漢字制限の趣旨に共鳴し、年一年、むづかしい漢字は用ゐない様になつて來たのは、明かな事實でありますから、この時勢の推移に鑑み、今回、一千九百六十字の常用漢字から百四十七字を削り、新に四十五字を差し加へましたので、總計一千八百五十八字、即ち從前のものに比して、百〇二字減少致しました。今後更に修正を加へるべき時期が遠からず來るであらうと思ひますが、その際は、更に一層の減少を見るものと信じて居ります。

索引

一、國語は歷史的假名遣、字音は發音的假名遣で、五十音圖順に排列した。

二、標語の下の數字は、本書の項の順序を示す。

三、目次に明かに示してあることは、往々省略した。

ア

イ

ウ

エ

オ

カ

コ

ナ

ニ

ヌ

〔附表一〕

動詞の活用表

（活用形の名を示す部分に、「形」を略した）

文語

下二段		受く	受(ウ)	け	け	く	くる	くれ	
下二段	ガ	投ぐ	投(ナ)	げ	げ	ぐ	ぐる	ぐれ	げよ
下二段	サ	失す	失(ウ)	せ	せ	す	する	すれ	せよ
下二段	ザ	交ず	交(マ)	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜよ
下二段	タ	捨つ	捨(ス)	て	て	つ	つる	つれ	てよ
下二段	ダ	出づ	出(イ)	で	で	づ	づる	づれ	でよ
下二段	ナ	連ぬ	連(ツラ)	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
下二段	ハ	教ふ	教(ヲシ)	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
下二段	バ	述ぶ	述(ノ)	べ	べ	ぶ	ぶる	ぶれ	べよ
下二段	マ	染む	染(ソ)	め	め	む	むる	むれ	めよ
下二段	ヤ	越ゆ	越(コ)	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
下二段	ラ	流る	流(ナガ)	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
下二段	ワ	植う	植(ウ)	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ
下一段	カ	蹴る	（蹴）	け	け	ける	ける	けれ	けよ

口語

下一段	カ	蹴る	（蹴）	け	け	ける	ける	けれ	けよ（ろ）
下一段	カ	受ける	受(ウ)	け	け	ける	ける	けれ	けよ（ろ）
下一段	ガ	投げる	投(ナ)	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ（ろ）
下一段	サ	失せる	失(ウ)	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ（ろ）
下一段	ザ	交ぜる	交(マ)	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ（ろ）
下一段	タ	捨てる	捨(ス)	て	て	てる	てる	てれ	てよ（ろ）
下一段	ダ	出る	（出）	で	で	でる	でる	でれ	でよ（ろ）
下一段	ナ	連ねる	連(ツラ)	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ（ろ）
下一段	ハ	教へる	教(ヲシ)	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ（ろ）
下一段	バ	述べる	述(ノ)	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ（ろ）
下一段	マ	染める	染(ソ)	め	め	める	める	めれ	めよ（ろ）
下一段	ヤ	越える	越(コ)	え	え	える	える	えれ	えよ（ろ）
下一段	ラ	流れる	流(ナガ)	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ（ろ）
下一段	ワ	植ゑる	植(ウ)	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ（ろ）

〔附表一〕

動詞の活用表

（活用形の名を示す部分に、「形」を略した）

文語

種類	行名	例語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	カ	聞く	聞キ	か	き	く	く	け	け
	ガ	騒ぐ	騒サワ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	サ	貸す	貸カ	さ	し	す	す	せ	せ
	タ	打つ	打ウ	た	ち	つ	つ	て	て
	ハ	問ふ	問ト	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	バ	飛ぶ	飛ト	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	マ	踏む	踏フ	ま	み	む	む	め	め
	ラ	乗る	乗ノ	ら	り	る	る	れ	れ
變格	ナ	死ぬ	死シ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
	ラ	有り	有ア	ら	り	り	る	れ	れ
	カ	來ク	（來）	こ	き	く	くる	くれ	こよ
	サ	爲ス	（爲）	せ	し	す	する	すれ	せよ
上二段	カ	生く	生イ	き	き	く	くる	くれ	きよ
	ガ	過ぐ	過ス	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
	タ	落つ	落オ	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
	ダ	恥づ	恥ハ	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
	ハ	強ふ	強シ	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
	バ	延ぶ	延ノ	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
	マ	恨む	恨ウラ	み	み	む	むる	むれ	みよ
	ヤ	悔ゆ	悔ク	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
	ラ	懲る	懲コ	り	り	る	るる	るれ	りよ
上一段	カ	着る	（着）	き	き	きる	きる	きれ	きよ
	ナ	煮る	（煮）	に	に	にる	にる	にれ	によ
	ハ	干る	（干）	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
	マ	見る	（見）	み	み	みる	みる	みれ	みよ
	ヤ	射る	（射）	い	い	いる	いる	いれ	いよ
	ワ	居ヰる	（居）	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
下二段	ア	得ウ	（得）	え	え	う	うる	うれ	えよ
	カ	受く	受ウ	け	け	く	くる	くれ	けよ
	ガ	投ぐ	投ナ	げ	げ	ぐ	ぐる	ぐれ	げよ
	サ	失す	失ウ	せ	せ	す	する	すれ	せよ
	ザ	交ず	交マ	ぜ	ぜ	ず	ずる	ずれ	ぜよ
	タ	捨つ	捨ス	て	て	つ	つる	つれ	てよ
	ダ	出づ	出イ	で	で	づ	づる	づれ	でよ
	ナ	連ぬ	連ツラ	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
	ハ	教ふ	教ヲシ	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
	バ	述ぶ	述ノ	べ	べ	ぶ	ぶる	ぶれ	べよ
	マ	染む	染ソ	め	め	む	むる	むれ	めよ
	ヤ	越ゆ	越コ	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
	ラ	流る	流ナガ	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
	ワ	植う	植ウ	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ
下一段	カ	蹴る	（蹴）	け	け	ける	ける	けれ	けよ

口語

種類	行名	例語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	カ	聞く	聞キ	か	き	く	く	け	け
	ガ	騒ぐ	騒サワ	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
	サ	貸す	貸カ	さ	し	す	す	せ	せ
	サ	害す	害ガイ	さ	し	す	す	せ	せ
	タ	打つ	打ウ	た	ち	つ	つ	て	て
	ナ	死ぬ	死シ	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
	ハ	問ふ	問ト	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
	バ	飛ぶ	飛ト	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
	マ	踏む	踏フ	ま	み	む	む	め	め
	ラ	乗る	乗ノ	ら	り	る	る	れ	れ
	ラ	有る	有ア	ら	り	る	る	れ	れ
變格	カ	來る	（來）	こ	き	くる	くる	くれ	こい
	サ	爲る	（爲）	せ	し	する	する	すれ	しろ せよ
上一段	カ	着る	（着）	き	き	きる	きる	きれ	きよ（ろ）
	カ	生きる	生イ	き	き	きる	きる	きれ	きよ（ろ）
	ガ	過ぎる	過ス	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ（ろ）
	ザ	案じる	案アン	じ	じ	じる	じる	じれ	じよ（ろ）
	タ	落ちる	落オ	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ（ろ）
	ダ	恥ぢる	恥ハ	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ（ろ）
	ナ	煮る	（煮）	に	に	にる	にる	にれ	によ（ろ）
	ハ	干る	（干）	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ（ろ）
	ハ	強ひる	強シ	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ（ろ）
	バ	延びる	延ノ	び	び	びる	びる	びれ	びよ（ろ）
	マ	見る	（見）	み	み	みる	みる	みれ	みよ（ろ）
	マ	試みる	試コヽロ	み	み	みる	みる	みれ	みよ（ろ）
	ヤ	射る	（射）	い	い	いる	いる	いれ	いよ（ろ）
	ヤ	悔いる	悔ク	い	い	いる	いる	いれ	いよ（ろ）
	ラ	懲りる	懲コ	り	り	りる	りる	りれ	りよ（ろ）
	ワ	居る	（居）	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ（ろ）
下一段	ア	得る	（得）	え	え	える	える	えれ	えよ（ろ）
	カ	蹴る	（蹴）	け	け	ける	ける	けれ	けよ（ろ）
	カ	受ける	受ウ	け	け	ける	ける	けれ	けよ（ろ）
	ガ	投げる	投ナ	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ（ろ）
	サ	失せる	失ウ	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ（ろ）
	ザ	交ぜる	交マ	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ（ろ）
	タ	捨てる	捨ス	て	て	てる	てる	てれ	てよ（ろ）
	ダ	出る	（出）	で	で	でる	でる	でれ	でよ（ろ）
	ナ	連ねる	連ツラ	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ（ろ）
	ハ	教へる	教ヲシ	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ（ろ）
	バ	述べる	述ノ	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ（ろ）
	マ	染める	染ソ	め	め	める	める	めれ	めよ（ろ）
	ヤ	越える	越コ	え	え	える	える	えれ	えよ（ろ）
	ラ	流れる	流ナガ	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ（ろ）
	ワ	植ゑる	植ウ	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ（ろ）

〔附表二〕

口語可能動詞の活用表（すべて下一段活用）

行名	例語	語幹	未然	連用	終止	連體	假定
カ	書ける	書（カ）	け	け	ける	ける	けれ
ガ	研げる	研（ト）	げ	げ	げる	げる	げれ
サ	直せる	直（ナホ）	せ	せ	せる	せる	せれ
サ	譯せる	譯（ヤク）	せ	せ	せる	せる	せれ
タ	打てる	打（ウ）	て	て	てる	てる	てれ
ナ	死ねる	死（シ）	ね	ね	ねる	ねる	ねれ
ハ	言へる	言（イ）	へ	へ	へる	へる	へれ
バ	飛べる	飛（ト）	べ	べ	べる	べる	べれ
マ	飲める	飲（ノ）	め	め	める	める	めれ
ラ	歸れる	歸（カヘ）	れ	れ	れる	れる	れれ
ラ	居れる	居（ヲ）	れ	れ	れる	れる	れれ

形容詞・形容動詞の活用表

語尾に括孤したのは、現代に多く用ひられぬ活用形。又語尾の左下に括孤したのは、その活用形につく助動詞・助詞等を便宜上記したもの。

〔附表 三〕

文語									
形容動詞	第二種	静かな	静か	なら（バ）		（な）	な		
		丁寧な	丁寧						
	第三種	静かだ	静か	だら（ウ）	だつ（タ）	だ	（だ）		
		丁寧だ	丁寧						

口語の形容動詞の第一種には、終止形がないので、例語の欄には、假りにその未然形を記入した。

口語の形容動詞の第三種は、「静かで」「立派で」に「ある」がついて成つたものである。

形容詞・形容動詞の活用表

〔附表三〕

語尾に括孤したのは現代に多く用ひられぬ活用形。又語尾の左下に括孤したのは、その活用形につく助動詞・助詞等を便宜上記したもの。

文語

種類		例語	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令
形容詞	ク活用	高し	高(タカ)	く	く	し	き	けれ	
形容詞	シク活用	新し	新(アタラ)	しく	しく	し	しき	しけれ	
形容動詞	第一種	高(タカ)かり	高か	ら	り	(り)	(る)	(れ)	れ
		新(アタラ)しかり	新しか						
形容動詞	第二種	靜かなり	靜かな	ら	り	り	る	れ	れ
		丁寧なり	丁寧な						
形容動詞	第三種	堂々たり	堂々た	ら	り	り	る	れ	れ
		判然たり	判然た						

口語

種類		例語	語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
形容詞	ク活用	高い	高(タカ)		く	い	い	けれ	
形容詞	シク活用	新しい	新し						
形容動詞	第一種	高から	高(タカ)か	ら(ウ)	つ(タ)				(れ)
		新しから	新しか						
形容動詞	第二種	靜かな	靜か	なら(バ)		(な)	な		
		丁寧な	丁寧						
形容動詞	第三種	靜かだ	靜か	だら(ウ)	だつ(タ)	だ	(だ)		
		丁寧だ	丁寧						

口語の形容動詞の第一種には、終止形がないので、例語の欄には、假りにその未然形を記入した。

口語の形容動詞の第三種は、「靜かで。」「立派で。」に、「ある」がついて成つたものである。

〔附表四〕

助動詞の活用表

〔活用形の（　）印したのは、現代文に多く用ひぬもの、又は用法の極めて局限されたもの。接續の欄に、未然・連用等記したのは、その助動詞が動詞に承ける活用形の名。又×印したのは接續に特例があるが、簡單に表し得ないもの。〕

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
希望	(た)し	(た)く	たく	たし	たき	たけれ		連用
	まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ		未然
				し	ごとき			用言の連體及びガ・ノ
				る	るゝ	るれ	れよ	受身、使役の助動詞に同じ
				る	らるゝ	らるれ	られよ	
				(す)	(する)	(すれ)		
				(さす)	(さする)	(さすれ)		
				(しむ)	(しむる)	(しむれ)		
				り	なる	なれ	なれ	體言と用言の連體
				り	たる	たれ	たれ	體言

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令	接續
たい	たから	たく たかつ	たい	たい	たけれ		連用
れる	れ	れ	れる	れる	れれ		受身のレル・ラレルに同じ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ		
ます	ませ	まし	ます（まする）	ます（まする）	ますれ	ませ（まし）	連用。但し命令形は敬譲の意のないものにはつかぬ。
な	なら	なり	（な）	な			體言と用言の連體形
だ	だら	だつ	だ	（だ）			體言
です	でせ	でし	です				體言

〇「う」「よう」は、時の助動詞の欄に出したたけで、推量の助動詞の欄には略した。

〇指定の「のだ」「のです」は、用言の連體形につく。その活用は、「だ」「です」と同樣故、表には略した。

…の「む」「んず」と同活用故、別…用ひても、活用には變り…のみ擧げた。

正誤表

口語			
種類	語	未然	連用
打消	ぬ（ん） ない まい○		
敬譲	ます	ませ	まし○

〔附表四〕

助動詞の活用表

（活用形の（ ）印したのは、現代文に多く用ひぬもの、又は用法の極めて局限されたもの。接續の欄に未然・連用等記したのは、その助動詞が動詞につく時に承ける活用形の名。又×印したのは接續に特例があるが、簡單に表し得ないもの。）

文語

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身	る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ	未然（四段・ナ變・ラ變）
	らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ	未然（右以外）
可能	る	れ	れ	る	るゝ	るれ		受身のル、ラルに同じ
	らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ		
	べし	べく	べく	べし	べき	べけれ		終止（ラ變は連體）
	べかり	べから	べかり	（べかり）	（べかる）	（べかれ）		
使役	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	未然（四段・ナ變・ラ變）
	さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ	未然（右以外）
	しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	未然
時・完了	つ	て	て	つ	つる	つれ	（てよ）	連用
	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	（ね）	連用
	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	（たれ）	連用
	り	（ら）	（り）	り	る	（れ）		已然（四段）未然（サ變）
時・過去	けり	（けら）		けり	ける	けれ		連用
	き			き	し	しか		×連用
時・未來	む（ん）			む（ん）	む（ん）	め		未然
	んず			んず	んずる	んずれ		未然
打消	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね		未然
	ざり	ざら	ざり	（ざり）	ざる	ざれ	ざれ	未然
	まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ		終止（ラ變は連體）
	じ			じ	（じ）	（じ）		未然
推量	らむ（らん）			らむ（らん）	らむ（らん）	らめ		終止（ラ變は連體）
	けむ（けん）			けむ（けん）	けむ（けん）	けめ		連用
	めり		（めり）	めり	める	めれ		終止（ラ變は連體）
	らし			らし	（らし）	（らし）		
	まし			まし	まし	ましか		未然
詠歎	なり			なり	なる	なれ		連用
	けり			けり	ける	けれ		連用
希望	たし	たく	たく	たし	たき	たけれ		連用
	まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ		未然
比況	ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき			用言の連體及びガ・ノ
敬讓	る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ	受身、使役の助動詞に同じ
	らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ	
	す	せ	せ	（す）	（する）	（すれ）		
	さす	させ	させ	（さす）	（さする）	（さすれ）		
	しむ	しめ	しめ	（しむ）	（しむる）	（しむれ）		
指定	なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	體言と用言の連體
	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	體言

○推量の「む」「んず」は、未來の「む」「んず」と同活用故、別に擧げない。

○「べし」は推量、その他に用ひても、活用には變りがない故、可能の部にのみ擧げた。

口語

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令	接續
受身	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ（ろ）	未然（四段）
	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ（ろ）	未然（右以外）又サ變の連用にも
可能	れる	れ	れ	れる	れる	れれ		受身のレル・ラレルに同じ
	られる	られ	られ	られる	られる	られれ		
使役	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ（ろ）	未然（四段）
	させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ（ろ）	未然（右以外）又サ變の連用にも
時・完了過去	た	たら	たり	た	た			連用
時・未來	う			う	（う）			未然（四段）
	よう			よう	（よう）			未然（右以外）
打消	ぬ（ん）		ず	ぬ（ん）	ぬ（ん）	ね		未然
	ない	なから	なく なかつ	ない	ない	なけれ		未然（サ變は連用）
	まい			まい	（まい）			終止（四段）連用（サ變）未然（右以外）
推量	らしい		らしく らしかつ	らしい	らしい			終止 終止
詠歎								
希望	たい	たから	たく たかつ	たい	たい	たけれ		連用 連用
比況								
敬讓	れる	れ	れ	れる	れる	れれ		受身のレル・ラレルに同じ
	られる	られ	られ	られる	られる	られれ		
	ます	ませ	まし	ます（まする）	ます（まする）	ますれ	ませ（し）	連用。但し命令形は敬讓の意のないものにはつかぬ。
指定	な	なら	なり	（な）	な			體言と用言の連體形
	だ	だら	だつ	だ	（だ）			體言
	です	でせ	でし	です				體言

○「う」「よう」は、時の助動詞の欄に出しただけで、推量の助動詞の欄には略した。

○指定の「のだ」「のです」は、用言の連體形につく。その活用は「だ」「です」と同樣故、表には略した。

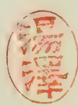
昭和六年九月十一日印刷

昭和六年九月十五日發行

解說日本文法

定價二圓八十錢

譯者　湯澤幸吉郎



東京市麻布區笄町一七六番地

發行者　八木重良

東京市牛込區山吹町一九八番地

印刷者　萩原芳雄

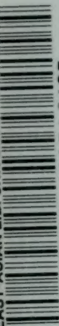
發行　東京市麻布區笄町一七六

振替東京六四九五二番

大岡山書店

著者	書名	判型・定價
井上通泰著	播磨風土記新考	菊判七五〇頁 定價七圓五十錢
後藤藏四郎著	出雲國風土記考證	四六判四二〇頁 定價三圓二十錢
栗田寛校註 後藤藏四郎補註	標註古風土記 常陸	四六判二三四頁 定價二圓三十錢
栗田寛校註 後藤藏四郎補註	標註古風土記 出雲	四六判三八〇頁 定價三圓二十錢
栗田寛纂訂	古風土記逸文	四六判三八〇頁 定價三圓五十錢
栗田寛著	古語拾遺講義 稜威男健	菊判五三〇頁 定價六圓
池邊眞榛著	校訂古語拾遺新註	菊判七六四頁 定價十圓
國學院大學校訂	校訂延喜式	菊判三冊索引共 定價二十圓


UNIVERSITY OF TORONTO
VELUT ARBOR ÆVO


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02954 0135